

学問分野別
P9

分野別

学問分野別 履修要領

総合教育科目
P51

総合

文学部
P89

文

経済学部
P167

経

法学部
P205

法

教職
P269

教職

- ・履修要領には、絶版となった参考書も記載してあります。これは、「その参考書が学習上有益である。」と担当者が判断したものです。可能な範囲で図書館などで捜して学習することをお勧めします。
- ・この学問分野別履修要領では、科目名の「新」・「改訂」が省略されている箇所があります。また、すべての専攻が掲載されているわけではありません。

学問分野別履修要領

外国語科目

英語

英語科目は、履修者が「高校卒業程度」の英語力を備えていることを想定しています。このレベルの履修者を対象とするのが、以下の説明で〈中級〉に分類される科目です。〈基礎〉とある科目は〈中級〉に至るまでの課程を復習するものとなっています。なお、科目名に付いているⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅶの番号は、科目間の難易度の区別や履修順序などを表しているわけではありません。

以下に各教科書のレベルと特徴を示しますので、受講する上での参考とし、実力に合わせた学習計画を立ててください。

「英語Ⅰ」：〈中級〉 文法と作文。高校までに修得した文法のまとめを行う。普通。

「英語Ⅱ」：〈基礎〉 文法、作文、リスニング、スピーキング。高校ぐらいまでに習得しておくべき英語の基礎知識の復習を行う。やや易しい。

「英語Ⅲ」：〈中級〉 新聞記事、文学作品の読解。やや難解。

「英語Ⅶ」：〈中級〉 評論の読解。普通。

英語が得意な人は、教科書を手に取り、自由に好きな科目を履修してください。英語が苦手な人は、まず「英語Ⅱ」を履修してください。英語の基礎的な能力をバランスよく高めることができます。そして、「英語Ⅶ」を履修してください。初めは、辞書を使わずに全体に目を通し、話しの流れを把握しましょう。その後、注や辞書を利用し、細かいところまで教科書を精読してください。英語教職課程履修者は、「英語Ⅰ」を履修し、文法の知識をしっかりと習得することが望ましいと思います。英文学専攻予定者には、文学作品が中心の「英語Ⅲ」の履修を勧めます。

テキスト科目だけではなく、スクーリング（夏期・夜間・週末）と放送授業でも履修できます。主にリーディングとライティングに分かれますが、担当者によっては、リスニングやスピーキングなども含めた総合的な訓練を目指す授業もあります。言葉はコミュニケーションのためのものです。スクーリングでは、クラスメートや教員と積極的にやりとりをする中で、さらなる英語力の向上を目指してください。

言葉の学習には、「習う」側面と「慣れる」側面の両方があります。教科書に向かい、思い悩みながら取り組んで、習うことと合わせて、色々な英語に多く触れ、ひたすら慣れることも大事です。習うことだけに捕われるとつまずいてしまうかもしれません。慣れることにも心がけて、焦らずじっくりと時間をかけて取り組んでください。

ドイツ語

ドイツ語未習者は、まず最初に初級前期・初級後期の単位をスクーリングで取得することを目標とするとよいでしょう。ドイツ語のような言語は文法体系の概観ができていると、その後の独習が楽になるからです。また、組み合わせとしては、初級前期または初級後期のみで卒業単位には足りる場合でも、スクーリングの共通テキストについては初級前期・初級後期を通じて学習し、言語構造を概観してから次に進むことが望ましいと思います。

時間的な余裕がある人、または当面スクーリングに出席するのが難しい人は、放送授業により初級前期・初級後期のいずれかを取得することもよいでしょう。

しかしいずれの場合でも、完全な未習者が初級前期よりも先に初級後期を、あるいは初級前期と初級後期を並行して履修することは勧められません。

スクーリング中級、上級の授業には担当者によってさまざまなヴァリエーションがあり、必ずしも配本テキスト第三部あるいは第四部の内容に類似の授業が行われるわけではありません。教室での対話を通じて学習を深めるためにも、講義要綱を熟読した上で、ぜひいろいろな授業を積極的に履修して下さるよう望みます。

フランス語

フランス語未習者は、まず最初に初級前期・初級後期の単位をスクーリングで取得することを目標とするとよいでしょう。スクーリングではフランス語の文法体系の習得と同時に、発音やコミュニケーションの表現を学習でき、その後の独習が楽になるからです。また、組み合わせとしては、初級前期または初級後期のみで卒業単位には足りる場合でも、スクーリングの共通テキストについては初級前期・初級後期を通じて学習し、言語構造を概観してから次に進むことが望ましいと思います。

時間的な余裕がある人、または当面スクーリングに出席するのが難しい人は、放送授業により初級前期・初級後期のいずれかを取得することもよいでしょう。

しかしいずれの場合でも、全くの未習者が初級前期よりも先に初級後期を、あるいは初級前期と初級後期を並行して履修することは勧められません。

スクーリング中級、上級の授業には担当者によってさまざまなヴァリエーションがあり、必ずしも配本テキスト第三部あるいは第四部の内容に類似の授業が行われるわけではありません。教室での対話を通じて学習を深めるためにも、講義要綱を熟読した上で、ぜひいろいろな授業を積極的に履修して下さるよう望みます。

文学部専門教育科目

文学部履修要領について

文学部での学習の進め方は、他学部比べて多様です。その分、学生のみさんひとりひとりが自分で学習の方向を管理しなければなりません。ここには、文学部Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類に属するいくつかの専攻（文学部は17専攻あり、その他に自然科学および諸言語があります）からの学習に関するいろいろな助言が掲載されています。みなさんは、まず、自分の所属する類に該当する専攻（Ⅰ類は哲学、倫理学、美学美術史学、図書館・情報学、社会学、心理学、教育学、人間科学、Ⅱ類は日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学、Ⅲ類は国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学）の助言を参考にしてください。さらに自分の卒業研究の方向性が明らかであるならば、その研究に該当する専攻の助言には特に注意を払って味読してください。もちろん自分の所属する類でなくても、みなさんが履修するテキスト科目を担当する専攻の助言にも注意しなくてはなりません。ただいくつかの科目（「ロシア文学」「人文地理学」など）については、ここには言及がありませんので、科目別履修要領の各科目の項を参照してください。

哲学専攻

哲学専攻で設置されている科目で履修の順序に特に注意が必要なのは、論理学です。現在「論理学」は、総合教育科目と専門教育科目に各々設置されていますが、数学と同様テクニカルな要素を持った論理学では、基礎から順序立てて学習を積み重ねていく必要があります。したがって、まず総合教育科目で学問の概要を学ぶとともに基礎を固め、ついで専門性の高い段階へと学習を進めていくことになります。

他方、総合教育科目に設置された「哲学」と専門教育科目に置かれている「西洋哲学史Ⅰ」、「西洋哲学史Ⅱ」は、いずれも卒業論文作成にあたって問題を絞り込む際に、その前提となる哲学的な思考法ならびに哲学史上の知識を習得するための科目です。したがって、学習にあたって特に順序を気にする必要はありません。意欲と時間の余裕があれば、それぞれを平行して学習していただいてもかまいません。ほかに、「科学哲学」、「歴史哲学」がありますが、これは、それぞれ、「科学」とは何か、「歴史」とは何かを哲学的に掘り下げる学問ですので、「哲学特殊」とでもいうべき性格をもっています。したがって、特定の関心と、ある程度の子備知識が要求されることとなります（「歴史哲学」は平成3年度より学則上第2類に設置されています）。

また、テキスト科目がその性格上網羅的な傾向にあるのに対して、スクーリングでは各担当者がそれぞれの問題関心にしたがってもっともアクチュアルなテーマで講ずる傾向があります。したがって、スクーリングの履修にあたっては、学習者の関心に応じて適宜選択して

いただくことが、学習への動機付けという観点からして効果的でしょう。

この分野の主要な参考文献に関しては、三田哲学会編集の『哲学 別冊文献案内』が重要な情報を満載していますので、ぜひ参照してください。同書は、通信教育部で希望者に随時頒布しています。また、哲学専攻の専任スタッフが最近どんな問題関心のもとで、どんな論文を書いているかなどについては、文学部が毎年発行している『文学部専任教員一覧』に詳しい記載があります。こちらの方は卒論指導登録許可を受けた者に対し、希望により販売しています。

最後に、大学で哲学を学ぶ皆さんにお勧めしたいのは、入門書の類を何冊も読むよりは、これと思った本物の哲学書を邦訳でよいから直に読むこと、何度も繰り返し読むことです。最初はよく分からなくても、何度も繰り返し読むうちに、次第に私たちが思考することの深みへと導いてくれるはずです。そのときすでにあなたは、みずから哲学を始めているのです。

倫理学専攻

本専攻に関わるテキストとしては、次の2書がある。

- ・「倫理学」小泉 仰著
- ・「現代倫理学の諸問題」大谷愛人、池上明哉、小松光彦共著

前書はヘブライ思想など古典的な視点をも包摂して倫理的観点を教授するものであるのに対し、後書は表題に見られるように近代からの思想の諸潮流を解説しながら現代に課題として残された諸問題を提示して近現代の倫理思想に重きを置いている。そのようにテキストの性格も違い、内容的にもそれぞれ独立したものであるもので、講読の順序は問わない。関心の置き所によって選択すべきである。但し、いずれもその書のみ一冊読めば倫理学がわかるといった標準的教科書的な内容ではないので、書かれている事柄の奥行を理解するためには、テキストで紹介されている参考文献は言うまでもないが、それらに関連するものも積極的に読破した上で理解を進めていく必要がある。

日本史学専攻

日本史関係で設置されている科目は、総合教育科目の「歴史（日本史）」と専門教育科目の「日本史概説Ⅰ—中世・近代—」「日本史特殊Ⅰ—日本法制史—」「日本史特殊Ⅱ—キリシタン史—」「日本史特殊Ⅳ」「古文書学」の、あわせて6科目です。

日本史の学習を進めていくにあたって、まず必要なのは日本の歴史全体の流れを一通り押さえておくことです。その意味で、最初に「歴史（日本史）」を履修することで、勉強の基礎を固めた上で、専門科目の勉強に入るのが望ましい順序です。

専門科目の中でも、比較的広い時代にわたる概括的な歴史を扱うのが「日本史概説Ⅰ」です。特に日本の中世史や近代史で卒業論文を書く予定の方は、是非とも履修してほしい科目ですが、それ以外の方でも、政治・経済・社会・文化など様々な面から歴史を考える視点は、大いに参考になるでしょう。

「古文書学」は、歴史を研究するための材料である史料について学ぶ科目です。日本史で卒業論文を書くための基盤となる科目であり、特に古代・中世史を扱おうとする場合には必ず履修しておいて下さい。

より深く一つのテーマを掘り下げるのが「日本史特殊」という科目です。時代やテーマの対応関係としては、古代史が「日本史特殊Ⅰ」、キリシタン史が「日本史特殊Ⅱ」、近世・近代史が「日本史特殊Ⅳ」ということになります。単に知識を身につけるだけでなく、絞り込んだテーマで史料に基づいて歴史を描き出す手法を学ぶことで、卒論執筆の参考にして下さい。その意味では、必ずしも自分が特に関心のある時代・テーマでなくとも、勉強の役に立つ何かを得られるはずです。

以上の各科目のテキストの学習は、実は日本史の勉強の出発点に過ぎません。それぞれの講義要綱やテキストの中で紹介されている参考文献を初めとして、多くの概説書・専門書を読んで、歴史に対する理解を深めて下さい。卒業論文のテーマに迷っている方も、そうした積極的な勉強を進めていけば、間違いなく自分の興味・関心の対象が見つかります。

東洋史学専攻

東洋史関係で設置されている科目は、総合教育科目の「歴史（東洋史）」と専門教育科目の「東洋史概説Ⅰ」、「東洋史概説Ⅱ」、および「東洋史特殊」のあわせて4科目です。

東洋史の学習を進めていくに当たって、まず必要なことはアジアに対していろいろな意味で幅広い関心を持つことです。それは歴史だけに留まらず、現代に至るまでの政治、経済、社会、文化全体を指します。その上で、とりわけ強く興味を抱くエリアに地域を絞って深く学習していくことを勧めます。アジアといっても広く、そこに住む人々のあり方は一様でないからです。

「歴史（東洋史）」はアジア全般に関して概括的な知識をつける科目です。専門科目としての「東洋史概説Ⅰ」は中国の古代史を中心として通史的な知識をつけることを目的としています。「東洋史概説Ⅱ—中国史—」は中国の近現代史に重点を置きながら、古代史から説き起こし、歴史の流れを通して現代中国のあり方を考えることを目的としたもので、専門課程で身につけるべきハンドリングもあわせて指導しています。

慶應義塾大学の東洋史研究のもう一つの核である中東イスラム研究の初歩は「東洋史特殊」で補えます。「特殊」ではありますが、トルコ民族の通史を知ることができます。

以上の各科目のテキストの学習は、東洋史の学習全般の単なる一歩に過ぎません。歴史学とは人間が営んできた、さらにいま営んでいる社会の産物を研究する学問であり、その意味では学習に当たっては多様な学問領域を包摂するものです。一にも二にも知識欲と好奇心が必要であり、それを具体化するために豊富な読書量と知識を習得しなければなりません。その入り口にあってはまずテキストを熟読することが必要十分条件だといえます。

西洋史学専攻

ここでは、西洋史学専攻が設置している科目について、どの科目をどのような順序で履修すれば効果的な学習をすることができるかという観点から、これらの科目を概観しておきますので、皆さんの学習の一助として下さい。特に西洋史学の領域で卒業論文を書くことを予定している学生諸君は、論文にとりかかる前に、これらの科目のすべてを履修しておくことが望ましいのは言うまでもありません。

是非とも最初に履修して頂きたいのは総合教育科目の「歴史(西洋史)」です。この科目は、古代から現代に至るまでの西洋の歴史全体のアウトラインをおさえることを目的としていて、他の科目での学習の基礎となります。これと同時に履修するのが望ましいのは「史学概論」です。この科目では、高等学校までの歴史とは違って、大学で学ぶ歴史が単なる暗記ではなく、過去と現在の対話のプロセスであることを学びます。これら2科目を終えた上で、「西洋史概説Ⅰ」及び「西洋史概説Ⅱ」を履修して下さい。総合教育科目の「歴史(西洋史)」で幅広く得た知識をふまえて、「概説Ⅰ」では西洋の古代・中世全般について、「概説Ⅱ」では近・現代全般について、比較的深い知識を身につけることができます。最後に履修するのが望ましいのは「西洋史特殊Ⅲ」で、中世から近代に至るイギリス国制史を扱っています。これらの領域に特に関心を持たない学生諸君も、とりわけ西洋史で卒業論文を書くようとする人たちは、これらの科目の学習を通じて、歴史学の探求の方法を学んでいただきたいと思えます。

なお、どの科目についても、教科書そのものは単に骨組みに過ぎないものと理解しておいて下さい。それぞれの科目分野で実質的な学習を行うためには、それぞれの教科書に挙げてある参考書をはじめとして、できるだけ多くの概説書ならびに専門書を読んで、知識の肉付けをするように心がけて下さい。

民族学考古学専攻

民族学考古学関係の科目は以下の3つが設置されている。

- ・「考古学」
- ・「西洋史特殊Ⅰ—古代オリエント史—」
- ・「オリエント考古学」

これらのうち「考古学」では取り扱う地域・時代を幅広く設定し、人類学といった周辺領域との関連を含め、理論や方法論を包括的に解説する。一方、「西洋史特殊Ⅰ—古代オリエント史—」と「オリエント考古学」では、文明の起源の地としてのオリエント(西アジア地域)の古代史を取り上げる。「西洋史特殊Ⅰ」では、文献資料を重視し、地中海世界を含む西アジア地域の歴史を講じるが、「オリエント考古学」では新石器時代以降の西アジア世界における考古学的研究の成果を紹介する。いずれも概説的な内容であり、履修順序に指定や推奨はない。ただし、科目内容と方法論には相互に関連があるので、複数履修することに

よって考古学への学術的理解は深まるはずである。

スクーリングの「考古学」では担当教員が専門とする地域や時代の内容も盛り込まれる。受講者各人に馴染みのある地域が事例として取り上げられることも多いだろう。さらに、時空を超えた異文化理解として考古学を位置づけるとき、文化人類学や歴史人類学が重要な関連分野として浮かび上がる。スクーリングの「民族学」ではこの点に着目し、文化の構築性をテーマに歴史研究と文化研究の接合が論じられる。

民族学考古学の世界に関心を持つ受講生には、V. G. チャイルド『考古学とは何か』（岩波書店）や、鈴木公雄『考古学入門』（東京大学出版会）・『考古学はどんな学問か』（東京大学出版会）、C. クラックホーン『人間のための鏡』（サイマル出版会）、A. マザール『聖書の世界の考古学』（リトン）、R. ワグナー『文化のインベンション』（玉川大学出版部）といった入門書に目を通すとよい。なお、専攻 HP (<http://www.flet.keio.ac.jp/~toru38/ethnoarch/>) も参考になるだろう。

国文学専攻

当専攻に関わるテキスト科目は、総合教育科目の「文学」、専門教育科目の「国語学」、「国語学各論」、「国文学」、「国文学史」、「近代日本文学」、「国文学古典研究Ⅰ」、「国文学古典研究Ⅱ－1」、「国文学古典研究Ⅱ－2」、「国文学古典研究Ⅲ」、「国文学古典研究Ⅳ」、「国語国文学古典研究Ⅴ」などである。どの科目から履修しても差し支えない（科目間に学習上の優先順位はない）。ただし、テキスト(教科書)で触れられている作品はできるだけ多く通読してほしい。原典を読解することが何よりもテキストの理解を深めることにつながるからである。近年では古典でも著名な作品ならば手軽に現代語訳や、時としてはマンガで読むこともできるが、それでは大学という場で専門的に学ぶ意味がない。時間を惜しまず、原典をじっくり読んでほしい。なお、基本的な原典テキスト、参考書、辞典類、研究書などは慶應義塾大学藝文学会の編集・刊行している『藝文研究 文献案内』に詳しく記してあるので、そちらを参照されたい。希望者には通信教育部で販売している。

国文学で卒業論文を書こうとする者は、夏期・夜間のスクーリングにできるだけ出席することが望ましい。それは、テキストからだけでは理解しにくい研究の意義や方法論を直に教員から聴くことのできる絶好の機会だからである。

中国文学専攻

現在、通信教育課程では、中国文学関連の科目として、以下の4科目が設置されている。

「中国文学史」：古代から現代に至るまでの各ジャンルにおける文学通史。

「漢文学Ⅰ」：古典文学概論、および代表的詩文の作品選。

「漢文学Ⅱ」：『論語』注釈。

「漢文学Ⅲ」：『孟子』注釈。

文学に親しむための決まった方法はない。興味のある書物を一つ一つ読み進めればそれでよい。しかしながら、中国文学は三千年におよぶ歴史を持つ世界であり、代表的作品だけでも膨大な数に上る。短期間に効率的な学習をするためには、まず文学史の基礎的知識をしっかりと習得し、各ジャンルの歴史の変遷を把握した上で個々の作品を鑑賞することが望ましい。したがって、「中国文学史」を「漢文学」より先に履修することを推奨する。なお、人文科学分野の「文学」の科目においても、中国文学関係のものが含まれている。

外国文学の学習においては、ぜひ原典に触れてほしい。文学は言葉の学問であるから、翻訳のみではその作品のエッセンスは伝わってこない。幸い古典文学の場合には、漢文の訓読で原作を読むことができる。現代文学を中心に学ぶ学生は、スクーリングなどを利用して中国語を履修することが望ましい。

参考文献は、各テキストの巻末を参照されたい。古典に関しては、特に角川書店の「鑑賞・中国の古典」シリーズ（全24巻）を入門書として薦めたい。原文・訓読・注釈に加えて、各分野の専門家である編者が詳細な解説を加えているので、作品の背景を知るためのよき道案内になる。

英米文学専攻

- 英文学、米文学、英語学の分野で卒業論文を執筆する学生は第3類の英米文学関連の科目をなるべく多く履修することが望ましい。
- 卒業論文開始後の早い時期に（あるいは、それより以前に）「ACADEMIC WRITING II」（4単位）を履修してもらいたい。
- 英米文学関係の科目数は多く、各々の科目についての文献をここで挙げることは不可能であるが、基本的な参考文献については文学部英米文学専攻のウェブサイト（<http://www.flet.keio.ac.jp/englit/>）または、『藝文研究 別冊』〔2011年度版文献案内〕（藝文学会編）を参照されたい。
- 卒業論文は日本語で執筆してもかまわないが、第一次資料及び重要な第二次資料は必ず英語で読む必要がある。英文を読む機会を与えてくれる科目を少しでも多く履修してもらいたい。

独文学専攻

他の文学においてもそうであるように、ドイツ文学を学ぼうとする人たちに期待されているのは、まず数多くの文学作品に触れてみることです。翻訳でなるべく多くのドイツ文学作品に触れていただき、そこで自分なりの読書体験をしてほしいということが、受講者に期待する第一のことです。もちろん、われわれの設置した講座やテキスト科目などがきっかけとなって、これまでまったくドイツ文学に無縁であった人にドイツ文学への個人的興味をもつていただき、作品に触れてもらうこともまた心から歓迎すべきことです。そしてこういった

個人的な読書体験、読書からの感動を基礎にしながら、その体験や感動を文学史や文学理論によって学問的に位置づけていくのがドイツ文学研究の基本的な方法論ではないでしょうか。この目的のためのガイドとなり、助言者となり、あるいは研究方法のモデルとなるのがテキストとスクーリング講義なのです。その場合、いくつかの参考書にあたり、自分の感動を歴史的な流れのなかに置いてみたり、あるいは理論的に構築したりする手続きが必要となるでしょう。

現在われわれのテキスト科目としては「近代ドイツ演劇」「近代ドイツ小説」が設置されています。これらはいずれもドイツ文学を学ぶ上での重要な時代をカバーしていますから、ドイツ文学やその歴史について基本的な認識を得る最初のステップとして利用してください。これらの二つのテキストはいずれも入門者のために書かれたものですが、内容的には相当高度なところまで踏み込んでおり、コンパクトにまとまっていますので、いろいろな参考書にあたる前に、まずこれらのテキストを熟読することをお勧めします。参考書はあくまでもテキストを理解するための補助であり、なによりもこれらのテキストを理解することが肝心です。そして、そこで知りえた文学作品にもし日本語訳があり、それに興味をお持ちになったら、ためらうことなく作品に向かってください。さきほども言及しましたように、読書の感動こそが基本中の基本なのです。二つのテキストのうちどれを先に学ぶべきかといったことは、受講者の関心によって決まります。いずれから学び初めてもかまいません。

スクーリング科目としては、「ドイツ語学文学」「ドイツ文学史」「ドイツ文学研究」などの講座が設置されています。これらの科目はそれぞれ、理論的認識、歴史的認識を深めるためのきっかけとして利用されるべきものです。担当者によって、扱う時代やテーマ、作品、作品を扱う手法などが異なりますが、それもまたテキスト科目ではカバーできない部分を知りうる良い機会であり、個々の担当者の個性ある講義を通じて、さらに認識を深めていただきたいと思います。とくにドイツ文学で卒業論文を書こうとする受講者には教員を個人的に知る絶好の機会ですから、積極的に参加してください。担当者は皆さんのご質問にできるかぎり答えてくれることでしょう。これらの科目もまたテキスト科目と同様にいずれを先に受講すべきかということは問題になりません。テーマに関心がもてるほうから受講すべきでしょう。

ところで、ドイツ文学というジャンルに特徴的なことは、オーストリアやスイスといったいわゆるドイツ語圏の文学も含んでいることです。したがって、皆さんが受講されるのは、正確に言えば「ドイツ文学」ではなく「ドイツ語圏の文学」ということになるでしょう。これらの国々が優れた文学者や文化の担い手を輩出していることはいまでもありません。ドイツにのみ視野を限定することなく、自分の関心を広くオーストリア、スイスの文学や文化にも向けてください。

今、「文化」という言葉を使いましたが、われわれが受講者に望んでいるのは、なにも狭い意味での「ドイツ語圏の文学研究」といったものばかりではなく、広やかにドイツ語圏の文化全般（音楽、美術、建築など）に触れてもらうことです。いずれの国の文化もそうであ

るように、ドイツ、オーストリア、スイス文化は多様な魅力に満ちています。通信教育課程に設置しているドイツ文学講座を、受講者の皆さんが魅力あふれるドイツ（語圏）文化に触れるきっかけの一つとして利用してくださることが、われわれにとってなによりも嬉しいことなのです。

参考書や辞典類はあまりに数多くあり、残念ながらここでいちいち触れることは不可能です。詳しくはスクーリングの担当者や卒業論文の指導教授などに聞いてください。また、コンピュータを使用できる方は、慶應義塾大学図書館のOPACシステムや文部科学省のNacsisのWebcat、あるいは国会図書館のサイトなどから検索機能を使って、自分の関心のある領域の所蔵データを得ることができます。しかし、基本はあくまでも上記の二冊のテキストとスクーリングにおける講義であるということを念頭においてください。数多くの参考書にあたることも大事ですが、それ以上にテキストを良く読んで、基本を知ることが重要なのです。

仏文学専攻

フランス文学を学ぶためには、まず「文学」（4単位）のテキスト科目で中国、日本、英米、独、仏という東西にわたる広い文学的展望を身につけてから、「フランス文学概説」（3単位）、「十九世紀のフランス文学Ⅰ」（3単位）、「十九世紀のフランス文学Ⅱ」（3単位）、「二十世紀のフランス文学」（3単位）の各論に赴くのが順序でしょう。一方で、個別の作品に積極的に触れることが重要であるのは言うまでもありません。翻訳書で十分ですので、できるだけ多くの作品を読み込んでください。

スクーリング科目は、テキストでは十分に扱うことのできない主題を中心に講義を進めます。テキストの情報は十九、二十世紀に偏る傾向がありますので、より古い時代についての補足も必要です。また十九、二十世紀の文学であっても、テキストで論じきれない作品や考察もあります。このような欠落を補うために、スクーリングを活用してください。

フランス文学についての基本的な学習態度、視点とは、まず少なくともフランス語の初級程度の知識を身につけること、ついで作品の手応えや感動を大切にすること。そして、その手応えや感動を自分の言葉で対象化し、さらに敷衍して理論構築したり、歴史の流れから理解したりできるように、沢山の参考文献に目を通していただきたい。これはフランス文学に限らず、すべて文学作品を読み、作家についてなにかの認識を得ようとする場合の基本的態度でしょう。

フランス文学の体系を把握するために欠かせない入門書をいくつか挙げておきましょう。

- (1) 渡辺、鈴木『フランス文学案内』（岩波文庫、1961年）
- (2) 饗庭、朝比奈、加藤編『新版フランス文学史』（白水社、1999年）

また、卒業論文執筆準備その他で、専門的な知識を得たい学生のための参考文献や文献案内としては以下のものが勧められます。

- (3) 『事典 現代のフランス』(大修館書店、増補版再版、1999年)
- (4) デュビイ、マンドルー『フランス文化史』(人文書院、1970年)
- (5) 『フランス文学講座』全6巻(大修館書店、1979年)
- (6) 『フランス語フランス文学研究文献要覧』(日外アソシエーツ)。これは自分で買い求める本ではなく、図書館に置いてあります。
- (7) 『フランス文学事典』(白水社、1974年)
- (8) 『フランスを知る——新<フランス学>入門』(法政大学出版局、2003年)

文献の渉猟にはインターネットが便利です。以下のサイトを活用してください。

- ・慶應義塾図書館所蔵の図書、雑誌：KOSMOS
- ・他大学図書館所蔵の図書、雑誌：CiNii Books (国立情報学研究所)
- ・学術論文：CiNii Articles (国立情報学研究所)

なお、仏文学専攻では、卒業論文のテーマとしてフランス語学(フランス語を対象とした言語学)を選ぶこともできます。この分野のテキスト科目とスクーリングは開講されていませんが、論文指導は可能です。詳しくは担当教員に相談してください。

社会学専攻

社会学分野のテキスト科目は、総合教育科目3分野科目の「社会学」、文学部専門教育科目の「社会学史Ⅰ」「社会学史Ⅱ」「社会心理学」「教育社会学」「都市社会学」の6科目から成り立っています。社会学分野で卒業論文を書こうと思う学生のための履修モデルを掲げておくと次の通りです。まず3分野科目の「社会学」を学習して、社会学が対象とする領域の全体について全般的な知識を身につけたあと、専門教育科目の「社会学史Ⅰ」「社会学史Ⅱ」を履修して、社会学の諸理論について基礎的な知識を修得します(その場合「社会学史Ⅰ」は社会学史の全体を取り扱っており、「社会学史Ⅱ」は各論にあたるので、Ⅰを履修したあとにⅡを履修することが望まれます)。そのあと各自の関心にしたがって「社会心理学」「教育社会学」「都市社会学」のうちのいくつかに進むことが望ましいと思います。テキスト科目とスクーリング科目のあいだにはとくに関連づけはないが、積極的に社会学分野のスクーリング科目を履修してください。しかし、これはあくまでも履修のためのモデルとして理解していただきたいと思います。社会学は非常に幅の広い学問分野であり、さまざまな入口から入り、さまざまな出口に出ることが可能です。要は各自の問題関心次第です。自分の問題関心にしたがってさまざまな履修パターンを考えることが可能です。また社会学はそれだけで完結した閉ざされた分野ではありません。社会学の分野で研究をするためには、哲学や文学・歴史についての知識も必要となります。積極的に他の分野の科目も履修してほしいと思います。社会学は私たち自身の社会生活についての学問です。書物で学習するだけでなく、日頃から自分の身の回りで起こっていることをよく観察して問題関心を磨いておくことが重要となります。

社会学の辞典・事典を手元に置いて、わからない言葉が出てきたら、すぐに引いて確認をする習慣を身につけてほしいと思います。いくつか代表的な辞典・事典を以下に挙げておきます。

- ・濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編『新版・社会学小辞典』（有斐閣）
- ・森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』（有斐閣）
- ・見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』（弘文堂）
- ・日本社会心理学会編『社会心理学事典』（丸善）

心理学専攻

義塾の心理学研究室では、実験を中心とする実証科学的な方法に基づく、主として基礎的な心理学の研究・教育が行われている。通信教育課程においてもこのような実証科学的な心理学が講じられている。

通信教育課程で受講することのできる科目としては、まず、総合教育科目の「心理学（知覚・認知）」および「心理学（行動・個性）」の2科目が、毎年夏期にスクーリング科目として開講されている。これらの科目は、広く心理学で扱っている問題を紹介し、それらに対するさまざまな科学的アプローチについて論じている。学生諸君にとっては、科学的な心理学で扱っている問題やそれらの研究方法はあまりなじみがないと思われるので、心理学分野の研究を志す諸君はぜひ履修してもらいたい。また、テキスト科目としては、総合教育科目の心理学は設置されていない。

専門教育科目に関しては、テキスト科目2科目が設置され、スクーリングでも毎年2科目が開講されている。テキスト科目の「心理学Ⅰ」は、「行動の科学としての心理学」という立場から、知覚、学習、感情の問題を論じている。このテキストを履修することによって、さまざまな専門用語があらわしている概念とそれら概念間の諸関係を理解することが求められる。履修者は、心理学関係の辞典や参考書を利用しながら確実に心理学的概念を習得することが望ましい。

テキスト科目の「心理学Ⅱ」は、「実験・測定・モデル」というサブタイトルが付けられているが、その名のとおり方法論に関する問題が論じられている。その意味で、この科目は心理学分野の研究を志す諸君にぜひ履修してもらいたいが、内容的には数式なども多く使われていて非常に手ごわい科目となっている。履修するものは、すべての数式を理解し覚えようなどとは思わずに、その「精神」、すなわち概略的な考え方を読み取る努力をするとよいであろう。

専門のスクーリング科目のテーマは、担当教員の専門に応じて多岐にわたっている。これらの科目は通常、他の専門教育科目（テキスト科目、および他のスクーリング科目）を履修済みであることを前提としていることはない。したがって、履修を希望するものは、好きな順序で好きな科目を何科目でも履修することができる。（ただし、同じ担当者が同じ科目名

で開講する科目を除く。) 学生諸君は、特に自分の興味に近そうなものは積極的に履修してほしい。

しかし、心理学的な考え方は、慣れない初学者にとっては難解なことが多いので、ぜひ総合教育科目を履修しておくことが望ましい。不可能な場合には、あらかじめ各自概論書などを読み、勉強しておくことが必要であると考えてほしい。

心理学は、学習を進めていく上で積み重ねを必要とする程度が高い領域である。したがって心理学関係で卒業論文を書くことを目指す諸君や、ある程度体系的に心理学の勉強をしたいという諸君は、次のような履修の仕方を目指すとうよいであろう。

まず、先に述べたように、総合教育科目の心理学については、スクーリング科目を履修することを目指してほしい。また、心理学の科目ではないが、統計学の科目を最低1科目履修することをお勧めする。総合教育科目の「統計学」であってもかまわないが、心理学の卒業論文に取り組もうと考えている場合には、専門教育科目の「心理・教育統計学」を履修・修得することが必要条件であると考えてほしい。心理学では、統計学的な考え方は非常に多用されているので、実際に卒業論文のためにデータを集めて分析する、という人以外にも、統計学を学んでおくと、心理学の理解は大きく助けられるであろう。

専門教育科目は、テキスト科目もスクーリング科目も、興味があるものを、履修できるときに、好きな順序で、できるだけ多く履修するとよいであろう。卒業論文の指導を受けるためには、2科目以上の専門教育科目を修得していることを条件とする。ただし、先に述べたように、テキスト科目の「心理学Ⅱ」は非常に難解であるので、他の科目をいくつか履修した後にチャレンジしたほうがよいかもしれない。また、その他の科目に関しても、心理学関係の科目は比較的難解なものが多いので、専門科目を履修する前に、市販の入門的なテキストに目を通しておくとよいであろう。

心理学の領域は多岐にわたっており、同じ問題に対しても複数のアプローチが可能な場合も多い。漠然とでも、心理学関係の卒業論文のテーマを考えている人は、なるべく早い時期に、スクーリングや科目試験、あるいは、郵送による質問などの機会を利用して教員に相談してもらいたい。

〈通信教育部における心理学の学習について〉

- ・専門教育科目のスクーリングを受講する場合は、極力、総合教育科目の心理学を修得しておくこと。やむをえない場合は、それに相当する予習が必要である。また、統計学の科目を修得しておくことが望ましい。
- ・心理学の卒業論文の作成を希望する学生は、指導に入るまでに、専門教育科目の心理学を2科目以上、および心理教育統計学を修得しておくこと。

教育学専攻

1. 教育学の学問体系および履修の順序について

文学部の教育学は、①教育哲学、②日本教育史、③教育心理学、④比較教育学の各分野をいわば四本柱としている。これを実際に設置されている専門教育科目と対応させるならば、「教育思想史」が①および④に、「教育史」が②および④に、「教育心理学」および「心理・教育統計学」が③に該当する。ただし、この四分野は、それぞれが全く別個の視座や方法に基づいて、成立しているわけではない。各分野とも、「教育」という視座を共有し、「教育」という営みの追究を目指して展開される学的営為であることにはかわりはない。この「教育」という視座をとりわけて問題とする分野のことを、私たちは教育基礎論と呼び、上記四分野の土台として最も重視する。設置科目としては、「教育学」がこの学に相当する。したがって、教育学関係科目の履修は、まずは「教育学」から開始し、その上で各分野の学習に向かうことが望まれる（各分野の順序は特に考慮するには及ばない）。またスクーリング科目として「教育学特殊」が設置されているので、そこでの特殊テーマに関する講義も勉学や研究の参考となるであろう。さらには、教職課程設置の諸科目も上記のものに関連しているので、履修してみるのも良い。

2. テキスト科目とスクーリング科目との関係について

上記のテキスト科目以外に、毎年二つのスクーリング科目（夏期一科目・夜間一科目）を開設している。スクーリングの二科目は、上記の①または②と③、もしくは①または④と③の組み合わせで開設されており、いずれも上記の四分野の学習を補強することを目指している（ただし、科目名は担当者によって異なる）。したがって、スクーリング科目も、上記「教育学」履修後であれば、どのような順序で履修しても構わない。

3. 求められる学習態度、入門書、参考文献などについて

教育学はそれ自体がすでに学際的かつ総合的傾向をもつ学問分野である。それゆえに、学習者の側に「教育」という視座が確保されていなければ、その学的営みは求心力を失い、拡散されてしまう恐れを常に孕んでいる。この意味からも、教育学の学習にとって最も根本的な要件は、「教育とは何か」を絶えず問い続ける姿勢だといえる。村井実『教育学入門（上）（下）』（『村井実著作集』第1巻、小学館、1988年、所収）や、村井実『「善さ」の復興』（東洋館出版、1998年）などは私たちにその自覚を喚起してくれる書である。なお、これ以外の文献については、三田哲学会 HP 掲載の『哲学 別冊文献案内』（<http://www.flet.keio.ac.jp/~bibiken/mita-tetsu/10/>）を参照されたい。

経済学部専門教育科目

はじめに

経済学部通信教育課程において学ぶ諸君は、専門教育科目を履修して、所定の単位を修得しなければならない。これらの履修科目の中には、6科目の必修専門科目が含まれている。学則にも明示されている通り、それらの必修科目は、「経済原論」、「経済政策学」、「経済史」、「財政論」、「金融論」、そして「経営学」の6科目である。これらの必修科目は、経済学の様々な分野について学習を行う上で、最も基本的な基礎知識を与えてくれるものであり、先ず、何よりも先にしっかりとその内容を理解し、その知識や考え方を身につけたものとしなければならない。

さらに、専門教育科目は、第Ⅰ類から、第Ⅶ類にいたる、7つの分野から構成されている。この類の構成は、経済学および商学のさまざまな教科目の分野別メニューを表しているとともに、これらの分野の専門科目をバランス良く履修することによって、経済学全体についての理解を深めることが出来るようになるといえる。そこで、以下において、これらの類の分類に沿いながら、スクーリング開講科目を含め、開設科目の履修上の注意点ならびにガイドラインを示してみることにしたい。

.....

A. 分野別履修要領

I 経済理論・計量経済に関する科目

経済理論・計量経済の分野については、「経済原論 (E)」、「統計学 (A)」が入門科目にあたり、それらの科目の参考文献が入門書に相当する。

経済理論

経済学は大まかに言って、ミクロ・マクロの体系からなる経済理論、統計的方法を用いる現状分析、および史料による歴史の実証を目指す経済史からなる。その中で経済理論は、ありとあらゆる経済学での応用分野にとっての不可欠な分析用具を提供するものであり、その基本的内容は世界基準として定型化されている。したがって経済学部で学ぶ学生は、まずミクロ・マクロ経済理論の基礎を十分に学習しておくことが望ましい。

ミクロ経済学およびマクロ経済学の基礎理論を扱う科目が「経済原論」である。これは必修科目という位置づけからもわかるように、他の多くの経済学の科目に対する予備知識とされるべき科目である。マクロ経済学が国民総生産・失業率・物価水準といった経済全体の集計量を問題にするのに対し、ミクロ経済学は個々の経済主体（家計・企業など）の経済活動に焦点を当てる。「経済原論」で学んだマクロ経済学の知識をもとに、より進んだ形で国民所得の決定やその統御を目指すマクロ経済政策について学ぶのが「国民所得論」である。同様に「経済原論」でのマクロ経済学に基づいて、景気循環や経済成長といった国民所得の変

動について学ぶのが「経済変動論」である。

経済理論は複雑な現実の経済現象に対して、一貫したものの見方を提供してくれる。そしてどんな応用分野にも適用される理論を学ぶためには、単なる暗記などではなく、しつこく自分の頭で考える姿勢が必要となることに注意してもらいたい。最後に、経済学および経済理論の広範な体系を初学者にとっても学びやすい形で解説している書物として、以下のものを挙げておく。

ポール・クルーグマン、ロビン・ウェルス『クルーグマン ミクロ経済学』・『クルーグマン マクロ経済学』 大山他訳（東洋経済新報社）

計量経済学

計量経済学は、「経済原論（E）」レベルの経済理論を用いて、現実の経済を「統計学（A）」を基礎としてデータを用いて分析する。

経済理論・計量経済に関する科目は、最初にやさしい理論、手法を学び、徐々に複雑な理論、手法を学んでいく。これは、現実の複雑な経済を分析するにあたって必要なステップであるので、読み飛ばすことなく各章を順番にしっかりと学習していくことが不可欠である。また、単に読んでいるだけでは理解しているかどうかの点検ができない。必ず、各章を読み終わるまでにその章についての練習問題に挑戦し、理解の深さについてチェックする必要がある。

この分野の研究を志す学生は、常に現実の経済問題への応用を頭に入れておくことをお勧めする。新聞、各経済雑誌を読みながら現実の経済問題を理論を用いて考える習慣をつけていくことが、問題発見、そして独自の論文を書くための出発点となる。また、政府機関が出版している各種白書、研究所が出版する報告書の多くに理論・計量的な分析が数多くあるので、関心のある経済問題については出来る限り読むようにして欲しい。

なお、これらの科目の履修にあたっての案内を、もっと詳しく知りたい人は、後述の『別冊三田会雑誌 スタディガイド』の、「第2章 マクロ経済学」、「第3章 ミクロ経済学」、そして、「第6章 統計学」の各章を読みたい。

II 経済史・学史・思想史に関する科目

経済史

経済には歴史的に形成された現象が多々あり、それらのことは必ずしも理論的には理解できず、歴史的に分析してみる必要がある。経済学において経済史が重視されている理由はここにある。なお経済史は、経済学の一分野であるとともに、歴史学の一潮流を構成するものであり、履修にあたっては、経済学の基礎的知識とともに、歴史に生きる人間の社会的・文化的営為についても幅広い知識と洞察力が要求される。履修条件は特にないが、まずは必修科目である「経済史」をよく学習し、その後、西洋経済史および日本経済史の科目別履修要領にしたがって学習すること。経済史の学習においては、結果よりも学習の過程が重要であ

る。

なお、詳しくは、『別冊三田学会雑誌 スタディガイド』の「第1章 経済史」の章を読みたい。

学史・思想史

通信教育課程には、テキスト及びスクーリングにより「経済学史」、「社会思想史」等の科目が設置されている。まず、これらの学問分野について簡単に説明したい。経済学は、堅固な学問体系を誇る科学ではあるが、その進歩が本質的なものであるかどうかは議論のあるところである。もし、過去における経済学のディシプリンが現代のそれよりも劣っているということが自明の理でないとするならば、経済学の過去をふりかえってみることに多様な意義が存することになる。このような立場から経済学の過去を扱うのが経済学史である。さらに、経済学という狭い枠を越えて、社会というものについてのすべての言説を歴史的観点から問題にしようとするのが、社会思想、社会思想史である。ここには、経済についての言説のみならず、法思想史、政治思想史、そして場合によってはその他の知の領域についての歴史的展開も含まれる。したがって、社会思想史のほうが経済学史よりも扱う範囲は広範なものである。

つぎにこれらの分野を学ぶ場合の準備について述べてみよう。まずは、受講者が現代の諸問題についての鋭い問題意識をもっていることが望まれる。問題は、さしあたり経済問題でもよいし、あるいは社会問題であってもかまわない。さらに、各人がなんらかの意味での歴史的関心を有していることが要求される。現代の問題はすべて過去に通じているからである。現代の問題を正確に理解するための一つの方法が歴史的な接近方法だといってもよいだろう。

最後に、それぞれの科目について前提とされることがらについてふれたい。上記の科目全般について歴史的素養が必要とされるから、経済史、あるいは歴史学の講義に接しておくことは良い準備となるだろう。これによって歴史的センスがみがかれるからである。さらに、経済学史については、経済理論の入門講義を聴講しておくことがよいだろう。また、社会思想史については、とりわけ社会と自己とのかわりについて自覚的に認識しておくことが必要である。日常茶飯におきている問題を実感としてだけでなく、整理した上で客観的にそして理論的にとらえることが望まれる。こうしたことすべてが、社会思想史研究への良きイントロダクションになる。

Ⅲ 経済政策に関係する科目

経済政策分野には2つの主要な目的がある。第1は、個別の経済現象の理論的な意味を明らかにすることであり、第2は、そのような理解に基づき、貧困の解消、不公平の是正、物価の安定、経済発展等、具体的問題解決のための処方箋を立案することである。従って、まず、マクロ経済学やミクロ経済学等の基礎理論を十分に理解する必要がある。その一方で、

新聞、白書類などを通じて現実経済の問題についての理解を深め、経済政策についての関心を高めておいて欲しい。

テキスト科目としては、「経済政策学」、「財政論」、「金融論」、「社会政策」が用意され、スクーリングでは、それらに加えて、「工業経済論」、「社会福祉論」、「公共経済学」などが開講されている。「経済原論」を深く学習した上でそれらに臨めば、一層充実したものになるであろう。

IV 日本経済・国際経済に関係する科目

この分野の専門科目には、「日本経済論」、「国際貿易論」、「経済発展論」など、経済学における応用の分野や現状分析の分野が含まれている。現実の経済を分析しようとするとき、理論や経済史、さらには政策の基礎が必要だが、それと同時に、具体的な経済現象についての個別的な知識や理論がなくてはならない。特に、現在、世界の経済は、グローバル化の進展の中で、極めて強い相互依存の体系に移行する過程の中にある。このような現実を理解しようとするとき、国際経済学や経済発展論の知識は欠くことが出来ない。スクーリング科目として「国際経済学」、「国際金融論」、「世界経済論」などが開講されている。

この類の科目の履修にあたっての履修条件は、先ず何よりも、先に述べられた、必修科目の理解を深めることにある。国際経済や経済発展の分野では、マクロとミクロの経済理論の知識を前提にして、さまざまなモデルや理論が展開される。また、具体的な経済を分析しようとするならば、歴史的な背景や、政策や制度の基礎知識はどうしても必要となる。また、現実の経済を対象とするには、さまざまなデータを収集したり分析したりすることになる。そこでは統計学の知識が必要になることは言うまでもない。急がば回れ、先ず、経済学の基礎をしっかりと身につけることが、この分野における研究のためには不可欠となる。

V 環境・社会に関係する科目

この分野の専門科目には、テキスト科目としては「地理学」、「人口論」、「都市社会学」、またスクーリング科目としては「経済地理」、「社会史」といった、経済現象や経済活動をより深く理解しようとする際に関連してくる隣接諸科学の学問分野が含まれている。途上国の抱える経済問題の中心には、人口や環境、そして都市や地域の問題がある。先進国においても、少子高齢化や女性の社会進出、環境問題や都市問題、地方の過疎化など社会問題はきわめて重要な問題といえる。これらをはじめとした、現代社会において看取される諸問題の現状や課題、背景、歴史的経緯、分析方法を学び、グローバルな視点から学習することが、この分野の共通したテーマである。また、経済活動の担い手である「人」にとりわけ注目し、社会を構成する様々な要素と人との関係を歴史的視点から学ぶことも、この分野の重要な課題の一つである。狭義の経済学だけでなく、人や社会に関わるこれらの科目を習得することが、社会科学を学ぶうえで必要な思考力を高め、視野を広げることにつながるであろう。

VI 経営・会計に関する科目

この分野は、商学系統の学問分野であり、経営学、会計学、商業学の3つの分野から構成される。

【経営学】

経営学は、企業を対象としてその行動や構造を明らかにする学問である。企業は、現代経済の中心的主体として価値を創造し、財・サービスの供給や雇用機会の創出に寄与している。もちろんその際、社会のルールにしたがわなければならない。さらに、情報通信技術の発展や経済のグローバル化といった劇的な環境変化によって、企業の経営にはかなり複雑な問題がつけつけられている。

経営学は、環境変化に直面している企業を「組織」としてとらえ、その仕組みを解明していく。この分野は、企業のどのような特徴に焦点をあてるかによって分化している。したがって、企業の戦略、経営者の役割、組織の性質やデザイン、組織形態の進化と多様性、企業倫理、企業文化、そして企業間関係などの多様な問題を扱う。また経営学は、ミクロ経済学と深い関係をもっているが、事例研究や計量的手法なども適宜援用しながら、多面的な観点からの企業の理解が模索されている。

【会計学】

会計は、経済主体の活動を主に貨幣額によって記録・測定し、これを利害関係者に伝達する行為であって、利害関係者の意思決定に資することを目的として行われる。会計学は、財務会計論と管理会計論の2つに大別される。財務会計論は、企業の資本および損益を測定し経営成績ならびに財政状態を明らかにして、これを企業の外部利害関係者に報告するための会計を研究領域とする。他方、管理会計論は、経営上の意思決定を行い経営活動の業績を評価する上で有用となる情報を、企業内部の管理者各層に提供するための会計を研究領域とする。これらに加え、会計情報の信頼性を確保するために行われる会計監査も会計分野の重要な研究領域となっている。

【商業学】

商業学は、ミクロ・マーケティング論とマクロ・マーケティング論の内容から構成される。ミクロ・マーケティング論は、個別企業のマーケティング活動（具体的には、製品、価格、チャネル、プロモーション等に関する意思決定と管理）とそれに関連する消費者行動を、また、マクロ・マーケティング論は、それらが集計された概念として、社会的に構造化・制度化されたマーケティング・システム（例えば、日本の流通機構）を、それぞれ対象として扱う。いずれの対象においても、それら2つのマーケティング論は、それぞれの対象とそれを取り巻くマーケティング環境との相互作用に着目しながら、様々なマーケティング現象を客観的に記述・説明・予測・統制することを目標としている。

商学関係の専門教育科目としては、必修科目である「経営学」をはじめ10科目ほどがテキスト科目として設置されているほか、スクーリング科目として毎年3～4科目が開講されており、商学関係の科目を幅広く学ぶことができるようになっている。詳しい内容・学習方法については、それぞれの科目の科目別履修要領を熟読してもらいたい。なお、スクーリング科目は毎年同じものが開講されるわけではないので履修にあたっては十分注意して欲しい。

VII 法律に関する科目

法律に関する科目の履修上のガイダンスは、法学部の履修要領を参照されたい。

B. 「別冊三田学会雑誌 スタディガイド」について

経済学部の通学課程では、基礎的な専門分野の履修について、学生の履修をガイドするために、多くの専門科目について、やさしくどのように学習をしていったらよいかを書きまとめた冊子がある。基礎的な専門科目の履修については、通学課程も通信教育課程も基本的には同じであり、この「スタディガイド」は、通信教育課程の学生諸君にも同じように役立つものと考えられる。

扱われている専門分野とは、経済史、マクロ経済学、ミクロ経済学、マルクス経済学、社会問題、統計学（計量経済学にもふれる）、環境経済学、経済思想の歴史、経済数学の分野である。これから経済学を勉強しようとする人々や、既に経済学の履修をはじめている人には、有効なガイドといえよう。

法律学分野

法律学は、きわめて体系的な学問である。その全体が一つの体系になっているため、その体系に則り、最初は基本的な科目から学び、その基礎知識の上に成立する特別法を後から学ぶのでなければ、本質的な理解には達し得ない。

法と呼ばれるものは、広く考えれば様々な社会の慣習等も含めた、当該社会のルールを意味する。しかし、現在“法律”と呼ばれるものは、憲法をその頂点とし、国会の議決を経て制定された国家の法を意味する。法学を大別すると、基礎法学と解釈学に分類できる。法が成り立つ基礎に遡ってそのあり方を模索するのが基礎法学であるが、それには歴史的側面から学ぶ「法制史」、思想的側面から学ぶ「法哲学」、あるいは諸外国の法制度から示唆を得る「外国法」が含まれる。これに対し、現行法の解釈・運用のあり方を条文・裁判例を通じて学ぶ分野は、広く法解釈学と呼ばれている。

法解釈学の対象である法律は、その頂点に「憲法」を置く。法律科目を学ぶ最初は、法を学ぶ意義および法の全体像を知るための「法学」と、「憲法」を学ぶことから始めるべきである。法律学は伝統的に、私法と公法の二つの系統で考えられてきた。私法領域とは私人間の法律関係（契約、民事責任、親族、相続など）を規定するもの、そして公法領域とは国家対国家・国家の行政主体・そして国家と私人の関係を規定する領域である。各々の領域は、その基本的部分から体系立てて学ぶ方が理解し易く、また早く効率的に習得できる。

私法領域を学ぶには、その全ての基本となる「民法」から学習するべきであろう。法律は一般法と特別法という関係で捉えられる。全体的かつ基本となる原則を定める一般法に対して、より限定された対象にとって特に必要とされる特則を定めるのが特別法である。例を挙げれば、一般的に全ての私人の関係を規定する民法の中で契約等の概念は定められるが、これに対して商法は、特にその中でも企業の取引等を対象として特別な規定を定めている。基本原則は民法にあり、その構造が理解できていることを前提として商法の議論はなされる。それ故、まず基本構造を理解した後に特別法を学ぶ方が、体系的に無理が無くかつ早く理解できる。また知的財産法も、基本的な財産法である民法の応用といってよい。

同様に公法もまた体系で学ぶべきである。ただし公法領域は、国家が私人の罪を律する「刑法」部門、国内の行政主体間及び国家と私人の関係を律する「行政法」部門、あるいは国際間の国家の関係を律する「国際法」部門等に分類できる。各部門は直列的ではなく、むしろ憲法を頂点としてその下に並列して存在している。従って、どの分野を先に学ばなければならないという順位はない。強いていうなら、初学者が比較的取り組みやすい領域は、おそらく「刑法」であろう。窃盗や殺人のように我々の頭で事例が想像し易く、かつそこで求められるのは被疑者となった者の人権をどう守るかという問題でもあり、憲法をそのままに体现する部門といえるからである。

上記の二領域に加え、現代社会では第三の領域たる社会法のウエイトも増している。社会

法とは、私法の行き過ぎた形式的平等を是正するため、いわば社会的弱者に対し国家的視点から保護を加えるために形成された領域である。現代社会では、労働者と使用者との間を規律する「労働法」、企業間・国家間の公正競争を担保する「経済法」、あるいは新しい領域である「環境法」などがあげられよう。この領域は、一方で私人間の契約等を基礎としつつ、他方その総合的コントロールを国家的視点から行うという意味で行政法学である。従って、社会法は公法と私法の双方にまたがる領域として、上述の体系が理解できた後に取りかかるべきである。

以上のような法の体系をふまえながら、計画的に学習することを、心がけていただきたい。

憲法部門

憲法とは、国家統治の組織と作用の基本法で、その目的は、全ての国民の個人としての尊厳が確保された国家生活の実現である。そのために、全ての国民が、自由で、平等で、適正に扱われ、正当な待遇を受け、平和裏に、個性的に欲望を充足できる（つまり、「自分らしく生きられる」幸福な）状況を実現するために、権力の在り方を規制するものである。これを換言するならば、全ての国民の個性が解放されていながらも、同時に、全体として秩序が保たれた国家生活の実現である。

このような憲法は、最高法として、他の諸法を違憲審査の対象とするもので、そういう意味で、国家基本六法の中で唯一超然とした、いわば「独立王国」である。

また、どの国でも、憲法は、独立、敗戦、統合などといった大きな歴史的出来事に際して作られるものである。だから、憲法の学習に際しては、いわゆる法学概論に加えて、歴史、哲学等、広く人間に関する知識と洞察が不可欠になる。

1. テキスト（科目試験）とスクーリングの関係

テキストは、参考書を併用して、憲法の全体的かつ体系的な学習を期待するものである。他方、スクーリングは、時間の制約がある反面、学生が担当者に直接出会える機会でもあるので、むしろ、現代的で身近な憲法問題の解説を通していわゆる憲法感覚を伝えることを目的としている。

2. 憲法の学習方法

まず、自分で気に入った（つまり、読み易い）版の新しい参考書を書店で見つけて通読し、加えて、配本テキストで日本国憲法の基本構造を知り、さらに、スクーリングで新しい問題の意味を知れば、憲法の学習は完了する。その際、常に、専門的な単語（用語）の意味（定義）と原理（原則）の意味（条件）を確認しながら学習を進めることがコツである。

行政法部門

1. 「行政法」は、国や地方公共団体が登場するあらゆる法律関係を学習の対象に設定する。その中には、行政内部の話も出てくるし、行政と国民（私人）の関係において運転免許やパスポートの取得、公営による上下水道・病院・交通等のサービスの提供、飲食店営業や酒類販売、公益事業（電気・ガス・運輸・通信・放送事業等）への許認可など、学生諸君にとって身近な話も出てくる。守備範囲が広く、したがって「行政法」に関わる法律は数多あるが、「行政法」という一般的かつ形式的な法典は存在しない。民事法、刑事法、訴訟手続法、社会法等、他の法分野も当然包含した上で、「行政法」と称するだけの特色を見極めることが「行政法」研究の最終ゴールに設定されている。このように行政法は、身近な存在でありながら、そのフィールドは途方もなく大きいものである。
2. 省庁再編、地方分権、規制緩和、情報公開、政策評価等、行政組織の在り方を含めた行政システム自体が変革期にある。日々の報道にも、行政法の学習素材は無数に見つけることができる。単に教科書を丸暗記するといった学習ではなく、次々に現れる行政現象をどのように解けばよいか、頭の中でシミュレーションしてみるという学習が極めて有効になってくる。
3. 他の法律学科目として、憲法及び民法（総則・物権・債権）の学習がある程度終了していることが望ましい。また、行政法の基礎理論は、しばしば行政事件訴訟法等の訴訟手続法とセットになったものなので、民事訴訟法を学習することも望まれる。
4. 初学者はまず教科書から学習に入ることになるだろうが、既存の教科書は性質上、どうしても抽象的な記述が多くならざるを得ない。その中でも、初学者にとって読みやすく、学問的水準も保たれた教科書として、原田尚彦『行政法要論』（学陽書房）、櫻井敬子・橋本博之『行政法』（弘文堂）、大橋洋一『行政法Ⅰ・Ⅱ』（有斐閣）等を勧めたい。また、先述のとおり、できる限り裁判判決や日常的行政現象を念頭に置いて、論点を理解する工夫が望まれる。曾和俊文・金子正史『事例研究行政法』（日本評論社）、大貫裕之・土田伸也『行政法事案解析の作法』（日本評論社）、吉野夏己『紛争類型別行政救済法』（成文堂）等を勧めたい。

刑法部門

1. 刑法学とは

刑法学とは、現行刑罰法規（とくに刑法典）を対象とする法解釈学の一部門です。刑法典は、第1編の「総則」と第2編の「罪」という2つの部分によって構成されています。総則とは、あらゆる犯罪に共通する普遍的なものをまとめて一般的に扱った部分のことをいいます。たとえば、故意は、傷害罪であれ、文書偽造罪であれ、収賄罪であれ、すべての犯罪において共通に問題となります。そこで、刑法は、総則の38条において故意について一般的に規定しています。個別の犯罪について規定した刑罰法規は、刑法典の第2編「罪」

以外にも、数多く存在しますが、刑法典の総則は、それらの特別刑法の処罰規定にも適用されるのが原則です（刑法8条を参照してください）。

2. 刑法総論と刑法各論

総則と各則の区別に対応して、刑法学は、刑法総論と刑法各論とに分かれます。この2つを両方とも勉強しなければ、刑法をきちんと学んだことにはなりません。刑法各論は個別の犯罪（たとえば、殺人罪、強盗罪、放火罪…）を規定した各刑罰法規の解釈論を内容としています。これに対し、刑法総論は、犯罪と刑罰の基礎理論、犯罪（ただし個々の犯罪ではなく、およそ犯罪たるもの）の構成要素ないし成立要件、すべての犯罪に共通して妥当する理論、刑罰の種類と適用などを対象とします。各論の勉強は、「障害物競走」のようなもので、解釈論上の一つ一つの論点をじっくり学んでいけばいつかマスターできますが、総論の勉強はまるで「棒高とび」で、総論特有の体系的な思考を身に付けないかぎり、総論を「ものにする」ことはできないという難しさがあります。

3. 刑法学の学び方

総論と各論の勉強方法については、どちらから先に学びはじめなければならないという決まりのようなものはありません。各論の方が具体的で理解しやすいと感じる人も少なくないでしょうし、まず総論の議論が分かっていないと、各論も理解できないと考える人も多いでしょう。お勧めしたいのは、「刑法入門」といったタイトルのついた本を読んで、刑法学の全体を概観した後に、総論または各論を詳しく勉強するという学習方法です。たとえば、最初に読むのに適した本として、井田良『基礎から学ぶ刑事法〔第5版〕』（有斐閣、2013年）があります（そこには、参考文献も示されていますし、文献や資料の利用に関するアドバイスも含まれています）。これをじっくり読んだうえで、総論と各論それぞれの指定テキストに取り組むのが良いでしょう。

法律学のどの分野も、独学するには困難が伴いますが、とくに刑法学は概念が複雑であって議論も錯綜しており、テキストのみによる独力の学習ではなかなか成果が上がらない場合も多いと思います。仲間とゼミを組んで議論することが効果的だと思いますが、スクーリングの講義を活用して先生の言葉に耳を傾け、また難しい論点については勇気を奮って先生に質問に行くことをお勧めします。

刑事訴訟法部門

刑事訴訟法は、実体法である刑法を具体的に実現する手続法です。民法や刑法のような実体法は、抽象的に権利・義務や国家刑罰権を定めていますが、その実現のためには手続法を定めておかなければなりません。そこで、民事について民事訴訟法、刑事について刑事訴訟法があります。

民事訴訟法は、私的紛争を法的に解決するための手続法ですが、刑事訴訟法は、国家刑罰権の実現のための手続法です。

刑事訴訟法では、刑法が実現される過程を学ぶので、刑法の知識を前提とします。

刑事訴訟法を学ぶにあたっては、訴訟手続全体についての考察が必要です。訴訟手続のそれぞれの段階での事象は、相互に密接に関連しています。手続の発展的・有機的関連を全体的に考察することが重要です。

法律を学ぶにあたっては、法律概念を正確に理解してください。ことに刑事訴訟法は、個人の権利を大きく制約することがあるので、その概念があいまいでは基本的人権の保障はおぼつかないこととなってしまいます。

刑事訴訟法ではテキスト科目もスクーリング科目も基本的に同じです。

法律を勉強するに際しては、かならず条文にあたってください。いわゆる「六法」は常に手元に置いておく必要があります。ただ、刑事訴訟法の場合、構成が総則・各則となっていて、実際の手続の流れに沿っていませんから、条文をひくのがややめんどうと感じる人がいるかもしれません。

刑事訴訟法では具体的な事件の解決に関心を払います。したがって、判例集も重要な資料ですから、図書館などで参照してください。なお、いわゆる判例解説は、解説者の視点がいっていますから、判例集に直接あたって読むことが大切です。

最後に、刑事訴訟法の入門書として、上口裕ほか『刑事訴訟法』〔第5版〕(Sシリーズ)(有斐閣、2013年)をあげておきます。

その他、刑事訴訟法を学ぶ上では、裁判傍聴も欠かせません。近くの裁判所について刑事裁判を傍聴してみてください。

刑事政策学部門

刑事政策学は、犯罪の少ない安全な社会を作るための政策や制度のあり方を研究する学問です。具体的には、犯罪者に対しどのような刑罰や処分を設けるべきかという刑事制裁論と、犯罪者に対する刑罰や処分を執行する過程でどのような処遇や教育を行うべきかという犯罪者処遇論が中心となりますが、どのようにすれば犯罪や非行を未然に防ぐことができるかという犯罪予防論も重要ですし、犯罪被害を受けた被害者の立ち直りに向けどのように支援するのがよいかを検討する被害者学(被害者支援論)も欠くことのできない分野となっています。

いずれも犯罪(被害)の現状や制度の運用状況を踏まえたうえで政策や制度のあり方を検討する必要があるため、テキストだけでなく、各種の犯罪統計や白書を必ず参照するようにしてください。犯罪白書は、一次統計をわかりやすくまとめ、図表化したもので、これを常に参照しつつ、必要に応じて、元の統計(警察庁平成～年の犯罪、検察統計年報、司法統計年報、矯正統計年報Ⅰ・Ⅱ、保護統計年報など)にも当たってください。犯罪白書は、毎年、特集の部分があり、法務総合研究所が行った調査結果など貴重なデータが得られます。また犯罪白書以外にも、警察白書、青少年白書、高齢社会白書、男女共同参画白書、犯罪被害者

白書なども大変参考になります。

また、勉強にあたっては、テキストである安部哲夫＝守山正編著『ビギナーズ刑事政策（第2版）』（成文堂、2011年）をしっかりと読むことから始める必要がありますが、**テキストはレポート作成の上での単なる出発点にしか過ぎませんから、テキストを読むだけで終わってはけません。テキストを読んだ上で、テキストに掲載されている参考文献や論文は勿論、更にそれらの中に示されている参考文献や論文といった具合に、当該問題に関する参考文献や論文を幅広く集め、読み込む必要があります。**特に、刑事政策のような政策学は、犯罪情勢の変化や新しい立法などで常に変化していますので、図書館の文献目録やデータベース（CiNii、国立国会図書館蔵書検索など）を利用して、該当分野の新しい論文に必ず触れるようにしてください。関係論文が数多く掲載される雑誌や報告書の一覧（一般の法律雑誌を除く）を下に掲げておきます。

従って、レポートや科目試験は、テキスト以外の資料や文献にきちんと当たっていることが最低条件となります。テキストをまとめてあるだけのレポートは、何回提出されても合格にはなりません。数多くの参考文献に当たり、何が論点かを見極め、それについて洞察を加えることがレポートの課題です。ましてや、インターネットに掲載されている情報をコピーしてペーストして切り貼したようなレポートは添削の対象にはなりません。悪質なものは不正行為として処分の対象になりますので、くれぐれも注意してください。学問に近道はありません。時間をかけ、こつこつ地道に取り組んでください。

なお、**刑事政策学に属するテーマで卒論を書くことを希望する場合、刑事政策学のレポートとテキスト科目試験の両方に合格していることが条件となります**ので、注意してください。

参考雑誌・報告書一覧（法律主要雑誌は除く）

- ・警察 警察学論集、警察公論、警察時報、科学警察研究所研究部報告（防犯少年編）
- ・法務省・検察 罪と罰、研修、法律のひろば、法務省法務総合研究所研究部報告
- ・裁判所 法曹時報、家庭裁判月報（廃刊）、家裁調査官研究紀要（旧・調研紀要）
- ・矯正 刑政
- ・保護 更生保護と犯罪予防（廃刊。事実上の後継雑誌「更生保護学研究」）、更生保護
- ・その他 犯罪と非行、刑事法ジャーナル
- ・学会誌 刑法雑誌、犯罪社会学研究、犯罪心理学研究、矯正教育研究、被害者学研究
犯罪学雑誌、警察政策、更生保護学研究

民法部門

1) 民法とは、その一 ～実質的民法と形式的民法～

民法とは、私法関係（ \longleftrightarrow 公法関係）を規律する原則的な法（＝一般法）を、意味しています。個人と個人、会社と個人など、私達の私的法律関係を規律する、その法ルール、それ

が民法なのです。これが実質的にみた場合の民法の定義です。民法は、人が生まれてから死ぬまでの一生の活動にかかわる法律です。

他方、民法を形式的にみた場合には、皆さん方が持っている六法全書（ポケット六法や基本六法と呼ばれる市販の本）に掲載されている「民法典」と称される法典、それが民法に他なりません。それが形式的意義における民法です。

2) 民法とは、その二 ～一般私法～

私達は国家（日本国）という社会形態を組織し、その中で社会生活を営んでいます。としますと、国家と私達との関係、換言すると私達の国民としての生活関係、これを「公法関係」といいますが、これを規律する法ルールが、「公法」と呼ばれるものです。

これに対して、国家とは直接的には関係することなく、私達相互の生活関係、これを「私法関係」といいますが、これを規律する法ルールが「私法」と呼ばれるものです。

私法と公法との区別を前提としますと、民法は私法に属し、その一つであり、その原則的なものです。この点から、民法は私法分野の基本法と呼ばれています。そしてここから、商法、会社法、消費者契約法、など、たくさんの私法の特別法が作られているのです。

3) 日本民法典の編成は ～五つの編～

先に述べてきたように、私達相互の私的法律関係を規律し、六法全書にのっている民法典、これが民法に他なりません、この民法典は、その編成として、次の五編より成っています。

①第1編・総則、②第2編・物権、③第3編・債権、④第4編・親族、⑤第5編・相続、の五つです。通信教育課程における民法の学科目やテキストもまた、原則的には、この五つの編に即して、設置され配本されているのです。

4) 各編の内容は ～財産法（前三編）と家族法（後二編）～

民法典は総計1000条を越える大部のものです、各編毎にその内容を把握しておけば、それ程、とりつきにくいものでもありません。

①まず、総則編は、民法（主として財産法）における通則を定めています。ここでの学習が、民法を理解するための、土台であり基盤となります。まず、第1歩の作業です。池田真朗『スタートライン民法総論〔第2版〕』（日本評論社、2011年）を参照してください。

②次に、物権編は、物を直接的に支配しうる権利として、所有権を中心として、各種の物権（占有権・地上権・永小作権・地役権・入会権）を定めています。その前半部分の「ヤマ場」は物権変動論です。その後半部分の担保物権（留置権・先取特権・質権・抵当権）についての諸規定に関しては、近時、学問的にも実務的にも、極めて大事なものとなってきています。石田・田高・占部ほか『民法Ⅱ物権 リーガルクエスト』（有斐閣、2010年）を参照してください。

③さらに、債権編には、その内容上二つに分かれ、債権一般に関する総則、そして各個の債権発生原因についての特則、を定めるものです。前者は債権法総論、後者は債権法各論、と呼ばれています。池田真朗『スタートライン債権法〔第5版〕』（日本評論社、2010年）を

参照してください。

④また、親族編は、家族関係としての婚姻・親子・後見の扶養について、定めています。

⑤最後に、相続編は、人の死亡をきっかけとして生ずる財産関係、つまり財産の承継たる相続や遺言について、定めています。④⑤については、大伏由子＝石井美智子＝常岡史子＝松尾知子『親族・相続法』（弘文堂、2012年）を参照してください。

以上、民法は五つの編より成り、前三編は財産法であり、後二編は家族法である、ということが出来ます。

5) 学習の基本姿勢は——読むこと、聞くこと、書くこと、話すこと——

民法の学習に限りませんが、まずテキストを読むことです。また、スクーリングで講義を聞くことも、大事です。耳から聴いて、理解するのです。レポート作成も、そして報告したり、相互に議論することも、肝要です。慶友会の仲間とゼミを組んで、議論しながら勉強するのも大変有益です。さらにひとこと加えれば、民法の学習には、日頃から相手の立場に立つて物事を考える習慣をつけることが有益です。

商法部門

商法分野からは、「商法総則・商行為法」、「会社法」、「保険法・海商法」、「手形法」が専門教育科目として設置されている。これらは実質的意義における商法の重要分野である。

商法は、その内容から企業法と言い換えることができ、企業組織法と企業取引法とで構成される。企業組織法の最重要分野が会社法（会社法という名称の単独の法律が編纂されている）である。もっとも、会社は数ある企業組織の一つに過ぎず、個人企業が代表する他の企業組織については商法総則（商法典の第一編に該当し、商法分野全体の総論もその範囲に含まれる）が規整している。会社法と商法総則は平成17年に大きく改正されている（会社法は平成26年にも大幅に改正されている）。企業取引の通則および各種営業について定めるのが商行為法（商法典の第二編に該当する）である。特殊な営業である保険業の組織と取引を対象とするのが保険法である（保険法および保険業法という名称の法律が制定されており、平成20年に大改正されている）。海商法は、海上企業組織と海上企業取引についての特別法である（商法第三編および国際海上物品運送法が中心となる）。手形法（手形法および小切手法という名称の法律が制定されている）は、企業の決済手段の一つである。なお、商行為法、海商法、手形法・小切手法についても改正作業が進められている。

経済社会の仕組みを理解するには商法の勉強が必須だといえよう。特に、会社法は重要である。一方で、商法は、企業組織および企業取引についての法分野であるから、専門性・技術性が強く、保険法、海商法そして手形法についてはその傾向が顕著である。したがって、商法科目を履修するにあたっては、まず会社法および商法総則・商行為法から始めるとよいであろう。そして、この両科目についても同様であるが、保険法・海商法および手形法については、民法総論、債権総論および債権各論を履修した後で勉強を始めると効率的である。

商法は企業法であるから、経済社会の進展とともに頻繁に改正される。したがって、最新の実務動向に注意していると、商法の面白さが倍増するであろう。そして、商法分野の勉強には最新の文献・資料を用いなければならない。特に、法改正前の文献・資料に基づいてレポートを作成することがないように気をつけて欲しい。

民事訴訟法学部門

1. 民事訴訟法学の領域

(a) 狭義の民事訴訟と広義の民事訴訟

民事訴訟は民事紛争を法的に（正義に基づいて）解決するための制度であり、その方法は、原告の法的な主張（例えば自己が権利者であるとの主張）が正しいか否かを、被告の反論を聞いて、裁判所が判断するというものである（「民事訴訟法」のテキストの講義要綱参照）。裁判所の判断は判決によってなされるから、民事訴訟は判決手続とも呼ばれる（狭義の民事訴訟）。判決手続以外に民事紛争の解決のための手続としては、強制執行手続、民事保全手続、倒産処理手続などがある。

ところで強制執行手続と民事保全手続は、かつては民事訴訟法典に規定されていた。このことが示すように、これらも民事訴訟といわれることがある（広義の民事訴訟）。なお、判決手続に関する特別手続として、督促手続、手形・小切手訴訟、少額訴訟、人事訴訟、行政訴訟等がある。督促手続、手形・小切手訴訟、少額訴訟は民事訴訟法が規定しているし、「民事訴訟法」のテキストにおいて説明がなされている。人事訴訟は人事訴訟法、行政訴訟は行政事件訴訟法が規定している。なお民事訴訟法が広義の民事訴訟手続を規定していないことから、一般に民事訴訟は狭義の意味で使用されている。

(b) 判決手続以外の紛争解決のための手続

強制執行手続は、債務名義といわれる給付請求権の存在を公証する文書（確定判決が代表的）に基づいて、執行機関が請求権の実現を図る手続である。民事執行法が規定している。民事保全手続は、判決手続と強制執行手続は時間がかかるので、それらを補完する手続であり、強制執行の実効性を確保するために、暫定的措置（仮差押え、仮処分）を行う手続である。民事保全法が規定している。倒産手続は債務者に対して複数の権利が競合しかつ債務者の財産が不足していて、それらを満足させることができない場合、総債権者が公平な満足を得るための処理手続である。倒産手続には債務者の財産を清算して各債権者に分配する手続と、債務を棚上げして債務者の更生を考える手続がある。前者は清算型といわれ、破産法、商法の特別清算手続が規定している。後者は再建型といわれ、会社更生法、民事再生法が規定している。なお倒産手続には否認や相殺といった実体規定も置かれていて、訴訟手続のみとはいいがたい面があるが、倒産で問題となる権利が争われる場合は、判決手続で決着をつけることになっている。

2. 本部門の履修の順序と基本的な学習態度

判決手続（狭義の民事訴訟）の原理や原則はあらゆる民事の訴訟法や手続法の基礎や根幹に影響を与えているので、判決手続以外の民事訴訟法学（広義の民事訴訟手続）の領域のいずれを学ぶにしても、先ず判決手続を勉強することである。そして次に、それ以外の紛争解決のための手続や判決手続に関する特別訴訟手続を勉強するのがよい。すなわち、判決手続を規定している民事訴訟法をしっかり勉強して、この部門の特有の原理や基礎理論を修得し、手続的正義や手続保障というものについて具体的に理解することが重要である。

通信教育として開講されている科目名でいえば、「民事訴訟法」、次に「破産法」ということになる。すなわちテキスト科目としては、判決手続については「民事訴訟法」、倒産手続の破産手続に関しては「破産法」という名称で、開講されている。スクーリングの科目も同様で、例年、この2科目が開講されている。なお強制執行手続と民事保全手続については、現在は開講されていない。

なお勉強に際して法の改正に注意しなければならない。司法制度改革に伴い最近では民事訴訟法や関連する法律が毎年のように改正されている。このような状況であるから、勉強に際しては常に最新の六法を参照しなければならない。また参考書を利用する場合は、できる限り最新の法改正を織り込んでいるものを利用すべきである。もっとも理論的な問題や法の改正に影響されない問題であれば、改正を記述していない参考書でも利用できるから、法の改正によって従前の参考書が価値がなくなるというものではない。

3. 本部門の参考書

開講されている「民事訴訟法」、「破産法」の勉強方法や参考書については、それぞれの講義要綱やレポート課題集の参考文献欄を参照すること。他の手続の場合は、手続を規定している法律名を表題とする本が参考書になる。すなわち、民事執行法、民事保全法、破産法、会社更生法、民事再生法等を題名にしている本である。ただし倒産手続に関しては、個々の法律名だけでなく、それらを統合した「倒産法」という本も出版されている。

本部門を全体的に概観したい場合は、中野貞一郎『民事裁判入門 [第3版補訂版]』（有斐閣、2012年）を推薦する。あるいは、「民事訴訟法」についての本格的な教科書を参照するという方法もある。例えば、三木浩一ほか『民事訴訟法 [第2版]』（有斐閣、2015年）、新堂幸司『新民事訴訟法 [第5版]』（弘文堂、2011年）、伊藤眞『民事訴訟法 [第4版補訂版]』（有斐閣、2014年）など。

4. その他

民事訴訟法学者は一般に判決手続と関連手続を研究領域（守備範囲）にしている。日本民事訴訟法学会は毎年3月末に「民事訴訟雑誌」を刊行しているが、そこには判決手続（狭義の民事訴訟）に限らず、本部門（広義の民事訴訟）に関する最新の研究が発表されている。

社会法（労働法・経済法）部門

社会法という領域は、それまでの公法・私法という二分法からすれば、その双方の法領域にまたがる、第三の領域である。

社会法は、19世紀という資本主義社会草創期においてその必要が生じ、創造された。19世紀前半の社会理念は、私人の自由と平等を重んじ、その権利の絶対性を尊重するあまり、私人間の契約に係る領域には国家は介入しないことを是とした。私人間の自由意思による契約は絶対であり、独立した私人が自ら決定したことは、そのまま尊重されることがより良い社会の形成につながると考えられたのである。しかし、法的主体間に存する事実上のアンバランスを無視した形式的平等主義は、結果として社会の貧富あるいは強者と弱者の間の不平等をかえって助長する結果となった。

19世紀後半になると、これらの社会的矛盾を是正するためには、私人間の契約に係る領域であっても、場合によっては国家的見地から政府が介入し、社会のバランスを改善する事が求められるようになる。そのためのルールを確定する、一種の政策的法領域が社会法と今日呼ばれている領域である。

この領域には、使用者と労働者という雇用に係る個人間のあるべきバランスを求める「労働法」、あるいは経済主体としての企業間もしくは国家間の取引に係る領域における・自由競争を確保しようとする「経済法」、個人の幸福追求を国家が如何に支援するかを政策的に遂行する「社会保障法」などが、含まれる。

この領域を学ぶには、まずその前提として契約とは何かが理解できていなければならない。労働契約にしても、商取引にしても、その基本は契約である。従って民法の学習は全ての基本であろう。しかし同時に、この領域は前述したとおり、一方で私人間の契約を対象としながら、場合によってはその契約を国家的見地から取り締まり、あるいは国家的見地からの給付に関する法体系である。だからこそ、憲法・行政法に関する知識が不可欠である。

このように、社会法を学ぶには、私法・公法にまたがる双方の理解が必要である。従って、この領域はむしろ基礎的・一般的法律科目を履修した後に学ぶべき、特別法の領域であることを自覚して欲しい。基礎がなければ、それらの修正原理としての「社会法」を学ぶことは困難である。更に、具体的紛争は民事訴訟として生ずることもあれば、事案によっては行政訴訟の形をとって提起される場合もある。将来この分野で卒論を書く者は、卒論指導にはいる前に、それら訴訟法に関する学習も同時にしておくべきであろう。

国際法部門

国際法とは

国際法とは、伝統的概念にしたがえば、国家を構成単位とする国際社会に妥当する法規範のことです。

国際法もまた法規範であるゆえ、憲法をはじめとする国内法諸分野と多くの特徴を共有し

ています。しかし、両者の間には、それらが妥当し、また逆にそれらを支える社会構造の相違に由来する決定的な相異点が存在しています。それは、立法府、行政府、司法府といった通常の近代的国内社会において法の諸々の作用を担う機関（特に、警察・検察や裁判所といった典型的な法の執行・強制機関）が、国際社会には存在しないという点です。そのため、国際法には、法の本質とも考えられる強制力が欠如しているものとみなされがちです。そこからさらに、「国際法は法か」という問いがしばしば発せられることとなります。

国際社会のこのような構造は、その構成単位である各国家が最高・絶対とされる主権を有し、それゆえにすべての国家は平等であり、上位者を認めないという法的擬制によって規定され、国際法理論もそれを前提として提示されてきました。国家と国家の関係ということで公法の一分野であるはずの国際法ですが、平等な法的地位にある諸国家間の関係が私法上の私人間関係に類似したものと観念されたため、近代国際法に関する学説及び実行は古代ローマ法に由来する私法理論に大幅に依拠することによって形成されました。しかし、20世紀（特に、第一次世界大戦後）に明白となる国際社会の構造変化によって、従来の国際法理論では理解され得ない事象が数多く生じています。

国際法の学び方

以上のような基本構造と歴史的背景を有する国際法の学習と理解のためには、法学の基礎理論（法解釈学のみならず、法哲学及び法史学を含む）、私法と公法に関する多面的な知識が必要とされることとなります。そしてそれらの知識をもとに次のように国際法の学習を進めればよいでしょう。

まず、テキスト、入門書〔大森正仁『国際法Ⅱ』・大森他『よくわかる国際法』（ミネルヴァ書房、第2版、2014年）等〕によって国際法学の概要を把握し、次に専門的概説書〔栗林忠男『現代国際法』（慶應義塾大学出版会、1999年）（2000年度より通信指定テキスト）〕によって体系的理解の獲得を目指すことをすすめます。さらに興味があれば、特定の分野や事項に関する個別の専門文献（単行書・雑誌論文）へと進めばよいでしょう。なお、教科書や文献の理解を深めるために、それらの中で引用されている条約や判例については資料集（条約集・判例集）を参照することも重要です。

外国法部門

なぜ、外国法を学ぶか

外国法を学ぶ目的は、二つある。一つは、法の本質を問うためであり、もう一つは、現実の国際関係に役立てる為である。後者の目的の理由は明瞭である。友好的で、効率のよい国際関係を築くには、どんなレベルであっても、相手方の制度、機構、文化を理解することは基本的な必要条件であるからだ。この目的の為には、様々の国家の法を知ることが必要になってくる。しかし、法律学の研究において、特に重点が置かれているのは、フランス法及び、ドイツ法、そして英米法である。その理由は、第一の目的と深く関係してくる。

そして、慶應義塾のカリキュラムにおいて、外国法は、基礎法という分野に属するものとして扱われている。そもそも、基礎法とは、法哲学のように法の本質を考えるための学問であり、また、憲法のように、国家及び、ある国の法制度及び理念の基礎を決定する法分野である。ではなぜ、外国法は基礎法に分類されるのだろうか。外国法を学ぶことによって何が見えてくるのであろうか。

日本の法律は、その後、独自の発展を遂げたとはいえ、近代の初期に、ヨーロッパに成立していた法及び、法哲学を基礎に、制定された。それゆえ、現代においても、その理念を理解し、それが、新しい時代において、その普遍の理念がどのように生かされるべきかを考える為には、日本法の母法たるドイツ法、フランス法を知ることには大変有意義だと考えられる。これらの国家の法や、その理論を学ぶことにより、直接に日本法に利用し、その内容を充実させることができる。

では、英米法についてはどうであろうか。周知のごとく、英米法は、大陸法とは異なった理念によって、動いている。その特徴は、慣習をもとにした判例法であり、また、陪審制度など、独特の訴訟手続きを持っている。現実的な理由以外、この様に、異なった法制度を研究する理由は、どこにあるのだろうか。それは、法に対する異なったアプローチを学ぶことが、法の理解を深め、充実させるところにある。なぜ、法が存在するか、法の本質は、法はいかにあるべきか、これらの問いは、法を学ぶ者が、それにどっぷり浸かっている体制を学ぶだけでは、見えてこない場合が多い。異なる視点、異なるスタンスから、ものを考えることから、その本質や問題点が見えてくる場合が多いのである。外国法を学ぶということは、この、異なった視点を得ることだと言えよう。

部門共通—判例の読み方

現代の法律学では、より現実の紛争解決に近づくことのできる、リアリティのある学習をすることが求められている。そのためには、従来のいわゆる理論的な教科書だけでは足りず、実際の紛争とその解決策を示す「判例」の学習が重要になる。これは、憲法、行政法、刑法、民法、商法、民事訴訟法、刑事訴訟法、社会法等の各部門に共通の要請である。しかし、判例の検索法とか読み方については、通学課程では、そのための独立の科目（「法学情報処理」）もあり、また、ゼミ等でも適宜教えられるのであるが、通信教育課程ではまだ独立の科目が設置されておらず、それぞれのテキストでも必ずしも十分に触れられていない。したがって、以下の解説を参考にしていきたい。

トータルな内容の判例学習書としては、池田真朗編著『判例学習の A to Z』（有斐閣、2010年）が便利である。

重要判例を紹介し解説する書物は、『判例百選』シリーズ（有斐閣）や『判例講義』シリーズ（悠々社）など、比較的多くのものが出版されている。しかし、それらは「判例解説書」であって、「判例学習書」ではない。一方、判例をどう検索するかというリーガルリサーチ

に関する書物も、存在するが（いしかわまりこ他著『リーガル・リサーチ（第3版）』日本評論社）それだけでは不足である。また、判決文それ自体の読み方を解説するものもあったが（中野次雄『判例とその読み方（三訂版）』有斐閣）、現代の学生向けの独習書としてはいささか取り付きにくいかもしれない。そして、判例学習そのもの、すなわち、主要な各法分野について、リサーチの仕方に始まり、判例の機能を知り、法解釈の中での判例の位置づけを学び、かつその判例に重要度のランク付けをしたり、一つの判例をさまざまに活用した学習法などを教える書物はこれまで存在しなかった。そのようなトータルな意味での「判例学習書」と呼べる書物は、前掲の『判例学習のA to Z』くらいと思われるのである。

以下、判例学習のポイントを同書（以下「前掲書」として引用）を参照しつつ解説する。

(1) 判例は、できるだけ要約されたものではなくオリジナル（判決原文）にあたること。ことに、卒業論文で引用するような判例は、必ずオリジナルを読んでおくこと。最高裁判決の中でも、最高裁判所の公式判例集である『最高裁判所民事判例集』（民集と略す）、『最高裁判所刑事判例集』（刑集）に載っているものが最も重要である。民間の判例雑誌としては、「判例時報」（判時）、「判例タイムズ」（判タ）、「金融商事判例」（金判）、「金融法務事情」（金法）などがある。なお、第一審から控訴審、上告審と進む訴訟の構造と判決文のあり方については、前掲書第I章を参照されたい。

(2) 判例の調べ方は、データベースを十分に活用するべきであるが、データベースを妄信してはいけない（人為的に編集しているので、完全なものではない。前掲書第VI章参照）。

(3) 判例を読むときには、すぐに判旨を読むといけない（こういう、「判旨」などの言葉の意味は、前掲書第I章で確認してほしい）。①まず、判例（事実、判旨）を読むときには、必ず紙と鉛筆を用意する。②最初にするのは、**事実関係の把握・整理**である。最初から判旨を読むといけない。事実関係を読む際には、文章を、鉛筆で適宜区切りながら読む（さらにいえば、判例の中には、古い大審院時代の漢字カタカナの文語調のものもあるのだが、そういう判例を読む場合の指導については、前掲書第II章参照）。③登場人物が多数ある事案、当事者の主張が多岐にわたる事案については、必ず**関係図**を描いてほしい（前掲書では関係図の書き方も指導する）。④さらに、取引関係がいくつか重なっているケースでは、それらを**時系列**で整理してみる。時の流れを示す直線の上に、日付を入れた出来事メモを順番に書き込んでいくのである。これだけやって初めて、⑤原告が**何を求めてどんな訴えを提起したのか**、⑤**適用条文の確認**、と進んでいくのである（判旨はまだ読むといけない）。適用条文は、何法の何条なのか、を想像し、その条文にあたって、規定内容を確認して、その条文では何が足りないのか、どんなことを足さないとこの紛争が解決しないのかを考える作業が非常に大事なのである（法律学の学習に一番必要なのは、想像力である。暗記の能力などではない）。それだけやって、ようやく⑥**判旨を読む**ことになるのである。

(4) 判例学習は、先例を覚えるためのものではなく、これから遭遇する紛争事例に対処できるための応用力を養うものでなければならない。ここも勘違いしないように。

(5) 具体的に民法、憲法、刑法という主要法分野ごとに、具体例を扱いながら、判例の意

義を考えていく。そうすると、法分野ごとに判例の意味や役割が違っていることもわかってくる。その中で、価値の高い判例とはどういうものなのか、も考えてもらう（いわば判例の「格付け」である）（これらのことを前掲書では第二章から第四章で学習する）。

(6) 判例や裁判例を使った発展的学習としては、当事者がどういう人か、なぜこのような紛争が起こるのか、を考えてみたり、事案を少し変えて別の登場人物がいたら結論はどうなったか、などと考えたり、という訓練がある（詳細は前掲書第V章参照）。

(7) もちろん、どうやって判例を検索するかというノウハウがなかったら、いわば料理すべき材料が入手できないのであるから、そのリサーチの技法はしっかり身につけていただく必要がある（詳細は前掲書第VII章参照）。スクーリングの機会に図書館で開催されるオリエンテーションに参加することも強く勧められる。

以上がポイントの概略である。なお、判例と学説を一緒にして、「判例はA説だが学説にはB説とC説があり」などと書いている教科書をよく見かけるが、判例は「説」を立てているのではない。それぞれの事案に対する紛争の解決法を提示しているのである。したがって、判例法理の中には一般化できるものとできないものがあることも理解したい。

いずれにしても、紛争解決のためには、①まず条文にあたり、②それで足りないときには判例の準則を探し、③最後に学説を調べる、という順番を常に忘れないでほしい。

.....

政治学分野

本塾の政治学教育にかかる科目は、大別して、政治思想論、政治・社会論、日本政治論、地域研究・比較政治論、国際政治論、という5部門に分かれています。ただ、これら5部門は相互に関連しており、バランスよく履修することが、政治学ないしは政治という現象を正しく理解するために必要となります。内容をごく簡潔に要約すれば以下の通りです。政治思想論は古今東西の政治理論ないし政治思想の理解を深めるための科目です。政治・社会論は経験的もしくは科学的と呼ばれる政治理論、および社会学や行政学・法律学・経済学などの視点から政治現象の解明を目指す科目です。日本政治論は日本社会における政治の仕組みや思惟を過去から現代にかけて解明する科目です。地域研究・比較政治論は世界各地における政治制度や政治の動態を北米・南米・ロシア・中東・アフリカ・中国・東南アジアなどの地域ごとに個別に解明したり、比較論的視座から分析したりする科目です。国際政治論は日本を含む諸国家ないし諸機関どうしの相互作用を全体としてとらえ、世界的視野から平和と紛争を考察する科目です。

政治哲学（「政治哲学」）**政治思想史（「ヨーロッパ中世政治思想」「政治思想史Ⅲ」）部門**

政治哲学も政治思想史も、政治学の基礎概念にかかわる学問分野です。この部門では「政治哲学」、「ヨーロッパ中世政治思想」、「政治思想史Ⅲ」のテキスト科目を用意しています。

ところで今、「政治学」と述べました。言うまでもなく政治学とは「政治」を対象とする学問ですが、では人間の様々な社会活動のうち何が「政治」と言えるのか、こういう問題が当然のことながら出てきます。言い換えますと、経済現象でも社会学的現象でもない、政治現象の確定が求められているわけです。

これは決して簡単な問題ではありません。私たちの目に通常映っているのは、社会的活動の漠然とした束だからです。したがって私たちは無意識のうちに、ある一定の基準を設定し、それを用いて「政治」を社会から抽出していると言えます。そして、ここで言う基準をより厳密に・より体系的に論じようとする試みこそ政治哲学に他なりません。そのため、テキストを通じて履修者はまず「政治の本質」を改めて考察することになります。

また、人間は生きる意味・目的を求めてやまない動物です。とすれば、そういう人間にとって政治はどのように評価されるべきなのか、こういう問いは全体主義や民族紛争を見聞きした私たちにとって切実なものであるはずです。「政治の価値」が再検討されなくてはならない所以ですが、「政治哲学」は「政治に関する世界観の学」として、この問題にも立ち向かいます。

さて、政治哲学が基礎政治学の共時的な理解を目指すとするれば、政治思想史はその通時的な理解を目指す学問領域だと言えましょう。

およそ学問には、過去の学説に照らし合わせて、自らの意義を確認しようとする契機がありますが、政治学において学説史の学習はまことに重要だと言わなければなりません。政治学は他の学問以上に、過去に用いられた術語を批判・検討しながら、私たちの政治生活の理解を深めようとする傾向が強いからです。たとえば「民主政治」ひとつとっても、現代の多くの理論家たちは古代ギリシアを引証基準にして考察を行っているのです。

ところで、皆さんが手にするテキストはもっぱら、ヨーロッパの地で展開された政治思想を扱っています。日本政治思想にはほとんど言及がなされません。しかし、近代日本の幕開けとともに先人たちが政治思想を含む西洋文化の吸収に努力してきた結果、ヨーロッパ文明は今日、私たちの「第二の自我」と言うべきものになっています。そのことを疑う人はいないでしょう。ですから、日本政治思想を深く学んでみたいと思っている方も、ヨーロッパ政治思想の「応用問題」として目を日本に転じることは、決して間違いではないはずです。

履修者に求められる視点を少し具体的に述べますと、まず「ヨーロッパ中世政治思想」ですが、上に記したとおり、私たちにとって重大な意味を持つヨーロッパ政治思想の「原型」

が形成されたのが、中世と呼ばれる時期であることに注意を払って下さい。では、ここでいう「原型」とはどういうものか それは皆さんが学習を進める中で明らかになるはずです。と同時に、そういう問題意識をもって中世政治思想を学ばれるならば、ここでの理解がヨーロッパ文明そのものの理解と直結していることに気が付かれることでしょう。

「政治思想史Ⅲ」では、ヨーロッパ政治思想史を飾るビッグネームが打ち立てた理論を学習します。ここで意識してもらいたいのは、彼ら思想家たちの理論それぞれが、近代的な政治観の確立に寄与しているということ、その結果私たちにとっても「どこか親しみが持てる」ものになっていることです。ただし、テキスト執筆者が語っているように、そこで感じられた「親しみ」は、あくまで現代の思想的課題に対する私たちの認識の道筋を整えるための出発点です。私たちが探求すべき政治は、近代政治思想のナイーヴな延長線上にあるのではないからです。その意味では、過去の思想家たちに問いかけようとする姿勢こそ、学習を通じて最も求められるものだと言えましょう。

政治理論部門

政治理論にかかわる専門教育科目で現在テキストが配布されているのは、島田久吉・多田真鋤著「政治学 (J)」です。この他に、「政治学」「政治理論」「政治過程論」のスクーリング科目が開講されています。

法学部通信教育課程乙類として開講されている諸科目に共通するのは、それらがすべて政治学の科目であるという点です。したがって、それらの科目の基本からの理解には、政治学とは何かを理解していることが不可欠です。

たとえば、いま、あなたが日本研究者の集まりに参加しているとします。そこには、経済学、社会学、人類学、宗教学、文学、医学等々の研究者が集っているはずです。これらの研究者に囲まれて、あなたが他の研究者とは異なり「政治学として研究を行なう」というのはどういうことか、その説明を求められたらどう答えるでしょうか。

この間は、政治学の出発点で問われるべき問であり、また到達点として明快な答をもつべき問でもあります。「政治学 (J)」の履修は、この答を探すために必要な第一歩だと考えてください。

日本政治部門

政治を理解するためには、政治思想や政治制度、さらには政治の歴史や実態を学ぶことが必要不可欠です。また、世界各国の政治状況を理解するためには、まずは自国の政治状況を十分に理解し、これを正しく把握しておくことが、何よりも肝要であることもあらためて指摘するまでもありません。法学部ではこのような要請に応えるため、とくに「日本政治」の部門を設置しています。

「日本政治」の部門では、日本政治の歴史や実態を詳しく勉強するため、「日本政治史」、「日

本政治史Ⅰ（古代）、「日本政治史Ⅱ（中世）」、「日本外交史Ⅰ」、「日本外交史Ⅱ」のテキスト科目を用意しているほか、夏期もしくは夜間スクーリングに際しては、上記科目ばかりでなく、現代日本政治の実態の理解を深めてもらうために、「日本政治論」の講座を開講しています。

「日本政治」というと、他国の政治と異なり、私たちにとって身近な存在であり、誰でも簡単に学ぶことができるものと思われがちです。しかし、ジャーナリスティックな興味をこえて、アカデミックな分析手法や研究成果を習得することは、そう簡単なことではありません。「日本政治」の勉強は、対象には接近しやすいのですが、その分だけ、逆に高度なレベルが要求され、なかなか厳しいものがあるからです。履修希望者は、安易な気持ちを捨て、たとえ困難な課題にぶつかったとしても、これを乗り越える努力をして欲しいと思います。そして履修生諸君が、この機会を利用して日本政治の「過去」と「現在」を正しく理解し、その上で、それぞれがこの国の「将来」についても真剣に考えてくれることを期待しています。

履修にあたっては、それぞれの科目担当者が示している指針や履修条件を十分に参照・吟味し、くれぐれも途中で挫折したり、後悔することのないようにして下さい。また、履修科目選択の順序は、とくに指示がない限り、全く自由です。

地域研究部門

「各国別、各地域別の研究で、特定の国あるいは地域の総合的理解と、他の国・地域との比較を重視する」学際的学問が地域研究です。ここでいう「総合」とは、ある地域の近現代または現在が抱える問題に対し、複数の専門領域からアプローチし、その成果を総合して理解するという意味です。その際学際研究のやり方をめぐり、1人の研究者が、すでに確立している社会科学の複数の学問分野をマスターして取り組むのか、それとも1人の研究者は1つの専門分野に特化して研究を進め、その上で他の専門分野の研究者と共同研究を行うのかという疑問が生じます。この方法論上の問題は学会でも決着のついていない問題なので、ここではこれ以上問いません。

いずれにしても地域研究者は第1にその地域の文化に惹かれ、言語を修得し、現地での生活を体験し、近現代史を概観した上で、地域特性を研究対象にします。その意味では実証的な学問です。しかしそれだけでは不十分で、上述のように社会科学の学問分野を少なくとも1つマスターし、そこで練り上げられた問題の見方や分析手法を地域の研究にできるだけ使う必要があります。

法学部学生が地域研究に取り組む場合、差し当たり政治学関係の諸科目を幅広く学ぶのがよいです。整合性、体系性の点で、政治学とは何かという問題が残るでしょう。また多くの場合政治学の理論は欧米地域の近現代を研究対象にして作られているため、その理論を地域研究、特に途上国研究に応用しようとしても途惑うことが多いです。しかしそうであったと

しても、地域の実証的な研究と社会科学の理論的研究との関係は相互に交流し、影響を与え合い、時に緊張関係に陥りながら長期的には地域研究からのフィードバックによって社会科学理論自体が作り変えられてゆくものと考えerべきです。

従って冒頭に挙げた「他地域との比較」の重視についても、その比較軸は社会科学の理論的イシューです。ある地域の人間の行動様式は特性を持つと同時に、他地域のそれと比較してみれば共通点も見出せます。より広い地域設定の中で問題を理解することが、理論的一般化にとっては必要です。以上に述べた地域研究の学問的特徴、方法論について詳しく知りたい者は、『入門現代地域研究』、「特集：地域研究の海へ」（『地域研究論集』）、『講座 現代の地域研究』を読むとよいです。

現在テキスト科目では、「現代中国論」「アメリカ政治史」「ロシアの政治」が開講され、スクーリング科目ではそれ以外の諸地域もカバーされています。理論的アプローチは科目毎に少しずつ違いが見られますが、自らの関心に従ってどの地域から学習してもよいです。できれば卒論などに繋げて関心地域を掘り下げて学習してください。

地域の問題を見つける上で、『世界年鑑』（共同通信社、各年）をはじめとする年鑑類を活用するなどして、各地域の現状をフォローするのが役に立つでしょう。また本塾図書館での資料探しの他に、特に途上国研究に取り組む場合、日本貿易振興会アジア経済研究所の図書室を訪ねるとよいです。

- ・加藤普章編『入門現代地域研究』（昭和堂、1992年）
- ・共同通信社『世界年鑑』（各年）
- ・国立民族学博物館地域研究企画交流センター編『地域研究論集』第1巻第1号「特集：地域研究の海へ—その方法と可能性」（平凡社、1997年）
- ・矢野暢編『講座 現代の地域研究』第1～4巻、（弘文堂、1993～94年）
- ・『現代用語の基礎知識』特別編集、『国際情勢ベーシックシリーズ 第1～10巻』、世界各地の現代史を概説（自由国民社）
- ・日本貿易振興会アジア経済研究所 <http://www.ide.go.jp>
- ・地域研究コンソーシアム <http://www.jcas.jp>

国際政治部門

国際政治部門では、歴史的な視座からこれまでの国際政治の大きな潮流を展望して頂くと同時に、現代の国際政治の諸問題を理解する基礎を学んで頂くことになります。国際政治では、平和と戦争、内政と外交、地域主義とグローバル化などの多様な問題群を理解することが求められ、そのためには国際政治の基礎概念を正確に理解することが必要となります。

国際政治部門としては、『ヨーロッパ政治史』と『西洋外交史』のテキストがあります。『ヨーロッパ政治史』は1単位で、ロシア革命から1950年代までのヨーロッパ各国の政治と外交を学ぶことになります。『西洋外交史』は2単位の科目で、第一次世界大戦後のパリ講和会議

から第二次世界大戦までの時代の欧米を中心とした外交史を学ぶこととなります。いずれの科目もテキストがやや古くなり、また戦後の時代をあまり扱っておりませんので、参考書を用いて戦後のヨーロッパ統合の問題や、外交や国際秩序の変容についても同時に学んで頂くこととなります。

国際政治部門の総合的な科目としては、夏期スクーリングあるいは夜間スクーリングで「国際政治論」を用意しております。これは国際政治論の概論であり、国際政治の理論と歴史、そして現状を学んで頂くこととなります。担当講師の指定したテキストや参考文献を幅広く読んで頂くと同時に、動きつつある現代の国際情勢にも関心を寄せて下さい。

国際政治は日々めまぐるしく動いております。毎年、新しい展開が見られ、重要な外交合意が創られ、深刻な危機が勃発しています。歴史的な視野と同時に、現代を理解する洞察力を養い、世界の動きに関心を寄せて頂ければと思います。

学問分野別
P9

分野別

総合教育科目
P51

総合

文学部
P89

文

経済学部
P167

経

法学部
P205

法

教職
P269

教職

科目別履修要領

〔総合教育科目〕

- ・履修要領には、絶版となった参考書も記載してあります。これは、「その参考書が学習上有益である。」と担当者が判断したものです。可能な範囲で図書館などで捜して学習することをお勧めします。
- ・この科目別履修要領の講義要綱には、科目名の「新」・「改訂」が省略されている箇所があります。

【講義要綱】

哲学の歴史は学問の中では最も古く、多くの人間が解決に悩んだ問題の歴史です。哲学を学ぶには、「問題」の方に力点をおくやり方と、「歴史」の方に力点をおくやり方があります。どちらのやり方にもそれなりの利点がありますが、この講義では、前者のやり方をとり、哲学的問題とはどのような問題なのか、それを解決するためにはどのように考えればよいのかを、実際の問題を扱いながら考えて行きます。その際に強調したいことは、哲学は科学を中心とする現代の理論的営みと無関係なものではないということです。したがって、この講義が目指すのは、現代に生きる私たちがそれぞれの生活の中で生じる哲学的な問題に直面したとき、それを解決する方法や手懸りを提供することです。

【テキストの読み方】

テキストをどのように読み進めるかはきわめて重要です。そこでこのテキストの読み方について説明します。このテキストは論証の部分と、歴史的経緯や状況の説明の部分とからなっています。事件や事実を叙述する場合と、その背後のからくりや原因と結果の関係を推理する場合は大きく違っています。叙述の代表は小説や報道記事です。何が何時どのようなようになったかという報告は、素直に読むだけで事の経緯がわかりますから、考えながら読む必要はありません。映画やテレビドラマが面白いのは筋の展開や心理描写にあり、それらは考えなくてもわかります。一方、論証の代表例は数学の定理の証明です。シャーロック・ホームズの推理も論証の一つです。数学の定理や名探偵の推理はしっかり考えないとわかりません。このテキストはこれら二つの異なる部分、つまり論証部分と叙述部分からなっていることに注意してください。

読んでいる部分が論証なのか、叙述なのかをまず確認してください。いずれの部分かによって読み方が違ってきます。論証部分はかつて数学のテキストを読んだときのことを思い出ししながら、その時と同じように読んでみてください。時間をかけてゆっくり読まなければなりません。途中でわからなくなったら先に進むのではなく、前に戻らなければなりません。何度も前のページを見返すことが必要になります。一人で読む場合、このような読み方は一方的に辛抱強さを要求しますから、ついいい加減になったり、読み飛ばしたりしてしまいます。辛抱強く、何度も読み返す、わかるまで頑張る、といった根気が求められます。これに対して、叙述の部分は日本語さえわかれば大抵苦労なしに理解できます。正確に理解することを心掛ければまず心配は要りません。用語や人名が不明ならそれを調べる程度で済みます。でも、自分が正しく内容を理解したかどうかの確認は叙述の部分の方が厄介で、誤解しないよういつも注意しなければなりません。論証部分はわからない場合にはわからないという自覚が必ずあり、わからないことがはっきりわかります。

さらに、このテキストのもつ特徴は（問）があちこちにあることです。問は必ず解答して

ください。テキストの内容が理解できたかどうかの目安になります。テキストが二つの異なる部分をもつことを念頭に置きながら丁寧に読み進め、必ず「わかった」、「理解した」という確信がもてるまで何度も読み直してみてください。

【関連科目】

哲学から個々の学問が生まれていったことを考えれば、すべての科目が哲学に関連していると言っても過言ではありません。テキストの内容に対応する科目は何かを常に意識しながら学ぶと個々の研究を通じて哲学が理解できる筈です。

実際に関連の強い科目は論理学と科学哲学です。論理学は推理推論するために知っておかなければならない事柄ですし、科学哲学は哲学の個々の分野の一つです。

【参考文献】

野矢茂樹『哲学の謎』講談社現代新書、1996年

柴田正良『ロボットの心』講談社現代新書、2001年

戸田山和久『知識の哲学』産業図書、2002年

西脇与作編『入門科学哲学』慶應義塾大学出版会、2013年

【レポート作成上の注意点】

特に注意してほしいことは、教科書や参考書に書かれている事柄をまとめるだけのレポートにならないようにすることです。もちろん、教科書や参考書で理解したことを前提としなければなりません。その上で、あなた自身はどう考えるのかということを中心に書いてください。他方、教科書や参考書から学んだことをすべて無視して、自分の考えだけを書くという、逆の誤りにおちいることも避けてください。また、自分はこう考えると述べるだけでは、レポートにはなりません。必ず、なぜそう考えるのかという理由や根拠を挙げてください。レポートの書き方については、補助教材『学習のすすめ』を参考にしてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

論理学 (A)

(A 015-7903、A 7950)〔4単位〕

【講義要綱】

論理学の研究はアリストテレス以来長い歴史をもっています。私たちが何かを推理するときには不可欠の規則が論理規則と呼ばれ、それがないと考えることさえ覚束ない基本的な規則と考えられています。それを研究するのが論理学で、19世紀末のフレーゲの研究によって論理学はそれまでにない新たな発展をすることになります。数学的な思考と記号の使い方が論理学に取り入れられ、数学やコンピュータ科学と結びつきながら、様々な分野で応用され、基礎研究には欠かせない役割を演じています。

この講義では論理的な推論や真偽概念について基本的な事柄を学ぶことを目的にしています。それによって自分が論理的に考えることができるようになるだけでなく、他人の考えが正しいかどうかもしっかり判定できるようになれるはずです。

【テキストの読み方】

文学部の他のテキストと違って記号や数式、論理式がたくさん登場します。自然な言語ではなく、記号言語を使って文や命題を論理式に書き直し、推論が正しいかどうか調べることが主要な内容ですから、それをしっかり肝に命じて読み進めてください。丁寧に説明されていますから、普通に読み進めれば、テキスト以外の参考文献を参照しなくても完全に理解できます。根気強く読めば、このテキスト一冊だけで論理学の基本は理解できるのです。

【関連科目】

論理学が生まれた経緯や歴史から哲学が強い関連をもった科目です。推論することが主要な研究方法である哲学では論理的な推論が大切な道具になっていますから、論理学の知識は哲学の問題を扱う上で必要なのです。また、数学的な形式をもった内容ですから、数学基礎論、計算理論、コンピュータ言語等は論理学と密接に結びついています。さらに、言語学との関連も20世紀後半には強くなり、統語論、意味論等で重要な役割を果たしています。

【参考文献】

論理学のテキストはたくさんありますが、テキストの読み方で書いたようにこのテキスト以外のテキストをまずは忘れてこのテキストだけに集中してみてください。どれも似た内容なら一冊だけ暗記するほどに読むのが一番です。

【レポート作成上の注意】

他の文献を参照する必要はありませんから、テキストの内容だけを十分に使ってレポートを作成してください。文献を検索し、巧みにそれを使うのではなく、テキストの内容を正しく理解し、それだけを使って問題を解くことに専念してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

文学

(A 012-7601、A 7610)〔4単位〕

●中国文学関係

【講義要綱】

漢詩は、世界で最も美しい文芸の一つと言われ、日本の短歌や俳句、あるいは欧米のソネットやバラッドなどと並んで、それぞれの言語や感性の特色を美しく反映した抒情の結晶です。また漢詩は、3000年近くという長い歴史を持つ、中国古典文学の中でももっとも中心的な位

置を占め続けてきた文学ジャンルです。本講義を通じて、奥深い漢詩の世界に対する理解を深めてもらいたいと思います。

なお中国の古典文学は、どのジャンルにおいても、いわゆる西欧の文学（literature）の概念とは異なる独自の在り方、発展・変化の過程を有しています。

そうした状況を、中国の文化・歴史的な背景や中国語の特徴と関連づけて考え、また他国・他地域の文学と比較してとらえることは、自らの「文学観」を相対化し、中国文学に対して多角的で深い視座を持つために非常に重要であると考えられます。

このような視座を持つことは、文学に限らずおよそ人文科学すべての分野において、必須であると思われます。本講義を通じて、そのような視座を養ってもらいたいと希望します。

【テキストの読み方】

テキストに加え、下記参考文献の①、②、③を読んで、中国文学の特徴を各ジャンルごとに（特に漢詩を中心に）把握すること。

さらに、④を読んでそれぞれの特徴や各作品を文学史の観点から整理し、さらに前後の時代の特徴と比較すること。また、特に漢詩については、⑤、⑥を読んで知識・理解を深めること。

また、各詩人および作品についてさらに深く考察し、先行研究を調査するために、⑦を利用すること。

【履修上の注意】

まずは参考文献を読んで、中国文学の特徴、とりわけ他の国・地域の文学と比較して顕著な特徴について、特に漢詩のジャンルを中心によく理解すること。

次に、自分が選択した詩人・作品にそうした特徴がどのように表れているのかについて、他の詩人との比較を含めて注意深く分析し、先行研究も踏まえつつ論じること。

【参考文献】

- ① 吉川幸次郎『中国文学入門』講談社学術文庫、1976年
- ② 興膳宏編『中国文学を学ぶ人のために』世界思想社、1991年
- ③ 前野直彬『中国文学序説』東京大学出版会、1982年
- ④ 前野直彬編『中国文学史』東京大学出版会、1975年
- ⑤ 小川環樹『唐詩概説』岩波書店（岩波文庫）、2005年
- ⑥ 松浦友久『漢詩—美の在りか—』岩波書店（岩波新書）、2002年
- ⑦ 『中国古典文学案内』日外アソシエーツ、2004年

【レポート作成上の注意点】

指定の字数内で、はっきりと読みやすく書くよう心がけること。引用文は自分の文章と区別できるようにし、出典と引用箇所を明記すること。また、レポート本文中で参考文献を引用したり使用する場合は、参考文献の書誌情報に加え、必ずその引用ページも明記すること。

●日本文学関係

【講義要綱】

近代日本文学の歴史は、新聞・雑誌などの出版メディアの発達史と不可分の関係にある。

近代文学作品の中には新聞に掲載されてはじめて読者の目に触れるという形式を取るものが少なくないが、そこには媒体自体の性格や位置づけが大きく関与している。

夏目漱石と『朝日新聞』との関係に典型的に現れているように、文学的営為とメディアとの関係は相互に極めて密接である。漱石は明らかに新聞というメディアを想定して創作しているが、他方、新聞自体の発行部数との関連など、消費の対象としての意味もそれは担っていた。

さらに、新聞掲載時には挿絵が施されるなど、単行本とは異なる固有の発表形態をもっている。

これらさまざまな観点を視野に入れつつ、具体的な事例を取りあげ、近代文学と新聞との関わり方や、その意味を検証する。

【参考文献】

関肇『新聞小説の時代—メディア・読者・メロドラマ』新曜社、2007年

山田俊治『大衆新聞がつくる明治の「日本」』NHK ブックス、2002年

高橋修ほか編『メディア・表象・イデオロギー』小沢書店、1997年

李孝徳『表象空間の近代—明治「日本」のメディア編制』新曜社、1996年

【レポート作成上の注意点】

たんに文学作品と新聞との関係を指摘するだけでなく、両者がどのように関与し、それがどのような意味を担っているか、同時代において、あるいは文学史的視野においてどのような位置を担っているか、といった分析が求められる。

●フランス文学関係

【講義要綱】

フランス文学は、特に近現代において、小説、詩、演劇、批評、思想といった文学のあらゆるジャンルで、人類の芸術の歴史から見ても突出した創造を達成しました。それは人間の感性、世界観、思想をおおきく広げ、深化させました。皆さんは今回の学習を通して、いくつかの作品を読むことにより、その一端に触れることになります。学習に何よりも大切なのは、まず自分自身の感覚・知性を全開にし、読書をひとつの「経験」にまで深めることです。そして、もしその作品に興味を持ったら、作者の生涯、時代背景、あるいは文体などについて文献を探索し、さらに作品の理解を広げるようにしてください。

近代（特に19世紀以降）のフランス文学では、パリがしばしば語られ、描かれてきました。産業革命と近代化にともなって、首都パリが大きく変貌し、人々の生活様式と意識に影響を及ぼしたからです。バルザック『ゴリオ爺さん』、フロバール『感情教育』、ボードレール『パ

りの憂鬱』、ゾラ『居酒屋』、ブルトン『ナジャ』、そして2014年度のノーベル賞作家モディエアノの一連の小説がパリを舞台にしています。文学と都市のつながりについて考えてみてください。

【テキストの読み方】

取り上げた作品をレポートの課題にそくして、ていねいに読んでください。

【履修上の注意】

特になし。

【関連科目】

テキスト『十九世紀のフランス文学』、『二十世紀のフランス文学』、『フランス文学概説』の学習も役立ちます。

【参考文献】

- 饗庭孝男（編）『パリ 歴史の風景』山川出版社、1997年
 エリック・アザン『パリ大全』以文社、2013年
 小倉孝誠『「感情教育」—歴史・パリ・恋愛』みすず書房、2005年
 小倉孝誠『パリとセーヌ川』中公新書、2008年
 澤田肇ほか（編）『パリという首都風景の誕生』上智大学出版、2014年

【レポート作成上の注意点】

レポートを作成する際は、参照した文献にあった要素を単にまとめるのではなく、それらの要素をいったん消化したうえで、自分自身であらためて作品についてよく考え、それを記述するよう心がけてください。参考文献からの引用のモザイクにならないよう注意してください。あくまで「自分なり」の視点で論じることが重要です。

●演劇関係・ドイツ文学関係

【講義要綱】

ドイツ語圏の文学は、哲学や音楽、また自然科学とも複雑に関連し合って、大きな表現の世界を作り上げてきました。また、ヨーロッパの中央部に位置しながら、長らく統一国家が形成されなかったことも、ドイツ語圏の文化をより一層複雑なものとしています。多様性の中の総合性、変転の中の普遍性を見つめる視線をもって、ドイツ語圏の文学に取り組んでみていただきたいと思います。

【履修上の注意】

テキスト『近代ドイツ演劇』や『近代ドイツ小説』も通読しておくことをおすすめします。

【関連科目】

文学研究は、視点の置き方次第で、あらゆる学問領域に関連付けることが可能です。問題

意識を大胆に広げてみて下さい。

【参考文献】

手塚富雄・神品芳夫『ドイツ文学案内』岩波文庫、1993年
柴田翔『はじめて学ぶドイツ文学史』ミネルヴァ書房、2003年
池内紀『ほくのドイツ文学講義』岩波新書、1996年

【レポート作成上の注意点】

自分の書きたいテーマが何であるのか、つねに鮮明に意識しつつ、全体の構成を見据えながらレポートを作成してください（実際に、論文・レポートの内容の見取り図を書いてみるとよろしいでしょう）。自分の研究分野にどのような先行研究があるのかも可能な限り調べて、論述の冒頭において簡潔に言及するようにしてください。参考文献に記されている「見解」と、自分のそれとが混同しないように、つねに心理的な「距離」をとりつつ文献に接してください。

●英米文学関係

【講義要綱】

文学作品には、それが書かれた時代と社会の姿が否応なく反映される。作者がそれらをいかに理解し自分自身の問題とした上で、作品としてどのように再構成・表現したかに注目して欲しい。必ずレポート課題で指定したテーマを中心に据えること。自分の興味に応じて時代、作品を選ぶことになるが、この段階でよく調べ考え抜くことが良いレポートを書く秘訣である。読んで面白かった作品を選び、その面白さ、自分の興味を喚起した点について論理的に考察すること。それにあたっては、参考文献を渉猟し、作品とその時代、そして作者への理解を深めることも重要である。

【参考文献】

加藤憲市ほか訳『コンプトン英国史・英文学史』大修館書店、1996年（定評ある百科事典から関連項目を訳出したもの。文学史を大づかみに理解する上で役に立つ。）

中村邦生ほか編著『たのしく読めるイギリス文学—作品ガイド150』ミネルヴァ書房、1994年（有名作品のあらすじ、作者、典型的な読み方などを要領よくまとめている。作品選びに便利。）

【レポート作成上の注意点】

1. レポート冒頭で、作家名、作品名、翻訳を用いるなら訳者名、使った版の出版社名、出版年を明記すること。
2. レポートの内容・論旨を端的に示す独自のタイトルを付けること。
3. 末尾には完備した文献一覧をつけること。
4. 作品の「あらすじ」は不要。自分の論を展開する上で不可欠な場合のみ、必要に応じて部分的に導入すること。
5. 自分の考えと参考文献等から得た知識とは明確に区別し、後者を引用する場合はもちろん

ん、咀嚼し要約などして用いる場合でも、それぞれの箇所で注を施し、出典を明記すること。

6. その他の点については、『塾生ガイド』掲載の「レポート作成上の注意」に紹介されているような手引き書を参考にすること。

【成績評価方法】

科目試験による。

歴史（日本史）

（市販書採用科目）（A 043-9591）〔2単位〕

【テキスト】

竹内誠・佐藤和彦・君島和彦・木村茂光編『教養の日本史〔第2版〕』東京大学出版会、1995年

【第1回】

【講義要綱】

大化改新とは蘇我本宗家滅亡事件という乙巳の変と改新詔をはじめとする様々な政治改革を指すが、その史的意義をめぐる諸説ある。本レポートでは、①改新の要因、②改新の実態、③七世紀後半への展開を論点として、まとめて欲しい。

【参考文献】

熊谷公男『日本の歴史03 大王から天皇へ』講談社、2001年（講談社学術文庫で再刊）

吉川真司『シリーズ日本古代史③飛鳥の都』岩波新書、2011年

【第2回】

【講義要綱】

江戸時代の百姓・町人らの間に、独自の道德思想が形成された。この思想は、儒学が民間社会に伝播した形態であると共に、生活上の諸問題に直面する百姓・町人らによって鍛え上げられたものでもあった。そして明治時代に向け、全国の諸階層に受容されていったとされる。現代において一方で忘却されつつも依然として私たちをとらえている、この道德思想の中身と役割について検討することを、課題としたい。

【参考文献】

安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店、1974年（平凡社ライブラリーで再刊）

尾藤正英『日本文化の歴史』岩波新書、2000年

【成績評価方法】

科目試験による。

歴史（東洋史）

（A 005-7101、A 7108）〔2単位〕

【講義要綱】

中国を中心としたアジア地域および中東・イスラーム世界の歴史について、概論的な知識を習得する。その上で、東洋史研究において特に重要なテーマに関して、課題・参考図書の特読、関連文献の調査・研究によってさらに理解を深めて行くことを目標とする。

【参考文献】

佐藤次高編『西アジア史Ⅰ アラブ』（新版世界各国史8）山川出版社、2002年
小松久男編『中央ユーラシア史』（新版世界各国史4）、2000年

【レポート作成上の注意点】

課題・参考文献の文章を引用、または典拠として利用した場合には、必ずその頁数を註として明記してください。なお、註はレポートの最後にまとめて示すこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

歴史（西洋史）

（A 003-7102）〔2単位〕

【講義要綱】

この科目は、高等学校「世界史」の西洋史部分と、大学で学ぶ学問的に高度な西洋史との橋渡しをすることを目的としています。従ってテキストは、「世界史」よりは多少詳しく、かつ学問的にも多少高度に書かれています。入学後、他の難解な科目を履修する前に、この科目で歴史の勉強の基礎を作ってください。

【テキストの読み方】

レポート課題に取り組む前に、テキストを一読して西洋史の全体的な枠組みを把握し、同時に西洋史的な感覚をやしなってください。レポートについては課題書1冊のみを精読し、今回の課題について勉強してください。その後再度、科目試験にむけてテキストを入念に読み、履修者各自がテキストからトピックを取り上げて、トピックそれぞれについて各自なりに知識を整理してください。テキストを用いたトピック別の知識の整理が、科目試験の対策勉強になります。なお、科目試験対策としては、それぞれのトピックの骨組みとなる主要な事柄（事項、年代、人物）のみを覚えるようにし、細かい事柄は主要な事柄を理解するためにのみ必要と割り切ってください。科目試験の採点者は答案の細部にはこだわりません。

【履修上の注意】

この科目は、入学後早い段階で履修されることを想定しています。だから、事前ではなく同時に、西洋の文学史、近代思想史、政治学、経済原論などを履修すれば、この科目の理解

に役立ちますし、科目間の相乗効果も期待できます。

【関連科目】

「新・西洋史概説Ⅰ（古代・中世）」「西洋史概説Ⅱ（近代・現代）」「西洋史特殊Ⅰ—古代オリエント史—」「西洋史特殊Ⅲ—近代イギリス国家の成立（中世から近世へ）—」

【参考文献】

西洋史全般については、テキスト巻末に詳しい参考文献をあげておきましたので、それを見て下さい。レポート作成のためには、レポートの課題書を入念に読んで下さい。レポートについては、課題書以外にさらに他の参考書を読む必要はありません。

【レポート作成上の注意点】

今回の課題書を丁寧に読んで下さい。薄い本ですから、入念に読み、内容をよく咀嚼し、履修者各自の力で整理し、自分の言葉でレポートを書くように心がけて下さい。課題書の文章のつぎはぎ細工では歴史の勉強になりません。

なお論述に際しては、いきなり書き始めるのではなく、レポート全体の構成をよく考えて下書きを作り、文章を推敲した上で清書して下さい。添削担当者が、日本語の添削ではなく、論述内容の添削に集中できるようにして下さい。多少のミスは別としても、日本語を添削しなければならないようなレポートは、「添削不能レポート」として返却します。

【成績評価方法】

科目試験による。

法学（憲法を含む）

（A 021-8402）〔4単位〕

【講義要綱】

今日私たちの日々の生活は、「法」との接点なしに成り立つものではない。そこで本講義は、今後「法」との長い関わりをもつであろう法律学を専攻する者にとっても、また今回以外に「法」に係わる学習の機会を持ち得ないかもしれない者にとっても、現代社会を生きていくなかで、「法」をめぐり、これだけは知っていて欲しいと思われる基礎的な事柄への知見を得、理解を深めるために開講される。学習に当たっては、まずテキストを通読すること、つまりテキストの冒頭より最終頁までを必ず根気よく読み通してみることが肝要である。そして、次のステップとして、テキスト通読中十分理解できなかった箇所や疑問の箇所に重点を置きつつ、できれば複数の参考書を参照して、さらに学習を進めるべきであろう。レポート課題を横目で眺めながら、ただただ課題提出のみに的をしぼった学習など、本科目を真実自分のものにするためには、何ら意味無きことであると承知されたい。いささかの時間を要するかも知れないが、体系的な理解こそ、結果的には学習進捗のもっとも早道と思料される。なお、参考書については特に指摘しない。ちなみに「法学」に関しては、多くの労作が世に問われ

ており、図書館・書店に出向いて、自らの目で確かめ選択すること。また学習に際しては、できる限り当該年度の「六法」を入手し、それを座右に置き、必要に応じて丹念に条文内容を確認することは、「法学」履修の基本姿勢である。

【参考文献】

霞信彦『法学講義ノート（第5版）』慶應義塾大学出版会、2013年

【レポート作成上の注意点】

テキストや参考書の丸写しにならないように留意することが必要である。併せてそれら参照文献を換骨奪胎してレポートを作成することも、評価の対象とならない。参照文献については、もれなく書名・著者・刊行年・出版社名をレポートの最後に明記することが求められる。

【成績評価方法】

科目試験による。

政治学（A）

（A 001-6403）〔4単位〕

【講義要綱】

政治制度（政治体制を含む）の基本的理解を獲得したうえで、具体的事例としての日米両国の比較を行ってください。

【テキストの読み方】

複数の章にまたがるテーマです。テキスト全体を熟読することを忘れないようにしてください。

【参考文献】

中村勝範編『主要国政治システム概論〔改訂版〕』慶應義塾大学出版会、2005年

【レポート作成上の注意点】

安易に他の文献に頼らず、まず教科書を熟読しテーマに関連する基礎的事項の理解を深めてください。足りない場合は、上記の参考書を、さらに不足の場合は、それ以外のものを利用してください。なお、参考文献は必ず文末に明記すること。またいかなる文献を選択したかも評価の対象になります。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

現実の経済を理解し分析するための基礎的な能力を身につけることを目的とする。概要は以下の通りである。

1. 総論：経済の本質、経済循環の構造
2. ミクロ経済学
消費者・生産者行動
市場均衡
経済厚生と国際経済
3. マクロ経済学
国民所得決定のしくみ
財政・金融政策の効果
景気変動と経済成長

【テキストの読み方】

図や式の意味をよく理解するようにして下さい。

【履修上の注意】

高校レベルの数学は理解しておくことが望ましい。

【参考文献】

塩澤修平『経済学・入門〔第3版〕』有斐閣、2013年

塩澤修平『基礎コース 経済学〔第2版〕』新世社、2011年

【レポート作成上の注意点】

仮定と論理的帰結の区別を明確にすること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

ギデンズ『社会学〔第5版〕』而立書房、2009年

※テキストは、最新版の使用が望ましいが、第4版(2004年)を用いて学習しても構いません。

【講義要綱】

テキスト『社会学』第5版（第4版も可）は、全般的に広範囲のテーマに関する社会学的な思考を述べてあります。社会学は社会科学の一分野です。社会学の基本的特徴は、経済学、法律学、経営学、政治学などの社会科学が、人間社会のさまざまな現象をいわば縦割にして研究対象としているのに対して、それらの現象の基底において横断的に存在する社会的行為、社会関係、社会集団、組織に関する問題を考察、分析するところにあります。

社会学的思考、分析は社会学において使用される概念および概念枠組の操作を通してなされるものですから、社会学的思考、分析を身につけるには、社会学の基礎概念をよく理解することが必要となります。テキストに出て来る基礎概念、キーワードに注意してテキストをよく読み、理解し、それらの術語を使って具体的問題を記述、説明できるようになることが大事です。

【テキストの読み方】

このテキストには、1～22のセクションがあります。関心のあるところから読んでも構いません。またそれらセクションの最後に、まとめ、考察を深めるための問い、読書案内がつけられています。これらはあくまでも理解を助けるための情報です。まとめを読んで済ませることのないようにしてください。必ず本文を読み、まとめ等の情報を適切に利用して、理解を深めてください。また末尾の用語解説も参考にして、注意深く読んでください。その上で、そこに紹介された概念やアイデアを利用して、様々な出来事を「社会学的」に見ることができるようになってください。

【履修上の注意】

社会学的なものの見方を身につけることが大事です。特に各セクションの視角をマスターしてください。レポートでは、論述という形式を習得しているかどうかが大変な評価基準になります。特に大事なものは、参考文献リストを作成し、テキストや参考文献を参考や引用した場合、レポート本文でその旨を、注などによって、明記することです。

【関連科目】

社会学史、都市社会学

【参考文献】

レポート作成にあたっては、あなたの関心やテーマに応じて文献を探し出すことが重要です。少なくとも5本以上の文献をテキストの他に探すことが、合格の条件になります。

【レポート作成上の注意点】

- ①参照や引用には注をつけて、出典を明らかにすること。ネットからの情報はホームページ名とダウンロード日時を明らかにすること。
- ②レポートの章立てを行うこと（1、課題設定。2、その課題を選んだ理由。3、本論。4、今後に残された課題。5、参考文献や資料）。

【成績評価方法】

科目試験による。

改訂・統計学 (A)

(A 055-0902)〔4単位〕

【講義要綱】

社会科学分野の研究においても、統計的分析が不可欠となっていており、社会科学における基礎学問としての「統計学」の重要性が高まっています。統計学では、①統計的記述（実際のデータの特徴をどのように捉えるか）、②統計的推測（標本から母集団の特徴をどのように推定するか）、③統計的検定（理論的主張をどのように検定するか）、④相関・回帰分析（複数の変数の間の相関・因果関係についての分析）について様々な分布を用いながら学ぶことにより統計的分析の基礎を身につけます。

【テキストの読み方】

各章の最初に示されているその章の解説を読み、まずは細かいところは気にせずその章を一通り読むことによって、概要をつかんでください。そして、次に例題を手掛かりにしながらコツコツと読み進めてください。分析によっては計算量が多くなってしまふ場合があります。その際にはエクセルを積極的に活用してください。各章末にエクセルの利用に関する解説が示されています。例題を理解していくことによってレポートに取り組む準備が整うことになるでしょう。また、基礎の部分に落ち着いて取り組めるよう、この科目では、テキストに発展項目と示されている節および項は試験・レポートでは範囲外としています。まずは基礎の部分にしっかり取り組んでください。

そして、章末の練習問題にも取り組んでください。それらは、いずれも現実社会のデータに関するものです。現実のデータを用いて統計分析を考えることによって応用力が身につきます。巻末の解答の指針を丸暗記するのではなく、それぞれの問題で確認すべき分析や考え方は何かを意識しながら取り組んでください。試験では、データを用いた計算とそれに関する統計学的考え方の理解が問われますので、練習問題を理解することによって試験に向かう準備が整うことになるでしょう（発展問題は試験の範囲外になります）。

今回の改訂では、社会におけるデータ分析の重要性の増加を考慮し、貧困率やポートフォリオなどの項目の追加、エクセルに関する解説の対象の拡張、練習問題の更新などを行っています。現実のデータへの取り組みとエクセルの活用をさらに重視して学習してください。

【履修上の注意】

この科目を履修する前に事前に履修すべき科目はありません。

【参考文献】

テキストの参考文献のページを参照のこと。

【レポート作成上の注意点】

統計学は計算結果や図表も含めてレポートを作成する科目であるため、指定箇所を除き、特に分量に制約を設けません。そして、レポート作成にあたっては、答えを求めるまでの経過もきちんと示してください。経過が示されていない場合、添削・採点の対象となりません。また、考察や説明が求められている場合、その設問も必ず解答してください。計算が出来ただけでは統計学が理解出来たとは言えません。計算途中で必要となるワークシートおよび図についてはエクセルで作成したものを印刷し、それを貼りつけても構いません。また、統計学のレポートではテキストで取り上げられるデータ分析の実践を通じての復習に重点が置かれるため、論述形式のレポートにあるような参考文献の使用は必要ありません。

【成績評価方法】

科目試験による。

当該科目試験における出題範囲は、テキスト全体から発展項目を除いた部分とします。

数学（基礎）

(A 041-0001)〔2単位〕

【講義要綱】

●第1章 集合（集合、写像）、第2章 数列（数列、数列の極限、級数）、第3章 関数（数の極限と連続、指数関数・対数関数、三角関数）

数学の多くの分野は集合を基礎にしてその理論が構築されている。ここで学ぶ写像の概念は数列、関数へと特殊化されて、社会科学のさまざまなところで応用されている。広く諸科学を専攻するための「基礎の基礎」として、ぜひ学習されるようお勧めしたい。

数列や関数の極限の考え方は、物事の漸近的な様子を記述する上で重要である。「限りなく近づく」（収束）、あるいは「限りなく大きく（小さく）なる」（発散）というイメージに親しむことを目指す。

さらに、特によく用いられるいくつかの重要な関数について学ぶ。それぞれの定義と特徴について学習し、取り扱いに慣れることが大切である。

●第4章 個数の数え上げ（直積の要素の個数、和集合と共通部分の要素の個数、順列と組合せ）、第5章 確率（標本空間と確率空間、事象と確率、確率の計算と順列・組合せ、条件付き確率、確率変数と期待値）、第6章 事象と認識（順序、束、分割、集合体、可測空間と可測写像、エントロピー）

初めに個数の数え上げの手法を学ぶ。数え上げる対象の代表的なものとして順列と組合せがあるが、ここでは数え落しや、数え過ぎのないよう規則的に数え上げる態度を養う。

次に確率論の初歩を学ぶ。社会現象に不確実性を伴うことはごく普通のことであり、その不確実性は確率を使い記述される。確率の概念を数学的に表現するためのいくつかの概念を

導入し、これらとすでに学習した数え上げ手法に基づき確率の計算も行う。さらに、確率論で最も重要な概念である、確率変数とその期待値について学習する。

最後に、事象とその認識の問題をあつかう。事象を認識するときのその粗さや細かさを数学的に表現する方法を学習する。このときすでに学んでいる集合論の知識がいたるところで使われ、また、確率論とも密接に関係してくる。さらに、エントロピーの概念も紹介される。

【テキストの読み方】

教科書を通読した後に、必ず練習問題を解くこと。また、要点をまとめた自分なりのノートを作成するとよい。

【参考文献】

高等学校の教科書（数学Ⅰ、数学A、数学Ⅱ、数学B、数学Ⅲ）
志賀浩二『集合への30講』朝倉書店、1988年

【レポート作成上の注意】

問題文からどのように着眼し、どのような思考をして結論に至ったのか、添削者が読み取れるように丁寧に記載すること。答えを求めるまでの過程が明示されていない場合、添削、採点の対象となりません。

【成績評価方法】

科目試験による。

数学（微分・積分）

（A 024-8501、A 8542 b）〔2単位〕

【講義要綱】

- 第1章 微分法（関数の極限、導関数、Taylorの定理、関数の性質、微分法の応用）、
- 第2章 偏微分法（多変数関数の極限、偏導関数、極値問題、偏微分の応用）

例えば0時から x 時までの車の移動距離を $y=f(x)$ で表すと、 a 時から b 時までの車の平均速度はその間の移動距離 $f(b)-f(a)$ を時間 $b-a$ で割ったものになる。その間車の速度は一定ではなく、絶えず変化していると考えるのが自然であろう。では a 時での車の瞬間の速度はどうなるであろうか。 b が a に近ければ近いほどその間の平均速度は瞬間の速度に近づくと考えられる。そこで b を a に限りなく近づけるという極限の概念がでてくる。 b を a に限りなく近づけたときの平均速度の極限 $f'(a)$ が a 時の瞬間速度である。車の移動の様子は速度 $f'(x)$ 加速度 $f''(x)$ によってある程度調べることができる。

1章ではいろいろな関数 $f(x)$ について $f'(x)$ の求め方、 $f'(x)$ と関数 $f(x)$ の増減、 $f''(x)$ と関数 $f(x)$ の凹凸との関係、関数の極値について学ぶ。また、関数を多項式関数で近似し、その誤差を調べる、Taylorの定理を学ぶ。

2変数の関数 $z=f(x, y)$ は空間の曲面を表していると考えることができる。

曲面 $z=f(x, y)$ が山を表していると想像してください。山の様子を知るにはどのような方法があるだろうか。例えば地図は等高線で山の様子を表している。同様にいろいろな高さ c の等高線 $f(x, y)=c$ を考えることにより曲面の様子を調べる。また山を縦方向に切断してその切断面を調べることによって山の様子を知ることができる。 $z=f(x, y)$ は $y=b$ とすると x だけの関数 $z=f(x, b)$ となるし、 $x=a$ とすると y だけの関数 $z=f(a, y)$ となる、1変数の関数は1章により詳しく調べることができるので、これらを利用して $z=f(x, y)$ の様子も調べることができる。

2章では2変数関数 $z=f(x, y)$ について $x=a$ または $y=b$ と固定したときの微分にあたる偏微分を学ぶ。また山の頂上にあたる極大値、山道を歩いたときの峠にあたるある条件のもとでの極大値などを学ぶ。

●第3章 不定積分（不定積分、置換積分法・部分積分法、有理関数・無理関数・三角関数の積分）、第4章 定積分（定積分、定積分の計算、定積分の定義の拡張）、第5章 定積分の応用（面積・体積、道のり・曲線の長さ）、第6章 重積分（2重積分、重積分の計算、体積・曲面積）

積分法は微分法の逆の演算で微分法と表裏一体をなすものです。ここでは前半で学んだ微分、偏微分等の知識を踏まえて積分に関する基礎事項を学びます。

【テキストの読み方】

1章ではまずいろいろな関数 $f(x)$ について導関数 $f'(x)$ を求められるようにしてください。合成関数の導関数の公式が使えるようになると、導関数を求めることができる関数がぐっと増えます。次に $f'(x)$ 、 $f''(x)$ を調べることにより $y=f(x)$ のグラフの概形を描けるようになるようにしてください。

2章ではまず偏導関数の計算を練習してください。偏導関数についても合成関数の偏導関数の公式は重要です。次に、2変数関数の極値、条件付き極値問題に進んでください。

【レポート作成上の注意点】

第1回

答えだけではなく、その結論に至る過程も丁寧に記述してください。

1. は関数のグラフについての問題です。
2. は高次の導関数の問題です。
3. は2変数関数の極値についての問題です。
4. は2変数関数の条件付き極値問題です。

テキストの該当する個所をよく読んで、理解してからレポートを作成してください。

第2回

最終的な「答」のみを記載したものは不可です。問題文からどのように着想し、どのような思考をして結論に至ったのかわかるように、ていねいに記述してください。

問題2. 4) ではテキスト P38の (4. 18) 式を、また問題3. 3) では同 P39の (4. 24) 式をそれぞれ用いて解答してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

数学（線形数学）

（A 058-1001）〔2単位〕

【講義要綱】

● 「線型代数とは何か、なぜ学ぶか」

線型代数とは何かと聞かれれば、1次式と2次式の数学と答えることができます。数学が考える対象として関数はより一般性をもっていますが、社会科学・心理学などを学ぶときには、様々な量の関係のモデルを、それらの量の1次式と2次式で構成するのが基本です。しかも、モデルは確率・統計を用いて、現実のデータに適合したものを採用しますが、その最適化のプロセスで線型代数が大いに役に立ちます。中学のときに学んだ連立1次方程式をさらに深めた内容を学ぶと聞くと、ばかげていると思うかもしれません。しかし、人類が量を記述する最も基本的な方法が線型代数で与えられるのです。

● 第1章 ベクトルとその幾何学

この章では、ベクトルの加法、減法、定数倍などの演算に加えて、内積を用いた幾何学とその応用について学びます。ベクトルの代数的側面と併せて対応する幾何学的イメージを習得できるとよいでしょう。この章を学ぶ前に、高校で学んだベクトルの内積について復習しましょう。

● 第2章 行列

m 個の変数を用いた n 個の1次式があるとします。これをまとめて表現するのに、行列を用います。この章では、行列の演算について詳しく学びます。

● 第3章 連立1次方程式

この章では、連立1次方程式の「掃き出し法」を学びます。ここで計算機アルゴリズムに触れることができます。この章の主眼は、連立1次方程式の具体的な解法にあります。その背後にある基本行列を用いる理論が線型代数の基本になります。

● 第4章 行列式

行列式は、 n 個の変数を用いた n 個の1次式で表される連立1次方程式の解法を与えてくれます。この量が、行列の基本的な性質を記述してくれるのです。ここでも「掃き出し法」は重要な役割を演じます。

● 第5章 線型部分空間

連立1次方程式が定める解空間を記述するのに必要な線形部分空間について学びます。ここでは、基底や次元といった根本的な概念の理解が重要です。ここでも再び「掃き出し法」は重要となります。

【注意】 第1章、第2章、第3章が第1回レポートの内容で、第4章、第5章が第2回レポートの内容です。

【テキストの読み方】

テキストにはたくさんの演習問題が出題されています。これを地道に解きながらテキストを読みましょう。

【履修上の注意】

高校2年生までの数学を学んだ人が対象です。

【関連科目】

「数学（微分・積分）」

【参考文献】

特になし。

【レポート作成上の注意点】

計算結果のみを記述するのでは、合格になりません。必要十分な情報は何かを考えながら、レポートを作成しましょう。用いた変形は必ず記述しましょう。特に基本変形を用いる場合は、使った変形を明記して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

地学

(A 051-0601)〔4単位〕

【講義要綱】

この科目は、私たちの身の回りの世界である地球と宇宙について、広く深く考察するものです。地球の姿や活動のしくみ、大気や海洋、太陽系や天体の姿とその成り立ちなど、さまざまな分野を含みます。それらは相互に関連し合っており、ある事象を説明するのに別の分野の知見が必要になることもあります。この課題を通して、地球や宇宙について認識を深め、日々の生活に役立ててほしいと思います。

【テキストの読み方】

今回からテキストに加え、地学分野を網羅した平易な書籍として、『新しい高校地学の教科書』（講談社ブルーバックス）を副読本として指定しました。まずこちらで課題領域の全体像を理解して下さい。さらにテキスト『地学』の該当箇所を精読し、課題について知識を

深めて下さい。課題によっては1つの単元だけを読んでも解決しない場合もあります。テキスト・副読本の他ページを読んだり、別の文献にあたったりして、より深い知識を求め、課題に取り組みましょう。

【履修上の注意】

地学は「理科・自然科学」科目です。地震などの自然災害や地球環境問題など、社会的な視点から捉えてよさそうなテーマもありますが、ここではそれは求められていません。あくまで自然科学の立場から、課題を捉えてください。

【関連科目】

「化学」「物理」

【レポート作成上の注意点】

個々の課題に対して、本筋ではない、周辺事項をたくさん記載して、ページを費やす人がときどきいます。何が求められているか、課題を良く読んで理解し、全体のバランスにも留意してうまくまとめて下さい。引用に終始せず、自分の言葉でまとめる技術も大切です。

【成績評価方法】

科目試験による。

物理学

(A 059-1101) [テキスト4単位 (他に実験スクーリング2単位の修得が必要) 計6単位]

【講義要綱】

物理学はテキスト学習とスクーリングにおける実験からなる合計6単位の科目です。テキストと実験を通じ、現代物理学の基本的な知識と考え方を学びます。単にテキストの内容を理解するだけでなく、興味を持った問題に関し、自分で調べ、考えて理解できる能力を身に付けることを目指しています。このような能力は物理学にとどまらず、あらゆる分野で威力を発揮するでしょう。

テキストは、20世紀の物理学を中心にして、いくつかの分野を深く学ぶ内容となっています。前半では量子力学とミクロの世界について考えます。後半では宇宙の物理と相対性理論について学びます。理論だけではなく、具体的な物理現象の仕組み、そして、理論が正しいと考える根拠を明らかにしていきます。テキストの内容はスクーリングで行う実験の内容とも密接に関連しています。

スクーリングの実験は、1人か2人一組で行います。配布される実験テキストに手順の詳細な説明があるので、誰でも結果を得られます。実験ではその持つ意味を考え、理解することが重要です。実験結果を得て実験レポートを提出する際に、必ず教員と質疑応答を行い、実験内容の理解を確かめます。実験を通じて、物理学テキストでも強調した、自然科学にお

ける実証の持つ意味を実感できると思います。また、理論と現実とのつながりも実感できるでしょう。インフォーマルで充実感があり、楽しい経験だと思います。

通信教育課程の物理学には高校での物理学の履修は必要ありません。また、使う数学は中学程度です。ただ、これは簡単という意味ではありません。新しい概念を学ぶのは誰にとっても難しいものだからです。テキストでは、必要に応じて基礎的な内容を説明しています。テキストを理解することを目指して下さい。科目試験の問題もテキストの内容を理解すれば解けます。

物理学は様々な現象がなぜ起きるかを考える大変面白い学問だと思います。物理学を楽しんで欲しいです。

【参考文献】

特に指定しません。テキストを理解するとともに、自分で興味を持った本や記事を読んで考えることを勧めます。

【レポート作成上の注意点】

テキスト学習では3回のレポート提出が求められています。レポートは物理学テキストの内容を理解すれば解答できる課題です。解答は内容を消化して、自分の言葉でわかりやすく表現して下さい。

物理学では課題に的確に答えられれば字数は気にする必要はありません。数式や図は必要に応じて使って下さい。計算をする場合には、必ず途中過程を記して下さい。10の累乗の計算法の理解は、レポートとスクーリングの実験の両方で必要です。3回分のレポートをいきなりまとめて提出するのではなく、まず1回分を提出し、評価とコメントを見てから残りを提出することを勧めます。

【成績評価方法】

①レポートの評価、②実験スクーリングの評価、③科目試験の評価による総合評価が最終評価となります。

化学

(A 060-1301) [テキスト4単位 (他に実験スクーリング2単位の修得が必要) 計6単位]

【講義要綱】

化学という学問は、さまざまな物質の成分や構造などを調べ、反応により別な物へ転換する方法を扱っています。例えば、空気の78%は窒素 N_2 ですが、これを高圧化で水素 H_2 と反応させ、アンモニア NH_3 を合成する方法を、1907年にドイツのハーバーが開発しました (1918年度ノーベル化学賞受賞)。窒素分は植物の肥料として欠かせない成分であり、この発明のおかげで、世界の人口が急増していても、食糧難にならずに済んでいるといえます。その一

方で、「化学物質」が環境を破壊する事態も発生しています。これらの問題にどう対処すべきか考える上で、化学結合や反応性を理解しておく必要があります。一般に化合物の構造は、元素記号と結合の線で表します。この講義の到達ゴールは、化学の基本的な考え方（概念）および構造式の意味がわかるようになることです。

【テキストの読み方】

第1章は、高校あるいはそれ以前に習う化学の基礎をまとめています。化学に自信がある人は、第1章の演習問題から取り組んでください。それから各章を読み、演習問題もやってみてください。もし問題の意味や答えが分からないときは、テキストの関連部分を読み返してください。自分なりに精いっぱい問題を解いてから、巻末の解答例をみて答を確認してください。レポート課題との対応は、〔第1回〕1～3章、〔第2回〕4～7章、〔第3回〕8～10章です。

【参考文献】

特に指定しません。

【レポート作成上の注意点】

「参考文献」の記載は、レポート〔第3回〕問題4についてだけ必要です。それ以外は、省略しても結構です。また、回答にあたっては、問題文中の「〇〇すること」、という指示にしたがってください。分量は制約しません（2000字に達しなくても、あるいはそれを少し超えても構いません）。説明問題への回答は、テキストでいかによく学習しているかを示す機会ですので、できるだけいねいに書いてください。ただし、自分なりに要点をまとめることが重要です。教科書や参考書などの丸写しはやめてください。計算問題に対しては、結果だけでなくそれを導出するための考え方や、途中の計算式も書いてください。特に、答えを導くにあたっての論理を明確に述べるのが、非常に重要です。

元素記号を書く場合、大文字と小文字は区別し、添え字の位置にも注意してください。たとえば、(正) H_2O や CH_4 を、(誤) h_2o や CH_4 のように書いてはいけません。構造式を書く場合は、炭素の原子価が4（結合の手が4本）であることに注意してください。

【成績評価方法】

①レポートの評価、②実験スクーリングの評価、③科目試験の評価による総合評価が最終評価。

生物学

(A 049-0501)〔テキスト4単位（他に実験スクーリング2単位の修得が必要）計6単位〕

【講義要綱】

近年、生命科学分野の発展はめざましいものがあります。医療や環境など、我々にとって

身近な問題を考えるためにも、基礎固めとして生物学の考え方をしっかり学ぶ必要があります。この教科書は生物学の基礎からはじめ、生物学的諸問題をじっくり考えられるように作られています。テキストの内容をしっかり読みこなしただけで、参考書を読めば、より深い理解が得られるでしょう。現在の『生物学』テキストは慶應義塾らしさを多く盛り込んだため、基礎部分がやや手薄になってしまっています。学生のみなさんの理解を助けるために2015年度よりサブテキストを指定します。テキストと合わせて熟読してください。

【テキストの読み方】

生物学の各分野は非常に緊密に連携しているので、課題に関連する部分を読んだだけではしっかりした理解につながりません。全体に目を通した上で、関連する分野を繰り返し熟読することで理解が深まります。参考文献では基礎的な記述が省略されている場合があるので、必ずテキストの関連する内容を確認してからレポートを作成すること。

【履修上の注意】

この科目は実験スクーリングの履修が必要な科目です。スクーリング前にレポートに取り組んでみるか、少なくとも教科書に一通り目を通しておきましょう。

この科目のレポートは1回の提出あたり2000字以内が基準です。大幅に超過することがないよう気をつけること。参考文献やインターネット情報の「関連ありそうな部分」を抜き書きしてつないでも良いレポートにはなりません。課題で求めていることに対して直接的かつ簡潔な記載を心がけること。

科目試験は教科書の内容がしっかり理解できていることを重視します。十分な準備をして臨んでください。

【参考文献】

サブテキスト：南雲保（編）『やさしい基礎生物学〔第2版〕』羊土社、2014年

第1回：古川洋一『変わる遺伝子医療 私のゲノムを知るとき』ポプラ社、2014年

宮地勇人『遺伝子の検査でわかること』東海大学出版会、2006年

中村祐輔『これからのゲノム医療を知る 遺伝子の基本から分子標的薬、オーダーメイド医療まで』羊土社、2009年

【レポート作成上の注意点】

第1回：指定の項目が含まれていれば、項目ごとに段落を分けなくて良い。全体として論理的でバランスのとれた文章とすること。どれかひとつの項目のみを詳しく記述するのではいけません。

このレポートの読者は教員です。「学生が教員に優しく教えてあげる」必要は無いので、参考図書に散見される比喩的表現を安易に用いないこと。

自身の遺伝子検査への理解度を十分アピールできる文章を作成するよう心がけてください。

参考文献を複数あげてありますが、すべてを読む必要はありません。また、これ以外の文献を参照してもかまいません。

第2回：(1) 専門用語は教科書や参考書（各自、探す）を用いて調査する。参考にした文献（教科書・インターネット情報を含む）は、当該論文と同じ形式で、「引用文献」としてリストアップする（番号を付す）。本文中、文献を参照した箇所では、その文献の番号を示すこと（当該論文と同じ形式）。

(2) 当該論文の図4（Fig. 4）は、「BPA曝露が行動の性差に与える影響を、胎児期暴露と授乳期暴露に分けて」示している。これを、「PBA曝露の時期が行動に与える影響を、雌雄に分けて示す」グラフに書き改めなさい（軸ラベルや図の説明は日本語でよい）。作成した図には、しかるべき図番号を付し、本文中で引用すること。その他の図（Figure）や表（Table）を付す場合も別々にナンバリングし、本文中に引用すること（本文中に引用されていない図表は添付してはならない）。グラフその他の図表は、Excel等のソフトウェアで作成したものを印刷・添付して良い。

(3) 当該論文の研究を更に発展させるアイデアを、具体的に議論すること。ただし、当該論文で既に議論されている発展は除く。

第3回：まず、テキストをよく読み、理解することが大切です。その上で、自分の文章でまとめてください。参考文献などを引用する場合は必ず引用した部分ができるようにし、出典を明示すること。

【成績評価方法】

①レポートの評価、②実験スクーリングの評価、③科目試験の評価による総合評価が最終評価。

英語 I

(A 045-0001) [2単位]

【講義要綱】

英文法の正確な知識を持つことは、読解においても作文においても会話においても大きな力となることは言うまでもありません。この科目では、文の構造・八品詞から始めて短い文章を文法的見地から精読し暗記することで、英文で発信された情報を正確に受信できる能力を涵養することを目的にしています。併せて、受講生諸君は多くの英文を読むことで、その知識を確かなものとして定着させてください。英語の学習には、なにより勤勉な学習態度が要求されます。テキストの「はしがき」「本書の構成」「今後の学習のために」に科目担当者の信念と方法が記されています。まずはそれを熟読してください。

【参考文献】

テキスト pp.237-38の「今後の学習のために」を参考にしてください。特に、参考書とし

て掲げたうちの1～3を推薦します。

【レポート作成上の注意点】

単に解答のみを書くのではなく、指示に従ってできるだけ詳しく説明を加えること。

全てに解答していないレポートは採点しません。文字はていねいに書いてください。判読が困難なレポートは大幅に減点します。

【成績評価方法】

科目試験による。

英語Ⅱ

(A 047-0101)〔2単位〕

【講義要綱】

●第Ⅰ部 文法・作文

本科目の目的は、英語を実際にコミュニケーションの道具として使っていく際に、どうしても身に付けておかなければならない英文法の基礎知識を学習することにある。

●第Ⅱ部 リスニング・スピーキング

本科目の目的は、第Ⅰ部で習得した英文法の基礎知識を、実際に、リスニングとスピーキングの中で応用する力を身に付けることにある。

【履修上の注意】

●第Ⅱ部 テキストの第Ⅰ部「文法・作文」をよく学習すること。

【参考文献】

辞書はできるだけ刊行後5年以内のものを使用すること。

【レポート作成上の注意点】

〔第1回〕〔第2回〕 問題文をしっかり読んで、その通りに解答すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

英語Ⅲ

(A 046-0001)〔2単位〕

【講義要綱】

『英語Ⅲ』の主な目標は、時事的なトピックを扱う英字新聞や現代人の抱える諸問題に取り組む著述家の作品に触れることによって、リーディングの能力を向上させることです。記事やストーリーを楽しみながら、知らず知らずのうちに様々な英語の言い回しを学び、ポキャ

ブラリーを増やして、英文の読解力を養うことができます。

Part I は、受講者に多読の習慣をつけてもらうことを目的としました。新聞記事をテキストの一部に採用することによって、英字新聞に親しんでもらえればと思います。また科目試験では、問題作成時の大きなニュースを出題する予定です。テキスト外からの応用問題となるので注意してください。

フィクションの部では娯楽性に重点をおいて選択しました。英語Ⅲのテキスト本文僅か100ページ足らずを読んで、即英語ができるようになるわけではありません。文庫本を読むような感覚で、英語のペーパーバックが読めるようになって欲しいと思います。そのための導入になるようにと編集したつもりです。

Part II では、イギリス人作家1名、およびイングランド在住の 아일랜드人作家2名の作品を収録しています。最初の作品—ジョージ・オーウェル「象を撃つ」はルポルタージュで、歯切れのよい直截的な表現を特徴としています。次にウィリアム・トレヴァーの短編「中年の出会い」は、フラッシュバックの手法を用いながら、男女の邂逅による出来事を心理の裏に入って巧みに描写しています。そしてエドナ・オブライエンの小品「暗黒の時間のなかで」は、初めて大学都市ケンブリッジを息子と共に訪れた作者が、女性特有の感性でその印象を綴っています。

客観的な情景、作中人物の意識の推移、会話の部分などが融合していることがあります。テキストの解説を参照し、ストーリーの概略を把握した上で、作品の文脈に注意しながら読んでください。

【履修上の注意】

この科目は、中学・高校時代のベーシックな英文法の輪郭を習得した学習者なら、誰でも履修できます。仮定法、関係代名詞、主語・動詞の倒置などに留意しながら、少しずつ読み進んでください。

センテンスが長いときには、意味のまとまりごとに、鉛筆で斜線を入れるなど、自分で工夫してみましょう。

【参考文献】

Wayne I. Phillips ほか著『アメリカの文化と社会』成美堂（文章構成の把握、語彙の増大に便利。）

【レポート作成上の注意点】

レポートでは、どの程度、テキストの英文を理解できているかについて試す問題が出されています。いずれも基礎的な知識を問う問題で、比較的容易に理解できるものばかりですが、作品全体を読んでいないと難しいかもしれません。和訳に関する質問では、名訳を期待しているわけではありません。語学的に正確な、日本語として分かりやすい文章を書くように心掛けてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

英語Ⅶ

(A 031-8901、W 8976)〔2単位〕

【講義要綱】

数十ページにおよぶ長い英語の文章を読んで、それを的確に理解できるようになることを目標としています。

【履修上の注意】

英文を読むためには、英文法の基本的な事項をひと通り習得しておくことが是非とも必要です。

【参考文献】

英文法が未習得の方には、参考書として『総合英語 Forest』（桐原書店）を推薦します。

【レポート作成上の注意点】

英文和訳の設問は翻訳の技術ではなく、英文の構造と内容の理解を試すためのものですので、その点に留意して訳文を作成するように心がけてください。また、字数制限のある設問は、内容の理解を試すとともに一定の字数内でまとめる能力を試すためのものですので、指定された字数内に収まるように工夫して解答を作成してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

ドイツ語第一部

(A 009-7303、A 7381)〔2単位〕

【講義要綱】

ドイツ語第一部では、発音および初歩的な文法事項を、平易な文章に即して学ぶ。

第1回レポートはテキスト1～7課、第2回レポートはテキスト8～15課を対象としているが、言うまでもなく学習内容は積み重ねであって、第2回は第1回の範囲の修得を前提としている。

【履修上の注意】

テキストを熟読し練習問題により習熟を図るのはもちろんのこと、市販の文法参考書・問題集の類も適宜併用されたい。また、とりわけ品詞分類や構文に留意しつつ独和辞典をひく習慣をつけることが肝要である。

【参考文献】

尾崎盛景・稲田拓『ドイツ語練習問題3000題』白水社

【成績評価方法】

科目試験による。

ドイツ語第二部

(A 017-8002、A 8082)〔2単位〕

【講義要綱】

● 文法篇

文法の基礎を確実なものにするのが目的です。ご存じのとおりドイツ語には各種の変化が数多くあります。学習者の悩みの種ですが、それがドイツ語という言語であり、ドイツ語によるコミュニケーションに不可欠なものなのです。教科書、辞書をフルに活用して、基本を身につけるようにして下さい。

● 読本篇

テキスト「ドイツ語第二部」の読本篇の「はじめに」に書かれていることを、よく守り学習して下さい。特に〔注〕の説明は大切で、しっかり理解し、熟読玩味すべきでしょう。〔注〕が〔本文〕、〔単語〕、〔文法〕、〔和訳〕の接点になっています。また、「文法篇」を何度も参照し、「どの箇所を見れば、何が書いてある」かが分かるほど、反復学習することが大切です。

【履修上の注意】

● 読本篇

読本篇ではありますが、ただ単にドイツ語を日本語に翻訳することが課されるものではありません。ドイツ語の基本的事柄が、真に理解できているかどうか、が問題です。文法項目としては、接続法までの初級文法を終了していることが望まれます。また、冠飾句（冠詞類と、現在分詞あるいは過去分詞を用いた長い名詞句）の使い方についての理解（テキスト「ドイツ語第二部」151ページの注11を参照のこと）が、基本的事項として求められます。

【成績評価方法】

科目試験による。

ドイツ語第三部

(A 056-0901)〔2単位〕

【講義要綱】

『ドイツ語第一部』および同『第二部』で勉強した基本的な文法事項に関する知識を用い、『ドイツ語第三部』では、ドイツの社会や文化に関するさまざまな話題を取り上げたテキスト

トを読みます。その際、ドイツ語の基本文法がしっかりと頭に入っていることが何よりも重要です。そのため、テキストには「文法の復習」コーナーが設けられています。また、必要に応じて『第一部』と『第二部』のテキストも読み返しなが、レポート課題に取り組んでください。

【テキストの読み方】

各課のドイツ語のテキストを、まずは辞書を引きながら独力で日本語に翻訳してみましよう。文法事項でわからない点については、「文法の復習」コーナーの解説を読んでください。

【履修上の注意】

『ドイツ語第一部』および同『第二部』で勉強するレベルのドイツ語文法を理解していることが履修の条件です。

【参考文献】

常木実『標準ドイツ語』郁文堂、1996年、2700円（税込）

（初級から中級までをカバーする参考書です）

中島悠爾・平尾浩三・朝倉巧『必携 ドイツ文法総まとめ 改訂版』白水社、2003年、1728円（税込）

（主として中級から上級レベルを対象とするドイツ語文法一覧です）

【レポート作成上の注意点】

文法事項に関する問題は、『ドイツ語第三部』のテキストに書かれている説明をよく読んで上で、これに取り組んでください。また、翻訳問題では、出来上がった日本語の文を自分で読んでみて、意味がきちんと通じるかどうかを確認してからレポートを提出してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

ドイツ語第四部

(A 028-8802、A 8784)〔2単位〕

【講義要綱】

ドイツ語第四部はすでに初級、中級の段階をクリアした学生を対象にしたいちばんレベルの高い科目です。卒業論文作成のため資料蒐集のできるレベルを目標にしています。レポートにとりかかる前に初・中級の文法事項を総復習して、再提出を繰り返さないよう留意して下さい。ことに分詞構文や冠飾句、接続法を用いた文章などに慣れるように努めるとともに、文章全体の要点を把握する力をつけてください。

【履修上の注意】

配布テキストの文法事項は何度でも読み返し、完全に身につけて下さい。ドイツ文にしば

しば使われる形容詞の名詞化、冠飾句などに慣れて下さい。

【参考文献】

- 岡田公夫ほか『基礎ドイツ語文法ハンドブック』三修社、2004年
 中島悠爾ほか『初心者のためのトレーニングドイツ語』白水社、1994年
 小栗浩『独文解釈の演習』郁文堂、1961年
 岩崎英二郎『ドイツ語副詞辞典』白水社、1998年
 中山豊『中級ドイツ文法』白水社、2007年
 『独和大辞典』小学館

【レポート作成上の注意点】

シラバスにも書きましたが初級文法は完全にマスターしておいて下さい。これまでの添削の経験ではまだこれが充分できていない方があり、レポートの書き直しを繰り返すことは時間的にも労力の上からも不利であり、添削する側も残念です。関係代名詞や従属接続詞の及ぶ範囲、接続法の用法を無視したレポートが多いようです。丹念に辞書をひき、かつ常識を働かせることは訳文にあたって当然のことながら重要です。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・フランス語第一部 (A 062-1501) [2単位]

【講義要綱】

『フランス語第一部』は、読む・書く・話す・聞くの4つの能力をバランスよく養う目的で書かれた、フランス語初学者のための教科書です。独学でフランス語を始める通信制の学生に向けて、通常の文法教科書よりも解説を丁寧にし、練習問題も多くしてあります。頑張っ
て最後までやり遂げれば、フランス語の発音と語彙、文法の基礎は身につくでしょう。

教科書を進めるに当たっては、次のことに注意してください。

- 言語の習得には、**定期性**と**継続性**が肝要です。しかし、授業に通うのと違い、自宅での学習ではこの2点を確保することが難しいものです。例えば「週に1課ずつ進んで、ほぼ1年で全課程を終える」などの計画を立て、一定のペースで持続的に学習しましょう。
- 教師につく場合と異なり、独習の場合は言語の音声的実態に触れることが疎かになりがちです。付録のCDの発音を聞き、必ず自分でも**大きな声**で発音して、フランス語を身体的に習得しましょう。
- それぞれの課の冒頭で、〈例文〉あるいは〈対話〉が示されます。これらの文は学習の基本を成すものです。繰り返し読み、聞き、また書き取って、**全文を暗記**しましょう。そうすることで、単語もスムーズに覚えられるはずです。

- 練習問題等は、少し分量が多いですが、全て実際にやってみましょう。答え合わせをし、間違ったところを直して、それぞれの課の理解を固めてから、先に進んでください。
- この教科書は、新しい語彙が出てきたときには意味とともに示してありますので、基本的には辞書を用いなくても勉強できるようになっています。単語帳などを作成し、語彙を確実に増やしていきましょう。掲載した単語は、現在のフランス語におえる使用頻度を踏まえ、精選したものです。

【履修上の注意】

フランス語の予備知識は必要ありませんが、教科書は高等学校修了程度の英語の知識を前提として書かれています。とくに、基本的な英文法の用語（他動詞、自動詞、目的語、関係代名詞など）を知らない、と、理解が困難となる可能性があります。

【参考文献】

代表的な仏和辞典としては、
『ロワイヤル仏和中辞典』旺文社
『クラウン仏和辞典第六版』三省堂
があります。

本教材ではこれらの辞書を使う機会はあまりないでしょうが、今後もフランス語を続けて学習するには必須の文献ですので、買って置いて損はないでしょう。

【レポート作成上の注意点】

第1回 第1節～第8節

第1回のレポートは教科書の復習と和訳を中心とした課題です。教科書の第8節までを範囲とします。教科書の指示通り第8節までを終えてから、レポートに取り組んでください。

第2回 第9節～第15節

第2回のレポートは和訳を中心とした課題です。教科書の第9節から第15節までを範囲とします。ただし、第8節までの語彙と文法事項を習得していることも必要なので、教科書全体をよく理解してからレポートに取り組んでください。

【成績評価方法】

科目試験による。試験では、和訳に限らずフランス語の総合的な能力を問います。教科書とレポートの例文も多く出題されますので、それらを中心に学習してきてください。試験の範囲に付録（p.212-217）は含まれません。

フランス語第二部

(A 036-9501) [2 単位]

【講義要綱】

フランス語第二部の教科書は、第一部で学んだ文法の知識を実際の文章の中で確認し、ま

た、学習者自身でも活用してフランス語で表現できるようにする事に目標が置かれています。教科書の第1章は、フランス語の文法が日常生活の表現ではどのように活用されているかを見、それに慣れる為に、多くの会話を読む事になります。一方、第2章では、フランス語の文章を正確に読み抜く為に必須の文法事項の習得と、それらの知識を基にした読解が中心になります。この教科書で学ぶことは、フランス語第一部の教科書と併せて、今後、フランス語第三部、第四部での基礎になりますからしっかり勉強しましょう。

【履修上の注意】

「フランス語第一部」を履修し終えていること。またはそれに相応するフランス語力を有していることが、履修の条件です。

【参考文献】

新倉俊一他著『フランス語ハンドブック』白水社、1996年

朝倉季雄著、木下光一校閲『新フランス文法事典』白水社、2002年

【レポート作成上の注意点】

フランス語第一部の教科書を参照しつつ、フランス語第二部の教科書にまんべんなく目を通すことが大切です。こうする事が、レポートで合格点を得る為の近道です。急がば回れ、と云う事です。

【成績評価方法】

科目試験による。

フランス語第三部

(A 057-0901)〔2単位〕

【講義要綱】

本科目は講義科目ではないのでいわゆるシラバスはありません。学習の目的についてだけ述べておきます。

第一部と第二部で習得した文法知識を基に、生きたフランス語の読解力を高めるステップです。断片的な文法知識を総合的に駆使し、読解力向上の訓練をする素材としてレポート課題を設定してあります。難しいと思われるかもしれませんが、ここでの訓練は科目試験での得点に直結します。科目試験合否の目安は、どれだけ課題レポートで頑張ったかにかかっていると断言してもいいでしょう。フランス語に限らずどの言語でもそうですが、辞書を丹念に引くことは当然ですが、書かれている内容についての知識や旺盛な想像力がないと理解できないこともあるので、一般常識の獲得を始めとして、日頃から全方位的な知性を磨いておくことも重要です。

【テキストの読み方】

常時第一部と第二部のテキストを手元に置き、随時参照するようにしてください。第三部テキストは日常、単独で行う訓練の素材として活用してください。

【履修上の注意】

とにかく機会あるごとに基礎文法（第一部）を徹底的に復習すること。これで実力は倍増します。そして、辞書を丹念に引くこと。日本語の表現力を磨くこと。

【参考文献】

外国語読解力向上の決め手は、良い辞書との出会いです。次の辞書をお薦めしておきます。小学館『小学館ロベール仏和大辞典』、三省堂『クラウン仏和辞典』、白水社『ディコ仏和辞典』、等々。なお、最近は電子辞書が流行していますが、動詞の活用を確かめるためにも、ある語彙の「全体を見渡す」ためにも、視覚的に記憶するためにも、上記辞書も紙媒体版の方が有利と思われます。最近、電子辞書のスクロール不足による出鱈目なレポートが多いので注意。

【レポート作成上の注意点】

まずは辞書を徹底的に引くこと。構文を正確に把握すること（特に主語と述語動詞をはっきりさせること）。いろいろな代名詞（人称代名詞・関係代名詞・指示代名詞・中性代名詞）が何を受けているかをはっきりさせること。動詞の時制に注意すること。

訳文が出来上がっても自分で読み返してみて、日本語として意味が通らないうちは、提出してはなりません。日本語としてチンプンカンプンなうちは、正しく訳せていないと思ってください。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・フランス語第四部 (A 061-1401) [2単位]

【講義要綱】

フランス語第四部は最も上級のレベルとなり、フランス語の総合的な運用能力習得を目指します。第四部の目標は3つです。はじめにフランス語で書かれた文書を正確に理解すること。次にフランス語の問いに的確に答えること。最後にフランス語で様々なことを伝えることです。具体的には課題文に対する質問への答えと日本文の仏訳をレポートとして期間中、2回提出してもらいます。

フランス語を正確に、そして的確に運用するには、動詞などの個々の品詞をどのように変化させるのか（形態論）、主語と動詞の関係など文の構造をどうすれば良いか（統辞法）また自分の伝えたい内容にふさわしい語はどれか（語彙）などという点を総合的に考察する必

要があります。第四部のレポートでそのコツをつかんで下さい。

【履修上の注意】

今まで勉強した文法事項を何度も読み返し完全に習得して下さい。さらに、言語の背景となっているフランス文化に関心を持つことが大切です。フランスの新聞、雑誌、小説等を積極的に読み、語彙、表現を学びながら、幅広く豊かな知識（歴史・現代社会・文化・文学・時事問題等）を身につけましょう。レポート作成、科目試験に役立つと思います。

【参考文献】

- 彌永康夫『時事フランス語 読解と作文のテクニック』大修館書店、2011年
 伊吹武彦編『フランス語解釈法』白水社、2006年
 嶋崎正樹『時事フランス語』東洋書店、2010年
 原田早苗・水林章・萩原芳子・田島宏『コレクション・フランス語〈7〉書く』白水社、2002年
 東京都立大学フランス文学研究室編『フランスを知る—新フランス学入門—』法政大学出版局、2003年
 鳥居正文・金子美都子・田島宏『コレクション・フランス語〈8〉語彙』（CD付・改訂版）白水社、2007年
 三浦信孝・西山教行編著『現代フランス社会を知るための62章』（エリア・スタディーズ84）明石書店、2010年

【レポート作成上の注意点】

これまでフランス語で自分の考えを表現する機会は少なかったと思います。レポートを作成しながら、自分の書いた文章を何度も読み返し、出来るだけ自然なフランス語で表現してみましょう。

【成績評価方法】

科目試験による。

改訂・保健衛生

(A 053-0703)〔2単位〕

【講義要綱】

人生の基本は健康です。人生80年を健康に、有意義に過ごすためには、最新の医学の常識を学び、いろいろな病気を予防していくことが肝要です。また、親となり、あるいは教育者となった場合には、将来を担う子どもたちに正しい知識を教える必要があります。あらゆる面で情報の多い現代では、医学情報に関しても、エビデンスに基づかないあやしい“治療”“薬もどき”もたくさんあります。保健衛生のレポートを通じ、エビデンスに基づいた正しい知識を身につけ、それを実践できるようになっていただければ幸いです。

【テキストの読み方】

項目ごとに精読し、索引などを使い、関連項目も学習する。疑問点に関しては、教科書的な本と、最新の文献を調べる。

【関連科目】

「体育理論」

【参考文献】

『きょうの健康』NHK 出版

【レポート作成上の注意点】

- (1) 2000字以内とは、課題や参考文献の記載を除いた本文がスペースを含んで1800字～2000字で完成させるということです。スペースのあけ方は常識的に行ってください。ワープロの場合、本文の字数を文末に必ず明記してください。
- (2) 参考文献は、各課題について3編～5編で、出版年は2004年以降のものとし、必ず各課題の本文の後に記載してください。テキストは精読していることが前提ですので参考文献に数える必要はありません。エビデンスに基づいた信頼できるものを選び、少なくとも1編以上は成書を用い、インターネット利用の場合でも成書または学術誌がPDF化されたものを優先し、出所を明らかにしてください。
- (3) 『理科系の作文技術』（木下是雄著、中公新書）などを参考にレポートを作成してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

体育理論

(A 052-0601) [2単位]

【講義要綱】

体育学は、人間の身体活動を対象とした応用科学であり、その範疇は広く人文・社会・自然科学全てに及びます。本科目は、人間の行う身体活動の意味を幅広く理解することを目的とするものです。健康で豊かな日常生活のための身体活動について、その現代的意義を考え、また運動として実践するための基礎的知識を得る、さらにスポーツ・運動が人間の社会にどのように根付いてきたか、その文化的背景などについての理解を深めていきます。

レポート課題は3題の中から1題の選択としますが、試験においては全範囲にわたって総合的な理解を求めます。

【テキストの読み方】

各章の最後にあげた参考文献を補助的に用いて、テキスト本文の理解を深めてください。

【参考文献】

玉木正之『スポーツとは何か』講談社現代新書、1999年
安部孝・琉子友男編『これからの健康とスポーツの科学 第三版』講談社、2010年
宮下充正『トレーニングの科学的基礎（改訂版）』ブックハウス HD、2007年
杉晴夫『筋肉はふしぎ』講談社ブルーバックス、2003年
勝田茂『入門運動生理学 第3版』杏林書院、2007年

【レポート作成上の注意点】

3000字～4000字を目安とし、参考にした文献を明記してください。引用した場合、必ず文中に注・番号を入れ、文末に文献名・引用頁を明示して対応させてください。自身の主張と文献からの引用を区別して論述を展開するように心掛けてください。「塾生ガイド」の中の「レポート作成上の注意」を確認してください。特に「参考文献の使用」を熟読願います。

【成績評価方法】

科目試験による。

学問分野別
P9

分野別

総合教育科目
P51

総合

文学部
P89

文

経済学部
P167

経

法学部
P205

法

教職
P269

教職

科目別履修要領

〔文学部専門教育科目〕

- ・履修要領には、絶版となった参考書も記載してあります。これは、「その参考書が学習上有益である。」と担当者が判断したものです。可能な範囲で図書館などで捜して学習することをお勧めします。
- ・この科目別履修要領の講義要綱には、科目名の「新」・「改訂」が省略されている箇所があります。

【講義要綱】

西洋哲学の源泉となった著作を自ら精読することにより、哲学の問題と方法に触れることを目的とする。

【参考文献】

内山勝利・中川純男編著『西洋哲学史〔古代・中世編〕—フィロソフィアの源流と伝統』ミネルヴァ書房、1996年

内山勝利・中川純男ほか編『哲学の歴史』第1巻（古代Ⅰ）、第2巻（古代Ⅱ）、第3巻（中世）、中央公論新社、2007-2008年

【レポート作成上の注意点】

- ・ レポートの書き方については、河野哲也『レポート・論文の書き方入門』第3版、慶應義塾大学出版会、2002年を参考にすること。
- ・ 自分の選んだテーマを最初に明示すること。
- ・ 教科書や参考文献をそのまま引用するのではなく、課題図書に基づいて自分のことばで考えること。
- ・ 概説的知識、時代背景などには言及しないこと。
- ・ 課題図書の書物の内容に言及するときは、a) の場合は、欄外にある21a、481B等の記号、b) の場合は、巻・章（できれば、欄外にある1097b20等の記号を合わせて）、c) の場合は、論文名、d) の場合は巻、章、節を明示すること。
- ・ 課題図書、教科書、参考書以外にレポート作成の参考にした書物があるときは、レポートの末尾に明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

『西洋哲学史Ⅱ』では、西洋近代の主立った哲学者の思想を時代順に紹介していきます。哲学では自分で問題を立てて考えていくことが重要ですが、自分勝手な思考に陥らないために、過去の哲学者の思想に習熟することは重要な訓練になります。この科目ではそういった基礎的な哲学的な知見の獲得を目指します。

【テキストの読み方】

難解な概念に出会ったら、哲学辞典など紐解き、基礎的知識を得た上で、反復して内容を

考えてみるのが大切です。

【履修上の注意】

概念の内容を身近な事例に引き寄せて考えてください。

【参考文献】

内山勝利・中川純男ほか編『哲学の歴史』第4巻（ルネサンス）、第5巻（17世紀）、第6巻（18世紀）、第7巻（18-19世紀）、中央公論新社、2007～2008年

【レポート作成上の注意点】

テキストや参考文献のことはよく理解できていないのに、そのまま写すような仕方での利用は避けてください。また引用する場合は、それが引用であることを明示し、またその出典を明示することがルールです。無断引用はカンニングに等しい行為です。

【成績評価方法】

科目試験による。

論理学 (L)

(L 037-7703、L 7742) [2単位]

文

【講義要綱】

論理学の研究はアリストテレス以来長い歴史をもっています。私たちが何かを推理するときには不可欠の規則が論理規則と呼ばれ、それがないと考えることさえ覚束ない基本的な規則と考えられています。それを研究するのが論理学で、19世紀末のフレーゲの研究によって論理学はそれまでにない新たな発展をすることになります。数学的な思考と記号の使い方が論理学に取り入れられ、数学やコンピュータ科学と結びつきながら、様々な分野で応用され、基礎研究には欠かせない役割を演じています。

この講義では論理的な推論や真偽概念について基本的な事柄を学んだ人を対象に、それらを実際に使うことができるようにすることを目的にしています。それによって自分が論理的に考えることができるようになるだけでなく、他人の考えが正しいかどうかもしっかり判定できるようになれることを目指しています。

【テキストの読み方】

文学部の他のテキストと違って記号や数式、論理式がたくさん登場します。自然な言語ではなく、記号言語を使って文や命題を論理式に書き直し、推論が正しいかどうか調べることが主要な内容ですから、それをしっかり肝に命じて読み進めてください。実際に問題を解く解き方が丁寧に説明されていますから、普通に読み進めれば、テキスト以外の参考文献を参照しなくても完全に理解できます。根気強く読めば、このテキスト一冊だけで論理的な推論の構成や吟味が自分で理解できるようになります。その意味で、このテキストは論理的な推

論についてのマニュアルだと考えてください。

【関連科目】

論理学が生まれた経緯や歴史から哲学が強い関連をもった科目です。推論することが主要な研究方法である哲学では論理的な推論が大切な道具になっていますから、論理学の知識は哲学の問題を扱う上で役立つはずですが、また、数学的な形式をもった内容ですから、数学基礎論、計算理論、コンピュータ言語等は論理学と密接に結びついています。さらに、言語学との関連も20世紀後半には強くなり、統語論、意味論等で重要な役割を果たしています。

【参考文献】

論理学のテキストはたくさんありますが、テキストの読み方で書いたように、このテキストはマニュアルですから、複数のマニュアルは必要ありません。他の論理学のテキストをまずは忘れてこのテキストだけに集中してみてください。どれも似た内容なら一冊だけ暗記するほどに読むのが一番です。

【レポート作成上の注意】

他の文献を参照する必要はありませんから、テキストの内容だけを十分に使ってレポートを作成してください。文献を検索し、巧みにそれを使うのではなく、テキストの内容を正しく理解し、それだけを使って問題を解くことに専念してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

科学哲学

(L 089-0401) [4単位]

【講義要綱】

科学哲学は科学についての哲学で、それを概説したのがこのテキストです。テキストは第一部の総論、第二部の各論からなっており、第一部はテキストの順序通りに読んでください。第二部は順序通りでなくても構いません。

テキストでは科学的な知識がどのような特徴をもっているかが中心課題の一つになっており、それを「自然の変化」をめぐる考察する仕方でも議論が進んでいきます。実際には各論から話を始める方が具体的なのですが、まず全体像を把握してもらうために科学史、思想史から始まっています。

科学を知った上で科学哲学を研究するのが普通ですが、テキストには科学的な事柄も必要なものは入っています。ですから、科学に関心さえあれば、テキストを読み進めていけるはずです。

【テキストの読み方】

テキストをどのように読み進めるかはきわめて重要です。そこでこのテキストの読み方について説明します。このテキストは論証の部分と、歴史的経緯や状況の説明の部分とからなっています。事件や事実を叙述する場合と、その背後のからくりや原因と結果の関係を推理する場合は大きく違っています。叙述の代表は小説や報道記事です。何が何時どのようなようになったかという報告は、素直に読むだけで事の経緯がわかりますから、考えながら読む必要はありません。映画やテレビドラマが面白いのは筋の展開や心理描写にあり、それらは考えなくてもわかります。一方、論証の代表例は数学の定理の証明です。シャーロック・ホームズの推理も論証の一つです。数学の定理や名探偵の推理はしっかり考えないとわかりません。このテキストはこれら二つの異なる部分、つまり論証部分と叙述部分からなっていることに注意してください。

読んでいる部分が論証なのか、叙述なのかをまず確認してください。いずれの部分かによって読み方が違ってきます。論証部分がかつて数学のテキストを読んだときのことを思い出しながら、その時と同じように読んでみてください。時間をかけてゆっくり読まなければなりません。途中でわからなくなったら先に進むのではなく、前に戻らなければなりません。何度も前のページを見返すことが必要になります。一人で読む場合、このような読み方は一方的に辛抱強さを要求しますから、ついいい加減になったり、読み飛ばしたりしてしまいます。辛抱強く、何度も読み返す、わかるまで頑張る、といった根気が求められます。これに対して、叙述の部分は日本語さえわかれば大抵苦労なしに理解できます。正確に理解することを心掛ければまず心配は要りません。用語や人名が不明ならそれを調べる程度で済みます。でも、自分が正しく内容を理解したかどうかの確認は叙述の部分の方が厄介で、誤解しないよういつも注意しなければなりません。論証部分はわからない場合にはわからないという自覚が必ずあり、わからないことがはっきりわかります。

さらに、このテキストのもつ特徴は（問）があちこちにあることです。問は必ず解答してください。テキストの内容が理解できたかどうかの目安になります。テキストが二つの異なる部分をもつことを念頭に置きながら丁寧に読み進め、必ず「わかった」、「理解した」という確信がもてるまで頑張ってください。

また、テキストはページ数が多くて最初から読みたくないという気持ちになりそうですが、第二部の各章は半ば独立していますので、好きな章から読み始めて構いません。

【履修上の注意】

科学的な知識を多くもっている必要はありませんが、科学に関心・興味をもっていることが必要です。

【関連科目】

科学の哲学ですから、科学のどの科目も関連科目ということになります。しかし、伝統的に科学哲学は自然科学の哲学として研究されてきました。ですから、まずは自然科学が関連

する科目であると考えてください。それらの多くは総合教育科目のほうです。社会科学や歴史の科目であっても、研究の方法や対象に関する哲学的な考察が含まれていれば、十分に関連科目と言えます。

科学に関するニュース、記事等は実に多いですから、それらに関心を寄せ、気にするようになしてください。

【参考文献】

科学に関する啓蒙書、科学雑誌、科学的なエッセイ、伝記等、科学に関するあらゆる本が参考文献になります。科学についての知見を広めるためにいろんな文献を貪欲に読んでください。

西脇与作編『入門科学哲学』慶應義塾大学出版会、2013年

【レポート作成上の注意点】

テキストや参考文献を写すのではなく、自分で推論した内容を書いてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

倫理学

(L 065-8902、L 8958)〔2単位〕

【講義要綱】

本書では、普遍的な倫理追究の型として、次の6つを取り上げて説明します。

- 1) ユダヤ・キリスト教
- 2) アリストテレスの目的論
- 3) カントの義務論
- 4) ムーアのメタ倫理学
- 5) シェーラーの価値倫理学
- 6) 生命倫理

【テキストの読み方】

『塾生ガイド』の「テキストの学習」（第4章「学習過程」、『教職課程履修案内』では第12章「学習過程」）に従ってください。

【参考文献】

小松光彦・樽井正義・谷寿美編『倫理学案内—理論と課題』慶應義塾大学出版会、2006年
柘植尚則『プレップ倫理学』弘文堂、2010年

【レポート作成上の注意点】

『塾生ガイド』の「レポート作成上の注意」（第4章「学習過程」、『教職課程履修案内』で

は第12章「学習過程」)に従ってください。

【成績評価方法】

科目試験による。

現代倫理学の諸問題

(L 045-7802、L 7844)〔4単位〕

【講義要綱】

20世紀の倫理学をとりまく学問的状況、研究対象としている問題（実存、他者、世界、言語、宇宙における人間の位置、価値）を概観することを通して、倫理学という学問についてより深い理解を得ることを目的とします。

【テキストの読み方】

『塾生ガイド』の4章（『教職課程履修案内』では第12章）学習過程の「学習指導室からテキストの学習」に従ってください。

【関連科目】

倫理学

【参考文献】

小松光彦・樽井正義・谷寿美編『倫理学案内—理論と課題』慶應義塾大学出版会、2006年

【レポート作成上の注意点】

『塾生ガイド』の4章（『教職課程履修案内』では第12章）学習過程の「学習指導室からレポート作成上の注意」、『レポート課題集』の「レポート課題」の注意1～3をよく読んでください。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・日本美術史 I

(L 116-1401)〔2単位〕

【講義要綱】

日本美術史のうち、江戸時代までを扱います。日本は中国および韓国から多大な影響を受けて自国の文化を形成しました。美術についても同様であり、これら大陸の美術状況を無視してはこの時代の日本美術を語ることはできません。したがって、第一に中国や韓国などのような影響を受けているのか、第二にそのような受容において日本独自のものがあるのか、あるとすればどのようなものか、という2つの視点が必要です。これを、観念的ではなく、自身の目で観察し、作品の特質とそのような作品が産み出された背景について、具体的な証

抛を挙げて論証することが、美術史学です。したがって、テキストや文献を読むのと同時に、自身で作品と出会い、作品を「読む」こと、つまり観ることが重要です。

【テキストの読み方】

作品を味わうことがなければ「日本美」は理解できません。テキスト（『新・日本美術史Ⅰ』）は縄文時代以降の日本美術を通史的に扱っていますが、どのように作品を味わうかという点に重点を置いているため、取り上げている作品に限りがあり、重要作品全てを網羅するものではありません。したがって、参考文献に挙げた図書等を利用し、できるだけ多くの作品を多角的に見る訓練を積んで下さい。

【履修上の注意】

美術史学は読んで理解するだけではなく、自身の目で見て会得するものです。あるいは、自身で観察した上でなければ、どのような解説書を読んでも理解できないというべきでしょうか。したがって、履修者はできれば実作品を見学するか、少なくとも写真によって観る訓練を積むことが必要です。概説を引き写しただけのレポートは評価しません。自身の観察したもので裏付けしつつ文献を読むように努めて下さい。

【参考文献】

- 1 『日本美術館』小学館、1997 ほか美術史概説書類
- 2 『原色図典 日本美術史年表』集英社、1986 ほか美術史年表類
- 3 『日本美術全集』講談社、1990—1994 ほか大型日本美術の全集類

【レポート作成上の注意点】

インターネットを利用する場合、引用するなら文責者が明示されているものに限ります。ある著書からの引用なら、原本を参照すること。大事なことは、だれの意見なのかを明示することで、参考書の内容を自身の考えのように引き写さないこと。「だれそれはこう述べているが、自分はこれこれの理由でこう考える」といった論調が好ましい。したがって、本文中に引用を行う場合は必ず註を付け、最後に参考文献を挙げること。

また、レポートは感想文ではないということを忘れずに。

【成績評価方法】

科目試験による。

社会学史Ⅰ

(市販書採用科目) (L 081-9791) [2単位]

【テキスト】

那須壽編『クロニクル社会学』有斐閣アルマ、1997年

【講義要綱】

「社会学史Ⅰ」では社会学の歴史の全体を概観する。おおまかに言えば、社会学の歴史は、サン＝シモン、コント、マルクスらの第一世代とともに始まり（誕生期）、デュルケム、ウェーバー、ジンメル、ミードらの第二世代によって確立され（成立期）、パーソンズ、マンハイム、シュッツ、ブルーマーらの第三世代によって展開され（展開期）、そしてルーマン、コールマン、ハーバーマス、フーコー、ゴフマン、ガーフィンケル（エスノメソドロジー）、ブルデュー、ギデンズら現代の社会学者たちへと受け継がれている。まずこの社会学の流れの全体像を把握し、そのうえでいずれかひとりの社会学者をとりあげて、その社会学者の学説をさらに深く掘り下げて理解することがこの講義の目的である。

【テキストの学習方法】

まずテキスト（『クロニクル社会学』）を通読して社会学の歴史の全体像を把握する。そのうえでテキストで取り上げられている社会学者から、関心をもった社会学者をひとり選んで、テキストの「読書案内」にしたがって、さらにその社会学者の学説について研究を深める。

【参考文献】

わからない用語がでてきたときに自分で調べられるよう、以下の小辞典のうちいずれかを手元に置くことが望ましい。

『岩波小辞典社会学』 岩波書店

『社会学小辞典』 有斐閣

社会学全般に関しては、

長谷川公一・浜日出夫ほか『社会学』 有斐閣

【レポート作成上の注意点】

「社会学史Ⅱ」と同一の文献を選択することはできない。

分量は4000字以内。ただし1割程度の誤差にとどめること。ワープロを使用する場合は、末尾に総字数を明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

社会学史Ⅱ

（市販書採用科目）（L 082-9591）〔2単位〕

【テキスト】

徳永恂・厚東洋輔編『人間ウェーバー』 有斐閣双書、1995年

【講義要綱】

「社会学史Ⅱ」では、社会学の歴史全体を概観した「社会学史Ⅰ」をふまえて、第二世代

の代表的な社会学者のひとりであるマックス・ウェーバーをとりあげ、その社会学の特徴をさらにくわしく考察する。したがって受講者は「社会学史Ⅰ」の単位を修得済みであることが望ましい。

ウェーバーの業績は、(狭い意味の)社会学にとどまらず、宗教研究、政治論、学問論など広範な分野にまたがる。まずウェーバーの業績の全体像を概観したうえで、いずれかひとつの分野をとりあげて、その分野におけるウェーバーの仕事をさらに深く掘り下げて理解することがこの講義の目的である。

【テキストの学習方法】

まずテキスト(『人間ウェーバー』)を通読してウェーバーの業績の全体像を把握する。そのうえでテキストの「読書案内」にしたがって、関心をもった分野におけるウェーバーの著作をひとつ選び、その著作を通してさらにその分野についての研究を深める。

【履修上の注意】

「社会学史Ⅰ」の単位を修得済みであることが望ましい。

【参考文献】

「社会学史Ⅰ」と同じ。

【レポート作成上の注意点】

「社会学史Ⅰ」と同一の文献を選択することはできない。

分量は4000字以内。ただし1割程度の誤差にとどめること。ワープロを使用する場合は、末尾に総字数を明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

社会心理学

(L 087-0301)〔2単位〕

【講義要綱】

最初に「社会心理学とはどのような学問か」を歴史や方法を概観しながら理解する。その上で、個人の問題から社会の問題と順に展開する。まず、社会における個人の問題として「欲求と動機づけ」「自己」「社会的認知」の問題を扱う。次に、個人と個人の関係について「説得と態度変容」「対人魅力」「対人交渉」「攻撃と援助」などを学ぶ。最後に集団や社会について「リーダーシップ」「集団での意思決定」「マスコミュニケーション」「イノベーションの普及」などを学ぶ。社会心理学が扱う対象は私たちの暮らしの中で見出される現象と密接にかかわっている。身近な現象を想定しながらテキストや参考書をよく読み、理解を深める。

【テキストの読み方】

まず第1章で社会心理学を概観するが、最初は細部までこだわる必要はない。2章以降については順に読み進めるのが基本だが、関心のある章から順に読んでいってもよい。一通り読んだところで再び1章を読むと社会心理学の全体がよくわかる。

【履修上の注意】

テキスト以外に社会心理学関係の参考書を少なくとも1冊は選び、読んでみてください。概論的なものでなく興味のある分野のものでも構いません。

【関連科目】

心理学Ⅰ—基礎過程—

心理学Ⅱ—実験・測定・モデル—

【参考文献】

遠藤由美（編著）『社会心理学：社会で生きる人のいとなみを探る』ミネルヴァ書房、2009年

亀田達也・村田光二（著）『複雑さに挑む社会心理学：適応エージェントとしての人間（改訂版）』有斐閣、2010年

安藤香織・杉浦淳吉（編著）『暮らしの中の社会心理学』ナカニシヤ出版、2012年

【レポート作成上の注意点】

日常的に経験する社会現象について、社会心理学によって説明できることを目標とします。したがって、まずは自分自身の経験を社会心理学の理論を用いて説明するよう、日ごろから心がけてください。社会現象はとらえ方によって複数の見方ができます。複数の理論で説明するというのは1つの現象を多角的に捉えるということです。

テキストや参考書の中には、社会心理学の理論によって説明される具体例が掲載されていることもあります。そうした例を使用する際には、必ず引用箇所を明示し、それに類似した自分が経験した事例についても理論的に説明するようにしてください。インターネットで知識を得る場合も同様です。インターネットの活用も大事なことですが、出典を明示した上で引用は最小限にとどめ、必ず自分自身のコメントをつけるなど考察の材料となるようにしてください。社会現象を説明するための参考書は、社会心理学以外のものを用いることもできます。その場合も社会心理学的な考察を必ず加えてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

藤田弘夫・吉原直樹編『都市社会学』有斐閣、1999年

【講義要綱】

本科目は都市の多様な側面を社会学的に理解することを目的とする。テキストに即して、次の順序で議論していく。

序 章 都市社会学の方法と対象

第Ⅰ部 都市の活動と世界

第Ⅱ部 住民活動とコミュニティの形成

第Ⅲ部 生活世界と都市文化の変容

第Ⅳ部 都市の計画と管理

終 章 都市社会学の新しい課題

名著解題

【テキストの読み方】

テキストについては、全部の章を正確に熟読してください。マテリアルやコラム、名著解題まで試験の範囲に入ります。

【履修上の注意】

持ち込み不可ですので、内容について自分でまとめてください。単にキーワードの暗記だけでなく、内容を論じる問題になります。

【参考文献】

各章の終わりに掲載されている文献を参考にしてください。他に次のようなテキストも参考になります。

- ・町村敬志・西澤晃彦『都市の社会学』有斐閣、2000年
- ・園部雅久・和田清美編著『都市社会学入門』文化書房博文社、2004年
- ・吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』有斐閣、2013年
- ・松本康編『都市社会学・入門』有斐閣、2014年

【レポート作成上の注意点】

以下の5つの条件がそろわなければ合格となりませんので、注意してください。

1. テキスト以外に5点以上の参考文献を用いること。
2. 字数は3600字以上4000字以内（注を字数に含む。参考文献リストは字数に含めない）。
3. 論述は社会学的視点からなされること。
4. 注をつけること。
5. 参考文献リストを作成すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

ここでは、感覚、知覚、認知、記憶、学習、動機づけ、感情などの基礎過程に関する個体の心理について学習する。ただし個体の心理といっても、知能・性格などの個体差についてではなく、個体に共通な一般的性質をとり上げる。

テキストは行動の科学としての心理学という視点から述べられているが、心理学の諸学説を紹介するのも、特定の学説による主張をしようとしたのでもない。むしろ、心理学が扱ってきた基礎過程に関する事実としての研究成果を、この視点から系統づけようとしたものであり、既に得られた心理学の知識を改めてこの視点から考えてみていただきたい。(テキストまえがきより一部改変)

【テキストの読み方】

専門用語を1つずつ、参考文献を利用しながら理解していくことが重要である。

【履修上の注意】

総合教育科目で心理学を修めたこと、もしくはそれと同等の学力を有していることを前提として、テキストは書かれている。

【参考文献】

中島義明ほか編『心理学辞典』有斐閣、1999年

J. E. メイザー著『メイザーの学習と行動（日本語版第3版）』二瓶社、2008年

【レポート作成上の注意点】

1. 参考文献を明らかにしていないレポートは採点できない。
2. 他人の著作を丸写しにただけで、自分の見解のないレポートは、それだけで不合格となる。
3. 内外の学術論文を事前に充分参考とすることで書きはじめる前にレポートを構成する図表や、論文の書き方をよく理解すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

この科目は、基礎の心理学の重要な研究方法である実験・測定・モデルについて学ぶことにより、実証科学としての心理学の考え方を理解することを目的とする。したがって履修者は、個々の現象や実験結果の細かい点に気を取られすぎずに、どうしてそのような実験が必

要となったのか、実験結果からどのようにしてどのような考察が引き出されたのか、といった研究における考え方の流れを、論理的に筋道立てて理解するよう努力してほしい。

本テキストは書かれてからかなりの年月が経過し、その間に心理学は大きな発展を遂げている。その意味からもテキストだけを勉強するのではなく、下記の参考書などを十分に活用して勉強してほしい。特に(1)『認知心理学を知る』からは、毎回かならず科目試験の問題が出題されるので、テキストとあわせて十分に勉強しておく必要がある。

【テキストの読み方】

本テキストは独学で学ぶには非常に難解で、数学や統計学の基礎知識もある程度高い水準のものが要求される。もちろんある程度の数学・統計学の知識は心理学を学ぶ上で必要なものである。しかし、本科目の履修に際しては、数式や数学的手法を完全に理解することよりも、考え方・精神を理解することに主眼を置いてほしい。

【履修上の注意】

履修者は、参考文献(1)の『認知心理学を知る』をあわせて勉強することが要求される。科目試験では、テキストのみではなく、この文献からも問題が出題される。また、ある程度の数学・統計学の知識があることが望ましい。最低限、総合教育科目の統計学、あるいは文学部専門教育科目の心理・教育統計学を修得している必要がある。

【関連科目】

「統計学(A)(総合教育科目)」、「心理・教育統計学(文学部専門教育科目)」

【参考文献】

- (1) 市川・伊東編『認知心理学を知る 第3版』おうふう、2009年
- (2) 井上・佐藤編『日常認知の心理学』北大路書房、2002年
- (3) 仲真紀子編『認知心理学』ミネルヴァ書房、2010年

【レポート作成上の注意点】

レポートの作成に際しては、読者として「心理学Ⅱ」の授業を履修する基礎学力は持っているが、まだ履修前の学生を想定すること。実験の紹介は、目的、方法、結果、結論に分けて簡潔、かつ明瞭に記すこと。紹介する研究は、原則として専門誌などに掲載された論文に直接あたること。心理学研究、認知心理学研究、基礎心理学研究などの雑誌が読みやすいと思われる。ウェブ上でCiNii Articlesなどのデータベースを利用するのもよい。引用・参考文献はもらさず記す。その際、形式はテキストや参考書などに倣い、標準的な方法にして一貫性を保つこと。横書きに限る。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

いわゆる狭義の「教育」は人間形成の過程（学び）への意図的な介入として定義づけることができます。したがって「教育学」とは、こうした「教育」という視座に立つことによって、そこで生ずる実践上の様々な問題や理論的諸問題を解決しようとして成立したまずは「術」であり、またその反省としての学問と考えることができます。つまり教育学とは「教育問題」の科学なのです。この科目ではこうした考え方すなわち「学問知」の成立や構造を理論的かつ歴史的に考察することが履修上の目標です。概念史的に見て「教育」という概念はいついかなる状況下で成立したのか、またその意味は何かを問うことの上で、その説明の仕方には歴史上様々のものがあり、それらはいくつかの類型に分類することができます。それらの説明の歴史と類型を踏まえて、さらに私たちは、この「教育」をどのように説明したらより適切な説明であるのか、その理論的提案を吟味します。さらに、この理解に立って、教育学上の主要問題のいくつかを分析・吟味することになります。

以上のような趣旨を十分に理解された上で、とりわけ現代の教育に思想的にも現実的にも直接の繋がりのある、17、18世紀に成立したいわゆる「近代教育理論」の形成と過程と理論構造の検討がこの科目の焦点となることは言うまでもありません。この世紀こそ「教育の世紀」と呼ばれるほど、子どもへの関心そして新たな教育への関心が増大し、また質的な発展を見せた時期はありません。この時期に誕生を見た近代教育学は多くの新しい示唆と観方を生み出しましたが、その一方で今日の近代教育批判にかかわる多くの問題性を潜在的に持っていました。したがってこの講義の履修を希望される方にはテキストの記述を参考に自からロックやカント、ルソーやヘルバルトさらにはデューイなどの言説を、古典的テキストを熟読吟味することを介してこうした問題性を考慮しながら批判的に考察して頂けることを期待します。

【関連科目】

「教育思想史」

【参考文献】

田中智志・今井康雄編『キーワード 現代の教育学』東京大学出版会、2009年

中内敏夫『教育学第一步』岩波書店、1988年

村井実『「善さ」の復興』東洋館出版社、1998年

* 絶版本は図書館で借りるか、インターネットの古書サイトで入手可能。

【レポート作成上の注意点】

まず、レポート課題は何を問うているかを正確に理解すること。

次に、テキストを丹念に読み込んだ上でその正確な理解に立って課題の問いに応じた学習活動（参考文献の読み込みなど）を展開し、課題の問いに則してレポートを作成すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

教育心理学

(L 114-1301)〔2単位〕

【講義要綱】

教育という人間に特有の学習のあり方の科学的解明をめざすのが教育心理学である。「発達」「学習」という基本的な心理学的メカニズムの理解の上に、学習環境と教育実践に関する認識を深めてもらうことが本テキストの目的である。内容は古典的な学説から最新の知見まで含まれ、多数のコラムも加わって、教育心理学の多面性を学ぶことができるだろう。

【テキストの読み方】

テキスト本文の学習だけでなく、コラムにも関心を寄せて、具体的な事例を想定しながら理解を深めてほしい。

【参考文献】

並木博編著『教育心理学へのいざない（第3版）』八千代出版、2008年
鹿毛雅治編『教育心理学（朝倉心理学講座）』朝倉書店、2006年

【成績評価方法】

科目試験による。

新・教育史

(L 117-1401)〔4単位〕

【講義要綱】

「教育」の史的展開をマクロなレベルでとらえるならば、それを、①「習俗としての教育」（生活空間の中に教育空間が包摂される段階）、②「組織としての教育」（教育が一定の組織を通して行われる段階。階層差・地域差・性差などの偏差が存在）、③「制度としての教育」（②の段階に残されていた偏差を解消し、全国民子女を対象に組織的な教育が行われる段階）、という三つの段階を辿ってきたものと理解することができる。そして、今日の日本の教育が③の段階を基軸とするものであることは論を俟たない。

だが、①から③への教育史の進展は、これを単純に「進歩」や「発展」としてのみ評価できるものではなく、①や②の段階に包含されていた様々な教育的価値を切り捨てることで、③の段階の教育が成立したという見方も成り立つ。地域（共同体）の教育力の低下が叫ばれたり、子どもの学習意欲の低下が問題視されたりすることも、その一つの証左といえる。

本テキストは、この国において、近代以後に「制度としての教育」が確立・整備されてきたこと、しかもその教育制度が「国家による国民形成」として行われてきたことに着眼点を

置き、その意味での日本の「近代教育」にどのような教育上の問題を認めることができるのか、に重大な視線を注いでいる。さらに、国家による国民形成としての「近代教育」をもって、唯一絶対の教育様態と理解するような発想を相対化し、教育のあり方を多様な視角から追求する必要性を論じている。

履修者には、上記①②③の次の段階に到達することが期待される「教育のかたち」を追求することを目指して、テキストの叙述内容に思想的格闘を挑まれることを期待したい。未来を切り拓くための示唆は常に歴史のうちにある、ということを踏まえて。

【テキストの読み方】

個々の教育史の動向を、絶えずより大きな教育史の流れの中に位置づけながら理解することに心掛けてほしい。

【履修上の注意】

テキストまたはスクーリングで「教育学」を履修していることが望ましい。なお、日本史の知識については、高等学校の教科書程度があれば問題ない。

【関連科目】

「教育学」「教育思想史」「教育心理学」

【参考文献】

天野郁夫『大学の誕生（上）（下）』中央公論社、2009年

沖田行司編『人物で見る日本の教育』ミネルヴァ書房、2012年

海後宗臣・仲新『教科書でみる近代日本の教育』東京書籍、1979年

佐藤秀夫『教育の文化史』全4巻、阿吽社、2004年

辻本雅史・沖田行司編『教育社会史』山川出版社、2002年

辻本雅史『「学び」の復権』岩波現代文庫、2012年

『論集 現代日本の教育史』全7巻、日本図書センター、2013-14年

これら以外については、〈<http://www.flet.keio.ac.jp/~bibiken/mita-tetsu/>〉の日本教育史文献案内を参照されたい。

【レポート作成上の注意点】

一つには、実証的な内容であることに留意すること。そのため、歴史事象の記述についてはできる限り第一次資料に基づいて出典を明記してほしい。もう一つには、教育史の流れを大局的に把握すること。そのため、時代背景を踏まえるとともに、事象が生起するに至るまでの歴史的経緯をよく理解してほしい。また、当該事象の今日的意義やその後の歴史に与えた影響を視野に含めた記述内容であることも必要である。

【成績評価方法】

科目試験による。

教育思想史

(L 046-7902、L 7992)〔4単位〕

【講義要綱】

現代教育の理念的基盤が成立した18、19、20世紀のヨーロッパとアメリカの教育思想、人間形成論の特徴を、古代、中世、近世の教育思想との比較の中で理解してもらうことを目指している。その際、特に政治や社会や文化との関係に着目し理解することを期待している。

【テキストの読み方】

全体を通読した上で、直接、課題のテーマにかかわる18世紀以降の部分を読すること。

【履修上の注意】

教育学に関する基礎知識、西洋史の知識を学んだ上で履修するのが望ましい。

【関連科目】

教育学

【参考文献】

宮澤康人『近代の教育思想』（3訂版）放送大学教育振興会、2003年

宮澤康人『教育文化論』放送大学教育振興会、2002年

今井康雄編『教育思想史』有斐閣、2009年

【レポート作成上の注意点】

取り上げる思想家の著（翻訳書可）一冊と、その思想家についての研究書を一冊読了した上で、レポート作成に取り組んでほしい。

【成績評価方法】

科目試験による。

教育社会学

(市販書採用科目) (L 107-1091)〔2単位〕

【テキスト】

久富善之・長谷川裕編『教育社会学（教師教育テキストシリーズ5）』学文社、2008年

【講義要綱】

現代日本社会における教育を主たる対象として、社会的背景と関連させて教育的事象を捉える能力を身につけることが本科目の目標です。別の言い方をすれば、社会学が対象とする教育（現象）の多様さを広がりを確認した上で、それらは一見個々別々の事象ですが、近代社会という共通土台の上に成立している社会的事象であることを理解することが目標です、ともいえます。

加えて、その近代社会が行き着いた先に現代社会があり、近代の完成・成熟としての現代

という時代変化への着目が重要です。教育社会学は教育現象を対象とする社会学ですが、教育という社会現象から現代社会を理解する社会学でもあります。よって、制度としての学校教育に対象が限定されず、若者の生き方、就職（移行）、子育て、階層の再生産、ナショナリズムなどについても教育社会的考察の対象となるのです。

【テキストの読み方】

テキストは複数の研究者によって執筆されていて、テーマも多岐にわたっています。しかし、テキストを通じての問題意識は共通しています。「学力」という言葉は、テキストの複数箇所が登場します。どのような「学力」が近代教育において重要視されるのか、また、「学力」は現代社会においてどのように見られているのかについて、テキスト全体の問題意識に位置づけて理解してください。

【履修上の注意】

必修として履修しておくべき科目は指定しませんが、社会学と教育学の基礎知識があるとよいです。これら2つの学問に関連する科目をそれぞれ1つ以上履修した上で、本科目を履修することを推奨します。

【関連科目】

上記の「履修上の注意」を参照。

【参考文献】

1. 教育科学研究会編『現代教育のキーワード』大月書店、2006年
2. 山内乾史、原清治編著『学力問題・ゆとり教育（リーディングス日本の教育と社会 第1巻）』日本図書センター、2006年
3. 荻谷剛彦『学力と階層』朝日新聞出版、2012年
4. 清水一彦ほか編著『最新教育データブック〔第12版〕』時事通信社、2008年

【レポート作成上の注意点】

1. 課題は2つに分かれています。が、(1)と(2)が有機的に関連付けられることが求められていますので、一連の課題とであると考えてください。(1)と(2)は混在させず、別個に記述してください。
2. テキストの理解を深めるためには、参考文献で議論の補強を行い、また、関係するデータとの照らし合わせをしてください。テキスト各章末にある参考文献も活用してください。これらの作業の成果を含めてレポート執筆してください。
3. レポート記述におけるテキストおよび参考文献の引用参照は、注による出典箇所の明示が必要です。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

広く行動科学の研究方法としての統計学の入門コースであるが、特に推測統計学の理論的背景を十分理解していただけるようにという願いをこめてテキストを執筆した。このテキストが使用されるようになって、レポートの質が高くなり、また科目試験の成績も良くなっているといった印象を受けることを喜んでいます。

【参考文献】

並木博『個性と教育環境の交互作用—教育心理学の課題』培風館、1997年
芝祐順・南風原朝和『行動科学における統計解析法』東京大学出版会、1990年

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

「法学概論」は、文学部および経済学部専門教育科目として開講されるが、学習の目的とするところは、法律学の基礎的事項についての知見を掌中にあることにある。今後の日常生活で法との接点を持たなければならない状況が生じた際、にそこで得た知識を生かすこと、本講義を通じて法律学への興味が芽ばえ、さらに多くの法分野への取り組みを試みる「きっかけ」となる気持ちが生ずること、新たに修得した異なる分野に関する知識を、自らが専攻する文学・経済学・商学のより深い理解のための拠りどころとすること、いずれも本講義の目指す主旨に叶うものである。そうした意味で当該学科目の位置づけは、まさに「入門講座」の一語に尽きよう。

【テキストの読み方】

さて、それがために、皆さんに提供されたテキストは、できる限り平易な文章で綴られ丁寧な説明により要点の理解が可能であるよう心掛けて執筆された。もちろん初学者にとっては、それでさえも目の前に広がる未知の世界が、得体の知れない茫漠たるものに映るのは、むしろ当然のことであろう。しかし、まず第一歩を踏み出さないことには、何も始まらない。そこで学習をする、つまりテキストを読み進むために二つの提案をしておきたいと思う。

まず第一は、ひとたびテキストを読み始めたら、自分のできる範囲で分量・日程の予定を組み、冒頭から末尾までなるべく連続した期間のなかで、必ず順を逐って読み切ることを勧めたい。費やす期間はあまり長くないこと、毎日とはいわないまでも前回の記憶の途切れない程度の連続性が必要である。また、読み方は、多少乱暴な表現と受け取られるかも知れな

いが、とにかく「読破通読」を目標に遮二無二に読む、途中いささか理解に苦しむ箇所があっても、それはそれとして、決して章や一文の飛ばし読みをせず、最終ページにたどり着く姿勢が肝要である。

第二は、テキストを読み進める際に、まずその内容の国語的理解に努めること、すなわち個々の項目についての専門性を主眼とする細密な理解は二次的なものとし、そこに書かれている「日本語」の内容を正確に読み解くことに力を注いで欲しい。用いられた漢字や比喻の意味、主語・述語や文章の構造への誤りない把握は、いかなるジャンルのものであれ日本語による著作を受容する第一歩である。そこで、テキスト読了に向けて日本文の文意文脈を正しく捉えるための道具として、常に国語辞典や漢和辞典を座右に置き、手間を厭わず活用して欲しい。確かに法律学の世界に特有の専門用語の意味が正しく捉えられていないと、入門書とはいえ理解に齟齬を生じる場合もおき得るリスクは否定しないが、そうした点については、テキストの中にも解決の糸口が示されており、「読破通読」の余慶に与ることが可能である。

【履修上の注意】

なお最後に、私は、これまでの対面講義でも、法律学の学習に際し、常に現行法令集である『六法』を必携すべきとの指摘を繰り返してきた。これは本講義においても変更されるものではない。いかなる分野であれ法を対象とする学習においては、最新年度の『六法』をひも解き条文を参照する行動が必須である。その種類や選択を巡るヒントは、テキストに示されており、ここで屋上屋を架することはせず、上述の結論を述べるにとどめた。

【関連科目】

「法学（憲法を含む）」

【参考文献】

霞信彦『法学講義ノート（第5版）』慶應義塾大学出版会、2013年

【レポート作成上の注意点】

叙述の、遮二無二にテキストを読み切るという作業は、一度のみならず繰り返しおこなうことが重要であり、回を重ね、併せて他者の著作を参照するなどの労を積むなかで、次第に理解に深みが増すと思う。こうした後に、初めてレポート課題取り組みへの途が開けることとなる。最初から課題の内容のみに注目してテキストの必要箇所を限定して学習を進めるなど、冒頭に述べた本講義の主旨のいずれにも合致しない。のみならず、体系への視野をもたない断片的かつ生半可な知識は、却って「百害あって一利なし」と言わざるを得ない。また、「まずレポートありき」の典型的なものとして、テキストや参考文献の丸写し・換骨奪胎による提出物（敢えてレポートとは表記しない）が散見されるが、これまた通信教育学習に取り組む本意の「はき違え」甚だしきものと断言しておきたい。いうまでもないが、参考文献については、もれなく書名・著者・刊行年・出版社名をレポートの最後に明記することが求

められる。

【成績評価方法】

科目試験による。

史学概論

(L 027-7403、L 7470)〔2単位〕

【講義要綱】

歴史学は実証と構想との狭間で展開される総合の学である。史学概論はそのような総合の学としての歴史学の認識論的基礎や歴史観の歴史を学ぶ科目である。

【テキストの読み方】

本課題は理論的課題であるため、テキストならびに参考書を熟読し、何が問われているかをよく理解することがレポート作成の前提である。

【参考文献】

E. H. カー『歴史とは何か』岩波新書

A. Я. グレーヴィッチ『歴史学の革新—「アナール」学派との対話』平凡社、1990年

カルロ・ギンズブルク『歴史・レトリック・立証』みすず書房、2001年

新井・松村・本多・渡辺『「事実」をつかむ—歴史・報道・裁判の場から考える』こうち書房、1977年

【成績評価方法】

科目試験による。

歴史哲学

(L 014-6702、L 21、L 6756)〔2単位〕

【講義要綱】

西欧の哲学者たちは歴史をどのように考えてきたのか。歴史哲学の中心的テーマ「歴史における自由と必然の関係」を通して西欧の歴史哲学の基本的発想を学ぶ。

【履修上の注意】

「西洋哲学史Ⅱ—近世・現代—」をあわせて履修することが望ましい。

【参考文献】

ヘーゲル著、長谷川宏訳『歴史哲学講義』岩波文庫

ヘーゲル著、三浦和男訳『精神の現象学序論』（訳者まえがき）未知谷、1995年

エアハルト・ラング編『ヘーゲルとわれわれ』真下真一訳、大月書店、1971年

コンスタンチン・グリアン『ヘーゲルと危機の時代の哲学』御茶の水書房、1983年

【成績評価方法】

科目試験による。

日本史概説 I

(市販書採用科目) (L 091-9692)〔2単位〕

(第1回)

【テキスト】

五味文彦・本郷和人・中島圭一著『日本の中世』放送大学教育振興会、2007年

【講義要綱】

源平の合戦・南北朝の内乱・戦国の争乱などに象徴されるように、中世は日本全体が大きく変動した時代でした。しかし、決して徒に戦乱に明け暮れていただけではなく、政治・経済・社会・文化など様々な面で、現代に直結する要素が歴史の表面に浮かび上がってくる時代でもありました。ただテキストを読むだけでもなかなか面白いのではないかと思います。さらに別掲の参考書や専門書などで知識と理解を深めて下さい。

【参考文献】

地域の歴史にアプローチする出発点となるのは、『～県の地名』（平凡社）や『角川日本地名大辞典』です。さらに詳しく調べるには、各自治体で編纂した『～県史』『～市史』の類が有用でしょう。いずれも近隣の図書館で探してみてください。また、テキストの内容を深めるためには、講談社版『日本の歴史』第07～15巻や『日本の中世』全12巻（中央公論新社）を、最新の優れた通史として薦めます。

【レポート作成上の注意点】

周辺が中世には何という荘園（あるいは公領）だったのか、何という名前の武士（あるいは百姓・商人・職人など）がどのような活動をしていたのか等々、かなり具体的な地域史像を打ち出して下さい。そして同時に、単なる郷土史に終わってしまわないよう、当時の日本全体の情勢の中に、その地域の歴史を置いて論ずることが必要です。なお、海外在住者や北海道民など、現住所の中世を探るのが困難な場合は、何らかの形で自分とゆかりのある土地の中世史をレポートのテーマとして結構です。

(第2回)

【テキスト】

鳥海靖『日本の近代』放送大学教育振興会、1996年

【講義要綱】

幕末開国期以降、戦後の高度成長を経て現在に至るまでの日本近代における、それぞれの時期における特徴を、政治・経済・社会・文化など多様な視点から把握し、世界史全体の流

れの中に位置づけるよう努めてください。

【テキストの読み方】

テキストはいくつかのテーマに分けて執筆されているので、適宜参考文献で補いつつ、日本近代史全体の流れを把握するようにしてください。

【参考文献】

坂本多加雄『日本の近代』2、中央公論社、1999年
鈴木淳『日本の歴史』20、講談社、2002年
松尾正人編『日本の時代史』21、吉川弘文館、2004年

【レポート作成上の注意点】

テキストや参考文献の抜き書き、コピーをせずに、自分の言葉と文章とで表現するように努力してください。また、ウェブ・サイトの記事を利用する際には、根拠となる資料に当たるなど、十二分に注意し、出典が明らかでないものは利用を控えるようにしてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

日本史特殊Ⅰ—日本法制史— (L 092-0401)〔2単位〕

【講義要綱】

日本古代の律令国家は天皇を頂点とする中央集権的な国家機構のもとに、唐制を範とした律令諸制を採用していた。しかし、その実態は唐制と全く同じものではなく、そこには大化前代からの氏族制的な要素が残されている。日本の律令国家が律令制と氏族制の二元的な性格をもっているといわれるゆえんである。従って、律令国家の諸制度を理解するためには、大化前代の大和王権における諸制度についても理解する必要がある。

テキストでは大化前代から律令制へ、さらに平安時代までの法の変遷を辿っている。日本古代における国家の法や制度の成立過程を辿り、日中律令制を比較することで日本古代国家の特色を理解することが学習の目的である。

【テキストの読み方】

テキストは自主的な学習の発展に期待する意味で最小限の事柄だけを記しています。参考書と関連させて自分自身で内容の理解を深めて下さい。

【履修上の注意】

法制史に限らず日本古代史に関する概説書を読んでおいて下さい。

【参考文献】

浅古弘ほか編『日本法制史』青林書院、2010年

利光三津夫・長谷山彰『新裁判の歴史』成文堂、1997年
大日方純夫編『家族史の展望』（日本家族史論集2）吉川弘文館、2002年
梅村恵子『家族の古代史』吉川弘文館、2007年
吉川敏子『氏と家の古代史』塙書房、2013年
美江明子編『婚姻と家族・親族』（日本家族史論集8）吉川弘文館、2002年
吉田孝『古代国家の歩み』（小学館ライブラリー『大系日本の歴史』）小学館、1988年

【レポート作成上の注意点】

参考書の使用について：『塾生ガイド』（または『教職課程履修案内』）所収、「レポート作成上の注意」の中に記されているように、「利用した参考書については、必ずその書名および執筆者名を記し」、参考書からの引用文については「注1」等の記号を用い、レポート本文中に注記を付して自分の文章と区別して下さい。またテキストのほかに、参考書は最低2冊以上利用して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

日本史特殊Ⅱ —キリシタン史—

（市販書採用科目）（L 110-1191）〔2単位〕

【テキスト】

五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館、1990年

【講義要綱】

16世紀中葉に日本にキリスト教が伝えられてから17世紀中葉の「鎖国」によって南欧のキリスト教国との関係が途絶えるまでの約1世紀間は、「キリシタン時代」または「キリシタンの世紀」と呼ばれている。この科目では、この時代の歴史を対象とする。

【テキストの読み方】

テキストを読むにあたっては、キリシタン史の全体像を理解することと、いくつかの個別の問題に対する理解を深めることに留意してもらいたい。

【参考文献】

東京大学史料編纂所編纂『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』訳文編、東京大学史料編纂所、1990年～
松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第3期（全7冊）同朋社、1991～1998年
高瀬弘一郎『キリシタンの世紀—ザビエル渡日から「鎖国」まで—』岩波書店、1993年

高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』岩波書店、1977年

五野井隆史『日本キリシタン史の研究』吉川弘文館、2002年

パチェコ・ディエゴ（佐久間正訳）『長崎を開いた人—コスメ・デ・トーレスの生涯—』中央出版社、1969年

【レポート作成上の注意点】

レポート作成にあたっては、「史料」と「研究」を区別してもらいたい。

【成績評価方法】

科目試験による。

日本史特殊Ⅳ

（市販書採用科目）（L 111-1191）〔2単位〕

【テキスト】

浜野潔・井奥成彦・中村宗悦ほか『日本経済史 1600-2000』慶應義塾大学出版会、2009年

【講義要綱】

テキストには、江戸時代から現代に至るまでの日本経済の流れが記されているが、日本の江戸時代がどのような「近代」を準備し、日本の近代はいかなる歩みをして現代に至っているのかということに留意しながら読んでほしい。

【テキストの読み方】

まずテキストを理解すること。読んでいって、難しいと感じる部分もあるかもしれないが、その場合は、日本史や経済学の辞典類を参考にしながら、できるだけ問題を解決してほしい。おおよそ理解できたら、勉強の場を関連図書類（テキスト末尾の参考文献参照）に拡げ、理解を深めるとともに、関心を拡げてほしい。

【履修上の注意】

高等学校レベルの日本史の知識と、経済学の基礎的な概念や理論をある程度知っておいた上で履修することが望ましい。

【参考文献】

井奥成彦『19世紀日本の商品生産と流通』日本経済評論社、2006年

その他、テキストに掲載されている諸文献

【レポート作成上の注意点】

どこからどこまでが他人の説で、どこからどこまでが自分の説（考え）なのかがはっきりわかる書き方をすること。他人の説の引用については、必ず注を付けること。

【成績評価方法】

科目試験による。

古文書学

(L 052-4902、L 29)〔2単位〕

【講義要綱】

古文書学とは、日本史研究の材料となる古文書について考える学問であり、日本史を学ぶ上での基盤となるものです。日本史に関する卒業論文の執筆を予定している学生は、是非とも履修して下さい。本テキストは文体が古風なため、読んで理解するにはいささか努力が必要かもしれませんが、古文書学の体系を要領よくまとめた名著として知られているものであり、別に示した参考書も積極的に活用しながら、学習を進めて下さい。

【テキストの読み方】

まず第一～三章にひととおり目を通した上で、このテキストの学習の中心となる第四・五章に進みます。第四章は古文書を主に形態学的観点から分析したもので、限られた紙数に要点がまとめられています。第五項については、佐藤進一『花押を読む』（平凡社）をあわせ読むと理解しやすいでしょう。第九項の中の「特殊用語」は、指定参考書として掲げた佐藤進一『新版古文書学入門』等に豊富に掲載された古文書の実例に即して見ると、頭に入りやすいと思います。第五章については、やはり『新版古文書学入門』の記述が詳しいので、適宜参照しながら学習を進めて下さい。

【履修上の注意】

日本史に関する一般常識がなくては、十分な学習が望めません。「歴史（日本史）」を既に履修していることが望ましい。

【科目試験出題用指定参考書】

佐藤進一『新版古文書学入門』（法政大学出版社、2003年）

【参考文献】

古文書の種類については、佐藤進一『新版古文書学入門』（法政大学出版社、2003年）が詳しいので、是非とも参照して下さい。古文書を読む能力を養っていく上では、『演習古文書選』全8冊（吉川弘文館）などの古文書写真集や各種史料集が有用です。史料の読解に用いる国語辞典としては『日本国語大辞典』（小学館）、漢和辞典としては『大漢和辞典』（大修館書店）、日本史辞典としては『国史大辞典』（吉川弘文館）が優れているので、近隣の図書館等で利用して下さい。くずし字辞典としては『五体字類』（西東書房）、『くずし字用例辞典』『くずし字解説辞典』（東京堂出版）などがあります。

【レポート作成上の注意点】

古文書の実物は、各地の博物館に足を運んで探してみてください。東京・京都・奈良・九州

(福岡県太宰府市)の各国立博物館や国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)・国立公文書館(東京都千代田区)、あるいは都道府県立の歴史博物館には常設で展示してある可能性が高いほか、市町村の博物館や寺社付設の資料館・宝物館にも古文書を所蔵・展示しているところがあります。また、毎年秋には奈良国立博物館で正倉院展、京都府総合資料館で東寺百合文書展が開かれ、鎌倉の建長寺・円覚寺では文化の日前後の風入れ(虫干し)期間に所蔵文書が数日公開されており、そのほか古代・中世の歴史に関わる特別展があれば普通は何か出陳されています。

古文書の様式については、前掲の『新版古文書学入門』を必ず参照して下さい。内容については、博物館等の図録だけでなく、古代・中世の歴史に関する通史(最新のものとしては講談社版『日本の歴史』や中央公論新社『日本の中世』など)や専門書、あるいは関係する地域の自治体が編纂した『～県史』『～市史』の類を探して、詳しく調べて下さい。

レポート・試験ともに、学問の性格上、古文と漢文の読解力が要求されます。こまめに各種の辞典(国語・漢和・日本史・古文書など)を引くことで、そうした能力を身に付けて下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

東洋史概説 I

(L 031-7601、L 7679)〔2単位〕

【講義要綱】

近年、中国大陸では竹簡・木簡などをはじめとする「出土資料」が陸続と発見されており、現代の私たちがおよそ2000年前の世界を垣間見ることができるような状況になっています。しかも、1万枚を超える竹簡が発見されるなど、分量的に膨大なものもあり、また、内容的にも歴史・思想・医学・地理など多岐にわたっているため、これまで文献史料では知ることのできなかった内容が次々と明らかになっています。その意味で、現在、中国古代史を研究する上で、「出土資料」の存在は欠かせないものになりつつあると言えるでしょう。

このような古代史研究の現状をふまえ、文献史料を中心とした中国古代史の基礎的な知識を指定されたテキストで学習するとともに、参考文献などで出土資料に関する知識を身につけ、より多角的に中国史を捉える視点を養ってほしいと思います。

【参考文献】

富谷至『木簡・竹簡の語る中国古代—書記の文化史—』岩波書店、2003年
湯浅邦弘『諸子百家—儒家・墨家・道家・法家・兵家』中公新書、2009年
横田恭三『中国古代簡牘のすべて』二玄社、2012年

【レポート作成上の注意点】

参考文献や WEB ページなどを引用または参考にした場合は、その箇所に必ず注をつけて自分の意見とは区別すること。また、最後に注の一欄を作り、その出典および引用ページ数を明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

東洋史概説Ⅱ—中国史— (L 086-0301)〔2 単位〕

【講義要綱】

近代中国の医療は、諸外国との密接な関係の中で、内容・構造ともに大きく変化しました。その背景には、欧米および日本を経由した科学医学の知識とシステムの導入・感染症の世界規模の流行・複雑化する国際情勢下における国家の競合といった複数の動力が働いていました。こうした位相には、近代世界における中国社会の体制や国家の特徴が明瞭に表われています。以上のような多角的な視野を以て、医療の変容を中国の近代化の一過程として分析して下さい。

【テキストの読み方】

参考文献①を通読して中国史の概観を把握して下さい。そのうえで、参考文献の②～④などの概説書を読み、近代中国がどのような時代であったか、国際世界の動きと合せて理解し、⑤～⑦などの関連書で課題にそったテーマを掘り下げて下さい。その他の参考文献は、テキスト⑤～⑦を手掛かりにして自分で探して下さい。

【参考文献】

- ① 礪波護・岸本美緒・杉山正明編『中国歴史研究入門』名古屋大学出版会、2006年
- ② 吉澤誠一郎『清朝と近代世界—19世紀』（シリーズ中国近現代史①）岩波新書、2010年
- ③ 川島真『近代国家への模索—1894-1925』（シリーズ中国近現代史②）岩波新書、2010年
- ④ 石川禎浩『革命とナショナリズム—1925-1945』（シリーズ中国近現代史③）岩波新書、2010年
- ⑤ 見市雅俊・斎藤修・脇村孝平・飯島渉編『疾病・開発・帝国医療 アジアにおける病気と医療の歴史学』東京大学出版会、2001年
- ⑥ 飯島渉『感染症の中国史』中央公論社刊 中公新書、2009年
- ⑦ エズラ・ヴォーゲル・平野健一郎編『日中戦争の国際共同研究3 日中戦争期中国の社会と文化』慶應義塾大学出版会、2010年（第2部を中心に）

【レポート作成上の注意点】

参考文献を手掛かりに、出来るだけ多くの文献を読んだうえで、自分の言葉で見解をまと

めて下さい。一次・二次資料や WEB ページを参考にした場合は、必ず註をつけて、出典及び引用ページを示して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

東洋史特殊

(L 098-0601)〔2 単位〕

【講義要綱】

「東洋史特殊」のテキストは、トルコ系諸民族の歴史を通観しながら近現代における中央アジア、アゼルバイジャン、トルコにおける民族主義、ナショナリズムの発展について述べたものである。ソ連邦の崩壊によってユーラシアのアジア側の部分でさまざまなかたちで民族問題が噴出している。それらの歴史的な背景をトルコ系諸民族の文化を探りながら考えていこうというのが、このテキストの目的である。イスラーム世界に関心のある人たちは、本書を通じて広大な地域に分布するアラブ民族とは異なるトルコ民族の世界に関する理解が深まるものと思われる。

【履修上の注意】

総合教育科目の「歴史（東洋史）」を履修していることが望ましい。

【関連科目】

「ロシアの政治」

【参考文献】

東長靖『イスラームのとらえ方』〈世界史リブレット15〉山川出版社、1996年

【レポート作成上の注意点】

課題・参考文献の文章を引用または典拠として利用した場合には、必ずその文献名と頁数を註として明記してください。なお、註はレポートの最後にまとめて示すこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・西洋史概説 I

(L 119-1501)〔2 単位〕

【講義要綱】

この概説は、ローマ帝国後期から16世紀中頃までのヨーロッパ史を対象とします。ヨーロッパ中世は、私たちが思っている以上に、いくつもの面で現代社会に影響を与えています。公正金利、国民、サイエンス、そして皆さんが通っている大学などです。本科目が取り上げる

のは、後期ローマ帝国、その瓦解後の模索、帝国、教皇、周辺の国々、キリスト教の浸透、中世の生活、国民の出現、宗教改革、近代の芽生えなどです。

この主題についてさらに理解を深めるために、テキストの他に、堀越宏一ほか編著『15のテーマで学ぶ 中世ヨーロッパ史』（ミネルヴァ書房、2013年）および以下の参考文献も読んでください。

【履修上の注意】

総合教育科目「歴史（西洋史）」を履修していることが好ましい。

【関連科目】

「西洋史概説Ⅱ」「西洋史特殊Ⅲ」

【参考文献】

森田義之『メディチ家』（講談社現代新書、1999年）を必ず読んでください。またピエール・アントネッティ『フィレンツェ史』（文庫クセジュ、1986年）、ジーン・ブラッカー『ルネサンス都市フィレンツェ』（岩波書店、2011年）、若桑みどり『フィレンツェ』（講談社学術文庫、2012年）、池上英洋『ルネサンス 歴史と芸術の物語』（光文社新書、2012年）などが、北原敦（編）『イタリア史（新版 世界各国史）』（山川出版社、2008年）などのイタリア史の概説も有益です。

【レポート作成上の注意点】

レポート作成のために、必ず上記の参考文献も読んで下さい。

レポートは、単にテキストと参考文献の丸写しや抜き書きではありません。自分自身の言葉でレポート課題の問題に対応した答となるよう作成して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

西洋史概説Ⅱ

（L 062-8801、L 8885）〔2単位〕

【講義要綱】

この科目はおよそ16世紀から20世紀までの西洋史概説を扱います。小さな事実にとらわれず、大づかみに歴史上の大きな課題や事件を、他との関連の中でとらえることを学習の目的とします。したがって、その課題や事件の特色や性格をとらえ、後代の歴史への影響や意義を考えることが肝要になります。

【テキストの読み方】

テキストに書かれている事実を表面的になぞって暗記するのではなく、テキストを理解のためのガイドブックとして使いながら、参考文献を読むようにしてください。テキストに簡

略にまとめられている概念や事件の意味は、複数の文献を読むことを通してはじめて理解できると思います。

【履修上の注意】

総合教育科目「歴史（西洋史）」を履修していることが望ましい。

【参考文献】

福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史』岩波書店、2005年

柴田三千雄ほか編 世界歴史大系『フランス史 2、3』山川出版社、1996、95年

村岡健次ほか編 世界歴史大系『イギリス史 2、3』山川出版社、1990、91年

成瀬治ほか編 世界歴史大系『ドイツ史 2、3』山川出版社1996、97年

*以下は今年度レポート課題用参考文献

木谷勤『帝国主義と世界の一体化』山川出版社：世界史リブレット40、1997年

エリック・ホブズボーム『帝国の時代 1875-1914（Ⅰ）』みすず書房、1993年

エリック・ホブズボーム『帝国の時代 1875-1914（Ⅱ）』みすず書房、1998年

アンドリュー・ポーター『帝国主義（ヨーロッパ史入門）』岩波書店、2006年

【レポート作成上の注意点】

テキスト、参考文献から必要な知識を学び（＝理解し）、それを課題に応じて整理して、自分の言葉でまとめてください。その際、レポートの記述内容が、どの参考文献のどの部分によっているのか、きちんと注を付けて示してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

西洋史特殊Ⅰ —古代オリエント史—

(L 022-7203)〔2単位〕

【講義要綱】

現在アルファベットは、英語などのヨーロッパ諸語を通して一般化されており、言語表記の基本となっている。しかし元来は、古代西アジア世界で発達したものであり、アラビア語やヘブル語もアルファベット文字で記される。

古代西アジアで発達したアルファベット文字には、大きく二種類がある。その一つは原カナン文字と呼ばれるもので、メソポタミアの楔形文字アッカド語をもとに造られたものである。楔形文字は、元来具体的なものを表す絵文字（表意文字）として生まれたが、次第に音価のみを表す文字（表音文字）として用いられる場合も出てきた。シリア沿岸部のウガリトでは、紀元前14世紀頃、この表音文字だけを用いて、言語体系の異なる自分たちの言語を表すようになった。ちょうど漢字から五十音を生み出した万葉仮名のようなものである。こう

して生まれたのがウガリト語であり、その文字を原カナ文字と呼ぶ。ウガリトでは、神話や儀礼など多種多様な粘土板文書が見つかっており、この言語が独自の発展を遂げていたことを示している。

この背景には、アッシリア、バビロニアというメソポタミアの大国が領域国家として広大な範囲を支配し、周辺諸民族と交易などを通して頻繁に接触したことが大きな意味を持っている。アッカド語は当時のリンガ・フランカとなっていた。しかも、さらに遡ると、アッカド語自体が、それに先行するシュメル語を借用しているのだから、こうした異なる言語相互の影響はさらに古いものだったと言えるであろう。

古代西アジアで発達したもうひとつのアルファベットは、原シナイ文字と呼ばれ、これが後のヨーロッパ言語のアルファベットの直接の祖先となった。エジプト語も、元来は象形文字から始まった表意文字であるが、そのうちいくつかの文字は表音文字として用いられた。エジプトに滞在していたレヴァント地方の人々はこれを借用し、まったく異なる言語体系(セム語)をもつ自分たちの言語を表すようになったのである。

レヴァント地方の人々は、先王国時代からエジプトと関係を持っており、特にヒュクソス時代には、デルタ地帯を支配するようになった。新王国時代になると、ヒュクソスは追放されたが、エジプト国内にもかなりの数のセム系の人々が奴隷などとして残ったようである。この言語の例としては、特にシナイ半島のトルコ石鉱山で働いていたセム系の奴隷が残したものがよく知られている。これはヘブル語、フェニキア語などの先駆となり、旧約聖書もこうした言語で書かれるようになった。

紀元前1千年紀になり、レヴァント地方のフェニキア都市の人々が地中海貿易を展開するようになると、彼らの言語も広がっていった。商取引などの接触の中で、ギリシア人はフェニキア人の文字を学び、ギリシア語をその文字で書くようになった。これが、ヨーロッパ諸語がアルファベットで表されるようになったきっかけである。原シナイ文字や古いヘブル語のアルファベットとギリシア語のアルファベットを比べてみると随分違うように見えるかもしれないが、90度回転させると、それらの形が関係していることがわかるであろう。また、アルファベットの順序もほぼ同じである。

こうして考えると、アルファベットの発達は単に特定の言語やその表記法の発達を意味するだけでなく、その背景に西アジア世界の広域にわたる人々の接触や移動があることがわかる。今回は、ぜひそうした側面にも目を向けてレポートを作成してほしい。

【関連科目】

「オリエント考古学」

【参考文献】

ヨセフ・ナヴェー 『初期アルファベットの歴史』 法政大学出版会、2000年

小川英雄 『発掘された古代オリエント』 リトン、2011年

【レポート作成上の注意点】

1. 参考文献もかならず活用すること。
2. 論理の流れと段落を意識して書くこと。
3. 議論、意見の根拠を明確に示すこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

西洋史特殊Ⅲ

—近代イギリス国家の成立(中世から近世へ)—

(L 044-7804)〔2単位〕

【講義要綱】

本科目のテキストでは、イギリスが近代化しデモクラシーへと発展する基礎が築かれる過程が中心に論じられている。特に、他のヨーロッパ諸国と違う独自の型の近代化を推進する基礎条件が、中世にいかに醸成されたかを書いたつもりである。イギリスでは、全体主義的王権や官僚組織の肥大化と硬直化といった弊害が比較的少ないのが特色だった。

イギリス史の特徴的発展の原因の一つとして、中世に一種の自主自営の「民」、即ち、ナイト、ジェントリー、スクワイヤー階層(いわゆる「独立自尊の民」の原型)が生まれ発展したことが指摘されている。また、他国と比較して、都市と農村部の有力者層の利害の調和と融合が進行したことも注目に値する。改訂版では、この点をやや具体的に述べた。

もう一つ重要な点は、イギリス中世社会においては、貨幣経済の浸透と社会全体の商業化が早くから顕著なことである。この傾向はすでに12世紀に萌芽的な形で見られ、13世紀に中間層を中心として封建的身分が主として貨幣収益を基準に再編成されていった(たとえば「騎士強制」)。後には、さらに上級階層の分化も貨幣収益を軸に進められた。封建制度の中核的義務である。ナイト勤務も12世紀末以来、軍役代納金制度の導入により、金納化が進んだ。イギリスは保守的でありながら社会の進歩に遅れることがなかった。これは、中世以来、社会の中産層以上が、時代の進展に耐えるか主導する人々によって占められていたからである。彼ら、社会を主導する層が政治権力に寄生する度合いが比較的 low、自己の力に依存する度合いが強かったのである。

しかし、このような特色のために、逆にイギリス社会の中に激しい生存競争を生むことになった。ある意味では、これは、安定的成長の代償かも知れない。ここに歴史の真の過酷さがある。これを何らかの方法で緩和するために、社会福祉制度や弱者救済の思想が必要となり、教会の慈善の役割が大きな意味を持つことになるのである。

さらに、イギリスの国制は早い時代から社会の進展に敏感に順応した。法や制度の柔軟性は、軍務の金納化や他の封建的付帯義務の金納化にも見られる。この現象はマグナ・カルタにも顕著である。マグナ・カルタには、封建的付帯義務の規定が多いが、その時点で封建的

負担はすでに貨幣負担化の傾向が見られた。また、特に、ヨーロッパの中世王制には租税制度の欠陥が一般にみられるが、イギリスではその欠陥は13世紀の混乱を経て解決され、近代的租税制度への基礎が確立された。「国家による経済的要求は「民」の合意を要する」という原則が確立され、また国王も自由保有地にはみだりに立ち入れないという形で私有財産の権利が保障された。その結果、国王は、「民」の合意なしには国政の基礎である十分な収入を確保できなくなったのである。そのため、王権の強大化が抑止されることになり、また、「民」の合意を得るには国王は「民」の意に適う国政の改革を行わねばならないため、制度の進歩・発達が保証され、制度の硬直化が阻止されたのである。立法における「民」の請願の重要性、無能あるいは腐敗役人の弾劾など裁判や行政における中間層の役割などを保証したのは、議会の財政特権だった(中世末の議会制度の発達の項参照)。この発展の過程では、多くの混乱、時には犠牲者が見られたが、何度か革命の事態は回避された。

イギリス史はヨーロッパ全体の中で理解されねばならない。多くの外国勢力がイギリスに流入し、また多数のイギリス人が海外で活躍した。この外との交流と摩擦から多くの影響を受け、イギリスは文化的経済的にも豊かとなった。近年この側面の研究に多くの関心が払われているが、本テキストでは、紙数の制限や現在のわが国の研究状況のために説明が十分ではない。

また、記述が12・13世紀に詳しくそれ以外の時代がやや簡略であるが、それは著者の研究関心と同時に本国の研究状況にもよるものである。ただ、本テキストは、現在、イギリス中世国制史に関して邦文で最も詳細なものである。昨今新聞紙上を賑わすこともある租税徴収と国民経済との関連、官僚の恣意的な自由裁量の抑制、法の近代化の問題などを考える上で、日本とイギリスを比較することは、興味深く思われるかもしれない。たしかに、このような方法は、研究の視角を決め問題を選択する時には有益であろう。しかし、このような「比較研究」は、現実には方法論的にきわめて難しいものであり、安易に行なうと単に読み物に終わる擬似的比較史に墮する可能性が高く、危険である。一にも二にも安易な比較を避け、対象とする国の史実をよく調べ、それをその時代の全状況の中に置いて考えることが重要である。歴史研究では、細かい問題を、あくまでもそれが置かれた広い状況の観点から考察するのが重要なのである。

【履修上の注意】

特に指定した科目の履修を終わっている必要はありませんが、まずイギリス中世史の基礎的な知識を身につけるためにエドモンド・キング『中世のイギリス』(慶應義塾大学出版会)を読んでください。そして、さらに西ヨーロッパ封建社会の全体像を理解するために、マルク・ブロック『封建社会』(岩波書店とみすず書房の二つの版がある)を読んでください。その際、西ヨーロッパで使われている「封建制度」の概念を学んでください。また、城戸毅『マグナ・カルタの世紀』(東京大学出版会)とデイヴィス『マグナ・カルタ』(ミュージアム図書)は、本テキストで扱う時代の本質的問題を理解するのに有益です。

【レポート作成上の注意点】

まずテキストを通読し、中世イングランド史の流れ、問題点をより大きな観点から理解してください。そして、個別のレポート課題をこの大きな流れの中に位置づけて考察してください。レポートを作成する際、それが課題の問いに対する直接の答えとなるように注意してください。また、それがテキストの抜き書き、丸写しにならないよう、自分自身の考えに基づき、自分自身の言葉で書いてください。これは、科目試験の際にも当てはまります。

【成績評価方法】

科目試験による。

オリент考古学

(市販書採用科目) (L 104-0991) [2単位]

【指定テキスト】

杉本智俊『図説 聖書考古学 旧約篇』河出書房新社、2008年

【講義要綱】

文明 Civilization という言葉は、「都市の」civil という語が含まれていることからわかるように、「都市化」することが文明だとする近代思想の暗黙の前提を反映している。それは、まさに「市民」革命によってもたらされたものだからである。

「都市」の定義の仕方は種々提唱されているが、考古学的にはさまざまな人々を含む「複合社会」を都市と呼ぶことが多い。定住集落の規模が拡大するにつれて、世俗的権力者（王）が生まれ、自分で食糧を生産しない支配者階層と被支配者階層の格差が明確化されるようになった。専門的な技術者も生まれてきた。そのような支配体制を維持するために、文字による財産の管理が行われ、法律が制定されるようになる。元来親族意識のない「よそ者」も多数共生するようになるので、社会は流動化し、都市同士、その支配者同士が権力の拡大に向けた戦争を行うようになった。

歴史的には、人間の生活のありかたは、必ずしも都市に限られていない。人類は、定住をしない生活形態、親族意識を持つ人々たちだけから成り立つ小集落、宗教的指導者を抱きながらも基本的に平等であった「首長制」社会などを経験してきた。しかし、人々が都市を形成するになると、社会の様相は一変し、その後の領域国家や帝国、現在のように世界中がひとつの大きなシステムに巻き込まれるような時代を生み出すきっかけとなった。ゴードン・チャイルドという考古学者は、この変化を「都市革命」と名づけ、「新石器革命」と並ぶ人類史の大きな変化だと捉えている。

このような都市は、メソポタミア南部のシュメル人の地域ではじめて形成されたとされる。考古学的に、都市は大きく都市計画性、行政機構、祭儀施設の3つの要素を持つものと考えられることが多い。祭儀施設（神殿など）は、都市が生まれる前から存在することも多かつ

たので、都市に限定されるものではない。しかし、都市計画性は、権力者がその考えに従って指導力と財力を用い、被支配者層を動員して形成するものである。道路網や水路の整備などがその証左であるが、なにより典型的なのは市壁、市門、濠などの防御施設の建設である。実際、都市であるかどうかの基準は、その規模よりも市壁の有無で判断されることが多い。ただ、市壁を建設しなければならないということは、戦争が現実的な脅威として存在するようになったことも意味している。行政機構は、神殿以外に世俗権力者の住居（王宮）や財産管理のためのさまざまな公共建造物が建設されるようになったことに見ることができる。それまでの社会が、ほぼ均一な大きさの住居だけからなりたっていたのと大きな違いである。また、支配者の住居や墓からは、その権威を示すような宝物（威信財）なども認められるようになる。

集落が都市化することにより、人口や経済の規模は拡大し、技術的な発展が起こる便利な社会、刺激的な社会になったとすることができるが、同時に社会の格差は固定化され、戦争の危機は表面化していくこととなる。都市革命の功罪を考えることは、まさに現代社会のありようを考える上で大切な視点を提供してくれる。

今回のレポートでは、最初に都市革命を経験したシュメルの都市に関して、考古学的な証拠からどのように都市化のプロセスを跡づけることができるのか、それは社会にどのような変化をもたらしたかという点を中心に記してもらいたい。

【関連科目】

「西洋史特殊Ⅰ—古代オリент史—」

【参考文献】

小泉龍人『都市誕生の考古学』同成社、2001年
 前田徹『都市国家の誕生』（世界史ブックレット）山川出版社、1996年
 小川英雄『発掘された古代オリент』リトン、2011年

【レポート作成上の注意点】

1. 参考文献もかならず活用すること。
2. 論理の流れと段落を意識して書くこと。
3. 議論、意見の根拠を明確に示すこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

考古学

（市販書採用科目）（L 093-8891）〔2単位〕

【テキスト】

鈴木公雄『考古学入門』東京大学出版会、1988年

【講義要綱】

考古学は、人類活動により残された様々な物的証拠の分析を通じて、過去の人々の生活のあり方やその変化について考える学問です。この科目の使用テキストは、考古学の全体的な枠組みを、具体的な事例を紹介しながら、平易に解説したものです。このテキストを熟読することにより、基本的な考古学の研究法・調査方法、考古学という学問の成り立ちや、関連諸学問との関係、現代社会との関わりまでを体系的に理解することができます。

ただし、このテキストは考古学の学問としての体系を解説した「概論」ですので、具体的な事例紹介にも限界があります。参考文献に挙げた図書は、テキストの著者が、これまでの自身の研究をわかりやすくまとめたものです。考古学という学問を、豊富な具体的な事例を通して理解することができるだけでなく、テキストの理解にも役立つと考えますので、併せて読むことをお勧めします。

【テキストの読み方】

まずはテキストを何度も読むことが大切です。その際、項目ごと、節ごとに、どんな内容が書かれているのかを自分の文章でまとめ、そしてそれらの間にどのような関係性があるのかを考えてみるのも有効でしょう。最初は理解できないことや誤読があるかもしれませんが、参考文献に挙げた図書を含め様々な本を読んだり、博物館などで実際の考古資料などを見たりするうちに、次第に理解が深まると思います。

【履修上の注意】

特別な注意点はありますが、強いて言えば日ごろから考古学に対する関心を強くもつことが重要です。そうすることにより考古学をめぐる報道や、考古学関連のさまざまな図書に自然と目が向くようになり、積極的に博物館・資料館、遺跡や発掘現場の見学に出かけられるようになれば、よりいいでしょう。

【関連科目】

「オリエント考古学」「西洋史特殊Ⅰ」

【参考文献】

鈴木公雄『考古学とはどんな学問か』東京大学出版会、2005年

ほかにも、考古学をめぐる様々な文献に目を通すことをお勧めします。ただし、自分が初心者だと思える方は、考古学の方法論を扱ったものよりも、具体的な研究成果を盛り込んだ概説的な本や、写真や図版を多用したものを読み、まずは考古学に対する関心を高めるのがいいでしょう。

【レポート作成上の注意点】

テキストのある科目ですので、まずはテキストや参考書を何度も読み込んで、内容を理解することが大切です。テキストの理解が足りないと判断されるレポートは、まず合格点になりません。

また、課題で何を求めているのかをじっくり考え、盛り込むべき内容をしっかり整理してからレポートを書き始めるようにして欲しいと思います。

なお、レポートは、テキストや他の文献を読んだり、実物の資料を見て理解したことを、自分の文章で表現するものです。テキストの内容の要約ではありませんので注意して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

地理学Ⅰ (L)

(L 103-0901)〔2単位〕

【講義要綱】

地理学Ⅰは、経済地理における急速な変動である「トランスナショナル化」を中心テーマとして取り上げた科目として構成されている。「トランスナショナル化」とは、一般的な「グローバル化」と重なる現象であるが、地球規模、地域経済統合、国、地域、都市、と様々な空間的レベルにおいて、様相を変えながら立ち現われている。この実態については、歴史的な時間軸と地理的な空間軸の両方からとらえることが重要である。

この科目で行う学習としては、毎日、必ず新聞を読み、内外の動きを自分の頭で考える習慣を身につけることを目指して行うことを期待している。

【参考文献】

教科書の各章の章末に掲げられているものを中心に選んでいくようにすること。

【レポート作成上の注意点】

理論的な点についての理解度を示す記述を期待するとともに、その内容を事例についても分析を行うように課題を設定している。このことに注意して作成していただきたい。

【成績評価方法】

科目試験による。

地理学Ⅱ (地誌学) (L)

(L 108-1001)〔2単位〕

【講義要綱】

地誌学の特徴は、唯単に、どの国やどの地域には何が存在するのかを調べ上げることだけではなく、それらの国々や地域において、これらの事物や事象が、時代とともに変化している有様や、他の国々や地域への影響や、他の国々や地域からの影響を調べ、何故そのような相互作用が起こるのかを考えることにある。

日常的にも、県民性や食文化ということについては話題になり、それぞれの人が、それぞ

れの考え方をもっているものであるが、今回のレポート作成にあたっては、非常に多数存在している関連する参考文献を利用し、これまで自分が抱いていたイメージを、客観的な事実やデータによって裏付けたり、新しい見方を獲得するように心懸けていただきたい。地誌学の面白さは、具体的事例を徹底的に調べ上げることから生まれる。

【参考文献】

郷土史、旅行ガイドブック、料理本など参考文献は限りなく存在するので、取捨選択が大切である。

【レポート作成上の注意点】

地誌学的知識と、いわゆる「常識」とは、どのように異なるのであろうか。単なる思いつきや固定観念（ステレオタイプなイメージ）だけで、この世界の中で生きて行くのは、つまらないことである。

地誌学の面白さは、様々な知見を、地域や場所という中で「総合化」することにある。レポートの作成にあたって、複数の異なる視点からの知見を「総合化」するように心懸けていただきたい。

【成績評価方法】

科目試験による。

人文地理学

(L 095-0501)〔2単位〕

【講義要綱】

歴史学や地理学は、学問自体の内的要請によって進化発展するものであるばかりではなく、時代の要請によっても変化するものである。今日の世界の基本動向を考える上で、「グローバル化現象」の理解は避けて通ることは不可能である。

『人文地理学』は、このような背景と時代要請の中で書き下ろされたものであるので、教科書全体を通して精読し、「グローバル化現象」の意味をしっかりと把握した上で取り組んでいただきたい。

【参考文献】

教科書の各章の章末に掲げられているものを中心に選んでいくようにすること。

【レポート作成上の注意点】

教科書の理解度を示す記述を期待するとともに、その内容を事例とともに説明すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

古代からの国語の変遷を通して、主に日本の古典文学の読解・鑑賞の質を高めること、および「ことば」に含まれる語義の多層性と汎用性をこまかに観察することにより、古典に見る日本人の心意の諸相を感知すると同時に、自身の言語の拠って立つところを洞察することを目的とする。

【参考文献】

〔方言に関して〕『講座方言学』『方言学概説』

〔方言辞典〕『標準語引き 日本方言辞典』『日本方言大辞典』『現代日本語方言大辞典』

〔言語地図〕『日本言語地図』『方言文法全国地図』

〔古語を多く収載する辞典〕『日本国語大辞典 第2版』『角川古語大辞典』『時代別国語大辞典 上代編』『同 室町時代編』『近世上方語辞典』『江戸語大辞典』『江戸時代語辞典』

【レポート作成上の注意点】

引用は必ず「 」でくくり、出典を明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

国語学が対象とするものは幅が広く奥行きも深い。国語の音韻・語彙・文法はもちろん、その背後にある歴史、民俗、文化、思想等さまざまなものを含むが、国語辞典・漢和辞典はそれらを包括し、規範となる説明を行なっているはずのものである。この各論では、現在・過去のいろいろな辞書・事典類を紹介した。但し冊子体のもののみを対象とし、電子辞書や玉石混淆のネット関係のものは除外してある。電子辞書の利便性はある程度認めるものの、紙媒体のものを電子化しただけのものや進化途上のものが多いからである。また、ネット上に氾濫している情報には、無責任で怪しげなものが多く、信頼に欠けるからである。

【テキストの読み方】

本テキストには数多くの注がつき、しかも詳細なものが多い。したがって注を読むことによって得られる知識その他は大きいと考える。また、第3章において、江戸時代の辞書・事典を取り上げているが、次々と出版された節用集や「増續大廣益會玉篇大全」、平安時代に成立し江戸時代によく参看された「倭(和)名類聚鈔(抄)」など、珍しいものではなく、普通に行なわれたものを紹介している。そして巻末の参考文献解題はただ単なる書名の羅列

ではなく、参照する際に役立つようにその章立て・内容等を記し、ときに批判も加えてある。書名や編集者名を覚えるだけでなく、注や参考文献を活用し、実際に当該文献を読んで行ってほしい。

【レポート作成上の注意点】

辞書・事典は、自分で読み、自分で引くもので、他人に引いてもらうものではない。したがって、参考文献やネット検索で得た知識をそのまま写すことは厳禁。利用してみたの実体験に基づいた報告を期待する。

【成績評価方法】

科目試験による。

国文学

(L 038-7701、L 7701)〔4単位〕

【講義要綱】

日本の古来から伝わってきた古典文学のすぐれた価値を知ること。古代の歌や物語、またそのなかに綴られる美しいことばや奥行きのあることばに注意を向ける。そのようにしながら、わたしたち日本人の古くから持ち伝えてきた伝統精神の豊かさや、生活習慣の多様さを知り、生きてゆくことのみざまな問題のはじまりと経過を尋ねてゆく。

【参考文献】

折口信夫全集第一巻国文学篇 および 同四巻（新全集）「日本文学の発生序説」中央公論社

池田彌三郎『万葉びとの一生』講談社現代新書、1978年

池田彌三郎『日本文学の素材』日本放送出版協会、1988年

藤原茂樹編著『催馬楽研究』笠間書院、2011年

藤原茂樹・坂本信幸『万葉から万葉へ』NHK 出版、2008年

藤原茂樹『万葉集の歩き方』NHK 出版、2013年

【レポート作成上の注意点】

レポート作成に際して、次の諸点に注意すること。

- 参考とした研究書名・論文名・著者名・刊行年月を明記する。（提示した参考文献以外のものでも可）
- 古事記・万葉集・日本書紀・続日本紀・源氏物語・歌謡などの古典文学のテキストは、新編日本古典文学全集（小学館）、日本古典文学大系・新日本古典文学大系（岩波書店）のシリーズを用いるのが好ましい。
- レポートに歌、記事等を引用する際には、参考書からの孫引きを避け、これらテキストから直接に自身で引用する。

- 参考文献にあげた書およびテキスト『国文学』序論や第二部日本文学の戸籍「万葉集の解題」などを参照すること。また藤原近著（NHK出版）は、万葉の普遍的価値について解説しているので二〇一四年度課題と関連性が深い。課題の意図を知る参考になる。
- 万葉の歌は、読み下し文で掲載（必要な場合のみ原文表記を採用）する。

【成績評価方法】

科目試験による。

国文学史

（L 008-5902、L 51）〔3単位〕

【講義要綱】

日本文学のながれを理解する科目。テキストは、現在の見地ではやや古風だが、基本をおだやかに網羅している。したがって、理解の補足のためには、参考文献としてしめたものが必要にもなる。しかし、それよりも第一に、テキストに引用されている様々の古典作品（とくに一節をあてられている作品・作者）の具体にふれることが大事だ（『新 日本古典文学大系』（岩波書店）、『新編日本古典文学全集』（小学館）、『新潮日本古典集成』（新潮社）等の古典校注・訳注叢書をもちいればよい）。むろん、たとえば『源氏物語』や『平家物語』の全篇、西行や西鶴の全作品等をよみとおすことは無理だが、部分もしくは数篇を実際によんで、それと文学史的記述とをもう一度自分で引照する必要がある。科目試験・レポートのために役だつだけでなく、自分たちの文化の理解にもつながる。

【参考文献】

- 『日本文学全史』学燈社
『日本文学新史』至文堂
小西甚一『日本文藝史』講談社（絶版）
加藤周一『日本文学史序説』筑摩書房
『岩波講座・日本文学史』岩波書店
『藝文研究「文献案内」』の「国文学」、慶應義塾大学藝文学会

【レポート作成上の注意点】

設問からもわかるはずだが、テキストの要約や他の文学史概説のぬきとりではレポートとならぬことに留意すべし。具体的に、ということは自分で作品をよんだ上で、実感に即しつつ、しかも論理をたててまとめる必要がある。

テキストとして読んだもの、参考とした研究文献を、著者・書名・刊行元・刊年の形で明示すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

近代日本文学は知識人男性によって担われることが圧倒的に多く、描く主体としての男性と描かれる客体としての女性という非対称的な構造が一般化していた。そうした中において、樋口一葉・与謝野晶子・田村俊子・野上弥生子・岡本かの子・宮本百合子などの女性作家たちの多くは、女性であることに自覚的な形で文学活動を鮮明に示しており、文学作品を通じて近代社会において女性であることのもつ意味がさまざまな形で問い返されている。

この点に着目することで、近代日本文学およびその背景としての近代社会の精神風土とその問題を本質的な視座から検証することが可能であると思われる。

【テキストの読み方】

テキストには自然主義に至るまでの近代文学の基本的事項が記述されているが、これらは文学史的な観点に立つ概論であり、個々の作家や作品の時代を超えた相互の関わりへの視野をもつものではない。

本課題は、むしろ、テキストの限定された範囲を補う意味をもつものであり、課題に即して近代文学作品に対する視野を広げることが望まれる。

【参考文献】

- 小平麻衣子『女が女を演じる—文学・欲望・消費』新曜社、2008年
新フェミニズム批評の会編『明治女性文学論』翰林書房、2007年
平田由美『女性表現の明治史—樋口一葉以前』岩波書店、1999年
『女性作家評伝シリーズ』新典社、1998～2003年
関礼子『語る女たちの時代—一葉と明治女性表現』新曜社、1997年

【レポート作成上の注意点】

ある女性作家をとりあげてその業績を要約・解説するだけでなく、その作品や活動が「女性」であることとどのように関わり、それがどのような意味をもっているかを、自分自身の観点から具体的に論述することが求められる。そのような視点からとらえ返すことで、男性作家を中心として発展してきた近代文学が抱える問題の本質を掘り下げることが可能になるはずである。ある共通のテーマで複数の女性作家をとらえることや、作家同士を比較することなども有効な方法である。

また、先行文献に頼るのではなく、あくまで自分自身の観点から分析・論述することが求められる。

【成績評価方法】

科目試験による。

国文学古典研究Ⅰ
— 御伽草子の世界 —

(L 088-0401) [1 単位]

【講義要綱】

御伽草子は、室町時代から江戸時代前期にかけて制作された短編の物語群の総称である。現在、約四百編の作品が存在している。この御伽草子の各作品について、テーマ毎に分類し、その特徴を学習する。

【参考文献】

日本古典文学大系・新日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集・新編日本古典文学全集（小学館）、新潮日本古典集成（新潮社）のうち、御伽草子・室町物語関係書。

【成績評価方法】

科目試験による。

国文学古典研究Ⅱ — 1
— 近世前期小説の展開 —

(L 013-6501、L 52 b、L 6507 a) [1 単位]

【講義要綱】

日本の近代文芸にも大きな影響を与えた江戸時代の文芸のうち、仮名草子、西鶴を中心とする浮世草子、それに談義本の流れを辿るもので、それらのジャンルの様々な作品を読む際の基礎知識を得る。

【参考文献】

日本古典文学大系・新日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集・新編日本古典文学全集（小学館）、新潮日本古典集成（新潮社）のうち、仮名草子、浮世草子関係書。

【成績評価方法】

科目試験による。

国文学古典研究Ⅱ — 2
— 近世後期小説の展開 —

(L 016-6901、L 6907 b) [1 単位]

【講義要綱】

洒落本・人情本・滑稽本それに読本といった近世後期小説の展開を学び、黄表紙や合巻等の草双紙を含め、様々なジャンルの色々な作品を実際に読んで行く。

【参考文献】

日本古典文学大系・新日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集・新編日本古典文学全集（小学館）、新潮日本古典集成（新潮社）のうち、江戸後期小説関係書。

【成績評価方法】

科目試験による。

国文学古典研究Ⅲ —古代和歌概説—

（L 041-7702、L 7733）〔1単位〕

【講義要綱】

和歌は長い年代にわたって、日本文学の最も表立ったものとして、上下に重んぜられてきた。日本文学理解のためには、どのような領域を目標として置くにせよ、和歌史についての知識を基本として欠くわけにゆかない。本テキストは和歌の発生からそれが文学としての地歩を占めるに至る、和歌史の最初の部分を概説したものであるが、特に文学が文学以前の目的から文学としての自覚を生じてくる過程に学習の重点を置いてほしい。

【参考文献】

『折口信夫全集』（旧版1・2・9巻、新版1・2・6巻）中央公論新社

『池田彌三郎著作集』1・4・5・6巻 角川書店（絶版※古書店に今なお多く流通している）

西村亨『新考 王朝恋詞の研究』桜楓社、1981年

西村亨『伏流する古代』大修館書店、2008年

西村亨『歌と民俗学』岩崎美術社、1966年

藤原茂樹・坂本信幸『万葉から万葉へ』NHK 出版、2008年

藤原茂樹『万葉集の歩き方』NHK 出版、2013年

その他独自に調査すること。

【レポート作成上の注意点】

レポートは、テキストを精読するのは勿論であるが、テキストの学習だけにとどまらず、参考とすべき書物・論文等をよく探し、なるべく数多く読んで、その成果を示すこと。本科目は特に折口信夫の文学発生説を基盤としているため、参考文献として挙げられたものなど、十分に学習することが望まれる。

なお、レポートは参考文献の文章を丸写しにするのではなく、自己のことは文章に移して書くように留意してほしい。参考論文は、論述上必要な場合は、「」に引用をする。（著者名・書名・論文名・掲載書名もしくは雑誌名・巻数・刊行年など明記のこと。）

【成績評価方法】

科目試験による。

国文学古典研究Ⅳ —平安和歌研究—

(L 074-9401、L 9409)〔1単位〕

【講義要綱】

本科目は、古典文学の中でも中心的位置を占める和歌という文学がどのようなものであるかを実際に作品に接して理解を深め、その基本的な知識を身につけるために設けられています。

【テキストの読み方】

八代集の各集の特質を理解して下さい。

【履修上の注意】

参考文献を写すだけでは、評価されません。それをもとに自身の考えをめぐらすよう努めて下さい。

【参考文献】

平安時代の勅撰集・主な私家集の注釈書は、和泉古典叢書（和泉書院）、新日本古典文学大系（岩波書店）、和歌文学大系（明治書院）などから刊行されています。

【レポート作成上の注意点】

平安時代の歌人とその作品をじっくり読んで、題材や表現の変遷に注意を向けて下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・国語国文学古典研究Ⅴ —中世和歌研究—

(L 120-1591)〔2単位〕

【テキスト】

小川剛生『武士はなぜ歌を詠むか—鎌倉将軍から戦国大名まで—』角川学芸出版、2008年

【講義要綱】

鎌倉時代から戦国時代にいたる中世和歌史を扱います。中世和歌の特色はいくつかありますが、新たな統治者となった武士が和歌を好んだことは見逃せません。作歌層が拡大し、地方にも歌壇が形成されており、中世文化の基盤となっています。作品は歴大に残存し、一見すると個性に乏しいものの、きちんと読めばその歌人の特色のみならず、文学史上・思想史

上のさまざまな問題を照らし出します。テキストは有名歌人を取り上げてその業績と歌風を述べました。まずは各時代の雰囲気を理解した上で、参考文献一覧を活用し、歌集や詠草を紐解いて作品を読み進め、中世和歌の奥深い世界に触れて下さい。

【テキストの読み方】

比較的マイナーな人名が多く出て来ますので、文学史・日本史の辞典を参照するとよいと思います。

【履修上の注意】

文学史はもちろんですが、中世の日本史についても一通りの理解をしておいて下さい。

【参考文献】

作品の本文としては新編国歌大観・私家集大成に収録されています。注釈書がある歌集は少ないですが、いくつかは岩波書店の新日本古典文学、明治書院の和歌文学大系などに収められています。

【レポート作成上の注意点】

参考文献や辞典の記述を丸写ししたものはレポートとして評価できません。必ず作品に触れて下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

書道

(L 040-7701、L 9112)〔2単位〕

【講義要綱】

書道の歴史は殷代の甲骨文に始まり周代の金文、秦の小篆、漢代の隷書、三国から六朝時代にかけては草書・行書・楷書が成立し発展していった。そして唐代には楷書が書法上の完成をみた。中国の書の歴史はこの様に流行した時代の書体を念頭に置いて理解されたい。

日本の書は中国や朝鮮との交流の中で育まれてきた。しかし日本の政治文化が独立したことで書も平安時代中期以降は和様の書が盛んとなった。この様な時代の流れをふまえて名跡をみていくことが重要である。

この科目は書道史とともに実技の課題が課せられているので、提出にあたっては十分な練習をすること。

【参考文献】

書道史の参考書

『中国書道文化辞典』西林昭一著 柳原出版

『日本書道辞典』小松茂美編 二玄社

『中国書道史事典』普及版 比田井南谷著 天来書院

『書林』書の精神と書学 星野聖山著 匠出版

『中国書道史年表』二玄社

『日本書道史年表』二玄社

実技用手本

『中国法書選』全60冊 二玄社

『日本名筆選』全40冊 二玄社

※分冊可、必要な手本を1冊単位で入手できる。

【レポート作成上の注意点】

作品提出の際、漢字作品は半紙に4文字を2行で、かな作品は口絵写真のとおり配置構成し、いずれも半紙の左側に名前も毛筆にて書くこと。十分な練習を積み提出して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

中国文学史

(L 057-8502)〔2単位〕

文

【講義要綱】

この科目は中国文学の全体像を通史的に学び、その歴史的展開の諸相と特質を理解することを目的とする。文学や文化が、政治・経済・社会との関わりの中なかで成立している点に留意しつつ、時代・分野・受容層等の観点から多角的に考察する。

【テキストの読み方】

学習者はまずテキストを精読することによって、中国文学史について概括的な知識を得ること。その上で各自の関心に従って問題を設定し、その解明のために作品や先行研究を広く読んで欲しい。

【履修上の注意】

「漢文学Ⅰ」「漢文学Ⅱ」「漢文学Ⅲ」を履修する場合は、その前に当科目を履修することが望ましい。

【関連科目】

「漢文学Ⅰ」「漢文学Ⅱ」「漢文学Ⅲ」

【参考文献】

九州大学中国文学会編『わかりやすくおもしろい中国文学講義』中国書店、2002年
奥野信太郎著・村松映編『中国文学十二話』NHK ブックス、1968年

【レポート作成上の注意点】

参考文献、とくに原文や先行研究を引用する箇所については、出典を明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

漢文学Ⅰ

(L 075-9601)〔2単位〕

【講義要綱】

当科目は中国文学の概説および作品選読である。「漢文学」という名称の通り、対象は中国の古典文学に限定し、近現代のものは含まない。中国で伝統的に「文学」と言う場合、言語によって表現される文芸・学問全般を指す。当科目では、その中の詩文・思想・歴史の三つの領域を扱う。

【テキストの読み方】

まず、テキスト第一部の「漢文学概説」を熟読すること。概説は各ジャンルの最も重要と思われる項目のみを簡略に紹介しているので、巻末の参考文献などによって不足の点を補ってほしい。

中国古典文学の全体的な流れが把握できた段階で、次の第二部「漢文学選読」に進むこと。テキストは原文に訓読と注釈を付しただけであるので、全文の解釈および作品の背景については各自で辞書・参考書を使って詳しく調べてほしい。

【履修上の注意】

「中国文学史」を履修済みであることが望ましい。

【関連科目】

「中国文学史」「漢文学Ⅱ」「漢文学Ⅲ」

【参考文献】

塩谷温『中国文学概論』講談社学術文庫、1983年

黎波『中国文学館』大修館書店、1984年

荘司格一ほか『中国文学入門』白帝社、1987年

九州大学中国文学会編『わかりやすくおもしろい中国文学講義』中国書店、2002年

松原朗ほか『教養のための中国古典文学史』研文出版、2009年

【レポート作成上の注意点】

参考文献を必ず明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

『論語』は孔子の言行録であり、儒教の最も基本的な経典である。徳治主義、尚古主義、身分主義といった特徴を持つとされるその思想は、中国のみならず日本、韓国、ベトナム等の東アジア諸国に大きな影響を与えた。まず『論語』の原典を通読し、数多くある参考書を参照しつつ、孔子の思想と儒教の特色の優れた点と限界について考察する。

【履修上の注意】

当科目を履修する前に、「中国文学史」を履修していることが望ましい。

【関連科目】

「中国文学史」「漢文学Ⅰ」「漢文学Ⅲ」

【参考文献】

- 吉田賢抗『論語』新釈漢文大系1 明治書院、1960年
 平岡武夫『論語』全釈漢文大系1 集英社、1980年
 吉川幸次郎『論語（上・下）』朝日出版社（朝日選書）、1996年
 金谷治『論語』岩波文庫、1999年
 加地伸行『論語』講談社学術文庫、2004年
 井波律子『論語入門』岩波新書、2012年
 和辻哲郎『孔子』岩波文庫、1988年
 金谷治『孔子』講談社学術文庫、1990年
 白川静『孔子伝』中公文庫、1991年
 江連隆『論語と孔子の事典』大修館書店、1996年

【レポート作成上の注意点】

『論語』や孔子に関する参考書は数多く、それぞれの解釈には大きな違いがある場合も多いので、必ず複数を参照して考察すること。また引用文は自分の文章と区別できるように記し、出典と引用箇所を明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

漢文に親しみ、中国古代の思想史を理解するために、『孟子』を題材にとり学習する。訓読（書き下し文）を通して解釈の方法を身につけると同時に、儒家としての孟子の思想の特

色についての理解を深める。

【参考文献】

島森哲男・浅野裕一『孟子・墨子』鑑賞中国の古典③ 角川書店
内野熊一郎『孟子』新釈漢文大系4 明治書院
宇野精一『孟子』全釈漢文大系2 集英社
大島晃『孟子』中国の古典4 学習研究社
貝塚茂樹『孟子』講談社学術文庫
小林勝人『孟子（上・下）』岩波文庫

【レポート作成上の注意点】

指定の字数内で、はっきりと読みやすく書くよう心がけること。引用文は自分の文章と区別できるようにし、出典と引用箇所を明記すること。また、レポート本文中で参考文献を引用したり使用する場合は、参考文献の書誌情報に加え、必ずその引用ページも明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

現代英語学

(L 100-0701)〔3単位〕

【講義要綱】

現代英語の特徴を多面的に研究する。英語が現代の世界で置かれている状況は明らかに他の個別言語と異なっている。また、言語だけを見ても、他のインド・ヨーロッパ語族にある言語とは異なった特徴がある。これらの視点をふまえて「英語らしい」英語の使用を考える。

【テキストの読み方】

熟読すること。

【関連科目】

「新・英語学概論」「英語音声学」

【参考文献】

唐須教光（編）『開放系言語学への招待』慶應義塾大学出版会、2008年
井上逸兵『伝わるしくみと異文化間コミュニケーション』南雲堂、1999年
池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚』NHK ブックス、2006年
池上嘉彦『〈英文法〉を考える』ちくま学芸文庫、1995年
井上逸兵『バカに見えるビジネス語』青春新書インテリジェンス、2013年

【レポート作成上の注意点】

自分で事例を探すこと（言語学の文献などの例の2次利用は不可）。

ワープロで書くことが望ましい。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・英語学概論

(L 121-1501)〔3単位〕

【講義要綱】

英語の言語上の特徴や英語と社会・文化・コミュニケーションとの関わりを見極めること。また、英語、ならびに言語を分析するために発展してきた研究の流れを理解し、それをふまえて英語の使用を考察すること。

【テキストの読み方】

熟読すること。

【関連科目】

「現代英語学」、「英語音声学」

【参考文献】

唐須教光（編）『開放系言語学への招待』慶應義塾大学出版会、2008年
井上逸兵『伝わるしくみと異文化間コミュニケーション』南雲堂、1999年
井上逸兵『ことばの生態系—コミュニケーションは何でできているか』慶應義塾大学出版会、2005年
西光義弘（編）『日英語対照による英語学概論』くろしお出版、1997年
安井稔『英語学概論』開拓社、1987年

【レポート作成上の注意点】

自分で例をさがすこと（言語学の文献などの2次利用は不可）。
ワープロで書くことが望ましい。

【成績評価方法】

科目試験による。

英語音声学

(L 115-1301)〔2単位〕

【講義要綱】

一般音声学的理解を土台として、音声英語の調音的特徴、音響学的特徴を理解すること。また英語の韻律についても理解を深めること。

【テキストの読み方】

熟読すること。

【履修上の注意】

文献・レポート等による学習だが、実際に自分で発音しながら学習してほしい。

【関連科目】

「新・英語学概論」「現代英語学」

【参考文献】

佐藤寧・佐藤努『現代の英語音声学』金星堂、1996年

窪菌晴夫『音声学・音韻論』くろしお出版、1998年

竹林滋・斎藤弘子『新装版 英語音声学入門』大修館書店、2008年

【レポート作成上の注意点】

- ・適宜、参考文献を参照すること（テキストレベルの詳述では不十分）。
- ・自分の言葉で書くこと（丸写しはダメ）。自分の母語（ほとんどの方にとっては日本語）の音声学的な特徴との対比を加えてもよい。
- ・ワープロによる作成が望ましい。

【成績評価方法】

科目試験による。

英語史

(L 047-7903)〔2単位〕

【講義要綱】

英語という言葉の特徴を理解するためには、それがたどってきた歴史を学ぶことが不可欠です。英語の起源はどこにあるのか、英語に見られる不規則性は何に由来するのか、英語は将来どうなってゆくのか、などの現代的な問題に歴史的・通時的な視点からアプローチすることで、多面的な英語観を形成することが、本科目の目標です。

【履修上の注意】

現代英語がなぜ今あるような言語となったのかを知ることが本科目の重要な目的の一つですから、高等学校までに学んだ現代英語に関する語学的な知識をきちんと整理しておいてください。余裕があれば、ぜひ参考文献に挙げた他のいくつかの英語史概説書を読んでおいてください。

【参考文献】

家入葉子『ベーシック英語史』ひつじ書房、2007年。

唐澤一友『多民族の国イギリス——4つの切り口から英国史を知る』春風社、2008年。

寺澤盾『英語の歴史』中央公論新社〈中公新書〉、2008年。

中尾俊夫、寺島廸子『図説英語史入門』大修館書店、1988年。

橋本功『英語史入門』慶應義塾大学出版会、2005年。

堀田隆一『英語史で解きほぐす英語の誤解——納得して英語を学ぶために』中央大学出版部、2011年。

松浪有（編）、小川浩、小倉美知子、児馬修、浦田和幸、本名信行（著）『英語の歴史』大修館書店、1995年。

渡部昇一『英語の歴史』大修館、1983年。

【レポート作成上の注意点】

文章中には具体的な専門用語、固有名詞、単語や例文などをなるべく多く含めるようにしてください。また、ワープロでレポートを作成の場合、ワープロで印字できない特殊な文字は手書きで記してください。とくに発音記号などは、ほかの文字で代用しないようお願いします。

【成績評価方法】

科目試験による。

ACADEMIC WRITING I —英語論文作成法—

(L 113-1201)〔2単位〕

【講義要綱】

「ACADEMIC WRITING I」は、英語論文執筆に必要な知識とスキルを習得することを目的としています。単なる「英作文」とは異なり、アカデミック・ライティングには「英語で書く」ということ、そして「学術的な論文を書く」という二つの基盤があります。つまり、文法・構文的に正確な文を作成するだけでなく、アカデミックな研究の性質や作法を理解し、論理的議論を構築し、それに応じた論文構成を行う能力が必要となります。本科目では、テキストを通してこれらを学び、レポート課題で実践します。

【テキストの読み方】

テキストのPart 1は英語論文の特色や構造について説明しています。Part 2は英語論文を実際に執筆し完成させるまでのプロセスを説明しています。

【履修上の注意】

本科目は、高等学校修了程度の英語力を持ち、文法的に正確な表現を用いて、ある程度の長さの英作文ができる学習者を対象としています。よって、英文法の復習が必要な学生は、市販の書籍や、参考文献に挙げた教材でよく学習してから、履修して下さい。

【参考文献】

アカデミック・スキルズ解説書

- ・佐藤望編『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門（第2版）』慶應義塾大学出版会、2012年（論文作成だけでなく、大学での学び全般に役に立つスキルや知識習得を目指した入門書。）

アカデミック・ライティング学習書

- ・アンドルー・アーマー、河内恵子、松田隆美、ウィリアム・スネル『アカデミック・ライティング応用編—文学・文化研究の英語論文作成法』慶應義塾大学出版会、1999年
- ・上村妙子、大井恭子『英語論文・レポートの書き方』研究社、2004年
- ・佐渡島沙織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』ひつじ書房、2008年（英語ライティングに特化したものではないが、大学で研究を行い、その研究成果を効果的かつ正確に著すのに必要な作法や手順が丁寧に説明されている。）
- ・崎村耕二『英語論文によく使う表現』創元社、1991年
- ・ポール・ロシター、東京大学教養学部英語部会編『First Moves: An Introduction to Academic Writing in English』東京大学出版会、2004年（8章構成。各章で短い学術的テキストを土台に、アカデミック・ライティングの諸要素（英語表現の詳細も含む）を学ぶことができる構成になっている。練習問題と解答例あり。）
- ・Robyn Najjar and Lesley Riley (2004). *Developing Academic Writing Skills*. Tokyo: Macmillan Language House. (15ユニットから成る大学生向け入門書。英語で書かれているが、文字が大きく、図表も多いので読みやすい。)
- ・Alice Oshima and Ann Hogue (2006). *Introduction to Academic Writing* (3rd edn). New York: Longman. (アカデミック・ライティング執筆に不可欠な知識、作法や手順が網羅されている。)
- ・Dorothy E. Zemach and Lisa A. Rumisek (2005). *Academic Writing: From Paragraph to Essay*. Oxford: Macmillan.

MLA スタイルの解説書

- ・Modern Language Association of America (2009). *MLA Handbook for Writers of Research Papers* (7th edn). New York: Modern Language Association of America.
- ・『MLA 英語論文の手引 第6版』北星堂書店、2004年（MLA Handbook 第6版の翻訳版。上記の第7版と異なる事項があるので注意すること。）
- ・Charles Lipson (2011). *Cite Right: A Quick Guide to Citation Styles — MLA, APA, Chicago, the Sciences, Professions, and More* (2nd edn). Chicago: University of Chicago Press. (様々な論文スタイルのガイド。)
- ・‘MLA Formatting and Style Guide’. <http://owl.english.purdue.edu/owl/resource/747/01/>（下記サイトのMLAスタイル解説のページ。）

アカデミック・ライティング学習のためのウェブサイト

- ・ <http://owl.english.purdue.edu/> (アメリカ Purdue 大学で運営されているサイト。ライティングにおける重要事項を具体的、丁寧な解説。専攻分野ごとの説明もある。英語学習者向け情報、練習問題も豊富。)
- ・ <http://www.uefap.com/> (‘Using English for Academic Purposes: A Guide for Students in Higher Education’. イギリスの英語教育コンサルタントが運営するサイト。分野ごとに練習問題が豊富に掲載されている。オンラインで取り組むことができ、ほとんどの問題に解答がついているので、自習に最適。)

【レポート作成上の注意点】

教科書のチェックリストは、レポート課題に多く見られる問題点と本科目の学習事項をもとに作成されています。各項目と照合しながら、最低二回は論文を読み直してください。

特に、以下の問題のあるレポートが多いので注意してください。

- ・ 英語の誤り (主語と動詞の一致、冠詞、品詞、構文、時制等において) が目立つ
- ・ 議論の構成 (論文の thesis が曖昧、論理的一貫性不足、客観的な立証不足)
- ・ 論文の構成 (パラグラフの構造、イントロダクションの役割と構造)
- ・ 書式、引用方法、文献リストの不備

【成績評価方法】

科目試験による。

ACADEMIC WRITING II

— 英米文学・文化研究における英語論文作成法 —

(L 080-9901) [4 単位]

【講義要綱】

The aim of Academic Writing II is to research and write an academic essay on a literary theme in English, conforming to the guidelines described in the textbook. The essay will be evaluated according to the proficiency of English, the content (i.e. argument), and technical details such as use of quotation, punctuation, etc.

【履修上の注意】

This essay must conform to the style(s) and format explained in the textbook and should be typed using a computer or word processor. It is expected that the works and critical studies referred to are for the most part in English, although the use of Japanese books, journals, etc. is not discouraged.

【参考文献】

テキストの当該欄を参照のこと。

【レポート作成上の注意点】

なるべくワープロで論文作成のこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

現代英文学

(L 043-7702、L 7724)〔2単位〕

【講義要綱】

小説作品をじっくりと丹念に読み、課題について考えることが必要。

書き出す前にレポートの構成を練ること。利用する引用文についても検討すること。

作品のあらすじ紹介にならないように注意すること。

【履修上の注意】

課題として選択した作品の詳しい情報をレポートの最初に記すこと。(出版年、出版社、出版地、翻訳者名)

【参考文献】

イギリスの現代史、小説史、文化史など。

【レポート作成上の注意点】

引用文の情報は明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

英文学特殊

(L 071-9201、L 9239)〔2単位〕

【講義要綱】

近現代のイギリス文学とその歴史を、「言論の自由」と「信仰への態度」という二つの側面から考察する科目である。レポート課題自体は、両者のいずれか一つを選択して執筆する形式となっているが、単位の取得のためには両方について深い知識と見識を持つことが必要になる。

【テキストの読み方】

まずは、テキストを精読し、第1部で述べられている海保師の見解、第2部で述べられている上村師の作品論、それぞれについて正確に理解することが必要である。その上で、レポート課題などに応じて、参考文献を自分で探し、増やししながら、自分独自の意見を持つことが必要。

【履修上の注意】

テキストもさることながら、小説などの原典をじっくりと読むことが何より大事である。しかし、レポートの執筆においては、単なるテキストの要約や作品の紹介ではなく、研究対象についての自分独自の視点を強く打ち出すことが求められる。その意味で、参考文献を貪欲に読破することが大事。

【履修上の注意】

特になし。

【関連科目】

特になし。

【参考文献】

文学部英米文学専攻のホームページにある『文献案内』または『藝文研究 別冊』の「文献案内」などを参考にしながら、妥当性が高いと思われる参考文献を一步一步、自分の力で探してみる。学習はそこから始まるのだから。

【レポート作成上の注意点】

レポート課題を熟読し、その趣旨をよく理解した上で、テキストおよび小説作品をまずはじっくりと読むことが大事である。そのうえで、課題に沿った、自分独自の視点から、論考を深めてゆくことが望まれる。レポートの執筆においては、単なるテキストの要約は作品の紹介ではなく、研究課題についての自分独自の意見をはっきりと述べる必要がある。その意味で、様々な参考文献を貪欲に読破し、謙虚かつ個性的に学習を深めるべきである。

【成績評価方法】

科目試験による。

中世英文学史

(L 035-7601、L 7622)〔2単位〕

【講義要綱】

中世の英文学は約1000年にも及ぶ長い中世の時代に書かれた英語文献のほとんどを研究範囲とします。大きく分ければ、ノルマン征服以前の古英語と以後の中英語で書き残された文学作品に区別できます。本講義はそのほとんどを扱うので、学生諸君は教科書を熟読して、大きな流れを理解して下さい。テキストに書かれているように、一見したところ「暗い古英語文学と明るい中英語文学」のように思えるかもしれませんが、けれど実際にひとつひとつの作品を読むとき、古英語と中英語の区別なく、中世の英語話者のダイナミックな世界観、あるいは日常の細やかな感情が丁寧に描かれていることがわかるでしょう。

日本ではあまり紹介されることのなかった分野ですが、実は非常に面白く、広く深い世界

を背景に持っていることを、課題に取り組みながら理解して載きたいと思います。

【テキストの読み方】

テキストは、中世英文学の大きな流れを概説しています。また、現代英語とは大きく異なるように見える古英語文学作品に使われた技法や、古英語以外のゲルマン文学の伝統がどのように古英語文学と関連するかを述べています。読者は、大きく流れを捉えると同時に、専門用語の意味をしっかりと理解し、参考文献を手にとって、テキストに書かれている内容を踏まえながら、実際に作品を（翻訳でもよいから）読んでみて下さい。文学テキストが様々な視点からも理解できることに気がついて下さることが望ましいです。

【履修上の注意】

英文学関連の他の専門科目、英語史、西洋史の科目もあわせて履修するとともに、英文学史、英語史、ヨーロッパ中世文化（宗教史、社会史、政治史、美術史など）への興味をもつことが望まれます。本科目は文学史的概説が中心となるので、その知識を「参考文献」に挙げられている作品の一つでも多く読むことで跡付けてゆくことが重要です。

【関連科目】

「英語史」、「近世英文学史」、「歴史（西洋史）」、「ACADEMIC WRITING II」

【参考文献】

高宮利行・松田隆美編『中世イギリス文学入門—研究と文献案内』（雄松堂出版、2008）
——中世英文学の全てのジャンル、作家に関する入門的解説と研究案内。参考文献も詳しく紹介している。

英文の主要な研究書については、テキスト巻末の文献案内を参考にすること。

主要作品の日本語訳

Beowulf 『ベーオウルフ』 忍足欣四郎訳（岩波文庫）、『ベーオウルフ』 厨川文夫訳（岩波文庫）

鈴木重威、鈴木もと子訳『古代英詩』（グロリア出版、1978）

Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales* / ジェフリ・チョーサー『カンタベリ物語』 榊井迪夫訳 全3巻（岩波文庫） / 西脇順三郎訳 全2巻（ちくま文庫）

Geoffrey Chaucer, *Troilus and Criseyde* 『トロイルス』 岡三郎訳・解説（国文社、2005）

William Langland, *Piers Plowman* / ウィリアム・ラングランド『農民ピアズの幻想』 池上忠弘訳（中公文庫、1993） [A テキスト（最初の短いバージョン）訳] / 『農夫ピアースの夢』 柴田忠作訳（東海大学出版会、1981）

John Gower, *Confessio Amantis* / 伊藤正義訳『恋する男の告解』（篠崎書林、1980）

Thomas Malory, *Morte Darthur* / サー・トマス・マロリー『アーサー王の死—中世文学集1』（ちくま文庫）

Mandeville's Travels / ジョン・マンデヴィル『マンデヴィルの旅』—福井秀加・和田章監訳（英宝社、1997） / 『東方旅行記』大場正史訳 東洋文庫 19（平凡社、1964）

Sir Gawain and the Green Knight / 『サー・ガウェインと緑の騎士』池上忠弘訳（専修大学出版局、2009）。トルキンによる現代英語訳も存在する。*Sir Gawain and the Green Knight, Pearl, and Sir Orfeo*, translated by J. R. R. Tolkien (Boston: Houghton Mifflin, 1975)

alliterative *Morte Arthure* / stanzaic *Morte Arthur* / 清水阿や訳『頭韻詩 アーサーの死』、『八行連詩 アーサーの死』（ドルフィン・プレス、1986、1985）

中世英国ロマンス研究会・訳『中世英国ロマンス集』第1-4巻（篠崎書林、1983-2001）

石井美樹子・久木田直江共訳『マージェリー・ケンプの書』（慶應義塾大学出版会、2008）

石井美樹子訳『イギリス中世劇集—コーパス・クリスティ祝祭劇』（篠崎書林、1983）

鳥居忠信、山田耕士、磯野守彦共訳『イギリス道徳劇集』（リーベる出版、1991）

【レポート作成上の注意点】

レポートの作成にあたっては、他の文献から引用した箇所、他の文献の記述を自分なりにパラフレーズして使用した箇所には、正確に注をつけること。また、レポートの末尾に、使用した文献を一次資料（引用した作品そのものやその他の原典資料）と二次資料（研究書、研究論文など）に分けて列挙すること。注や参考文献の書式は「学習の手引き」などを参考に正確に記すこと。また、「ACADEMIC WRITING II」のテキスト（通信教材）には、注の付け方や書式についての解説が含まれている。注、参考文献が不正確なレポートは再提出となり、他の文献に記されている内容をあたかも自分の見解のように用いることは論文盗用と見なされ、処分の対象となる。

【成績評価方法】

科目試験による。

近世英文学史

（L 036-7701、L 7723）〔2単位〕

【講義要綱】

この科目は、16世紀から19世紀にかけてのイギリス文学の流れを、詩、散文、演劇を中心に概観することで、近代イギリス文学の基本的な枠組みと流れを知り、より専門的な個別研究の基盤を築くことを目的とする。テキストは、ジャンル毎に、その特色と変化を、チューダー朝からビクトリア朝まで時間軸にそってたどるとともに、主要作品が文学史のなかで伝統的にどのように位置づけられているかを簡潔に示している。

【テキストの読み方】

「近世英文学史」のテキストは、16世紀から19世紀末までのイギリス文学の流れを、時代を追ってジャンル別に概説している。本書で指摘されている各時代の背景や作家の特徴は、

一国の文学の伝統を理解するために本質的なものばかりである。より専門的な学習・研究のためには文学史の知識は不可欠であり、細部までテキストを熟読し、自らの手でも系統的に整理することを薦める。また、下記の参考文献も併せて参照しつつ、可能な限り言及されている作品を実際に読んでみるのが、知識を空疎なものにしないために重要である。

【関連科目】

「イギリス文学研究Ⅰ～Ⅲ」「英文学特殊」「ACADEMIC WRITINGⅡ」

【参考文献】

- 斎藤勇『イギリス文学史』（研究社、1974年）
神山妙子編著『はじめて学ぶイギリス文学史』（ミネルヴァ書房、1989年）
パット・ロジャーズ『図説イギリス文学史』青木健ほか訳（大修館書店、1990年）
橋口稔編著『コンパクトイギリス文学史』増補版（荒竹出版、1991年）
三ツ星堅三『イギリス文学史概説 社会と文学』（創元社、1993年）
関裕三郎『作品が語るイギリス文学史』（開拓社、2000年）
白井義昭『読んで愉しむイギリス文学史入門』（横浜市立大学学術研究会、2013年）

【レポート作成上の注意点】

レポートの作成にあたっては、他の文献から引用した箇所、他の文献の記述を自分なりにパラフレーズして使用した箇所には、正確に注をつけること。また、レポートの末尾に、使用した文献を一次資料（引用した作品そのものやその他の原典資料）と二次資料（研究書、研究論文など）に分けて列挙すること。注や参考文献の書式は「学習のすすめ」などを参考に正確に記すこと。また、「ACADEMIC WRITINGⅡ」のテキスト（通信教材）には、注の付け方や書式についての解説が含まれている。注、参考文献が不正確なレポートは再提出となる。

【成績評価方法】

科目試験による。

イギリス文学研究Ⅰ—散文— (L 109-1101)〔2単位〕

【講義要綱】

第一次世界大戦を生き、描いた、イギリス女性作家たちのさまざまな立場を理解してもらいたい。時代と文学の多重性に注目することにより「戦争と作家」という視点をもつことが重要である。

【テキストの読み方】

通読して、文学史と文化史を把握してもらいたい。

【履修上の注意】

参考にした文献の情報は明確に伝えること。

【参考文献】

指定テキスト『イギリス文学研究Ⅰ—散文—』（『西部戦線異状あり』）に紹介されている文献案内を参照すること。

【レポート作成上の注意点】

引用文の情報は明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

イギリス文学研究Ⅱ—詩— (L 033-7603、L 7628)〔2単位〕

【講義要綱】

ミルトン、シェイクスピア、キーツ、エリオットなど、16世紀末から20世紀初頭にかけてのイギリスの代表的詩人24人の作品を読み、通常の散文とは別世界である英語の言葉の展開を追う。

【テキストの読み方】

英詩の特徴と味わい方は、テキスト序文に尽くされているので、熟読されたい。様々な韻律法が紹介されているが、それを丸暗記する必要はない。しかしそこで強調されているように、詩の真髄は言葉のリズムにあるので、どの作品も単語の意味を調べるばかりではなく、是非声に出して読み、口で賞味して頂きたい。詩のリズムは、わらべうたのように、意味の把握以前に音楽的な調子をもって言葉に息吹を吹き込んでいるからである。その上で、言葉の意味から全体の構成、作者の伝記的背景、時代状況に至るまでの要素がない交ぜとなって、作品の鑑賞に奥行きが与えられるであろう。

【レポート作成上の注意点】

広く参考文献にあたり、使用部分には注を施して出典を明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

イギリス文学研究Ⅲ—演劇— (L 050-7902)〔2単位〕

【講義要綱】

文学作品の鑑賞において最も不可欠で重要な要因の一つであろうと思われるものを挙げる

とすれば、作品との生の（直接の）触れ合いということになる。これはジャンルを問わず、すべての芸術作品についても言えることである。その出会いの原点乃至は源流を辿ることがどれほど価値を有するものであり、どれほど多くの発見を内に秘めた試みであるのかは、実際にその冒険に挑んでみなければ何人たりともわかり得ないだろう。文字通りそれほど奥の深い試みなのである。

特定の作品との感動的出会いを誘発且つ可能ならしめるところの直接的及び間接的要因をテキストのどの言葉やどの台詞に見出すかは、個人によって異なるであろう。それは各人が今日まで歩んできたところの人生行路、歩みの過程における出会いとそれによって意識的あるいは無意識的に織りなしてきたところの人間模様、今日まで培ってきた美意識の根底に深く静かに横たわる様々な風景や自然、その他人生における諸々の体験などの積み重ねなどによって、どの言葉が琴線に触れるかは自ずから異なるからである。自然の摂理に従うより他に術はあるまい。それ故にこそ、各人の鑑賞法の尊さが存在し、各人の存在意義（the reason for being ; the raison d'être）の再確認・再認識がなされて然るべきなのである。

出会いの原点乃至は源流を遡る試みの過程において最も必要とされるテキストは、自らが今日まで織りなしてきたところの人生という書物であろう。それは内にもまた外にも開かれた open text (socialized text) であり、文字通り未完成のテキストである。未完成ではあるものの完成への強い願望と意思とを宿したものであり、自己充足への実現を何よりも真摯に志向するものである。その未完成のテキストを拠り所として、目の前の作品と自分自身との影響関係を吟味・分析し、言語化し、表現するという作業に敢然と立ち向かわれんことを切望するのが、他ならぬ本講座の主眼である。

【テキストの読み方】

個々の作品世界に入り込むことが重要である。その鍵を握るのが登場人物の台詞であろう。台詞は言葉の集積である。それ故に、一語一語の意味を解き明かし、登場人物の心理や思想、行動様式や生き方などを理解する作業が不可欠である。行間を読む（read between the lines）という作業に挑むことこそが何よりも求められているということを、自覚してほしい。

【履修上の注意】

参考資料への過度の依存は避けるべきである。参考文献からの引用などは具体的引用箇所を明らかにすべきであり、断りなく書き写してはならない（cf. plagiarism）。稚拙な文章であると思われても、自分自身の頭で書き連ねる努力が大切である。行間に滲み出るのが、偽らざる自分自身の姿であり形であってほしいからである。

【関連科目】

「イギリス文学研究Ⅰ—散文—」、「イギリス文学研究Ⅱ—詩—」、「シェイクスピア研究」等の科目と有機的に関連していることは、理解できよう。

【参考文献】

個別の作家や作品に関する参考文献（テキストの「Ⅲ 参考文献集」を参照）は数多くあるが、あくまで参考程度にとどめることが肝心である。順序としては、テキストを読んでから参考文献に移ること。そうでないと、自らの読み（reading）の基本軸を失うことになるからである。

【レポート作成上の注意点】

本レポート作成作業を通して、英語力を存分に磨いてほしい。辞書を徹底的に引き、できれば大型の辞書（見出し語の語義および記述の絶対量において他を圧倒）を潰す程に辞書を引き捲ってほしいのである。辞書が潰れる頃には、皆さんは英語の教員になっているかもしれない。嘘か本当か、是非この逆説（paradox）の実証に挑んでほしい。尚、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* 等の英々辞典の使用も積極的に試みてはいかがだろうか。

【成績評価方法】

科目試験による。

アメリカ文学

（市販書採用科目）*（L 105-1001）〔2単位〕

文

【テキスト】

巽孝之『アメリカ文学史—駆動する物語の時空間』慶應義塾大学出版会、2003年

※「アメリカ文学」は上記市販書と、配本テキストのアンソロジー『アメリカ文学』の2冊が指定テキストとなります。

【講義要綱】

アメリカ文学思想史をふまえて多くの作品を読み進めていくとき、そこに17世紀ピューリタン植民地時代以来、人種・階級・性差を問わず連綿と培われたアメリカン・ナラティヴの伝統が脈々と息づいているのを見て取ることができる。テキスト『アメリカ文学史—駆動する物語の時空間』は、まさにそうした視点から、17世紀から19世紀にわたる男性、女性、混血の文学者を取り上げ、彼らがいかなるアメリカン・ナラティヴに準拠してきたかを克明に辿ったものだ。ジョン・ウインスロップからベンジャミン・フランクリン、マーク・トウェインからF・スコット・フィッツジェラルド、トマス・ピンチオンからカレン・テイ・ヤマシタに至る壮大なパースペクティヴを、アンソロジー『アメリカ文学』の原文を読むことで確認し、そこに各作家独自の「テーマ」を読み取ってほしい。

【参考文献】

レポート作成、科目試験準備に当たっては、テキストに加え以下の参考文献も適宜参照すること。

Peter B. High, ed, *An Outline of American Literature* (New York : Longman, 1986).

巽孝之『ニュー・アメリカニズム——米文学思想史の物語学』増補新版、青土社、2005年

【レポート作成上の注意点】

教科書を熟読した上で、その方法論を活かしつつ、代表的作品群を読み解くことが、このレポート課題の学生諸君に要求するところである。したがって、明らかに下記の三点に違反するものは不合格とする。

- (1) アンソロジー収録作品原典を必ず読み、そのことがはっきりわかるように原文からの引用と、できれば試訳も含むこと。
- (2) 教科書で扱われているアンソロジー収録以外の作品の場合、教科書をふまえながらも、できるだけ別の見解を編み出すこと。
- (3) 教科書で扱われていない作品の場合、その作家に関する他作品及び二次資料をも、きちんと収集してから分析すること。

なお、レポートにはときとして教科書の記述を丸写しにして恥じないものが少なくない。そういう姿勢が露呈した場合、自動的に不合格となるので覚悟されたい。

【成績評価方法】

科目試験による。

アメリカ文学研究 I (L 030-7602、L 7626) [2単位]

【講義要綱】

本講座は、19世紀前半のアメリカン・ルネサンス期を代表する6名の作家の作品を講読し、現代にまで受け継がれているアメリカ文学の特徴を学ぶことを目的とする。受講者は、テキストに収録された作品を通読し、それぞれの作品の背後にあるコンテキストを学ぶ。

【テキストの読み方】

英語で執筆された文学作品を読むためには、まずよい辞書が必要となる。本講座では『リーダーズ英和辞典』（第3版）をすすめる。テキストに書かれていることを理解することはもちろんのことだが、なぜこのような書かれ方をしているのか、なぜこの文が必要なのか、など、作品と積極的に関わる「アクティブな」読み方を実践してもらいたい。

【履修上の注意】

基本的な英語文法を習得していることが必要となる。また、作品についてのリサーチが必要となるため、図書館やデータベースを使った資料の調べ方の基本を習得していることが望ましい。

【参考文献】

テキスト末尾に掲載されている Bibliography を参照されたい。

【レポート作成上の注意点】

「テキストの読み方」で指摘したとおり、これはどういう意味だろうか、なぜこういう書き方をしているのだろうかという疑問や、気になる表現を考えることで、自分が論じたい点が明確になるだろう。その考察の補助線として、テキストの末尾に付された詳細な註釈や、末尾にある Bibliography に掲載された参考文献を参照しつつ、自分の解釈をほどこしていくことが大切である。

使用した参考文献に関する書誌情報は、レポートの末尾に記載すること。ただし、参考文献リストはレポートの文字数には入らないので注意されたい。

【成績評価方法】

科目試験による。

アメリカ文学研究Ⅱ

(L 017-6901、L 7931)〔2単位〕

【講義要綱】

文学研究において、実際の作品をどのように解読するかという作業は避けて通れないものである。この科目では、20世紀のアメリカ文学のいくつかの作品について、原文を注意深く読み、そこに描かれた物語の内容と形式に込められた意味をどのようにして理解すべきかという作業を行うことにより、アメリカ文学の読み方に関する技術を向上させることを目的とする。

【履修上の注意】

英語で書かれた作品の解釈を行うのであるから、英語の必要単位が全て取得済であることは、当科目の履修の条件として当然のことである。まとまった量の英語の読解に自信のない者には履修を勧めない。

【参考文献】

高田賢一・森岡裕一編『シャーウッド・アンダソンの文学』ミネルヴァ書房、1999年
大橋健三郎ほか編『総説アメリカ文学史』研究社、1975年

【レポート作成上の注意点】

文学作品を「論じる」という行為は、構成・技法・形式上の特質、登場人物の性格描写や人物造形、主題、文学史的価値などについて、作中の具体的な証拠（舞台設定や表現など）に基づいて論理的に説明し、自らの解釈を展開することである。作者は何を訴えようとしたのか、そのためにどのような工夫をしているのかを分析すること。これらの点について言及されておらず、あらすじ紹介や感想文に終始しているレポートは、「論じる」という次元に達していないものとして、全て不合格とする。また、作品の理解には、歴史的背景や文学史的知識が有効であることはいままでのまではないが、この科目は、それらの知識の有無を直接問う

ことが目的ではない。それらの知識を参考にして、実際の作品の価値をどう解釈するかがあくまで重要なのであるから、歴史的背景や文学史的知識を羅列しただけのレポートも不合格とする。したがって、当科目のレポートを作成するに当たっては、テキストの原文を丹念に読むことはもちろん、作品の書かれた時代背景や作者の文学史的位置、作者が書いた他の作品や他の作家との比較等、幅広い知識を活用して、実際の作品を具体的な証拠からどう意味づけるか論理的に説明できなければならない。作品を一つ読めばレポートが書けるわけではなく、アメリカ文学の流れや個々の作家に関する相当な勉強量が求められていることを認識した上でレポート作成に取りかかること。なお、科目試験の受験に当たっては、このレポート作成に求められるのと同様の勉強をテキストに掲載された他の全ての作品についても行った上で臨むこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

シェイクスピア研究

(L 039-7702、L 7730)〔2単位〕

【講義要綱】

シェイクスピアの劇作品は、16世紀以来、演出を変えてくりかえし上演され、また映画、絵画、オペラなど、異なったメディアでも扱われ続けてきた。そのようにテキストを受け止める文化的文脈が変化しても、変わらずに人気を保ち続けることは、シェイクスピア劇がまさに古典であることの証である。そうした永続的な魅力を一読者として知り、それを客観的に言語化できるためには、シェイクスピア解釈における様々な批評的立場を知り、それらを自己の解釈の確立に活用するとともに、何よりもテキスト本文の厳密な読みを心がける必要がある。それは、16世紀の英語を語学的に正確に読むということにとどまらず、作品中における特定の概念の意識的な主題化、イメージの連鎖、プロットの展開、登場人物の類型などに関して、分析的にテキストを読むことである。この点をふまえて、本科目の受講生は以下のようなプロセスで学習を進め、レポートの作成へと至って欲しい。

1. 教科書を通読し、エリザベス朝時代の演劇上演の背景やシェイクスピアの劇作品について、バランス良く基礎知識を習得する。シェイクスピアの英語（第7章）については、文法的特徴を現代英語との対比において理解する。
2. 教科書を参考にシェイクスピアの劇作品を複数選び、分析的に精読する。翻訳を活用して読み進めて良いが、定評ある学術的校訂版（The New Cambridge Shakespeare, The Oxford Shakespeare, The Arden Shakespeare などのシリーズが、注が豊富である）を入手し、原文と意識的に対照させながら読むことが望ましい。また、各ジャンル（悲劇、喜劇、歴史劇、ロマンス劇）について、それぞれ一編ずつは読んでみるとよい。
3. シェイクスピア劇を実際にどのように分析するのか、それを知り、自分の解釈を客観的

に提示するための参考とするために、近年のシェイクスピア劇の研究書のなかから定評あるものを複数読んでみる（参考書リスト参照）。

【テキストの読み方】

本科目のテキストは、シェイクスピアを批評するために有益な、シェイクスピアに関する伝記的事実、作品の制作状況、エリザベス朝の世界観や上演形態に関する基礎知識を中心的に記述している。テキストを通読することで作品を読むための文化的文脈を理解してほしい。その上で、各自の興味に従ってシェイクスピアの劇作品を数点選び、じっくりと読み込んでほしい。

【関連科目】

「近世英文学史」「イギリス文学研究Ⅲ—演劇—」「ACADEMIC WRITING II」

【参考文献】

シェイクスピア研究には大量の研究書が存在しているので、良書のみを選び出して利用する必要がある。以下には日本語で読めるものに限って、(1) 研究ハンドブック的なもの、(2) 近年の定評ある研究書に厳選して列挙した。もちろん以下に示し得なかった研究書のなかにも重要なものは数多いが、このリストの書目を出発点としてさらに自分の興味にあった研究書を探して読み進めて欲しい。

シェイクスピアをはじめ16-17世紀イギリス文学に関する重要な参考文献については、英米文学専攻のウェブサイトでも紹介しているので参照のこと。

(http://www.flet.keio.ac.jp/englit/bibl/bibl_index.html)

- ・高田康成他編『シェイクスピアへの架け橋』（東京大学出版会、1998）
- ・小津次郎編『シェイクスピア作品鑑賞事典』（南雲堂、1997）
- ・高橋康也編『シェイクスピア・ハンドブック』（新書館、2004）
- ・C. L. Barber, *Shakespeare's Festive Comedy* (1959). C. L. バーバー『シェイクスピアの祝祭喜劇』玉泉他訳（白水社、1979）
- ・Stephen Greenblatt, *Renaissance Self-Fashioning: From More to Shakespeare* (Chicago: Univ. of Chicago, 1980). スティーブン・グリーンブラット『ルネサンスの自己成型』高田茂樹訳（みすず書房、1992）
- ・Stephen Greenblatt, *Shakespearean Negotiations* (1988). スティーブン・グリーンブラット『シェイクスピアにおける交渉』酒井正志訳（法政大学出版局、1995）
- ・Juliet Dusinberre, *Shakespeare and the Nature of Women* (1975). ジュリエット・デュシンベリー『シェイクスピアの女性像』森祐希子訳（紀伊國屋書店、1994）
- ・Terry Eagleton, *William Shakespeare* (1986). テリー・イーグルトン『シェイクスピア—言語・欲望・貨幣』大橋洋一訳（平凡社、1992）
- ・Anne Barton, *Shakespeare and the Idea of the Play* (1962). アン・バートン『イリュージョンの力—シェイクスピアと演劇の理念』青山誠子訳（朝日出版社、1981）

- ・ Robert Weimann, *Shakespeare and the Popular Tradition in the Theater*, ed. by Robert Schwartz (Baltimore, MD : Johns Hopkins UP, 1978). R・ヴァイマン [著]; R・シュワーツ [編] 『シェイクスピアと民衆演劇の伝統』 青山誠子・山田耕士訳 (みすず書房、1986)
- ・ Jan Kott, *Shakespeare Our Contemporary*, trans. by Boleslaw Taborski (1965). ヤン・コット 『シェイクスピアはわれらの同時代人』 蜂谷昭雄・喜志哲雄訳 (白水社、1968)
- ・ Jan Kott, *The Bottom Translation: Marlowe and Shakespeare and the Carnival Tradition* (1987). ヤン・コット 『シェイクスピア・カーニヴァル』 高山宏訳 (平凡社、1989)
- ・ 岩崎宗治 『シェイクスピアのイコノロジー』 (三省堂書店、1994)
- ・ 蒲池美鶴 『シェイクスピアのアナモルフォーズ』 (研究社、1999)
- ・ 青山誠子 『シェイクスピアの女たち』 (研究社、1981)
- ・ 玉泉八州男 『女王陛下の興行師たち』 (芸立出版、1984)
- ・ ノーマン・F・ブレイク 『シェイクスピアの言語を考える』 森祐希子訳 (紀伊國屋書店、1990)

【レポート作成上の注意点】

レポートの作成にあたっては、他の文献から引用した箇所、他の文献の記述を自分なりにパラフレーズして使用した箇所には、正確な注をつけること。また、レポートの末尾に、使用した文献を一次資料（引用した作品そのものやその他の原典資料）と二次資料（研究書、研究論文など）に分けて列挙すること。注や参考文献の書式は『塾生ガイド』（または、『教職課程履修案内』）に掲載の「レポート作成上の注意」、そして『MLA 英語論文の手引き』などを参考に正確に記すこと。また、「ACADEMIC WRITING II」のテキスト（通信教材）には、注の付け方や書式について、詳しい解説が含まれている。注、参考文献が不正確なレポートは再提出となる。

【成績評価方法】

科目試験による。

日米比較文化論（総論）（市販書採用科目）（L 102-0891）〔2単位〕

【指定テキスト】

川澄哲夫『黒船異聞—日本を開国したのは捕鯨船だ』 有隣堂、2004年

【講義要綱】

本講義の目的は、19世紀後半から20世紀初めにかけての日本とアメリカとの文化的・文学的交錯について学び考察することです。南北戦争後のアメリカは、国内においては急速な工業化がすすみ、国外においては南アメリカや太平洋への進出を図っていました。こうした領土拡張の気運のうちにペリーによる日本遠征があり、この黒船来航を端緒として、日本は近

代西欧化を推し進めたのです。日米関係史において重要な変動期に、ふたつの国がいかにして互いを発見し、互いの文化を理解あるいは誤解し、体験していたのかを、具体的な作品を手がかりに考えてみましょう。

【テキストの読み方】

指定テキストおよび課題指定参考書は、さまざまな分野やレベルにおいて起きていた日米の文化的・文学的交錯を複眼的に解説していますので、基本的な歴史事実をまず確認するようにしましょう。そのうえで、日米関係のなかで日本とアメリカはどのように対峙し交流したか、それぞれの「日本らしさ」や「アメリカらしさ」はどのように形成されたか、という二点にとくに留意して考察を深めてください。

【履修上の注意】

テキストや参考書を読むだけでなく、そこに言及のある人物や事例について調べたり、原著やほかの関連文献にも触れたりするように心がけてください。

【関連科目・分野】

アメリカ文学、日本文学、比較文学、地域研究

【参考文献】

Christopher Benfey. *The Great Wave: Gilded Age Misfits, Japanese Eccentrics, and the Opening of the Old Japan*. New York: Random, 2004. [邦訳、大橋悦子『グレイト・ウェイヴー日本とアメリカの求めたもの』小学館、2007年]

大久保喬樹『日本文化論の名著入門』角川学芸出版、2008年

※これら参考文献からも、レポート課題と科目試験が出題されます。

【レポート作成上の注意点】

テキストや参考書から学んだことがらと、ご自身が考えたことがらを、きちんと分けて書いてください。文献を参照・引用した場合には、ご自身の文章と引用文とをきちんと区別して書き（引用部にはかぎかっこを付し、出典頁を明記する）、レポートの最後には参考文献表をつけるようにしましょう。

【成績評価方法】

科目試験による。

近代ドイツ小説

(L 054-8302)〔2単位〕

【講義要綱】

教科書『近代ドイツ小説』では主に小説ジャンルに特化して、ドイツ文学史を語っています。受講生諸君はまずこの本を熟読することから始めてください。そして文学史の大体の流

れが掴めたら、今度はそこに述べられていた小説のなかで気に入ったものを実際に読んでみてください。それが第一歩です。この講義が刺激となってドイツ文学の世界に受講生の諸君が参入してくれることが第一です。そしてそれをきっかけとしてドイツ文化などについても考えてください。小説を読んで自らを反省し、あるいはドイツ人やドイツ文化についての知識を自分で広げていく、これが次の一歩です。そして最後には、自分の意見を表現してみましよう。

【テキストの読み方】

上記の教科書であれ、参考文献にあげられたものであれ、まず1冊の文学史を選択して、それを数度にわたって読んでください。それが基礎的知識を形成します。そしてそのあとでは、参考文献の巻末についているはずの文献を渉猟して、徐々に知識を増加させてください。

【履修上の注意】

特にありませんが、ネットの文字情報等をそのままコピーして使用した場合、カンニング行為と見なされることがありますので、十分にご注意ください。

【関連科目】

文学はすべてに関連していますが、特に、哲学、美術史学、音楽などにも関心をもってください。余力があれば、さらに社会学、歴史学、科学史などにも進んでください。

【参考文献】

インターネットを活用できる方は、CiNiiなどの論文検索サイトを使ってみてください。ドイツ語のできる方であれば、積極的にドイツのネットで必要な情報を探すのもひとつの方法でしょう。ハインツ・シュラッファー『ドイツ文学の短い歴史』（同学社、2002年）、藤本ほか著『ドイツ文学史（第2版）』（東京大学出版会、1995年）、佐藤晃一『ドイツ文学史』（明治書院、2002年）、岡田ほか著『ドイツ文学案内（増補新版）』（朝日出版社、2000年）、阿部謹也『物語 ドイツの歴史』（中公新書、1998年）。

【レポート作成上の注意点】

自分の考えと、参考文献に書かれていることとの間の「距離」を十分にとって、立体的に論熟してください。そのためには、文献を批判的に、つまり「他の考え方もあるのではないか」と考えながら読み込んでください。参考文献からの引用にはかならず出典を（通常は注として）明記してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

ドイツ演劇は18世紀の啓蒙主義の時代から著しく発展し始め、古代ギリシア悲劇やシェイクスピア演劇などの伝統を継承したり復活させたりしつつ、新たな様式やジャンルを開拓し確立していった。その後19世紀後半の自然主義演劇まで続くこの発展は近代演劇の歴史そのものといえる。20世紀に入りいわゆる現代演劇の時代になると、劇作家たちは近代演劇のありようを刷新したり、見直したりすることでアクチュアルな戯曲を創造し続け、今日に至っている。また、ドイツ演劇はドイツだけでなく、オーストリアやスイスの演劇も含み、この双方の国々からも重要な劇作家が輩出され、独自の演劇ジャンルや歴史が確立している。

【テキストの読み方】

テキスト全体を通読した上で、課題に関する記述を確認し、該当箇所を入念に読み直してください。

【履修上の注意】

テキストを通読した上で、関心のある戯曲を実際に読んでみるといいでしょう。また、ドイツ演劇は社会の近代化とともに著しく発展し、近代化のプロセスで生じた社会的問題を批判的に描くことで歴史的展開を経てきました。したがって近代ドイツ演劇の足跡をたどる際に、時代の社会的状況とその変遷もたどることが望ましいでしょう。

【参考文献】

平田栄一郎『ドラマトゥルク——舞台芸術を進化／深化させる者』（第1・2章）三元社、2010年

【レポート作成上の注意点】

テキスト「近代ドイツ演劇」に述べられている19世紀の演劇の特徴を導き出してください。その際18世紀と20世紀に関する記述もよく読んでおくと、19世紀の特徴がよりはっきりとするでしょう。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

2010年度新設のこの科目は、フランス文学研究に役立つさまざまなテーマ系の発展の過程をたどりながら、作品解釈を進めるための方法論を学ぶことを目的としています。また、フランス語学史、作品伝播の手段の歴史、文学教育の歴史、(フランス本国ではなく)フラン

ス語圏の文学についても多くの紙面を割いて紹介している点において、この科目で使用する教科書は、市販のフランス文学史の教科書とは一線を画しています。したがって、フランス文学にかんする卒業論文を執筆したいと考えているかたがたのみならず、さまざまな文学アプローチの可能性に関心を持たれているかたがたにとっても示唆に富んだものであると言えるでしょう。

【テキストの読み方】

まず目次に目を通し、興味を持った章を通読することからはじめてください。その中で特に興味をもった作品、作家にかんする項目について、他の章ではどのように扱われているか、さらに調べてみるようにしてみてください。その際、巻末のインデックスを活用してください。

【履修上の注意】

基礎的なフランス語の知識があることが望まれます。また、以下に挙げる関連科目と併せて履修すると、より理解が深まると思われます。

【関連科目】

「十九世紀のフランス文学Ⅰ」、「十九世紀のフランス文学Ⅱ」、「二十世紀のフランス文学」、「文学」

【参考文献】

教科書に紹介されている作品のうち、興味を持ったものについては、ぜひとも自分で一読されることをお勧めします。また、各章末に挙げた参考文献を参照することによって、いっそう確実に知識を固めることができるでしょう。

【レポート作成上の注意点】

まず、教科書と分析対象として選んだ文学作品を熟読することからはじめてください。そして、テーマが絞りきれた時点で、関連する参考文献を探してみてください。

教科書や参考文献をただひきうつしたり、その内容をまとめたりしただけのレポートは評価の対象とはなりません。分析対象とする作品からは必ず引用をして、教科書の解説を参考にしながら、自分なりの分析をほどこすようにしてください。参考文献は、自分の見解を支えるために活用すべきではありますが、大部分が引用で成り立つものは受け付けられません。自分の分析が主となっているようなレポートを作成するよう、心がけてください。

また、文学作品や参考文献からの引用については、必ず脚注、あるいは文末注に、著者、タイトル、出版社、出版年、ページなどの情報を明記してください。レポートの末尾にかならず総字数を明記してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

十九世紀のフランス文学Ⅰ (L 077-9601)〔3単位〕

【講義要綱】

19世紀フランス文学の文学史的概観に基づいて、個々の作品をそれ以前あるいは以後の作家の作品と関連させながら丹念に読み解いていくことを目標とします。

【テキストの読み方】

教科書の第一部「概観」では、文学作品が生み出された歴史的背景や各時代特有の問題点が整理されています。レポートに取り組む前に、かならず目を通しておいてください。第二部「作家の顔」は個々の作家を研究する場合に、その生涯や作品の概略を知る上で参考になります。

【履修上の注意】

基礎的なフランス語の知識を有することが望ましい。

【関連科目】

「十九世紀のフランス文学Ⅱ」、「フランス文学概説」

【参考文献】

小倉孝誠（編）『十九世紀フランス文学を学ぶ人のために』世界思想社、2014年

【レポート作成上の注意点】

- 1) 対象とする作品を精読して、全体像を把握する。
- 2) レポートの課題にしたがって、作品の個々のテーマについて考察する。
- 3) 参考文献を参照し、論点を絞り込む。
- 4) 導入から結論に至る文章のアウトラインを考える。
- 5) 作品の引用を効果的に織り込みながら、自分の考えを展開する。
- 6) 引用文には出典と引用頁数を必ず明記する。

【成績評価方法】

科目試験による。

十九世紀のフランス文学Ⅱ (L 078-9801)〔3単位〕

【講義要綱】

19世紀フランス文学の文学史的概観に基づいて、個々の作品をそれ以前あるいは以後の作家の作品と関連させながら丹念に読み解いていくことを目標とします。

【テキストの読み方】

教科書の第一部「概観」では、文学作品が生み出された歴史的背景や各時代特有の問題点

が整理されています。レポートに取り組む前に、かならず目を通しておいてください。第二部「作家の顔」は個々の作家を研究する場合に、その生涯や作品の概略を知る上で参考になります。

【履修上の注意】

基礎的なフランス語の知識を有することが望ましい。

【関連科目】

「十九世紀のフランス文学Ⅰ」、「フランス文学概説」

【参考文献】

小倉孝誠（編）『十九世紀フランス文学を学ぶ人のために』世界思想社、2014年
高山鉄男編訳『モーパッサン短篇選』岩波文庫、2002年

【レポート作成上の注意点】

- 1) 対象とする作品を精読して、全体像を把握する。
- 2) レポートの課題にしたがって、作品の個々のテーマについて考察する。
- 3) 参考文献を参照し、論点を絞り込む。
- 4) 導入から結論に至る文章のアウトラインを考える。
- 5) 作品の引用を効果的に織り込みながら、自分の考えを展開する。
- 6) 引用文には出典と引用頁数を必ず明記する。

【成績評価方法】

科目試験による。

二十世紀のフランス文学 (L 055-8301、L 8337)〔3単位〕

【講義要綱】

20世紀においてフランスの作家、批評家たちの多くは、さまざまな政治的、社会的問題に直面し、書くことの意義についての反省を余儀なくされていたといえるでしょう。彼らが紙面上の文字を媒体とした創造行為に、いかなる可能性あるいは限界を見ていたのか、何が彼らを書くことへと向かわせていたのかなど、今日でも切実さを失ってはいない問題に、作品を精読しながら勇気を持って取り組んでください。作者の思想や登場人物の心情に安易に共感するのではなく、社会、世界、人間に対するどのような要請が作品の独自性を成り立たせているのかを、論理的に考察しましょう。

【履修上の注意】

フランス文学の専門科目ですから、少なくとも初級程度のフランス語を習得していることが望まれます。

【参考文献】

饗庭孝男・朝比奈誼・加藤民男編『新版フランス文学史』白水社、1992年
 福井芳男・阿部良雄ほか編『フランス文学講座』全6巻、大修館書店、1976-1979年

【レポート作成上の注意点】

選んだ作品を幾度も読み返し、中心となるテーマを把握することが大切です。その後で、テキストや参考文献を使い、作品の書かれた時代背景、その作家の創作活動全体に作品の占める位置などを正確かつ簡潔にまとめることから始めてください。そして本論では、多少大胆でも自分独自の見解を展開していくことが不可欠です。「私と作品の出会い」、「人生を変えたこの一冊」といった体裁のエッセーや読書感想文は問題外ですし、自分で理解する努力をせず、概説書の内容の引き写しに終始することも厳禁です。また、参考文献からは適宜、対象作品からは必ず引用をして、引用文末尾または脚注で、著者、タイトル、翻訳者名、出版社、出版年、ページなどの出典を明確にしてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

ロシア文学

(L 101-0701)〔2単位〕

【講義要綱】

ロシア文学は19世紀中葉に世界の最高峰にまで登りつめた文学で、その伝統は今でも生きています。トルストイやドストエフスキーやチェーホフなど、ぜひ人類の遺産とも言うべきロシア文学に、一度触れてみませんか。

当テキストは、ロシア文学を実際に手にとって味読してもらうための手引書であり、中世から19世紀、20世紀を経て現代に至るまでのロシア文学の彩り豊かな世界へと誘うものです。ゴーゴリやドストエフスキー、ブルガーコフ、パステルナーク、ソルジェニーツィン、ナボコフ、そしてペレーヴィンらの魂を揺さぶるような、あるいは読者の世界観までも変えてしまうようなエネルギーを感じてほしいと思います。また、ロシア文学を今日の視点から読み直し、私たちにも通ずる普遍的でアクチュアルな問題を考察するために、ジェンダーやポスト・コロニアリズムなど小説を読み解く視座を呈示するとともに、小説の普遍的テーマがオペラやバレエ、演劇、映画など他の芸術ジャンルによって表現されたケースについても紹介しています。ロシア文学の作品世界を多様な芸術言語で横断的に楽しむ案内として役立ててください。

なお、レポートの作成の際には、このテキストだけでなく参考書や他の参考文献も併用してください。科目試験では、テキストの中から重要と思われるテーマを選んで出題します。

【テキストの読み方】

1 回目は個々の具体的な作品や作家の具体的な人間像を追って、イメージしながら読む。続いて2回目は、ロシアの時代の流れを通して、文学の主義や思想などを読み込む。そして3回目は、その他の細かい部分にも注意して読む。都合3回読むことで、テキストの内容が頭に入ってくると思います。

【参考文献】

水野忠夫編著『ロシア文学 名作と主人公』自由国民社、2009年
藤沼貴・水野忠夫・井桁貞義編著『はじめて学ぶロシア文学史』ミネルヴァ書房、2003年
藤沼貴・小野理子・安岡治子『新版 ロシア文学案内』岩波文庫別冊、2000年
川端香男里『ロシア文学史』東京大学出版会、1996年

【レポート作成上の注意点】

ロシア文学全体の流れをつかんだ上で、対象作品を精読して下さい。論述に際しては、課題で何が求められているのかを把握した上で、レポート全体の構成を考えてから執筆に取り組むようにしてください。引用・援用部分には必ず註を付けて典拠を明示してください。対象作品は何を用いたか、明記して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

ラテン文学

(L 056-8402、L 8452)〔1単位〕

【講義要綱】

古典ラテン語で書かれた文学（古代ローマ文学）の主要な作家及びその作品について、基本的な知識を学ぶと共に、翻訳を通じてその実例に触れることを目的とする。

【履修上の注意】

特にありません。

【レポート作成上の注意点】

作品の翻訳を読み、それに対する自分の考え、感じ方を述べるようにこころがけて下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

学問分野別
P9

分野別

総合教育科目
P51

総合

文学部
P89

文

経済学部
P167

経

法学部
P205

法

教職
P269

教職

科目別履修要領

〔経済学部専門教育科目〕

- ・履修要領には、絶版となった参考書も記載してあります。これは、「その参考書が学習上有益である。」と担当者が判断したものです。可能な範囲で図書館などで捜して学習することをお勧めします。
- ・この科目別履修要領の講義要綱には、科目名の「新」・「改訂」が省略されている箇所があります。

【講義要綱】

ミクロ経済学およびマクロ経済学からなる経済学の基礎理論を学習する科目である。

マクロ経済学が国民総生産・失業率・物価水準といった経済全体の集計量を考察するのに対し、ミクロ経済学は個々の経済主体の経済活動を分析対象とするという差異はあるが、ミクロ・マクロ経済理論は現実経済に対する一貫したものの見方を提供している。この科目は他の多くの経済学の分野に応用されるような、経済学の基礎理論を学ぶことを目的とする。

【テキストの読み方】

図や式の意味をよく理解するようにして下さい。

【履修上の注意】

ある程度の数学的知識と論理的思考力を前提とします。

【参考文献】

塩澤修平『経済学・入門（第3版）』有斐閣、2013年

塩澤修平『基礎コース・経済学（第2版）』新世社、2011年

【レポート作成上の注意点】

記述のうえで、それが仮定あるいは前提であるのか、論理的展開であるのか、論理的帰結であるのか、といった区別を明確にして下さい。

この科目は、前半・後半に分かれていて、それぞれにレポートを提出しなければならない。

前半は第1章から第14章まで、後半は第15章から終りまでとする。レポートはそれぞれ4,000字以内とする。

科目試験の受験については、『塾生ガイド』（または『教職課程履修案内』）を参照のこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

本講義は、人間の経済的社会的営みを研究対象とする学問である。本講義のねらいについては、テキスト（岡田泰男『経済史』）の第1章を精読すること。

【テキストの読み方】

テキストは第2章（古代の文明と帝国）において古代社会を通観した上で、第3章（中世の社会と経済）、第4章（市場の形成と拡大）および第5章（近代への道程）において中世

から近代に至るヨーロッパ経済の発展をとりあげ、第6章（工業化の開始）、第7章（工業化の波及）および第8章（国際経済の展開）において、工業化がヨーロッパから世界各地に波及することによって展開していく国際経済のあり方を扱い、第9章（現代の経済）の叙述に至っている。

【履修上の注意】

特になし。学習の方法としては、まずテキストを通読することがあげられる。より深い学習のためには、テキスト巻末（327～329頁）の「参考文献」の中から、1～2冊選択し、それを、自らの興味・関心に応じて活用するとよい。経済史学上の概念・用語でよく分からないものについては、『経済辞典』（有斐閣）や歴史学の事典などで調べながら理解を深めてほしい。

【関連科目】

西洋経済史（中世）、西洋経済史（近世）、日本経済史

【参考文献】

参考書は、テキストの末尾に掲げた参考文献の中から選ぶこと。自分勝手に、手もとにある本を参考にして書いてはいけない。

【レポート作成上の注意点】

- ①テキストのみを参照した場合には評価の対象としない。必ず、テキスト末尾の「学習の手引き」の中から参考書を少なくとも1冊選び、よく読んでからレポートを書くこと。
- ②注記の方法などについてはレポート・論文の作成マニュアルなどを必ず参照すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

経済政策学（E）

（E 059-0801）〔2単位〕

【講義要綱】

市場機構は万能ではないため、政府が直接・間接に市場に介入し、市場の失敗の是正をはかっています。

経済政策学は、このような政府の活動の現状を明らかにすると同時に、望ましいあり方を提示することを目的とする学問です。

本講義では、まず、必要な基本概念と経済理論を身につけ、その上で、直面する今日の政策課題を見極め、解決の方向を探ります。

【履修上の注意】

マクロ経済学およびミクロ経済学に関する知識をもっていることが望ましい。

【参考文献】

福田慎一・照山博司『マクロ経済学・入門』有斐閣 2011年（第4版）
岩田規久男・飯田泰之『ゼミナール経済政策入門』日本経済新聞社 2006年

【レポート作成上の注意点】

教科書を熟読するのみならず、巻末の参考文献や新聞・雑誌の経済記事・論文を読み、進んだ知識を積極的に取り入れるよう努力して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

財政論 (E)

(E 022-7602、E 7614)〔2単位〕

【講義要綱】

この講義の目標は、財政の理論、制度、歴史、政策を理解し、現代日本における財政問題について考えることができるようにすることである。その際、財政理論は欠かせないが、財政現象は法制度に立脚しているため制度論ぬきに語ることはできず、また、歴史的研究を軽視して財政学は成立しえない。そのため、理論のみならず制度、歴史、政策までを含めて学んでほしい。本講義は、日本における予算、政府支出、租税、公債などを対象とするが、それぞれの領域で近年関心が高まっている現実的な問題についても関心をもって学んでほしい。

【参考文献】

片桐正俊編著『財政学—転換期の日本財政（第2版）』東洋経済、2007年
金澤史男編『財政学』有斐閣、2005年
佐藤進・関口浩『財政学入門（改訂版）』同文館、1999年
神野直彦『財政学（改訂版）』有斐閣など、2007年

【レポート作成上の注意点】

政府の財政活動が経済や社会全体にどのような影響を与えるかを考えるうえで、基礎的用語や理論についての知識が不可欠であると同時に、現実の経済問題や社会問題について強い関心を持っていること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

- 第1章 資金循環と資金の過不足
 - 1-1 経済と金融の関係—資金循環勘定
 - 1-2 政府の資金不足の調整
 - 1-3 企業の資金過不足の調整 (I-S バランス)
- 第2章 企業の資金調達と投資
 - 2-1 日本企業の資金調達と投資
 - 2-2 利子率と投資の関係
 - 2-3 トービンの q と企業の投資
- 第3章 金融商品のリスク制御と価格計算
 - 3-1 日本の家計のポートフォリオ
 - 3-2 債券市場・株式市場
 - 3-3 新しい金融商品とオプションの価格計算
- 第4章 金融機関の仲介機能と証券市場
 - 4-1 日本の金融機関の構成
 - 4-2 銀行・協同組織金融機関、貸金業
 - 4-3 証券会社と証券市場
 - 4-4 生命保険会社・損害保険会社
 - 4-5 機関投資家
- 第5章 金融行政と金融政策
 - 5-1 金融システムの安定と BIS 規制
 - 5-2 証券化とオフバランスシート
 - 5-3 金融政策と短期金融市場の金利調節
 - 5-4 インフレ・ターゲティングとテイラー・ルール
- 第6章 財政と財政投融资
 - 6-1 国債の発行増と金融機関の保有増
 - 6-2 財政投融资制度と財政投融资改革
 - 6-3 郵便貯金
- 第7章 貿易・資本移動と外国為替
 - 7-1 国際収支
 - 7-2 外国為替決定理論
 - 7-3 国際資本移動と国際金融のトリレンマ
 - 7-4 ユーロの危機
- 第8章 金融のミクロ理論

8-1 家計の金融行動

8-2 企業の金融行動

8-3 銀行の金融行動

第9章 金融のマクロ理論

9-1 IS-LM モデル

9-2 所得と利率の決定

9-3 物価の決定—総需要—総供給モデル

9-4 合理的期待形成と金融政策

9-5 IS=LM=BP モデル（オープン・マクロモデル）

【成績評価方法】

科目試験による。

新・経営学（E）

（市販書採用科目）（E 072-1491）〔3単位〕

【テキスト】

岡本大輔・古川靖洋・佐藤和・馬場杉夫『深化する日本の経営』千倉書房、2012年

【講義要綱】

経営学は、企業経営、企業組織、経営者行動など、組織と経営現象に関する幅広いテーマを対象とした学際的な学問です。本科目では、その中でも、コア領域である、経営管理論、経営戦略論の分野を主な対象としています。これらを通じて、企業はどのように戦略的な意思決定を行うのか、組織運営の原理・原則は何か、成功する企業と失敗する企業の違いを説明することはできるのか、について学んでいただき、社会・経済の中で不可欠な存在である企業と組織に関する理解を深め、新しい視点から物事を観察し、解釈できる目を養っていただければと思います。

【参考文献】

浅羽茂・牛島辰男『経営戦略をつかむ』有斐閣、2010年

浅羽茂・須藤美和『企業戦略を考える：いかにロジックを組み立て、成長するか』日本経済新聞出版社、2007年

【レポート作成上の注意点】

設問の意図を正確に理解し、レポートの構成を考えてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

現実の経済は常に循環・成長しており、様々な経済変動にさらされている。この科目の目的は、こうした経済の変動のようすを理論的に探究し、変動の原因・理由を解明することにある。したがって分析対象は、必然的に経済の動的な側面となる。たとえば国民所得や雇用（失業）の循環的変動や成長は、本科目の主要な関心事である。経済変動論は、景気循環理論と経済成長理論の2つの部分からなる。

【テキストの読み方】

予備知識として「経済原論」の内容が必要となる。「経済原論」を履修、できれば単位を取得していることが望ましい。

【参考文献】

オリビエ・ブランシャール著、鴫田忠彦ほか訳『ブランシャール マクロ経済学（上）（下）』東洋経済新報社、1999年

ロバート・E・ルーカス著、清水啓典訳『マクロ経済学のフロンティア 景気循環の諸モデル』東洋経済新報社、1988年

【レポート作成上の注意点】

論理的な筋道をよく考えながら作成してほしい。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

2020年の東京オリンピック開催が決まり、久しぶりに希望が見えてきた日本ですが、2020年のオリンピックは「日本オリンピック」ではなく「東京オリンピック」であるので、東京が発展する一方で地方が衰退して東京・地方間格差が拡大すると懸念されていますし、国際競争力の低下、財政赤字の累積等々、日本の諸問題を東京オリンピックが全て解決するとも考えられません。

実際、「時代が新しくなる局面では、経済が成長しながら格差が広がる」という傾向が1971年のノーベル経済学賞受賞者・クズネッツ氏（Simon Smith Kuznets, 1901-1985）によって見出されていますし、「景気が良くなったためにかえって構造改革が遅れ、不況後の停滞が長期化する」ということもバブルの生成・崩壊、その後の「失われた20年」で経験済みです。

本講義では、このようにピンチとチャンスに満ちた経済を理解するための基礎理論、すなわち「国民所得論」について、その考え方を分かりやすく、しかも詳しく解説します。国民経済計算、短期の国民所得の決定の理論、中期・長期の国民所得の変動に関する理論、財政・金融政策の有効性・無効性などが主な項目です。

【テキストの読み方】

経済学は積み重ねの上に成り立っていますので、用語を正確に把握して読み進めて下さい。特に数式については、その意味を十分に理解することが必要です。わからなくなったら前に戻って用語や数式を再確認するよう心がけて下さい。

【履修上の注意】

J.M.ケインズが述べているように、経済学を学ぶ際には、出来合いの特効薬についての知識を詰め込むより、その発想や考え方を学ぶ方がはるかに大切です。

マクロ経済理論的な発想や考え方を学び、それに基づいて現実の経済を観察し、新たな認識の構造を築いていただけたらと希望しています。

【関連科目】

「経済原論」を履修済みであることが望まれます。

【参考文献】

ピケティ、T. 著・山形浩生他訳『21世紀の資本』（みすず書房）

藤田康範『ビギナーズマクロ経済学』（ミネルヴァ書房）

【レポート作成上の注意点】

課題が求めていることを十分に読み取ってから着手し、全体の構成をよく考えて、結論に至る論理の道筋を整理してまとめて下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

計量経済学

（市販書採用科目）（E 069-1191）〔2単位〕

【テキスト】

秋山裕『Rによる計量経済学』オーム社、2009年

【講義要綱】

現代の経済分析では、計量的手法は欠かせない存在になっています。「計量経済学」は、経済理論を用いて実際の経済を統計学的に研究する学問です。非常に応用範囲が広く、学ぶべき項目も数多くあります。そのため、計量経済学を効率的に学ぶにはきちんとした段階を踏む必要があります。最初に（1）分析方法の基礎、（2）経済分析において生じやすい分析

上の問題とその解決方法を学んだ上で、(3) 各自の持つ研究課題への応用という実践の段階に進むことが可能となります。

この科目では、計量経済学の基礎である上記 (1)、(2) について、最近、利用が広まっている計量ソフトである「R」を用いながら学びます。この科目で学んだことを卒業論文などで現実の問題を研究するにあたって活用することにより、実践での力もついていくでしょう。

【テキストの読み方】

第1、2章では、計量経済学の考え方、実証分析の進め方について、第3、4章では、統計学で学んだ単純回帰の復習をしながらの「R」の基本操作について学びます。そして、第5章以降では、「R」の機能を活用しながら計量経済学の基本を学んでいきます。各章に例題があり、「R」による分析のしかたが説明されていますので、「R」を用いて結果を再現しながら読み進めていくとよいでしょう。また、章末問題は、実際の分析例を検討しながら各章で学んだことの復習を行えるようになっています。科目試験ではこのようなタイプの問題が出題され、計量経済学に関する理解が問われます。

実際に「R」を操作して計算することが理解への早道であるだけでなく、皆さんが卒業論文などで実証的分析を行う際に役に立つでしょう。

【履修上の注意】

「経済原論」および「統計学」を事前に学習しておいてください。これは、「計量経済学」が、経済理論を用いて実際の経済を統計学的に研究する学問であるためです。また、数学については微分の知識が必要となりますが、そのレベルは「経済原論」で用いる程度をきちんと理解していれば問題はありません。

【関連科目】

「経済原論 (E)」および「統計学 (A)」の学習を終えていること。

【参考文献】

小暮厚之『Rによる統計データ分析入門』朝倉書店、2009年

福地純一郎・伊藤有希『Rによる計量経済分析』朝倉書店、2011年

蓑谷千風彦『計量経済学 (第2版)』多賀出版、2003年

【レポート作成上の注意点】

計量経済学は計算結果を求め、図表も書く科目ですので、特に分量に制約を設けません。添字、分数などの数式の表記が正確に出来る者のみワープロで提出することができます。

これらの表記が不明瞭であった場合は採点の対象とはなりません。

また、計量経済学のレポートではテキストで取り上げられるデータ分析の実践に重点が置かれるため、論述形式のレポートのような参考文献の使用は必要ありません。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

杉山伸也『日本経済史 近代—現代』岩波書店、2012年

【講義要綱】

日本経済史は、日本経済の変化を歴史的に分析・解明する学問であるが、地域的にも時期的にも多様な地域や社会の多様な経済事象を一般化して議論することは容易ではない。また研究者の問題意識やアプローチも、現実社会の変化や実証研究の進展によってかわってくる。経済史を学習するためには、経済史の研究文献だけではなく、隣接する政治史・思想史・社会史などの文献を広く読んで、歴史をみる眼を養うことが大切である。

テキストは、17世紀の徳川幕府成立前後の時期から戦後まで約400年にわたる日本経済の変化をマクロ的に概観したものである。受講生は、テキストの学習を中心としながらも、参考文献も参照しながら効果的な学習をすすめてもらいたい。

【テキストの読み方】

各章の前後関係に注意して、熟読するように心がけてください。

【履修上の注意】

本科目では原則としてテキストにもとづいて試験問題を出題しているが、レポートなどではテキスト以外の参考文献も活用して、受講生が最近の研究成果を把握できるように指導している。テキストはもちろんのこと、参考文献についても多くを読みこなしたうえで、科目試験やレポート作成にのぞんでほしい。

【参考文献】

梅村又次他編『日本経済史』（全8巻）岩波書店、1989～90年

三和良一、原朗編『近現代日本経済史要覧』（補訂版）東京大学出版会、2010年

【レポート作成上の注意点】

- ①参考書を利用していないレポートが多く見られますので、参考文献・引用文献（ページも明記）を明記してください。
- ②レポートの課題の意味をよく考え、テキストや参考書をよく読み直したあとで、課題に対応したレポートを執筆してください。
- ③レポート用紙の使い方を間違えず、縦書きと横書きを混乱しないようにしてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

本科目は、世界史の構造的理解という壮大なパースペクティブにもとづいて西洋の中世経済を把握することを意図している。したがって、中世の西洋経済史の概説という枠を超えて、テキストの著者（寺尾誠本塾大学名誉教授）による世界史の構造的理解についての一定の理解の上に立って、西洋の中世経済を世界史の脈略の中でとらえるという問題意識を共有することが求められる。もちろん、テキスト末尾の「学習の手引」に述べられているように、参考文献目録に挙げられた参考書を併読し、自らの歴史理解を深めることが本科目の履修の最終目的であることは言うまでもない。

【履修上の注意】

事前に履修すべき科目は特にない。履修にあたり、最低限の知識として必要なのは高校段階の「世界史」および「日本史」で取り上げられている事実である。また、テキスト末尾の「学習の手引」の〈参考文献解説〉は必ず熟読していただきたい。

【参考文献】

J. クーリッシュェル『ヨーロッパ中世経済史』東洋経済新報社（絶版）

D. C. ノース、R. P. トマス『西欧世界の勃興：新しい経済史の試み』ミネルヴァ書房

【レポート作成上の注意点】

古代から近代に至る長期的な歴史の流れを意識しながら、その中に中世的発展の諸類型を位置づけることが肝要である。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

本科目は、世界史の構造的理解という壮大なパースペクティブにもとづいて西ヨーロッパにおける経済、社会、文化の近代化の過程を把握することを意図している。したがって、近世の西洋経済史の概説という枠を超えて、テキストの著者（本塾大学名誉教授 寺尾誠氏）による世界史の構造的理解についての一定の理解の上に立って、西ヨーロッパにおける経済、社会、文化の近代化の過程をとらえるという問題意識を共有することが求められる。

【テキストの読み方】

テキストを精読する場合には、テキスト末尾の「学習の手引」に述べられているように、参考文献目録にあげられた参考書を併読し、自らの史実理解の方法を発見することが本科目

の履修の最終目的であることを踏まえていただきたい。

【履修上の注意】

事前に履修すべき科目は特にない。履修にあたり、最低限の知識として必要なのは高校段階の「世界史」および「日本史」で取り上げられている史実である。また、テキスト末尾の「学習の手引」は必ず熟読していただきたい。

【関連科目】

経済史、西洋経済史（中世）、日本経済史

【参考文献】

「学習の手引」の参考文献の中から参考書を選ぶこと。自分勝手に、手元にある本を参考にして書いてはいけない。

【レポート作成上の注意点】

- ①テキストのみを参照した場合には評価の対象としない。必ず、テキスト末尾の「学習の手引」の中から参考書を少なくとも1冊選び、よく読んでからレポートを書くこと。
- ②注記の方法などについてはレポート・論文の作成マニュアルなどを必ず参照すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

社会思想史

（市販書採用科目）（E 073-1591）〔4単位〕

【テキスト】

坂本達哉『社会思想の歴史—マキアヴェリからロールズまで—』名古屋大学出版会、2014年

【講義要綱】

本科目では、近代・現代の社会思想の歴史的展開を、「自由と公共の相克」という視点から統一的に概観する。現代は高度に発達したグローバル資本主義の時代であるが、現代社会の諸問題を真に理解するには、マキアヴェリからロールズまでの西欧社会思想500年の展開をふかく理解し、その根底をつらぬく「自由と公共の相克」の論理を知る必要がある。思想家たちは、各自が生きた時代と社会を、哲学（人間本性の探求）と社会科学（政治と経済の探求）の二つの眼で探求してきた。彼らの思考は過去から受け継いだ思想伝統を継承しつつ、それを新たな時代のなかで大胆に革新することによって生まれたものである。社会思想の歴史における伝統と革新の絡まり合いを「自由と公共の相克」と言う視点から解きほぐし跡づけること、それが本科目の狙いである。指定教科書の構成は次の通りである。

序 章 「社会思想」とは何か

- 第1章 マキアヴェリの社会思想
- 第2章 宗教改革の社会思想
- 第3章 古典的「社会契約」思想の展開
- 第4章 啓蒙思想と文明社会論の展開
- 第5章 ルソーの文明批判と人民主権論
- 第6章 スミスにおける経済学の成立
- 第7章 「哲学的急進主義」の社会思想—「保守」から「改革」へ
- 第8章 近代自由主義の批判と継承—後進国における「自由」
- 第9章 マルクスの資本主義批判
- 第10章 ミルにおける文明社会論の再建
- 第11章 西欧文明の危機とヴェーバー
- 第12章 「全体主義」批判の社会思想—フランクフルト学派とケインズ、ハイエク
- 第13章 現代「リベラリズム」の諸潮流
- 終章 社会思想の歴史から何を学ぶか

【テキストの読み方】

テキストの内容は幅広く、論点は多岐にわたるが、一章ずつ読み進めていくなかで、過去の思想家との学問的対話を楽しみ、現代社会における「自由と公共の相克」という問題を考え直してもらうことが期待されている。そのためには、何よりも履修者自身の積極的な問題関心が不可欠であり、単位さえ取ればよいと言う姿勢では、4単位相当の本テキストを読破することはできない。自分が生きる時代と社会の問題を見つめながら、そのヒントを偉大な思想家たちの言説にもとめようとする主体的な問題意識が要求される。

【履修上の注意】

本科目は経済学部の特設科目としては対象とする範囲が幅広い。狭義の経済学はもちろん、哲学、思想、歴史、文化、芸術など、関連諸分野への幅広い関心がもとめられる。

【関連科目】

総合教育科目では、哲学、歴史（西洋史）、政治学、社会学などが関連深く、経済学部専門科目では、経済原論、経済史、西洋経済史（近世）、経済学史などが重要であるが、いずれも本科目の履修条件というわけではない。これらの科目を本科目と平行して学ぶことにより、本科目の理解は大いに助けられるであろう。

【参考文献】

本テキストは類書のなかでも参考文献の充実を特徴のひとつとしている。履修者は各章ごとに示された数多くの文献から、自分の関心に近いものを選び、慶應義塾の図書館をフルに利用しながら、できる限り眼を通すことが望ましい。テキストの全体像を理解する上で購入するに値する類書としては、次のものがある。

水田洋『新稿 社会思想小史』ミネルヴァ書房、2006年。

R.L. ハイブルローナー『入門経済思想史 世俗の思想家たち』ちくま学芸文庫、2001年。

川出良枝・山岡龍一『西洋政治思想史』岩波書店、2012年。

【レポート作成上の注意点】

レポート作成の技術的側面については補助教材に示された基本的内容や参考文献を十分に踏まえること。本科目のレポート執筆においてとくに重要なことは、テキストの内容を上手に要約しただけのレポートはたかく評価されないという点である。課された「問題」の意味を自分がどのように理解したかを示した上で、論述内容に自分自身の問題関心や思考の跡が分かるような内容が望まれる。また、レポート作成上にとくに参考とした文献をいくつか明示することも重要である。

【成績評価方法】

科目試験による。

社会政策 (E)

(市販書採用科目) (E 068-1191)〔2単位〕

【テキスト】

駒村康平『福祉の総合政策〔新訂5版〕』創成社、2011年

【講義要綱】

本講義の目的は、急速な少子高齢化の中、社会政策の中で比重を増した社会保障制度の理解と社会経済システムとの整合について検討し、望ましい政策を自ら考えられるようにすることを目的としている。具体的政策としては、社会保障制度の中心領域である年金、医療、福祉以外に、関連領域である人口、家族、財政、労働等についてもカバーしている。

1. 成熟化社会、少子・高齢化社会における社会保障
2. 社会保障制度の機能と歴史
3. 社会保険（年金・医療・介護・雇用・労災保険）
4. 児童・高齢者・障害者のための福祉政策
5. 生活保護
6. 雇用政策（最低賃金制度）
7. 制度改革の方向性

【テキストの読み方】

まず第1～3章で、現行の社会保障制度を取り巻く変化を理解したうえで、第4章で社会保障制度の機能、第5章で社会保障の歴史を学んでください。第7章以降は各論ですので、各々関心をもった制度について掘り下げて、学んでください。第19章は、社会保障制度の枠組みの中で、どのように効率性を高め、限られた資源でより充実した社会保障を提供できる

か、理論的背景とともに学び、社会保障の将来のあるべき姿について考えてください。

【履修上の注意】

経済学的な考え方を中心とした解説となっていますので、経済学の基本的な知識があった方が理解しやすいでしょう。また下記関連科目を併せて履修すれば、一層理解が深まるでしょう。

【関連科目】

「財政論」「人口論」「産業社会学」「労働法」

【参考文献】

城戸喜子・駒村康平編（2005）『社会保障の新たな制度設計』慶應義塾大学出版会。

厚生労働省『労働経済白書』、『厚生労働白書』各年版

厚生労働省サイト（<http://www.mhlw.go.jp/>）

【レポート作成上の注意点】

執筆する前にまず『塾生ガイド』（『教職課程履修案内』）の「レポート作成上の注意」をお読みください。課題1・2共に、引用・参考箇所（指定テキストを引用・参照する場合も含む）はレポート本文中に「 」等の記号を用い、またどこからの引用・参照なのか著者姓（出版年）該当のページ数まで明示したうえで、対応する参考文献リストをレポートの末尾に掲載してください。また節ごとに小見出しを付け、内容的な区切りを明示してください。こうしたレポート作成のガイドラインに沿っていない場合、添削不能として内容にかかわらず再提出となります。

また課題2については、政策に関するレポートですので、何らかの政策提言を行ってください。その際には、その政策提言の論拠を最新データに基づき明確に示してください。データはテキスト掲載以外のデータも併せて使用してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

国際貿易論

（市販書採用科目）（E 063-0991）〔4単位〕

【テキスト】

木村福成『国際経済学入門』日本評論社、2000年

【講義要綱】

国際貿易論は、貿易パターンの決定メカニズムを分析する国際分業論と政策効果や社会的厚生の変化を分析する貿易政策論という2つの部分から成る。本講義ではその両者を学ぶ。それらを踏まえ、企業活動のグローバル化が進み、国際取引チャンネルの多様化が進行する

国際経済の実態を理解するための経済学的・政治経済学的アプローチを考察し、さらに世界貿易機関（WTO）や自由貿易協定（FTA）等を通じた国際政策規律の意味するところを検討する。

【履修上の注意】

「経済原論」を履修済みであること。

【参考文献】

馬田啓一・木村福成編著『通商戦略の論点：世界貿易の潮流を読む』文真堂、2014年

【レポート作成上の注意点】

レポート作成にかかる前に、題意をよく理解し、参考書を丁寧に読みこなしてもらいたい。執筆にあたっては、論旨が明確に伝わるように全体の構想を立て、その中でひとつひとつの文章、段落を練り上げていくことが望ましい。参考書を丸写しにせず、引用する場合は必ず注をつけること。

【成績評価方法】

科目試験による。

産業社会学 (E)

(E 020-7502、E 7553)〔2単位〕

【講義要綱】

現代社会は、産業化と切り離せない。産業社会学は、産業化された現代社会の社会的・人間的側面を明らかにしようというものである。現代人は、企業・官庁・非営利組織など、ほぼ例外なく何らかの組織に帰属して生活している。本科目で考えるべきことは、産業化にともなう諸課題であり、産業革命と市民革命の関係、大量生産方式と大衆社会の到来、組織とコミュニティの問題、組織と個人の目的、その効率性と人間性、組織による人間疎外とその克服、あるいはリーダーシップやプロフェッショナルリズム、余暇と労働の問題など、そのテーマは幅広く、しかも身近である。みずからの仕事と生活をふりかえり、現代を考えるという意味で、生涯学習に最適な課題を含んでいる。本科目の学習を通じて、現代社会について一歩踏み込んで考えてほしい。

【テキストの読み方】

テキストは、書かれている数字や時代背景に古いものがあるが、時代を超えた「古くて新しい問題」を提起している。含蓄ある表現が随所にみられ、示唆に富むものでもある。テキスト全体の底流に流れている大きな主張を読み取ってほしい。

【履修上の注意】

産業化はわれわれのまわりに深く浸透している。産業化が社会や個人におよぼした影響を

他人ごとのように批判するのではなく、自分のこととして考えてほしい。他人の文章を借りるのではなく、自分の考えをしっかりと主張することが、履修上の条件である。

【関連科目】

特に指定しないが、経済学、経営学、社会学、心理学などに広がるテーマに関心をもっておいてほしい。

【参考文献】

- テラー『科学的管理法』ダイヤモンド社、2009年
- フロム『自由からの逃走』創元社、1984年
- ホワイト『組織のなかの人間』創元社、1984年
- バーナード『経営者の役割』有斐閣、1979年
- マグレガー『企業の人間的側面』産能大学出版部、1990年
- ハーズバーグ『仕事と人間』東洋経済新報社、1983年
- 井原久光『テキスト経営学（第3版）』ミネルヴァ書房、2008年
- 井原久光『社会人のための社会学入門』産業能率大学出版部、2012年など

【レポート作成上の注意点】

レポート課題はテキスト全体を通じて理解したことをたずねている。テキストの一部にある記述に頼るのではなく、全体を通じて学んだことをふまえて論じてほしい。また、今回のテーマは、産業社会に生きる私たちすべてに共通する課題といえる。社会批判や評論家的なレポートではなく、自分の問題として考えてほしい。レポートの分量については4,000字という制限にこだわっているわけではない。簡潔を旨としてほしいが、同時に、しっかりとした内容のものにしてほしい。

【成績評価方法】

科目試験による。

地理学 I (E)

(E 061-0901) [2 単位]

【講義要綱】

地理学 I は、経済地理における急速な変動である「トランスナショナル化」を中心テーマとして取り上げた科目として構成されている。「トランスナショナル化」とは、一般的な「グローバル化」と重なる現象であるが、地球規模、地域経済統合、国、地域、都市、と様々な空間的レベルにおいて、様相を変えながら立ち現われている。この実態については、歴史的な時間軸と地理的な空間軸の両方からとらえることが重要である。

この科目で行う学習としては、毎日、必ず新聞を読み、内外の動きを自分の頭で考える習慣を身につけることを目指して行うことを期待している。

【参考文献】

教科書の各章の章末に掲げられているものを中心に選んでいくようにすること。

【レポート作成上の注意点】

理論的な点についての理解度を示す記述を期待するとともに、その内容を事例についても分析を行うように課題を設定している。このことに期待して作成していただきたい。

【成績評価方法】

科目試験による。

地理学Ⅱ（地誌学）（E） （E 066-1001）〔2単位〕

【講義要綱】

地誌学の特徴は、唯単に、どの国やどの地域には何が存在するのかを調べ上げることだけではなく、それらの国々や地域において、これらの事物や事象が、時代とともに変化している有様や、他の国々や地域への影響や、他の国々や地域からの影響を調べ、何故そのような相互作用が起こるのかを考えることにある。

日常的にも、県民性や食文化ということについては話題になり、それぞれの人が、それぞれの考え方をもっているものであるが、今回のレポート作成にあたっては、非常に多数存在している関連する参考文献を利用し、これまで自分が抱いていたイメージを、客観的な事実やデータによって裏付けたり、新しい見方を獲得するように心懸けていただきたい。地誌学の面白さは、具体的事例を徹底的に調べ上げることから生まれる。

【参考文献】

郷土史、旅行ガイドブック、料理本など参考文献は限りなく存在するので、取捨選択が大切である。

【レポート作成上の注意点】

地誌学的知識と、いわゆる「常識」とは、どのように異なるのであろうか。単なる思いつきや固定観念（ステレオタイプなイメージ）だけで、この世界の中で生きて行くのは、つまらないことである。

地誌学の面白さは、様々な知見を、地域や場所という中で「総合化」することにある。レポートの作成にあたっては、複数の異なる視点からの知見を「総合化」するように心懸けていただきたい。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

河野稠果『世界の人口 [第2版]』東京大学出版会、2000年

【講義要綱】

現在約70億人の世界人口は、開発途上地域においてなおも増加が続いており、今世紀中に100億人に達する見通しである。同時に新興国を中心にめざましい経済発展を遂げつつある。一方、日本をはじめ多くの先進国は少子高齢化・人口減少に直面しており、経済・財政の面でも長期的な低迷に陥っている。とりわけ、日本は高齢化で世界の先頭を走っており、現在1億2700万人の日本人口は約50年後には8700万人、約100年後には4300万人にまで減少するという予測もある。21世紀に生きるわたしたちは、このように対照的な「膨張する世界」と「縮減する日本」がどのように向き合い、どのように交流していくのか、という大きな課題をつきつけられているといえよう。

この課題について考える上で、「人口学」の知識が不可欠である。「人口転換」と呼ばれる人口システムの長期的な変動（それは人口の総数だけでなく、年齢構造、人々のライフコースの変化でもあり、都市化や家族・ジェンダーのあり方とも連動している）が理解できれば、経済・社会システムの長期的な変化を理解する上で大いに助けになるに違いない。

1. 世界人口の動向
2. 人口転換と人口推計
3. 死亡力転換と長寿化のゆくえ
4. 出生力転換とリプロダクティブ・ヘルス／ライツ
5. 人口の年齢構造変化と社会経済開発
6. 都市化と国内人口移動
7. 国際人口移動
8. 人口と食料・資源・環境問題
9. 世界の人口開発問題と政策課題
10. 日本の人口問題

このうち1から9まではテキストの各章に対応している。

人口学の基本的な用語（定義・概念）、指標の見方、統計資料の入手・参照方法については、逐次解説する。これらの用語・指標・統計資料に関しては、下記参考文献のうち『現代人口辞典』、『世界の人口開発問題』、『人口統計資料集』を常時参照することが望ましい。

【テキストの読み方】

各章は基本的に各々のテーマについて、①現状と趨勢（国連等の統計資料による）、②要因、③政策課題を主な内容としている。ただし国連等の統計資料は1～2年ごとに更新されるため、より新しい資料が出ていることもある。この点については補足説明する。

【履修上の注意】

履修にあたって特別な知識やスキルは必要としない。初歩から順序立てて解説する。他の科目、一般書、マスコミ等で人口に関連した用語や指標を目にしたとき、よく留意し、テキスト・参考書を活用して理解に努めてほしい。

【関連科目・分野】

統計学

【参考文献】

阿藤誠・佐藤龍三郎（編）『世界の人口開発問題』原書房、2012年

人口学研究会（編）『現代人口辞典』原書房、2010年

国立社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集』（同研究所のホームページに掲載）

京極高宣・高橋重郷（編）『日本の人口減少社会を読み解く：最新データからみる少子高齢化』中央法規、2008年

宮本みち子（編）『人口減少社会のライフスタイル』放送大学教育振興会、2011年

河野稠果『人口学への招待：少子・高齢化はどこまで解明されたか』中央公論新社、2007年

阿藤誠・津谷典子（編）『人口減少時代の日本社会』原書房、2007年

和田光平『Excelで学ぶ人口統計学』オーム社、2006年

阿藤誠『現代人口学』日本評論社、2002年

（下記機関のインターネット・ホームページが参考になる）

国立社会保障・人口問題研究所

国連人口基金東京事務所

総務省統計局

日本人口学会

United Nations Population Division（国連人口部、英語）

【レポート作成上の注意点】

テキストを熟読すること。参考文献の中では特に『世界の人口開発問題』が参考になる。

【ワープロの使用について】

ワープロの使用は許可する。ワード、エクセルなどでの作表や作図なども可。但し、図表は多用せず、読み手の理解を促すため、明らかに必要と思われるところに使用すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

藤田弘夫・吉原直樹編『都市社会学』有斐閣、1999年

【講義要綱】

本科目は都市の多様な側面を社会学的に理解することを目的とする。テキストに即して、次の順序で議論していく。

序 章 都市社会学の方法と対象

第Ⅰ部 都市の活動と世界

第Ⅱ部 住民活動とコミュニティの形成

第Ⅲ部 生活世界と都市文化の変容

第Ⅳ部 都市の計画と管理

終 章 都市社会学の新しい課題

名著解題

【テキストの読み方】

テキストについては、全部の章を正確に熟読してください。マテリアルやコラム、名著解題まで試験の範囲に入ります。

【履修上の注意】

持ち込み不可ですので、内容について自分でまとめてください。単にキーワードの暗記だけでなく、内容を論じる問題になります。

【参考文献】

各章の終わりに掲載されている文献を参考にしてください。他に次のようなテキストも参考になります。

- ・町村敬志・西澤晃彦『都市の社会学』有斐閣、2000年
- ・園部雅久・和田清美編著『都市社会学入門』文化書房博文社、2004年
- ・吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』有斐閣、2013年
- ・松本康編『都市社会学・入門』有斐閣、2014年

【レポート作成上の注意点】

以下の5つの条件がそろわなければ合格となりませんので、注意してください。

1. テキスト以外に5点以上の参考文献を用いること。
2. 字数は3600字以上4000字以内（注を字数に含む。参考文献リストは字数に含めない）。
3. 論述は社会学的視点からなされること。
4. 注をつけること。
5. 参考文献リストを作成すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

経営管理論

(E 036-8501、E 8582)〔2単位〕

【講義要綱】

企業が長期に維持・発展をとげるためには従来研究されてきた経営管理技法の実践に加え、革新を通じあらたな戦略展開をはかることが重要となってきた。本科目では基本的な経営管理に関する理論を踏まえた上で、組織革新に纏わる管理問題を検討する。

【参考文献】

十川廣國『経営学イノベーション／1 経営学入門〔第2版〕』中央経済社、2013年
十川廣國『マネジメント・イノベーション』中央経済社、2009年

【レポート作成上の注意点】

「戦略経営」と「経営戦略」は異なる意味を持つことに留意すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

経営分析論

(E 030-7803、E 9183)〔2単位〕

【講義要綱】

- ①企業を評価するにあたり、評価とは何か、評価要因としてどのようなものがあるのか、それぞれの要因をいかにして加工し、総合的な判断を行うのか等の基本的な概念を学習する。
- ②経営分析で用いられる具体的な指標のそれぞれの意味を理解する。
- ③いくつかの指標を組み合わせた総合評価法について学ぶ。

【テキストの読み方】

テキストでは、ある程度の簿記や簡単な財務指標の知識がある事を前提に、それらを用いてどの様に企業を評価していくのかについて詳しく述べられています。そうした予備知識の無い学生は、下に挙げたような科目を同時に履修したり、参考文献等を活用するなどして学習してください。

【履修上の注意】

「会計学」、「簿記論」を併せて受講されることをお勧めします。

【関連科目】

「会計学」、「簿記論」、「経営学」、「経営管理論」、「経営数学」、「統計学」

【参考文献】

通商産業省産業政策局企業行動課編『総合経営力指標（製造業編、小売業編）』大蔵省印

刷局

あずさ監査法人編『有価証券報告書の見方・読み方（第8版）』清文社、2011年

K・G・パレプ他、斎藤静樹監訳『企業分析入門（第2版）』東京大学出版会、2001年

【レポート作成上の注意点】

全ての課題に解答してください。テキスト等を抜書きするのではなく、自分の言葉を使って出来るだけ詳細に論述してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

経営数学

(E 027-7603、E 7681)〔2単位〕

【講義要綱】

経営計画を策定する際、多くの手法が用いられる。そのほとんどはパソコンのソフトウェアによって自動的に実行される。したがって多くの場合、結果のアウトプットだけが示され途中の考え方、プロセスは示されない。重要なことはアウトプットの数字をどう解釈するかであるが、プロセスを理解していないと間違った判断を下す恐れが大きくなる。「経営数学」では現代企業が利用している数学的・統計的手法を使いこなすため、それら手法のプロセス理解を目的としている。

【テキストの読み方】

皆さんの中には、数学なんて真っ平ごめんだ、という方も多いと思いますが、それは今まで何のために数学を勉強するのか、という目的がはっきりしなかったからではないでしょうか。

経営数学のテキストは現代企業が経営計画を設定する上で欠かせない基礎的な手法を多く扱っています。それらを分かりやすく説明するために、あるパン屋さんを想定し、市場調査をしてニーズを調べたり、それに見合った設備投資をしたり、工場を建設する手順を考えたりしながら、それぞれに必要な手法を勉強していく、という構成になっています。なるほど、この手法はこんな時にこんな具合に使えるのか、ということが分かります。

何事も目的をもった勉強をすると効率もヤル気も飛躍的にアップする、ということを実感していただければ、と思っています。

【参考文献】

蓑谷千風彦『回帰分析のはなし』東京図書、1985年

有馬哲・石村貞夫『多変量解析のはなし』東京図書、1987年

石村貞夫『分散分析のはなし』東京図書、1992年

【レポート作成上の注意点】

課題はテキスト章末の練習問題ですから、テキスト本文をよく読んでから、問題を解いて下さい。他科目のレポートと異なり、参考文献を読む必要は特にありません。テキストを読んで、概念等が明確に理解できないときのみ、参考文献を使用して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

商業学

(市販書採用科目) (E 052-0191)〔2単位〕

【テキスト】

田村正紀『流通原理』千倉書房、2001年

【講義要綱】

製造業者によって生産された製品が、消費者によって消費されるまでの間には、所有、空間、時間、情報などに関して懸隔がある。これらのさまざまな懸隔を架橋するのが流通過程であり、それは、(1) 流通される製品、(2) 交換、物流、情報伝達、危険負担といった流通機能、および(3) 製造業者、卸売業者、小売業者などに代表される流通機関によって構成されている。そして、この流通過程は、全体的に見て、1つのシステムとして構造化・制度化されている。これが流通システムであり、それは市場経済が円滑に機能するうえで、きわめて重要な役割を果たしている。

さらに、流通システムの性質や役割は、生産技術や流通技術の進展、消費市場の変化、製造業者や流通業者の革新的なマーケティング活動などによって、動的に変化する。例えば、現在では、情報・通信技術の発展、市場の範囲のさらなる拡大、製品や組織間関係のモジュール化の進展が、流通システムに大きな変化をもたらしている。

本講座は、市場経済において重要な役割を果たしている流通システムの基本的な仕組み、また経済発展に伴う流通システムの変化傾向とその影響要因について理解することを目的としている。

【テキストの読み方】

- ・テキストの各章の最後にある要約を参考に（それに付け加える形で）、各章の内容をまとめたノートを作成すること。
- ・ある現象がなぜ生じているのかを理解すべく、その現象の背後にある原理（いくつかの重要な概念とそれらの間の関係）を押さえること。

【参考文献】

矢作敏行『現代流通：理論とケースで学ぶ』有斐閣アルマ、1996年

渡辺達朗・原頼利・遠藤明子・田村晃二『流通論をつかむ』有斐閣、2008年

【レポート作成上の注意点】

テキストと参考文献それぞれの課題に関連する部分をよく読んだうえで、解答すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

保険学

(E 043-9501)〔3単位〕

【講義要綱】

保険制度は、社会に存在する多種多様なリスクに備えて経済的保障を提供する経済制度として、既に私たちの生活に深く浸透しています。私たちの安定した生活は、多くの人々との関わりの中で、さまざまな保険制度に支えられています。保険学は、保険制度が、現実社会の中でいかなる仕組みや原理に基づいて、社会的あるいは経済的機能を果たしているのかを理解することを目的とします。その対象も、生命保険や損害保険に限らず、公的年金や医療保険などの社会保険の分野をも含んでいます。しかも、諸制度と相互関連を深めていることから、社会制度全体の理解が必要とされます。そして常に、現代社会における保険制度のあり方を意識することで、社会問題の本質を保険学の立場で理解することが最終的な目的となります。

【履修上の注意】

レポートの成績評価基準は、以下のとおりである。①テーマに対して的確に論述されているか、②参考文献を十分に読解したうえで論述されているか、③独自の見解を提示しているか、④規定字数を満たしているか、などの採点基準を設けて、総合的に評価する。

【参考文献】

- 堀田一吉・山野喜朗編著『高齢者の交通事故と補償問題』慶應義塾大学出版会、2015年
堀田一吉『現代リスクと保険理論』東洋経済新報社、2014年
堀田一吉『保険理論と保険政策—原理と機能—』東洋経済新報社、2003年
堀田一吉編著『民間医療保険の戦略と課題』勁草書房、2006年
堀田一吉ほか編著『保険進化と保険事業』慶應義塾大学出版会、2006年
田畑康人・岡村国和編著『人口減少時代の保険業』慶應義塾大学出版会、2011年
真屋尚生『保険の知識（第2版）』日本経済新聞社、2004年
下和田功編『はじめて学ぶリスクと保険（改訂版）』有斐閣、2007年
近見正彦・堀田一吉・江澤雅彦編著『保険学』有斐閣、2011年

【レポート作成上の注意点】

○まずは、できるだけ多くの教科書や参考書を一通り読んでから、課題を選択し、レポート作成に取りかかってください。一部分だけを読んで、無理にまとめようとすると、学習効

果はほとんどありません。

- 保険をめぐって現実社会で起こっている諸現象についても十分に関心をもってください。
現実社会と照らし合わせることによって、レポート作成の意義が大きく高まります。
- 自分なりのまとめ方を工夫してみてください。参考書にとらわれすぎずに、自分がどのように理解したかが伝わるような記述を心がけてください。
- 引用文献あるいは参考書については、必ず明記してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

会計学 (E)

(E 062-0901) [3 単位]

【講義要綱】

会計学、主として財務会計論の基礎を学習する。科目試験の出題範囲はテキストの内容に限るが、レポートの作成についてはより広範な学習にもとづくことを期待する。

【参考文献】

- 友岡賛『会計の時代だ』ちくま新書、2006年
- 友岡賛『会計学はこう考える』ちくま新書、2009年
- 友岡賛『会計学原理』税務経理協会、2012年
- 友岡賛（訳）『歴史に学ぶ会計の「なぜ？」』税務経理協会、2015年

【レポート作成上の注意点】

できる限り、自分の言葉をもって述べ、また、参考文献は明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

簿記論

(E 021-7602、E 7622) [2 単位]

【講義要綱】

「簿記論」では、企業の経済活動を秩序正しく組織的に記録・計算・整理し、経営成績ならびに財政状態を明らかにするための記帳技術である複式簿記を学びます。複式簿記は他の会計科目を学ぶ上で不可欠のものであり、また経営分析を行う際、貸借対照表・損益計算書等の財務諸表を読みこなすためにも是非とも必要な知識となります。それゆえ複式簿記の基礎はできるだけ早めに確実に習得して欲しいと思います。

「簿記論」の学習にあたっては、単にテキストを読むだけでなく、必ず自分で練習問題を

繰り返し解いてみるのが大切です。また、我が国ではここ数年、会計制度の変革が急速に進められています。必ず最新版の参考書を購入して変更点等を確認しながら学習して下さい。

【科目試験出題用指定参考書】

渡部裕亘・片山 覚・北村敬子編著『新検定 簿記講義 3級商業簿記』中央経済社

【参考文献】

『新検定簿記講義 3級商業簿記』中央経済社・『新検定簿記講義 2級商業簿記』中央経済社など、日商簿記検定用の商業簿記3級・2級のテキストおよび問題集。

*必ず「何年版」かを確認の上、最新のものを購入するようにして下さい。

【レポート作成上の注意点】

- ①参考書も利用して必ず全問解答してから提出すること。
- ②解答に赤インクペンは使用しないこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

原価計算

(市販書採用科目) (E 067-1191) [2単位]

【テキスト】

園田智昭・横田絵理『原価・管理会計入門』中央経済社、2010年

【講義要綱】

原価計算は、特に原価情報の収集、伝達を目的に展開される企業会計の一分野である。原価計算を行うのは、一方で、その基礎数値を提供して企業外部に報告する財務諸表の作成を行うためであり、他方で、経営管理に役立つ情報を提供して企業経営の効率性・効果性の向上に資するためである。本講義は、原価計算の理論と計算方法の概要について学習することを目的とする。概ね以下の項目を学習する。(1) 原価計算の意義と目的、(2) 原価要素の分類、(3) 費目別計算、(4) 部門別計算、(5) 製品別計算、(6) 標準原価計算、(7) 利益管理のための原価計算、(8) その他。

【テキストの読み方】

学習に際してのテキストの使用にあたっては、次の点を注意すること。

- ①原価集計の流れ及び学習項目の位置づけを把握し、自分が現在学習しているのはどの部分なのかを意識しながら学習すること。
- ②面倒でも、原価の集計プロセスを、数字を跡づけながら学習すること。
- ③原価計算は計算が中心であるから、読むだけでなく実際に計算をしながら学習していくこと。

- ④まず、理解すること。理解したら、理解したことをスムーズに計算できるように練習すること。

【履修上の注意】

会計学、経営学に関する基礎的な学習が済んでいることが望ましい。

【参考文献】

小林啓孝『現代原価計算講義（第2版）』中央経済社、1997年

岡本清『原価計算（6訂版）』国元書房、2000年

【レポート作成上の注意点】

学習にあたっては、原価計算の大きな流れを理解し、個別の学習項目がそのどこに当たるのかを常に意識すること。原価計算は、文字通り計算が中心であるので、理論的学習と計算練習を常に連動させること。理論を理解するための計算の練習であり、計算を練習するための理論の理解である。レポート作成にあたっては、テキストの内容をよく理解した上で、自分の言葉で簡潔に説明すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

会計監査

（市販書採用科目）（E 065-1091）〔2単位〕

【テキスト】

鳥羽至英『財務諸表監査 理論と制度【基礎篇】』国元書房、2009年

※監査基準の改訂（平成21年4月9日）に伴い、第21章の一部が改訂されています。下記のWEBサイトにて各自ご確認ください。

http://www.kunimoto.co.jp/contents/audit/s_tobaauditkiso.html

【講義要綱】

監査論の基礎を学習する。科目試験の出題範囲はテキストの内容に限るが、レポートの作成についてはより広範な学習にもとづくことを期待する。

【参考文献】

友岡賛『会計士の誕生』税務経理協会、2010年

友岡賛『会計学原理』税務経理協会、2012年

【レポート作成上の注意点】

できる限り、自分の言葉をもって述べ、また、参考文献は明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

「法学概論」は、文学部および経済学部の専門教育科目として開講されるが、学習の目的とするところは、法律学の基礎的事項についての知見を掌中にあることにある。今後の日常生活で法との接点を持たなければならない状況が生じた際に、そこで得た知識を生かすこと、本講義を通じて法律学への興味が芽ばえ、さらに多くの法分野への取り組みを試みる「きっかけ」となる気持ちが生ずること、新たに修得した異なる分野に関する知識を、自らが専攻する文学・経済学・商学のより深い理解のための拠りどころとすること、いずれも本講義の目指す主旨に叶うものである。そうした意味で当該学科目の位置づけは、まさに「入門講座」の一語に尽きよう。

【テキストの読み方】

さて、それがために、皆さんに提供されたテキストは、できる限り平易な文章で綴られ丁寧な説明により要点の理解が可能であるよう心掛けて執筆された。もちろん初学者にとっては、それでさえも目の前に広がる未知の世界が、得体の知れない茫漠たるものに映るのは、むしろ当然のことであろう。しかし、まず第一歩を踏み出さないことには、何も始まらない。そこで学習をする、つまりテキストを読み進むために二つの提案をしておきたいと思う。

まず第一は、ひとたびテキストを読み始めたら、自分のできる範囲で分量・日程の予定を組み、冒頭から末尾までなるべく連続した期間のなかで、必ず順を逐って読み切ることを勧めたい。費やす期間はあまり長くないこと、毎日とはいわないまでも前回の記憶の途切れない程度の連続性が必要である。また、読み方は、多少乱暴な表現と受け取られるかも知れないが、とにかく「読破通読」を目標に遮二無二に読む、途中いささか理解に苦しむ箇所があっても、それはそれとして、決して章や一文の飛ばし読みをせず、最終ページにたどり着く姿勢が肝要である。

第二は、テキストを読み進める際に、まずその内容の国語的理解に努めること、すなわち個々の項目についての専門性を主眼とする細密な理解は二次的なものとし、そこに書かれている「日本語」の内容を正確に読み解くことに力を注いで欲しい。用いられた漢字や比喩の意味、主語・述語や文章の構造への誤りない把握は、いかなるジャンルのものであれ日本語による著作を受容する第一歩である。そこで、テキスト読了に向けて日本文の文意文脈を正しく捉えるための道具として、常に国語辞典や漢和辞典を座右に置き、手間を厭わず活用して欲しい。確かに法律学の世界に特有の専門用語の意味が正しく捉えられていないと、入門書とはいえ理解に齟齬を生じる場合もおき得るリスクは否定しないが、そうした点については、テキストの中にも解決の糸口が示されており、「読破通読」の余慶に与ることが可能である。

【履修上の注意】

なお最後に、私は、これまでの対面講義でも、法律学の学習に際し、常に現行法令集である『六法』を必携すべきとの指摘を繰り返してきた。これは本講義においても変更されるものではない。いかなる分野であれ法を対象とする学習においては、最新年度の『六法』をひも解き条文を参照する行動が必須である。その種類や選択を巡るヒントは、テキストに示されており、ここで屋上屋を架することはせず、上述の結論を述べるにとどめた。

【関連科目】

「法学（憲法を含む）」

【参考文献】

霞信彦『法学講義ノート（第5版）』慶應義塾大学出版会、2013年

【レポート作成上の注意点】

叙述の、遮二無二にテキストを読み切るという作業は、一度のみならず繰り返しおこなうことが重要であり、回を重ね、併せて他者の著作を参照するなどの労を積むなかで、次第に理解に深みが増すと思う。こうした後に、初めてレポート課題取り組みへの途が開けることとなる。最初から課題の内容のみに注目してテキストの必要箇所を限定して学習を進めるなど、冒頭に述べた本講義の主旨のいずれにも合致しない。のみならず、体系への視野をもたない断片的かつ生半可な知識は、却って「百害あって一利なし」と言わざるを得ない。また、「まずレポートありき」の典型的なものとして、テキストや参考文献の丸写し・換骨奪胎による提出物（敢えてレポートとは表記しない）が散見されるが、これまた通信教育学習に取り組む本意の「はき違え」甚だしきものと断言しておきたい。いうまでもないが、参考文献については、もれなく書名・著者・刊行年・出版社名をレポートの最後に明記することが求められる。

【成績評価方法】

科目試験による。

憲法（E）

（市販書採用科目）（E 055-0091）〔2単位〕

【テキスト】

小林節・園田康博『憲法〔全訂〕』南窓社、2000年

【講義要綱】

テキストは、通学課程の受講用の簡潔なものであるが、精読すれば理解できるはずである。

【テキストの読み方】

概念と論理を正確に追うとよい。法律用語辞典を活用するのもよい。

【履修上の注意】

「憲法」を履修する前に、その前提として、どれか他の特定の科目を既に履修していなければならないということはない。「憲法」は、いわば入門科目であるので、むしろ前提知識などなくてよいという一面があり、他面で、総合科目として広い背景的知識（教養）があったほうが良いが、だからといってそれが特定科目によって充分なわけでもない。

【関連科目】

「行政法」、「国際法」、「刑事訴訟法」

【参考文献】

教科書の他に参考書があったほうが分かり易いだろうが、それは、どれか特定のものが良いとか、特定のものでなければいけないと言った性質のものではない。大きな書店や図書館で実際に手にとってみて自分が「読み易い」と感じたらそれが最良の参考書だと言える。

【レポート作成上の注意点】

配本テキスト及び参考書を通読し、問われている課題を十分理解したうえで、論点を整理しレポートを作成すること。また、使用した参考書は必ず文献一覧として最後に記して形式を整えること。

【成績評価方法】

科目試験による。

民法

(市販書採用科目) (E 050-9792) [4単位]

【テキスト】

池田真朗『民法への招待〔第4版〕』税務経理協会、2010年

※本書〔第3版補訂版〕で学習を進めている者はそれでもよい。

【講義要綱】

民法は、法律科目の中で最も身近でかつ最大の単位を配当されている、私法分野の基本法である。契約や債権等、経済学部生にも必要な知識が含まれるばかりか、家族、相続等の分野も民法の範囲である。また、商法等の学習のためにも、民法の学習を先行させるのが望ましい（商法などの法律は、民法の特別法という位置づけになるので、基本法である民法の一般的な考え方を先に学習しておくのが適切である）。本科目は、民法の財産法分野と家族法分野の全体にわたる基礎的な知識を身につけることを目的として配置されているものであるが、テキストは特に経済学や商学を学んでいる学生向けに書かれている。保証、債権回収、消費者契約等、今日の社会で問題になっているものも、この民法で学ぶことができる。なお、本テキストは2005年4月1日施行の現代語化新民法典に対応しており、公益法人関係など、

この新民法典がさらに変わった部分（2008年12月施行）についても、2008年の第3版補訂版で記述を修正した。なお、2010年に横書きの第4版が出版されたため、現在のテキストはこの第4版であるが、第3版補訂版を使用して学習してもよいものとする。

【履修上の注意】

特にない。経済・商学関係の専門を学ぶ諸君が誰でも、私法の基本法たる民法をわかりやすく学べることを目的としている科目である。小型の六法（科目試験に持ち込めるもの）を1冊購入して、学習の際は常に条文を参照すること。六法は『標準六法』（信山社）を推薦するが、最もコンパクトな『法学六法』（信山社）でも足りる。

【参考文献】

池田真朗『新標準講義民法債権総論』慶應義塾大学出版会、2009年
池田真朗『新標準講義民法債権各論』慶應義塾大学出版会、2010年
池田真朗『スタートライン民法総論』日本評論社、2006年
池田真朗『スタートライン債権法〔第5版〕』日本評論社、2010年
山田卓生ほか『民法Ⅰ〔第3版補訂〕』有斐閣Sシリーズ、2007年
淡路剛久ほか『民法Ⅱ〔第3版補訂〕』有斐閣Sシリーズ、2010年
野村豊弘ほか『民法Ⅲ〔第3版〕』有斐閣Sシリーズ、2005年
藤岡康宏ほか『民法Ⅳ〔第3版補訂〕』有斐閣Sシリーズ、2009年
池田真朗編『新しい民法』有斐閣ジュリストボックス、2005年

【レポート作成上の注意点】

まずテキスト全体を十分に学習して理解してから、レポート課題の問うている範囲を確認し、上掲の参考文献に当たってレポート作成を始めること。六法は『標準六法』（信山社）を推薦するが、最もコンパクトな『法学六法』（信山社）でも足りる。

【成績評価方法】

科目試験による。

労働法（E）

（市販書採用科目）（E 064-1091）〔2単位〕

【テキスト】

神尾真知子・増田幸弘・内藤恵『フロンティア労働法〔第2版〕』法律文化社、2014年
※テキストは、最新版の使用が望ましいが、初版（2010年）を用いて学習しても構いません。

【講義要綱】

労働法とは、賃金を得て生活する者（労働者）と使用者との関係を規律する様々な法律の

総称です。大別すると、以下の4つの領域として理解されます。

①、雇用関係に入る際の求人と求職に関わる法制度と政策を学ぶ、労働市場法。その中心テーマは、求職・求人に関する行政的支援・職業能力開発・雇用安定等で、昨今問題とされることの多い労働者派遣などもこの中で学びます。②、労働契約締結からその終了に至るまでの法律問題を考察するのが、個別的労働関係法です。ここでは、労働者と使用者の二者間の契約に基づく様々な労働条件、およびその変更が中心的テーマとなります。③、労働者・使用者に加えて労働組合という第3の主体が加わり、憲法28条の労働基本権を三者の間で具体化する領域が、集団的労使関係法です。労働組合・団体交渉・労働協約・争議行為、等を議論します。④、最後に現代社会では、労使間の紛争をいかに処理するかも重要な課題です。このような労働紛争の解決にかかる様々な法制度にも目を配る必要があります。

テキストは、現代的視点も含め、以上の領域全てを学べるようになっています。

【テキストの読み方】

伝統的な労働法の論点は、上記の②と③の領域にあります。②は、民法の雇用契約を発展させた領域ですが、現在では労働契約法も施行され、労働法独自の体系が整ってきています。③の領域は、憲法第28条の趣旨を如何に具現化するかを重視しております。但し興味深い論点のいくつかは、個別法と集団法の2つの法理が交錯する部分に生じます。

また労働法学は、現実社会の紛争から切り離すことの出来ない領域です。労働法学の学習には、総合的かつ体系的な理論を学習することに加えて、具体的な裁判例を学ぶことが必須です。学習に際しては労働法判例百選なども利用し、当該テーマにかかる学説が、具体的にはどのような事案として生じているかを学んで下さい。

最後に労働法学は、研究者のスタンスが分かれやすい領域でもあります。1冊のテキストに偏ることなく、複数の参考書を読み、相互に比較検討することをお願いします。かつまた現代社会では雇用の流動化が進み、労働市場に目を配る必要もあります。

【履修上の注意】

法律学を学ぶ際には、まず一般法の知識を得た上で、特別法による修正法理を学ぶ方が効果的です。労働法を学習するには、まず憲法、民法総則、債権各論を学習した後に履修することをお願いします。労働法学は法解釈学であり、労働関係を対象としております。社会政策や労働経済学の隣接領域ですが、それらを主として学ぶわけではありません。あくまでも法律学の1科目です。

【関連科目・分野】

上述したように法律学としての労働法は、憲法、民法総則、債権各論を基礎としています。

さらに社会保障法とは、相互補完的な関係にあります。他学部の科目としては、社会政策学や労働経済学とも関連します。

【参考文献】

注意：労働法は改正が頻繁に行われる領域です。参考文献は、常に最新版を使用して下さい。（下記には、当該シラバス原稿作成時における情報を入れておきます。）

まず最初にテキストを用いて、当該テーマの全体像をつかみます。次にテーマに関連する専門書、あるいは法律専門誌や大学紀要に掲載されている専門的論文、さらには裁判例の原本に当たって考察を深めて下さい。

- 1) 指定テキストの他に、入手し易い初学者向きの参考書として、
 - ・中窪・野田『労働法の世界』（第10版）有斐閣、2013年
 - ・安枝・西村『労働法』（第12版）有斐閣プリマ・シリーズ、2014年
- 2) 裁判例の概略を簡易に学ぶために
 - ・別冊ジュリスト・労働判例百選（第8版）有斐閣、2009年
 - ・菅野ほか『ケースブック労働法』（第8版）弘文堂、2014年
- 3) さらに専門的に学ぶ際の概説書
 - ・菅野和夫『労働法』（第10版）弘文堂、2012年

【レポート作成上の注意点】

レポートを作成する前に、まずテキストを通読して下さい。次にレポートの構成を考える際には、当該テーマに関する専門書・専門論文・判例等を収集し、読み比べ、論点を整理した上で取り組んで下さい。レポートの末尾に必ず参考文献一覧を明記すること。

時に、単なるテキストの要約を提出する学生がいます。これは評価できないのでご注意下さい。なお他の文献から直接引用する場合には、必ずその出典を明示して下さい。その際は、文献や判例の引用方法を確認すること。インターネットの情報を引用する場合には、作成者が明らかにされているもののみを補助的に使い、URLに加えて当該HPの作成者とそのHPの名称を明示して下さい。（2010年刊行のテキスト初版で学習することは構いません。但しその場合は、最近の法改正について自習して下さい。）

【成績評価方法】

科目試験による。

経済法（E）

（市販書採用科目）（E 056-0591）〔2単位〕

【テキスト】

白石忠志『独禁法講義〔第7版〕』有斐閣、2014年

※テキストは、最新版の使用が望ましいが、第6版（2012年）、第5版（2010年）、第4版（2009年）もしくは第3版（2005年）を用いて学習しても構いません。

【講義要綱】

本講義は、経済法の中核をなし、その基本的秩序を形成する「独占禁止法」の大系を学習することを目的としている。独占禁止法は競争法とも呼ばれ、国内経済のみならず国際経済をも基本的に秩序づけているいまやグローバルスタンダードといえる。また、現代の経済社会で活躍するビジネスマンにとって必要不可欠な法律である。わが国の独占禁止法は、敗戦後の昭和22年（1947年）に制定され、現在にいたるまで60年余が経過した。この間に、わが国の経済社会は大きく変化し、わが国経済を基本的に秩序付ける独占禁止法の内容、公正取引委員会の運用・解釈もそれに応じて変容してきたといえる。現在、独占禁止法の社会的役割、そしてその重要性は国民一般に広く理解・認識されてきているが、いまだ完全にわが国の経済社会に定着したとはいえない状況にある。わが国が経済大国に相応しい国になるためには独占禁止法をわが国の経済社会に定着させることが不可欠である。もちろん、慶應義塾に学ぶ学部学生諸君にとってはそれだけでは充分といえない。これらの法運用がいかなる理念ないし理論のもと実施されているのかを的確に理解したうえで、それぞれが、これらの問題を自らの問題として取り組み、直感ではなく冷静かつ合理的な判断ができることを本講義では最終的な目標とする。

【テキストの読み方】

テキストを読む際には、理論的な説明ばかりに気を取られずに、テキスト内で取上げられている事例も適宜参照してもらいたい。事例について詳しく知りたい場合は、舟田正之他編『経済法審決・判例百選』（別冊ジュリスト199号、2010年）を参照するのが便利である。また審決や判決それ自体に当たることも重要である。特に経済法の場合、様々な取引が問題となっており、ケースを読むとビジネスの裏側がよく分かるので、ケース分析は非常に楽しいものである。是非、審決や判決それ自体についても、図書館で読んでみて欲しい。

【履修上の注意】

履修に際し、他の特定の科目を事前に履修している必要はない。ただし、経済法では、現実の経済活動や取引関係について、幅広く分析することになるので、新聞報道などに関心を持ってもらいたい。

【関連科目・分野】

経済法・独占禁止法は、一面において、事業者の経済活動を市場メカニズムの機能を有効に発揮させることによってコントロールするものであり、人・法人の経済活動に関わる基本的な法制度（民法、商法、会社法）との関わりを無視することはできない。他方、事業者の経済活動が市場を場として行われ、ここにおける競争が国民経済の発達という公共目的と結びついて理解されることは、政府・公権力の権力行使とこれに関わる法制度（憲法、行政法、刑法）に自ずと関心を向かわせる。

このように経済法はさまざまな法制度の応用であり、これらの理解は経済法それ自体の把握に役立ち、またその前提でもある。本講義以外に、労働関係法や金融関係法も近時重要な

関連科目となってきた。

また、市場や経済の秩序ないしは制度を考察の対象とする本講義の関心と関連して、経済主体の決定や行動、更に望ましい社会的厚生の実現に関する学—経済学とりわけミクロ経済学（とその応用分野としての産業組織論や「法と経済学」）など—にも強い関心と問題意識を持って取り組んでもらいたい。

【参考文献】

白石忠志『独占禁止法 第2版』（有斐閣 2009）

根岸哲編『注釈独占禁止法』（有斐閣 2009）

【レポート作成上の注意点】

レポートの課題は、独占禁止法の内容を全体を通じて適切に理解できているか否かを端的に問う問題である。当然、受講者諸君が上に掲げた文献の該当部分だけを読み比べるだけでは当方が求める解答にはたどり着けないであろう。テキストや参考文献を丁寧に読み込んで、それらの考え方を整理・検討してもらいたい。独占禁止法の体系的な把握についてはさまざまな見解があり得るわけで、本レポートにおいても受講者諸君にこれらを凌駕する独自の見解を求めているわけではない。むしろ、ここで取上げられている議論を整理し、自分なりの主張を（これらの業績の上に主張するとしても）客観的な根拠と一貫した論理に基づいて論ずることができるかどうかにある。

【成績評価方法】

科目試験による。

改訂・会社法（E）

（市販書採用科目）（E 057-0792）〔4単位〕

【テキスト】

宮島司『新会社法エッセンス〔第4版〕』弘文堂、2014年

【講義要綱】

会社の経営者、従業員、会社と取引する企業、株主などにとって、会社がどのような法制度によって規制され、どのように行動するべきかを正しく理解することは、大変重要である。

平成17年に制定された会社法は、制定から9年を経て、平成26年6月改正法が国会を通過し、平成27年春にはその施行が予定されている。

これにより、これまで用いられていた委員会設置会社の名称が指名委員会等設置会社に変更され、コーポレート・ガバナンスの改善のため、監査等委員会設置会社の新設、社外役員の要件の見直し、支配権移動を伴う募集株式発行等の決定機関の変更、親子会社の法規制の見直しのため、多重株主代表訴訟（特定責任追及訴訟）の導入、特別支配株主による株式等売渡制度の新設、企業再編行為の差止請求権の許容、詐害的会社分割が行われた場合の債権

者保護規制の整備など、多くの点で改正が行われた。新テキストは、この改正を踏まえて改訂されたものである。

【テキストの読み方】

会社法全体に対して理解できるようになるためには、時間と根気が必要である。細部にこだわるよりも、まず、テキスト全体を通読して全体像を把握する、あるいは、株式・機関当たりの部分を熟読してそれを理解したのちに、他の部分を読むなど、工夫して学習を進めてほしい。

【履修上の注意】

特になし。

【関連科目・分野】

商法総則・商行為法、手形法、保険法

【参考文献】

江頭憲治郎『株式会社法（第5版）』有斐閣、2014年

神田秀樹『会社法（第16版）』弘文堂、2014年

山本爲三郎『会社法の考え方（第8版）』八千代出版、2011年

【レポート作成上の注意点】

テキストを丸写しすることなく、他にも参考書を読むなどして、問題点を多角的に分析し、再構成することを心がけてほしい。また、会社に関する法制度は頻繁に改正を受けているため、参考文献を用いるときは、どの時点で執筆された文献かをよく見極め、常に現行法の規定との整合性を検討することを忘れないようにしなければならない。

【成績評価方法】

科目試験による。

学問分野別
P9

分野別

総合教育科目
P51

総合

文学部
P89

文

経済学部
P167

経

法学部
P205

法

教職
P269

教職

科目別履修要領

〔法学部専門教育科目〕

- ・履修要領には、絶版となった参考書も記載してあります。これは、「その参考書が学習上有益である。」と担当者が判断したものです。可能な範囲で図書館などで捜して学習することをお勧めします。
- ・この科目別履修要領の講義要綱には、科目名の「新」・「改訂」が省略されている箇所があります。

【テキスト】

小林節・園田康博『憲法〔全訂〕』南窓社、2000年

【講義要綱】

テキストは、通学課程の受講用の簡潔なものであるが、精読すれば理解できるはずである。

【テキストの読み方】

概念と論理を正確に追うとよい。法律用語辞典を活用するのもよい。

【履修上の注意】

「憲法」を履修する前に、その前提として、どれか他の特定の科目を既に履修していなければならないということはない。「憲法」は、いわば入門科目であるので、むしろ前提知識などなくてよいという一面があり、他面で、総合科目として広い背景的知識（教養）があったほうが良いが、だからといってそれが特定科目によって十分なわけでもない。

【関連科目】

「行政法」、「国際法」、「刑事訴訟法」

【参考文献】

教科書の他に参考書があったほうが分かり易いだろうが、それは、どれか特定のものが良いとか、特定のものでなければいけないと言った性質のものではない。大きな書店や図書館で実際に手にとってみて自分が「読み易い」と感じたらそれが最良の参考書だと言える。

【レポート作成上の注意点】

配本テキスト及び参考書を通読し、問われている課題を十分理解したうえで、論点を整理しレポートを作成すること。また、使用した参考書は必ず文献一覧として最後に記して形式を整えること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

池田真朗『スタートライン民法総論（第2版）』日本評論社、2011年

【講義要綱】

民法は、私達が共に幸福な社会生活を営むために不可欠な、基本ルール（社会規範）の一つです。すなわち、私達が共に幸福な社会生活を営むためには、自分が望む権利移転の効果

をどのように求めるのか。自分の財産をどのように守るのか。私達が利己的になり他人の生命や財産を侵害しないようにするにはどうすればよいのか等々の基本ルールが必要ですし、それらは社会生活上とても大切なものの一つなのです。したがって、社会の構成員として皆さん一人一人に、民法を学問として学んでいただきたいと思っています。

また、本講義でとりあげる「民法総論」は民法典を理解する上での基本原則を内容とする領域ですが、本講義は同時に私法入門や民法入門の役割も兼ねていますので、これから法律専門科目を学んでいく人達は勿論、経済学、政治学、文学等を学んでいこうとする人達にも広く、積極的に履修し、学んで欲しいと願っています。

【テキストの読み方】

本講義で採用する『スタートライン民法総論（第2版）』は、筆者が、法学部をはじめとして経済・商・文・理工学部他の諸学部一般における、民法の講義テキストとして編集されたものです。

前述のように民法は私達の市民生活の基本ルールであり、しかも私達の生活の最も身近な問題を対象とし、立場や価値観の異なる人々の間に生じる利害の抵触と法的解決をとりあげる、親しみやすく解りやすい学問領域です。しかし、残念ながら、いざ民法を学ぼうとすると、法律用語や法文書の表現が固苦しく専門的なために、とても難解で取り組みにくいような印象を与えがちです。

そこで、このギャップを埋めるために、同テキストは、より判り易くて面白い民法の導入書として、できるだけ平易な記述で、民法の基本体系や各規定内容の相互関係を明確にするとともに、また民法の沿革・関連領域の解説や、今後につながる学習方法の説明に相当量を割いて書かれています。

したがって、同テキストの目的を理解して、第5課から始まる民法総則の前に必ず、第1課「ガイダンス」、第2課「民法総則予告編」、第3課・第4課と丁寧に読んでいただき、民法の面白さを十分に味わいながら、今後、民法をどのように学んでいくのかを理解して、学習をスタートしていただきたいと思います。

【履修上の注意】

- 1 法律用語を正確に理解して使えることは重要です。法律用語辞典等を手許において、解らない用語はすぐに調べるようにしましょう。
- 2 各制度の制度趣旨や他の制度との相違等を考え、整理できることも大切です。新しく学んだことは、常に既に知っていることと、どのように関連するのか、或いは異なるのかを考えるようにしましょう。
- 3 教科書を読む前に必ず、単元の範囲の一連の条文に目を通して、各規定がどのような事例を想定しているのかのイメージをもってから、教科書を読むようにして下さい。理解が深まります。
- 4 独りで教科書を読む繰返しに終らせないで、必ず講義に参加して、独学では想像でき

なかった事例や解説等を聞き、講義内容をじっくりと考え、友人達と議論を交したり、担当教員へ質問する等の作業を通して、実践的かつ有機的な民法学の理解へと繋げて下さい。

- 5 なお、全4回あります科目試験は、進路にそって、テキスト内容の理解を問われているものです。指定テキストから離れたような自分の思いや感想の記述については、一切、成績評価の対象とはなりませんので、くれぐれも指示通りの作業を終えて受験をお願いします。

【参考文献】

『判例百選民法1』（別冊ジュリスト）有斐閣その他、判例解説の市販書（各種あり）も利用すると便利です。

【レポート作成上の注意点】

- 1 テキストや参考文献でそのアウトラインをよく把握してからレポートの作成をはじめて下さい。
- 2 単なる引き写しではなく、自己の頭で整理して十分に問題点を理解した上で、できるだけ自己の言葉で説明して下さい。
- 3 読み手の立場に立った気持ちで、丁寧にレポートすることが大事です（レポートは文章です。図版等を利用した箇条書のレジюмеではありませんので、章立て、各段落、接続語に意味を持たせて、流れのある内容で書いて下さい）。
- 4 レポートや試験に臨む前に、テキスト第14課3の学習上のポイントは必ず読んでおいて下さい。
- 5 なお、科目試験については、指定テキストの範囲を4分して、その内容を問うものですので、少なくとも、事前にテキストを熟読して、記述された各論点を自分の言葉で他人に説明できるよう準備の上で、受験するようにお願いします。

【成績評価方法】

科目試験による。

刑法総論

（市販書採用科目）（J 089-0991）〔3単位〕

【テキスト】

井田良『講義刑法学・総論』有斐閣、2008年

【講義要綱】

刑法学とは、現行刑罰法規（とくに刑法典）を対象とする法解釈学の1部門である。刑法典は、第1編の「総則」と第2編の「罪」という2つの部分によって構成されている。総則とは、各則において個別的に問題とされることに共通する普遍的なものをまとめて一般的に

扱った部分のことをいう。たとえば、「故意」は、傷害罪であれ、文書偽造罪であれ、収賄罪であれ、すべての犯罪において共通に問題となる。そこで、刑法は、総則の38条において故意について一般的に規定している。個別の犯罪について規定した刑罰法規は、刑法典の第2編「罪」以外にも、数多く存在するが、刑法典の総則は、それらの特別刑法の処罰規定にも適用されるのが原則である（刑法8条）。

総則と各則の区別に対応して、刑法学は、刑法総論と刑法各論とに分かれる。刑法各論が個別の犯罪（たとえば、殺人罪、強盗罪、放火罪…）を規定した各刑罰法規の解釈論を内容とするのに対し、刑法総論は、犯罪と刑罰の基礎理論、犯罪（ただし個々の犯罪ではなく、およそ犯罪たるもの）の構成要素ないし成立要件、すべての犯罪に共通して妥当するような理論、刑罰の種類と適用などを対象とする。この2つを両方とも勉強しなければ、刑法を学んだことにはならない。総論の勉強はまるで「棒高とび」で、総論特有の体系的な思考を身に付けないかぎり、総論を「ものにする」ことはできないという難しさがある。総則と各則、総論と各論とを区別することは、わが国の法律学に大きな影響を与えたドイツの法律学に特に著しい傾向である。それは法解釈学を体系的なものとし、論理的に正確なものとする長所を持つが、総論の議論をあまりに抽象的で現実離れたものとし、また学ぼうとする者の理解を難しくするおそれがあることも事実である。

法律学のどの分野も、なかなか独学で勉強するには困難が伴うが、とくに刑法学は概念が複雑であって議論も錯綜しており、テキストのみによる独力の学習ではなかなか成果が上がらないかもしれない。仲間とゼミを組んで議論することがもっとも効果的だと思うが、スクーリングの講義を活用して先生の言葉に耳を傾け、また難しい論点については勇気を奮って先生に質問に行くことをお勧めしたい。

【テキストの読み方】

指定テキストを読んでわからない用語や概念があれば、そのつど法律用語辞典などでその意味を確認しながら読み進めること。また、テキストは必ず通読すること。刑法学は極めて体系性の強い学問なので、特定の論点に関する記述だけつまみ食いのように読んで理解できないだろう。テキストを何度も読み返しながら、地道に粘り強く学習することが肝心である。なお、刑法総論に関しては、複数の著者の本を同時並行で読むことは、学習上逆効果になるおそれがある。いろいろな学者の本を読みたいという意欲ある方も、まずは指定教科書を通読し、別の本に移るのはその後にして欲しい。

なお、後掲の判例教材を用いて教科書に出てきた判例の内容を確認しながら読めば、学習効果は倍増するだろう。

【履修上の注意】

特になし。上記指定テキストを読んで理解が困難だと感じた場合は、井田良『基礎から学ぶ刑事法〔第5版〕』（有斐閣、2013年）および同『入門刑法学・入門』（有斐閣、2013年）を読んだ後に再びチャレンジして欲しい。

【関連科目】

「刑法各論」「刑事政策学」「刑事訴訟法」

【参考文献】

成瀬幸典・安田拓人編『判例プラクティス刑法Ⅰ総論』信山社、2010年
井田良ほか『よくわかる刑法〔第2版〕』ミネルヴァ書房、2013年

【レポート作成上の注意点】

レポートの作成にあたっては、まず問われている論点を発見しなければならない。そのためにはテキストや参考文献をよく読むことが不可欠である。論点を発見したら、それについての判例と学説を調べ、何をめぐって見解が対立しているのかを理解しなければならない。そのうえで、自分の見解（オリジナルなものである必要はない）を確定して、レポートにまとめ上げる作業が行われなければならない。

自分の頭だけで考えて何かを書いてもそれはレポートにならないし、学説や判例をどれだけ調べ上げてまとめても、自分の見解が述べられていなければ合格点はつかない。参考にした文献はすべて引用する必要がある。特定の文献を引き写したレポート（ましてや他人のレポートを写したもの）はたんに不合格というばかりでなく、不正行為と評価される。

なお、本科目は「刑法総論」であるが、レポート作成の際、場合によっては「刑法各論」の文献も参照する必要がある。

【成績評価方法】

科目試験による。

法哲学

(J 017-5401、J 21)〔2単位〕

【講義要綱】

法哲学は、法および法学の根本問題について原理的・基礎的に考察する学問です。考察方法からみた場合には哲学的な方法を基本としており、哲学の一領域とみられることもあります。たとえば18、19世紀においてはカントやヘーゲルなど哲学者が法哲学の教育・研究もしていました。したがって、哲学的立場によってさまざまな法哲学があります。他方、対象領域からみた場合には、憲法、民法、刑法などの法解釈学・実定法学を含む法学全般をその対象としており、法学の一領域に属します。このように法哲学を学ぶ場合には、哲学と法学という二つの領域についての専門的知識や思考法が必要とされます。特に哲学的に思考することが重要ですので、これに本来的になじめないひとには難しい学問かもしれません。法哲学は必ずしも実定法学上の個々の法的問題に直接かかわるというのではなく、その意味では実用的とは言えないかもしれませんが、法解釈学や法実務に対して原理的・理論的基礎を提供するという意味では実践的です。

論者によって多少異なりますが、一般的に言って、法哲学はその主要な問題領域として三つのものが挙げられます。

つまり第一に、法の一般理論では「法とは何か」という法概念の解明をはじめとして、法源理論、法と道德との区別・関連の考察、法的強制の特質、法システム・法規範の構造と機能の解明、権利・義務・責任あるいは法の効力などの法的思考の基本的カテゴリーの分析を主要なテーマとしています。

第二に、正義論（法価値論）は、「正義とは何か」をはじめとして、自由や平等、法的安定性や法の合目的性など、法の実現すべき価値理念ないし実定法の評価・批判の基準の探求を中心的テーマとしています。

第三に、法律学方法論は、法の解釈・適用ないし法的議論・推論の論理構造や合理性基準、法律学の学問的性質の解明を中心的テーマとしています。

しかし、これらの三つの問題領域は相互に密接に関連しており、統合的な考察が不可欠です。これらの問題領域は古代ギリシア以来、多くの哲学者や法・政治哲学者によって探求されてきました。したがって哲学史や法・政治思想史についての専門的知識や思考法も必要となります。

これらの三つの領域の議論はいずれも抽象的な話になります。したがって、文学作品や映画作品の中にも法哲学的な問題をテーマとした名作が多数ありますので、それらを鑑賞することによって、より具体的な問題状況が把握できます。たとえば、「ニュルンベルク裁判」、「白と黒のナイフ」、「海を飛ぶ夢」、「スリー・ウィミン」、「陽のあたる場所」など。

【テキストの読み方】

法哲学は原理・原則を考察するという学問的な性質上、抽象的な議論になりやすいのですが、常に解決が求められている現在の具体的な課題とのかかわりの中で検討していくことが重要です。教科書および参考書が抽象的で理解に苦しむかもしれませんが、繰り返し熟読することによって理解できるようになると思いますので、じっくり考えながら、そして自分なりに納得しながら読み進める忍耐力が必要です。

また、テキストは1954年に出版されていますので、それ以降のさまざまな法思想の諸潮流も参考書を読むことによって補ってください。法哲学の基本的な問題設定は古代ギリシア以来異なるものではなく普遍的ですが、時代の状況に即して問題を解決するという意味では異なっています。テキストではまず、緒論の「法哲学とは何か」という学問的性質や法哲学の課題・方法および隣接領域との関係を理解してください。次に法思想史の流れをしっかりと読むことによって何が問題とされ、それがどのように解決され、そしてまた、何が新たに問題となったのか、という思想の流れをその時代状況との関係で理解してください。そこには、経済、政治といったさまざまな要因がかかわっています。

さらに本論では法哲学の三つの領域である法存在論（法の一般理論）、法価値論（正義論）および法認識論（法律学方法論）を一文一文理解しながら読み進めるように努めてください。

このテキストの中にはさまざまな哲学者・思想家が言及されています。できればこれらの人々の基本的な著作を、時間と労力を必要としますが、ぜひ読んでほしいと思います。原著を読むことによって自分なりの自信を持つことができ、より一層理解が深まります。

【履修上の注意】

上記に述べたように、法哲学は伝統的には哲学の一領域であったこともあり、広く哲学、倫理学、論理学、法・政治思想史などの知識・思考法が必要となります。これらの領域を事前になし並行して勉強しておくことで理解が深まります。また対象領域は法学全般ですので、憲法、民法、刑法などの基本的な法律科目を勉強していることが前提となります。

【関連科目・分野】

哲学、倫理学、論理学、政治哲学の科目を履修しておくことが望ましいと思います。

【参考文献】

田中成明『現代法理学』有斐閣、2011年

田中成明『法理学講義』有斐閣、1994年

青井秀夫『法理学概説』有斐閣、2007年

平野仁彦・亀本洋・服部高宏『法哲学』有斐閣、2002年

長谷川晃・角田猛之編『ブリッジブック法哲学』信山社、2004年

マイケル・サンデル（鬼澤忍訳）『これからの「正義」の話をしよう—いまを生き延びるための哲学—』早川書房、2011年

森征一・岩谷十郎『法と正義のイコノロジー』慶應義塾大学出版会、1997年

【レポート作成上の注意点】

上記の課題について、何が論点となっているのかを明確にし、それに対する各論者の見解を整理したうえで、自分自身の考えを展開してください。また、本課題の性質上抽象的になりがちですが、現在解決が求められている課題との関連において、具体的に論述してください。教科書および参考書をほとんどそのまま引用するような形式にならないように注意してください。注を必ず付記してください。注には著者名、著書名、出版社名、出版年、該当頁を記載してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

日本法制史 I — 古代 —

(J 044-8602)〔2 単位〕

【講義要綱】

まず、テキスト巻頭に詳論されている著者の「日本法制史」という学問に対する考えを熟

読んで欲しい。つまり、現代の法典や司法制度との関連を考えつつ、必ずテキストの全体を読み通し理解を深めることが必要である。

【履修上の注意】

テキストは、紙数の関係から、多くの歴史的事実を省略している。従って受講者は、近年復刊された中公文庫の「日本の歴史」（中央公論新社）や高等学校の日本史教科書などをまず一読し基礎知識を涵養してもらいたいと思う。

【参考文献】

霞信彦・漆原徹・浜野潔『日本法制史・史料集』慶應義塾大学出版会、2003年

霞信彦・原禎嗣・神野潔・兒玉圭司・三田奈穂『日本法制史講義ノート〔第2版〕』慶應義塾大学出版会、2012年

浅古弘・植田信廣・神保文夫・伊藤孝夫『日本法制史』青林書院、2010年

【レポート作成上の注意点】

テキスト・参考書の丸写しにならないように留意することが必要である。併せてそれら参照文献を換骨奪胎してレポートを作成することも、評価の対象とならない。参照文献については、もれなく書名・著者・刊行年・出版社名をレポートの最後に明記することが求められる。

【成績評価方法】

科目試験による。

日本法制史Ⅱ—中世・近世・近代—

(J 099-1201)〔4単位〕

【講義要綱】

本講義は、歴史的な法や制度のうち、中世・近世・近代の法制についての知見を深めるために開講される。すなわち、武家政権による封建的前近代的な法制から、西洋法を継受し近代的な法典へと変ぼうを遂げる明治時代までの法制について、焦点をあてたものである。受講にあたっては、過去の法を単なる歴史としてとらえるのではなく、現代の法典や司法制度との関連を考えながら学習をすすめてもらいたい。その際、必ずテキストの全体を読み通し理解を深めることが必要である。

【履修上の注意】

テキストは、紙数の関係から、多くの歴史的事実を省略している。従って受講者は、近年復刊された中公文庫の「日本の歴史」（中央公論新社）や高等学校の日本史教科書などをまず一読し基礎知識を涵養してもらいたいと思う。また、日本法制史を通史として理解するためには、「日本法制史Ⅰ—古代—」も併せて履修することが望ましい。

【関連科目】

日本法制史Ⅰ—古代—

【参考文献】

霞信彦・漆原徹・浜野潔『日本法制史・史料集』慶應義塾大学出版会、2003年
霞信彦・原禎嗣・神野潔・兒玉圭司・三田奈穂『日本法制史講義ノート〔第2版〕』慶應義塾大学出版会、2012年
浅古弘・植田信廣・神保文夫・伊藤孝夫『日本法制史』青林書院、2010年

【レポート作成上の注意点】

テキスト・参考書の丸写しにならないように留意することが必要である。併せてそれら参考文献を換骨奪胎してレポートを作成することも、評価の対象とならない。参考文献については、もれなく書名・著者・刊行年・出版社名をレポートの最後に明記することが求められる。

【成績評価方法】

科目試験による。

国際法Ⅰ

(市販書採用科目) (J 059-9991) [4単位]

【テキスト】

栗林忠男『現代国際法』慶應義塾大学出版会、1999年

【講義要綱】

経済活動や環境問題を考えると私たちが生きている社会は様々な部分で国際的になってきています。その国際社会において生じている状況に対応するために、国際法は多様な規則を提供してきました。国内社会の一員であると同時に国際社会の一員である私たちがそこで起きている出来事に敏感であることが求められています。国際社会の理解を法という視点から行うための力を養うこと、これが「国際法Ⅰ」の目標です。この学習を通じて国際社会を身近に感じてほしいと願っています。

【テキストの読み方】

条約集を手元に置いて該当する条約、条文を参照しながらテキストを読んでください。

【履修上の注意】

法学の基本的な知識を修得しておくことが必要ですが、何よりも国際社会で生じている出来事に関心を持つことが重要です。

【参考文献】

奥脇直也編『国際条約集』有斐閣、2015年

大森正仁編著『よくわかる国際法』ミネルヴァ書房、第2版、2014年

【レポート作成上の注意点】

課題は国際法の基本的な問題として法源と主体の意義を理解することを求めています。テキストの内容を理解した上で自分の言葉でそれを表現してください。

作成にあたっては参考文献を検索して利用するように努めてください。文献引用はレポートの一部ですので丁寧に行うことが必要です。どこまでが他の人の意見で、どこからが自分の意見なのかを明確にすることが求められます。

【成績評価方法】

科目試験による。

国際法Ⅱ

(J 096-1001)〔2単位〕

【講義要綱】

私たちの生きている社会は様々な部分で国際的になってきています。しかしながら、そこで起きている紛争は依然として多数にのぼります。このように生じている状況に対応するために、国際法は紛争を平和的に解決するための多様な規則を発達させてきました。依然として限界は存在しますが、それをどのように乗り越えていこうとしているのかを学ぶこと、これが「国際法Ⅱ」の目標です。この学習を通じて国際社会で起きている紛争の理解をしてほしいと思います。

【テキストの読み方】

条約集を手元に置いて該当する条約、条文を参照しながらテキストを読み進めてください。

【履修上の注意】

「国際法Ⅰ」を履修済みであることが望ましい。

【関連科目】

国際法Ⅰ

【参考文献】

奥脇直也編『国際条約集』有斐閣、2015年

大森正仁編著『よくわかる国際法』ミネルヴァ書房、第2版、2014年

【レポート作成上の注意点】

課題は紛争の平和的解決手続について基本的な意義を理解することを求めています。国際法においてどのような条約規定が紛争の平和的解決義務を課しているのかを検討して下さい。また、具体的な仲裁裁判を用いた紛争において、それらの規則の適用状況について考えることを求めています。この10年間に起きた事例を選んで検討をしてください。

参考文献を検索して利用するように努めてください。文献引用はレポートの一部です。どこまでが他の人の意見で、どこからが自分の意見かがわかるようにしてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・行政法

(市販書採用科目) (J 106-1591) [4単位]

【テキスト】

櫻井敬子・橋本博之『行政法〔第4版〕』弘文堂、2013年

【講義要綱】

行政法は、国や地方公共団体という行政活動の主体が当事者として登場する法律問題を考察対象とする。我われの日常生活を見渡せば、実に多種多様な行政活動が関わっていることが容易にわかるだろう。各種の公的手続に必要な住民票は市町村が管理し、自動車を運転するには都道府県の公安委員会が発行する免許が必要であるし、普段利用する鉄道の運賃は国(国土交通大臣)の認可を受けたものである。

守備範囲が広く、したがって行政法に“関わる”法律は数多くあるが、「行政法」という3文字の名前の法律は存在しない。行政活動を行うにあたって事前に踏む手続について「行政手続法」、何らかの権利侵害を受け、また損失を被った場合の救済手続について「行政不服審査法」「行政事件訴訟法」「国家賠償法」といったいくつかの統一法典は用意されているが、個々の行政活動は、無数にある個別実定法によって行われる。行政法(学)は、ある特定の法律だけを対象とするのではなく、さまざまな行政活動をマナ板にのせて、その法的な仕組みや、適正性を検証するための原理・原則を抽出して組み上げたものである。

今日の社会にあって、行政活動は、実に多くの場面で活発に行われ、かつ役割も重要である。そこでは、既存の法律や、これまでに積み上げられてきた判例・学説によって解決可能な問題ばかりではなく、新たに政策形成を試み、制度の構築を図る必要に迫られる問題もあるだろう。また、行政手続法、情報公開法の立法、行政事件訴訟法、行政不服審査法の改正などの法整備は言うに及ばず、規制改革・行政改革の波は、行政活動を取り巻く環境を着実に変化させている。現実の問題を前にしたとき、主権者たる国民にとって最善の解決策は何かということを常に考えながら、行政法の意義を学んでほしい。

【テキストの読み方】

行政法は、(1) 行政活動を担う組織に関する「行政組織法」のほか、(2) 行政活動の仕組みと法令適合性の判断を課題とする「行政法総論」と、(3) 行政活動による権利侵害や財産的損害を回復するために国民がとりうる手続・手段を考察の対象とする「行政救済法」の3本柱から構成される。

テキストに指定した櫻井敬子・橋本博之『行政法』は、このような行政法の体系全体をコンパクトに一冊にまとめたものである。参考文献に挙げた教科書・基本書には、同様に行政法の体系全体を一冊にまとめた稲葉ほか『行政法』もあれば、行政法総論（行政組織法の概略を含む）と行政救済法を分冊する大橋『行政法Ⅰ現代行政過程論』『行政法Ⅱ現代行政救済論』もある。いずれの場合も、とりわけ行政法総論と行政救済法が相互に連係することを意識しながら、読み進めるとよい。

【履修上の注意】

「憲法」及び「民法」の基礎を学んだうえで、履修すること。

【参考文献】

＊教科書・基本書

稲葉馨・人見剛・村上裕章・前田雅子『行政法〔第3版〕』有斐閣、2015年

大橋洋一『行政法Ⅰ現代行政過程論〔第2版〕』有斐閣、2013年

大橋洋一『行政法Ⅱ現代行政救済論〔第2版〕』有斐閣、2015年

＊学習用判例解説集

『判例百選』シリーズ

『重要判例解説』シリーズ

【レポート作成上の注意点】

- (1) 設問をよく読むこと。例年、設問の趣旨を無視し、「行政法とは何か」などを書いてくるレポートが散見される。
- (2) 法学の基礎知識を確認すること。根拠条文の引用方法、裁判判決の出典の表記方法など、基本的な約束事が守られていない場合が多い。
- (3) 構成を練ること。文章を書き連ねるだけでは、読み手に訴える説得力に乏しい。小見出しを付ける、(一部に) 箇条書きのスタイルを取り入れる等の工夫を試みてほしい。『法学教室』、『法学セミナー』等の法律雑誌に掲載された論文等に接することも、書きかたを学ぶためには有益である。

【成績評価方法】

科目試験による。

物権法

(市販書採用科目) (J 101-1391) [3単位]

【テキスト】

石田剛、田高寛貴、占部洋之、秋山靖浩、武川幸嗣『民法Ⅱ 物権 リーガルクエスト』有斐閣、2010年

斎藤和夫『レーアブーフ民法Ⅱ【物権法】』中央経済社、2009年

【講義要綱】

民法典第二編・物権編において規定されている諸制度を総称して、講学上「物権法」とよんでいます。物権は債権と並ぶ主要な財産権ですが、それでは、物権とはどのような権利なのか。いかなる種類・内容の権利があって、それらが取引社会においてどういう役割を果たしているのか。さらに、どのような場面において、いかなる形で物権をめぐる利害が対立し、それらについてどのように調整すべきなのか。こうしたことについて規律するルールが物権法なのです。本科目では、その全容について学びます。

【テキストの読み方】

物権法は私たちの財産および経済活動に関する基本的なルールですので、確かな理解と納得を一つ一つ丁寧に積み上げていくことを心がけてください。

【履修上の注意】

本科目を履修するに先立って、「民法総論」を履修することが望まれます。また、本科目と並行または前後して、「債権各論」および「債権総論」を履修することを推奨します。

【関連科目】

「債権各論」、「債権総論」

【参考文献】

『判例百選民法Ⅰ〔第6版〕』（有斐閣、別冊ジュリスト）

『民法の争点』（有斐閣、別冊ジュリスト）

【レポート作成上の注意点】

テキストを精読し、しっかり理解した上で、課題が何に関するどのような理解を問うているのかについて正確に把握し、必要に応じて参考文献を活用しながら作成に着手してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

債権総論

(J 055-9903)〔3単位〕

【講義要綱】

本テキストの各章の冒頭に四角囲みで各章の概要を提示しているのので、それをもって講義要綱（シラバス）に代替する。また本テキストは、学習方法のアドバイス等についても記述しているので（特に第8章「学習ガイダンス」）、適宜参照されたい。

【履修上の注意】

本科目の履修を開始する前に、「民法総論」を履修していることが望ましい。本科目と前

後して、「債権各論」を履修することを推奨する。

【関連科目】

民法総論、物権法、債権各論

【参考文献】

- 奥田昌道『債権総論 [増補版]』悠々社、1992年
中田裕康『債権総論』岩波書店、2008年
奥田昌道、池田真朗＝潮見佳男編『法学講義民法4 債権総論』悠々社、2007年
片山直也ほか編『STEP UP 債権総論』不磨書房、2005年
奥田昌道・安永正昭・池田真朗編『判例講義民法Ⅱ 債権 [補訂版]』悠々社、2005年（追補判例集付き増補版2010年）
鎌田薫ほか編『民事法Ⅱ 担保物権・債権総論 [第2版]』日本評論社、2010年
池田真朗編『民法 Visual Materials』有斐閣、2008年

【レポート作成上の注意点】

まずは、テキストを十分に理解してから、課題が何を要求しているかをじっくりと検討し、その後でレポート作成に着手するように心掛けたい。

【成績評価方法】

科目試験による。

債権各論

(J 090-1001)〔3単位〕

【講義要綱・テキストの読み方】

債権各論は、民法上の財産権である物権と債権のうち、債権の発生原因を扱う分野である。債権は、契約、事務管理、不当利得及び不法行為の四つの発生原因に基づいて発生する権利であるが、とりわけ、これらの発生原因の中で、契約と不法行為が重要である。契約については、民法521条以下、696条まで170箇条以上の条文があり、その内容を丹念に理解することが必要であるのに対して、不法行為については、709条から724条まで僅か16箇条しかなく、条文の細かな解釈というよりも、判例法の分野であるから、判例の丹念な勉強が必要となる。テキストは、契約に関して比較的丁寧な解説が付されているが、不法行為については、基本的な解説が付されているにすぎないため、不法行為の勉強に当たっては、たとえば、近江幸治『民法講義Ⅵ 事務管理・不当利得・不法行為 [第2版]』（成文堂）といった他の不法行為等を扱う詳しい教科書を参照することも心がけて欲しい。いずれにせよ、教科書や参考文献を読む際には、それを暗記するのではなく、一つ一つの制度の趣旨やその意義、その要件と効果を良く理解して、具体的にどのような場面で当該制度がどのように機能するのかをイメージしながら、勉強を進めて欲しい。

【履修上の注意】

債権各論は、民法財産法の一分野であるから、民法総則の理解は当然の前提として、関連が深い債権総論の勉強と関連づけて勉強をして欲しい。とりわけ、債権総論の債権の目的、債権の効果、分けても債務不履行の分野、債権の消滅の中でも弁済や弁済の提供、相殺といった分野の理解は、債権各論を理解するうえで必ず必要になるため、そうした分野との関連を必ず意識して欲しい。

【参考文献】

参考書：内田貴『民法Ⅱ〔第2版〕』（東京大学出版会、2007年）、近江幸治『民法講義Ⅴ契約法〔第3版〕』（成文堂、2006年）、近江幸治『民法講義Ⅵ事務管理・不当利得・不法行為〔第2版〕』（成文堂、2007年）等の定評のある一般的な教科書

判例解説：中田裕康・潮見佳男・道垣内弘人編『民法判例百選Ⅱ（債権）〔第6版〕』（有斐閣、2009年）、松本恒雄・潮見佳男編『判例プラクティス・民法Ⅱ債権』（信山社、2010年）等の判例の解説書

なお、レポートの課題に際しては、最新の判例を参照する必要もでてこよう。その際には、裁判所ウェブページやジュリスト増刊『平成23年度重要判例解説』といった判例解説なども、適宜参照して欲しい。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・親族法

（市販書採用科目）（J 104-1391）〔1単位〕

【テキスト】

高橋＝床谷＝棚村『民法7 親族・相続（第4版）』有斐閣、2014年

※テキストは、最新版の使用が望ましいが、第3版（2011年）を用いて学習しても構いません。

【講義要綱】

民法・親族編を対象としています。法が家族に関してどのような規律を行っているのか、法の基本的考え方を踏まえて理解しましょう。まず、夫婦とは何か、成立及び効果を学び、次に婚姻の解消＝離婚の方法及び効果について理解します。第2に、親子関係について、法的親子（実親子、養親子）関係の発生や、親権制度について理解します。最後に、それ以外の親族関係について生じる扶養や後見制度について学習します。

【テキストの読み方】

参考文献①を熟読することにより、テキストの概説の理解を補ってください。特に、法改正など新たな事情について、参考文献で学んでください。

【履修上の注意】

「民法総論」を履修済みであること。

【関連科目】

「相続法」

【参考文献】

- ①犬伏＝石井＝常岡＝松尾『親族・相続法』弘文堂、2012年
- ②二宮周平『家族法（第4版）』新世社、2013年
- ③水野紀子他編『民法判例百選Ⅲ』有斐閣、2015年

【レポート作成上の注意点】

基礎知識をふまえて論点を整理すること。教科書・参考書の丸写しはしないこと。参考文献①は必読である。

【成績評価方法】

科目試験による。

相続法**(J 021-7003) [1単位]****【講義要綱】**

民法・相続編を対象とする。ある人が死亡した場合に生じる財産の継承に関してどのようなルールが定められているかを理解する。法定相続のルール、遺言による処分についてのルールを理解し、法定相続人の地位、相続人間の平等、遺言制度の意義について理解する。

【テキストの読み方】

全体像の把握に努め、理解できない部分は、参考文献等で理解を深めること。条文を参照すること。

【履修上の注意】

民法一財産法及び親族法の知識が不可欠であるため、これらの分野について、理解していることが望ましい。

【科目試験用指定参考文献】

犬伏＝石井＝常岡＝松尾『親族・相続法』弘文堂、2012年

【関連科目】

「親族法」

【参考文献】

- ①犬伏＝石井＝常岡＝松尾『親族・相続法』弘文堂、2012年

②床谷＝犬伏編『現代相続法』有斐閣、2010年

③水野紀子他編『民法判例百選Ⅲ』有斐閣、2015年

【レポート作成上の注意点】

基礎知識をふまえて論点を整理すること。教科書・参考書のまる写しはしないこと。参考文献①は必読である。

【成績評価方法】

科目試験による。

改訂・会社法（J）

（市販書採用科目）（J 083-0792）〔4単位〕

【テキスト】

宮島司『新会社法エッセンス〔第4版〕』弘文堂、2014年

【講義要綱】

会社の経営者、従業員、会社と取引する企業、株主などにとって、会社がどのような法制度によって規制され、どのように行動するべきかを正しく理解することは、大変重要である。

平成17年に制定された会社法は、制定から9年を経て、平成26年6月改正法が国会を通過し、平成27年春にはその施行が予定されている。

これにより、これまで用いられていた委員会設置会社の名称が指名委員会等設置会社に変更され、コーポレート・ガバナンスの改善のため、監査等委員会設置会社の新設、社外役員の見直し、支配権移動を伴う募集株式発行等の決定機関の変更、親子会社の法規制の見直しのため、多重株主代表訴訟（特定責任追及訴訟）の導入、特別支配株主による株式等売渡制度の新設、企業再編行為の差止請求権の許容、詐害的会社分割が行われた場合の債権者保護規制の整備など、多くの点で改正が行われた。新テキストは、この改正を踏まえて改訂されたものである。

【テキストの読み方】

会社法全体に対して理解できるようになるためには、時間と根気が必要である。細部にこだわるよりも、まず、テキスト全体を通読して全体像を把握する、あるいは、株式・機関当たりの部分を熟読してそれを理解したのちに、他の部分を読むなど、工夫して学習を進めてほしい。

【履修上の注意】

特になし。

【関連科目・分野】

商法総則・商行為法、手形法、保険法

【参考文献】

江頭憲治郎『株式会社法（第5版）』有斐閣、2014年
神田秀樹『会社法（第16版）』弘文堂、2014年
山本爲三郎『会社法の考え方（第8版）』八千代出版、2011年

【レポート作成上の注意点】

テキストを丸写しすることなく、他にも参考書を読むなどして、問題点を多角的に分析し、再構成することを心がけてほしい。また、会社に関する法制度は頻繁に改正を受けているため、参考文献を用いるときは、どの時点で執筆された文献かをよく見極め、常に現行法の規定との整合性を検討することを忘れないようにしなければならない。

【成績評価方法】

科目試験による。

商法総則・商行為法（市販書採用科目）（J 080-0791）〔2単位〕

【テキスト】

落合誠一・大塚龍児・山下友信『商法Ⅰ—総則・商行為〔第5版〕』有斐閣、2013年
※テキストは、最新版の使用が望ましいが、第4版（2009年）、第3版補訂版（2007年）、第3版（2006年）を用いて学習しても構わない。

【講義要綱】

商法とは企業に関する法である。商法は、企業と企業取引に関する特別な規定を置いており、これらの規定を理解することは、私法の一般法である民法の理解もさらに深めることに役立ち、また、この他の企業法の分野に属する会社法や手形法・小切手法、保険法、海商法などを学ぶ橋渡しともなるであろう。商法総則と商行為法は平成17年に改正を受けている。条文番号や内容にも変容があったので、注意しなければならない。

【テキストの読み方】

わからない部分はそのままだとしないで、ゆっくり内容を確認しながら読むとよいであろう。特に、商人と商行為の概念ならびにこれらの相互の関係は重要なので、かならず理解するようにしてほしい。なお、テキストの9章（保険取引）は、当該科目のレポート、科目試験の出題範囲から除くものとする。

【履修上の注意】

民法総則は履修済であること。他の民法の科目（債権総論、債権各論など）についても履修していることが望ましい。

【関連科目】

民法関連科目全般、会社法、手形法、保険法・海商法。

【参考文献】

近藤光男『商法総則・商行為法（第6版）』有斐閣、2013年

藤田勝利ほか編『プライマリー商法総則・商行為法（第3版）』法律文化社、2010年

弥永真生『リーガルマインド商法総則・商行為法（第2版）』有斐閣、2006年

【レポート作成上の注意点】

テキストを丸写しせず、問題点を検討し、自らの力で問題点を書き表すように努力して欲しい。参考文献を探す際には、出版年を確認して、平成17年改正商法を前提に改訂された書物や雑誌記事で勉強する方が間違いを避ける意味でもよく、改正前の文献を用いる場合には改正点をよく把握した上で利用しなければならない。

【成績評価方法】

科目試験による。

保険法・海商法

（市販書採用科目）（J 086-0892）〔3単位〕

【テキスト】

山野嘉朗・山田泰彦編著『現代保険・海商法30講〔第9版〕』中央経済社、2013年

※テキストは、最新版の使用が望ましいが、第8版（2010年）を用いて学習しても構いません。

【講義要綱】

保険は、人の生活や企業活動におけるリスク・マネジメントの一つとして重大な役割を担っている。その特徴は多数の保険契約者が支払う（純）保険料の総額と、保険金の支払総額とが等しくなるように「大数の法則」に基づく確率計算が行われ、保険事故発生時における支払が制度的に担保されているところにある。

もともと、一般に人の経済活動に関する法律制度は、経済制度を形成・維持するための手段たる形式であるから、経済制度と法形式が内容上異なるということは考えにくい。が、保険制度にあっては、経済制度としては、保険団体を要素とするものでありながら、法律制度としては保険契約の当事者の契約のみが問題とされるというように、同一の取引について、経済制度と法律制度とでとらえる側面がまったく異なっているという特殊性が生ずる。また、保険制度上保険金支払の確保のための料率計算の必要性から、保険会社が作成する約款が不可欠の存在となっている。

その結果、保険契約に関してはさまざまな次元の問題が存在することとなる。近時の商法の判例の中でも、保険契約に関するものの比率が高くなっており、また平成22年4月1日か

ら「保険法」が施行されるなど、重要性の高まってきている分野といえる。

なお、海商法に関しては、商法第三編「海商」中の第六章に規定される海上保険についてのみ対象とする。

【関連科目】

「民法総論」

【参考文献】

西島梅治『保険法〔第三版〕』悠々社、1998年

山下友信『保険法解説』有斐閣、2010年

倉沢康一郎『保険法通論』新青出版、2004年

山下友信他『保険法（第3版）』有斐閣、2010年

重田晴生＝中元啓司＝志津田一彦＝伊藤敦司『海商法』青林書院、1994年

落合誠一＝江頭憲治郎・編集代表『海法大系』商事法務、2003年

山下友信＝洲崎博史編『保険法判例百選』有斐閣、2010年

【レポート作成上の注意点】

問題の所在を明らかにしたうえで、それについての判例・学説を論理的に把握し、自ら整理することが大切であり、それらを前提として、私見を明示しなければならない。

【成績評価方法】

科目試験による。

手形法

（市販書採用科目）（J 063-9892）〔2単位〕

【テキスト】

宮島司『やさしい手形法・小切手法〔第2版〕』法学書院、2003年

【講義要綱】

手形法は手形についての私法関係を律する法律であるが、手形自体が主に企業取引の道具として使われるものであるため、一般の人々には縁遠い存在である。そのため、手形法の学習にあたっては、まず興味を持ちにくいという難題をクリアしなければならない。しかしながら、手形法学はビジネスライクな企業取引の社会における慣習に基づいて構成されたルールであるため、感情的あるいは一般的・直接的な倫理観から離れた論理的な思考の体系となっている。その意味で、法律学というものの面白さを理解するためには、最適な科目であるといえる。より具体的には、手形行為論を学ぶことによって法律行為論についての理解を得ることができるのである。その意味では、民法を理解するためにも手形法を学ぶことには意義がある。

【テキストの読み方】

テキストとして指定した、宮島司『やさしい手形法・小切手法 [第二版]』は、手形法の骨格を具体的にわかりやすく解説し、入門者には最適の書物である。

手形法はしっかりとしたシステムティックな体系を持っているため、一時的に消化不良になるのは必然であるが、とりあえず本書を通読することが必要である。

【履修上の注意】

本来は、学習にあたっての基礎として、「民法総論」と「債権総論」の知識が必要であるが、「手形法」を学びながら、民法を振り返るという形でも構わない。

【関連科目】

「民法総論」、「債権総論」

【参考文献】

田辺光政『最新手形法小切手法（四訂版）』中央経済社、1994年

前田庸『手形法・小切手法』有斐閣、1999年

丸山秀平『手形法小切手法概論（第2版）』中央経済社、2001年

川村正幸『手形・小切手法（第3版）』新世社、2005年

倉沢康一郎『手形判例の基礎』日本評論社、1990年

鴻常夫ほか『手形小切手判例百選 [第6版]』有斐閣、2004年

【レポート作成上の注意点】

問題の所在を明らかにしたうえで、それについての判例・学説を論理的に把握し、自ら整理することが大切であり、それらを前提として、私見を明示しなければならない。

【成績評価方法】

科目試験による。

刑事政策学

(市販書採用科目) (J 085-0891) [2単位]

【テキスト】

守山正・安部哲夫編著『ビギナーズ刑事政策 [第2版]』成文堂、2011年

【講義要綱】

「刑の一部執行猶予」は、2013年6月に成立した「刑法等の一部を改正する法律」と「薬物使用等の罪を犯した者に対する刑の一部の執行猶予に関する法律」により導入された新しい形の刑罰制度である。それは、裁判所が、懲役又は禁錮を言い渡す場合において（宣告刑）、その刑の一部（猶予刑）の執行を一定期間猶予し（猶予期間）、猶予を取り消されずに猶予期間が経過した場合に、猶予されなかった刑（実刑部分）を刑期とする刑に減軽するという

刑罰である。当該制度を定めた法律は、公布日から起算して3年を超えない範囲内において政令で定める日から施行されることになっている。

レポートでは、まず、刑の一部執行猶予を設ける意義や要件（宣告刑、前科、必要性・相当性）、保護観察などについて要領よくまとめたうえで、施行後に予想される問題や制度の運用の在り方について検討を加え、自分なりの見解を示すことが求められる。

まだ成立したばかりの制度であり、その前に刊行されたテキストには簡単な紹介しかなされていないので、下記に掲げた参考文献を参照する必要がある。

【テキストの読み方】

当該問題に関する参考文献を丁寧に読んで、内容を理解し、問題点を抽出し、考察を加えてからレポートを書くこと。各参考文献の「切り貼り」作業をすることがレポートではない。

【関連科目】

刑法、刑事訴訟法

【参考文献】

主な参考文献を掲げるが、これに限るものではないので、適宜、参考文献を探して参照すること。

「特集・刑の一部執行猶予制度の導入と再犯防止」法律のひろば66巻11号（2013）。

「特別座談会・刑の一部執行猶予をめぐる」論究ジュリスト8号（2014）。

今福章二「更生保護と刑の一部の執行猶予」更生保護学研究3号（2013）。

今井猛嘉「刑の一部執行猶予制度—その意義と展望」法律のひろば66巻11号（2013）。

太田達也『刑の一部執行猶予—犯罪者の改善更生と再犯防止』慶應義塾大学出版会（2014）。

【レポート作成上の注意点】

テキストや参考文献をまとめるだけのレポートでは合格点はない。課題に関連した文献や論文のうち重要なものをきちんと読むことが大切である。さらに、「～という問題がある」という記述だけで終わっているレポートが多いが、その問題に対してどう考えるか、それとは異なる見解があるか、ある場合は、なぜそうした見解をとることができないのか、などをきちんと論ずるのがレポートの課題である。なお、再提出となった場合、前回の講評で求められていることを踏まえて次回のレポートを作成すること。前回の講評を加味して作成したとは思えないレポートや、前回の講評を考慮しないで、全く異なる内容としたレポートは、「添削不能」として処理するので注意すること。テキストや他人の文献等の丸写し、インターネット上の他人の資料等のコピー&ペーストは、添削不能とするばかりでなく、悪質なものと不誠実なものは、不正行為として処分の対象となるので、くれぐれも気をつけること。参照または引用した文献や資料は、必ず脚注に出典（著者名、題名又は書名、掲載雑誌又は出版社、刊行年、頁数）を書くこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

刑法各論

(市販書採用科目) (J 072-0291) [4単位]

【テキスト】

井田良『新・論点講義シリーズ2 刑法各論〔第2版〕』弘文堂、2013年

※初版(2007年)、同『論点講義シリーズ10 刑法各論』(弘文堂、2002年)でも単位修得には問題ありませんが、なるべく新しい版で学習をすることをお勧めします。

【講義要綱】

刑法各論は、個別の犯罪(たとえば、殺人罪、強盗罪、放火罪など)を規定した各刑罰法規の解釈論を展開することを内容としている。刑法総論が、犯罪と刑罰の基礎理論、犯罪(ただし個々の犯罪ではなく、およそ犯罪たるもの)の構成要素ないし成立要件、すべての犯罪に共通して妥当するような理論、刑罰の種類と適用などを対象とするのに対し、刑法各論は、総論の知識を前提としつつ、個々の刑罰法規に規定されたそれぞれの犯罪の特殊な成立要件を明らかにすることを中心とする。すなわち、それぞれ個別の犯罪類型を定めた刑罰法規の解釈を通して、各犯罪の具体的な内容と成立要件(たとえば、名誉毀損罪はどのような場合に成立するか)や、犯罪類型の相互関係(たとえば、窃盗罪と詐欺罪との関係)などを明らかにしようとするのである。

刑法各論は、身近な事例をめぐって法的論理が縦横に展開される、興味の尽きない学問領域である。「雑多な刑罰法規に関する種々の情報を平板に羅列したもの」などでは決してない。ただし、その面白さを本格的に味わうためには、刑法総論のかなり進んだ理解が前提となるであろうし、テキストをくり返し読むことが必要になるであろう。

各論を学ぶにあたっては、テキストの中に刑法の条文が引用されているときはもちろん、そうでなくても、つねに手元の六法を参照していただきたい。テキストを読んで理解が難しい箇所につづいたら、条文の内容が頭に入っているかどうか自問自答してほしい。テキストは、読者が六法を参照することを当然の前提として書かれている。重要な条文については、規定の文言をだいたい暗記してしまうほど何度も読み返すべきである。

また、応用力を養うためには、各論の重要な論点について立ち入った勉強をすることが必要である。すべての論点について掘り下げた研究をすることは不可能であるが、代表的ないくつかの論点を選んで教科書レベルをこえた勉強をすることは、各論全体に対する理解を数段深めることを可能にする。たとえば、芝原邦爾ほか編『刑法理論の現代的展開・各論』(日本評論社、1996年)、町野朔『犯罪各論の現在』(有斐閣、1996年)、山口厚『問題探究・刑法各論』(有斐閣、1999年)、曾根威彦『刑法の重要問題〔各論〕』(成文堂、2006年)などは、そのような学習に最適の文献であろう。

【テキストの読み方】

指定テキストを読んでわからない用語や概念があれば、そのつど法律用語辞典でその意味を確認しながら読み進めるべきだということは、「刑法総論」の場合と全く同様である。場合によっては、「刑法総論」の教科書を適宜参照する必要もでてくるだろう。「刑法総論」の場合と同じく、テキストを何度も読み返しながら、地道に粘り強く学習することが肝心である。

また、後掲の判例教材を用いて教科書に出てきた判例の事案と判旨を逐一確認すれば、学習効果は倍増する。

【履修上の注意】

特になし。基礎的な知識が欠けていると感じる場合は、まず井田良『基礎から学ぶ刑事法〔第5版〕』（有斐閣、2013年）および同『入門刑法学・各論』（有斐閣、2013年）を読んでほしい。

【関連科目】

「刑法総論」「刑事政策学」「刑事訴訟法」

【参考文献】

成瀬幸典ほか編『判例プラクティス刑法Ⅱ 各論』信山社、2012年
井田良ほか『よくわかる刑法〔第2版〕』ミネルヴァ書房、2013年

【レポート作成上の注意点】

レポートの作成にあたっては、まず問われている論点を発見しなければならない。そのためにはテキストや参考文献をよく読むことが不可欠である。論点を発見したら、関連する判例と学説を調べ、何をめぐって見解が対立しているのかを理解しなければならない。そのうえで、自分の見解（オリジナルなものである必要はない）を確定して、レポートにまとめ上げる作業が行われなければならない。自分の頭だけで考えて何かを書いてもそれはレポートにならないし、学説や判例をどれだけ調べ上げてまとめても、自分の見解が述べられていなければ合格点はつかない。参考にした文献はすべて引用する必要がある。特定の文献を引き写したレポート（ましてや他人のレポートを写したもの）はたんに不合格というばかりでなく、不正行為と評価される。

なお、本科目は「刑法各論」であるが、レポート作成の際、場合によっては「刑法総論」の文献も参照する必要がある。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

池田辰夫編『新現代民事訴訟法入門』 法律文化社、2005年

これは中野貞一郎編『現代民事訴訟法入門〔新版〕』の改訂版というべきものであり、2004年の民訴法の改正にも対応している。なお、これ以降の改正については、下記の「参考文献」欄に略述したので、参考にすること。

【講義要綱】

実体私法（民法や商法）は、具体的な権利の内容や権利の変動（権利の発生・変更・消滅等）のための要件事実を規定している。そこで権利の有無が争われた場合、裁判所は要件事実の存否を調べ、それに基づいて権利の有無を判断して、紛争の決着をつけることになる。この裁判所の判断（判決）が形成される手続が民事訴訟であり、この手続を規律しているのが民事訴訟法である。実体法上の権利の実現や私法秩序の維持は民事訴訟を通じて実現されるということができ、民事訴訟は民事紛争を法的に（正義に基づいて）解決するための手続ということもできる。つまり実体法と訴訟法は正に車の両輪に譬えられるもので、両者があいまって社会の法秩序が維持されている。

本講義の目的は、民事訴訟法の解釈を通して、民事訴訟手続の内容や構造、そこに働く原理や原則を明らかにするものである。なお、原告が私法上の請求権の実現を求めて訴えを提起した場合に、請求権の存在が裁判所の判決において認定され、その判決が確定したならば、請求権の内容は実現されることになっている。請求権の強制的な実現を目的とする手続が強制執行手続であり、民事執行法が規定している。

【テキストの読み方】

テキストを読んで、重要な用語や概念はテキストに線を引くなり、ノートにまとめるなりして、正確に理解し覚えること。同時にそれらの用語や概念は、具体的にはどのような事態（事例）を想定して作られたものであるかを考えることが重要である。用語や概念は、具体的な問題を解決するための指針として作られていることを忘れてはならない。したがって、判例や演習書を参考に、常に具体的な事例を考えながら勉強するとよいであろう。次に、民事訴訟手続の流れを自分なりに図等でまとめておくことも大切である。大局的に民事訴訟手続を理解することができるからである。

民事訴訟法は勉強する範囲が広いので、テキストを読む場合の効率的な学習方法は、重点的に読む部分とそうでない部分を区別することである。この区別は初学者には簡単ではないと思うので、参考までにテキストの重要な部分を挙げれば、「第1審の訴訟手続と複雑な訴訟」（第2章から第11章まで）である。すなわち、このことを念頭においてテキストを読む必要がある。これら以外の事項（序章・第1章・第12章以下）は、これらについて理解するために読む必要が生じた場合に、読めばよい。そうでない場合は、これらについて十分な理解が

できた後に、簡単に読めばよい。

さらに、「第1審の訴訟手続と複雑な訴訟」の中で、民事訴訟法の固有の問題で民事訴訟手続の根幹をなす重要項目を取上げて挙げれば、次のような箇所である。「訴えと訴訟上の請求」（第2章の1）、「訴えの利益一当事者適格」（第2章の2）、「弁論主義」（第7章の2）、「判決の効力」（第9章の2）、「判決の効力が及ぶ人々—既判力の主観的範囲」（第9章の3）である。

これらの項目については重点的に勉強すべきであるが、もちろん、これらだけで民事訴訟法の勉強は済むということではないし、これら以外は重要ではないということでもない。民事訴訟法を勉強したというのであれば、最低限、これらの項目について十分に理解しておく必要があるという意味である。なぜならば、これらは基礎理論を構成するものであり、これらのうえに民事訴訟法学は成り立っているからである。したがって、たとえ本科目の試験に合格して単位を取得したとしても、これらの項目の理解が十分でないならば、民事訴訟法を勉強したことにはならないと考えるべきである。

なおテキストの記述が簡単なため、内容を理解することが困難な場合は、詳しく記述されている体系書を参考にするとうい。また訴えや判決に関する箇所を読む場合、訴状や判決書を一度見ておくと理解しやすくなる。訴状や判決書のモデルは民事訴訟の実務に関する本に掲載されていることが多いし、判決書の書式は判例を判例集や雑誌で読むことによって知ることができる。

【履修上の注意】

「民法総論」、「物権法」、「債権総論」、「債権各論」、「会社法」、「手形法」等の民法・商法の基本科目の中で、少なくとも2科目以上は学習を終えていることが望ましい。

【関連科目】

「破産法」：「破産法」を履修する場合は「民事訴訟法」について学習を終えていることが必要である。

【参考文献】

参考書を利用する場合、法の改正に注意する必要がある。現在の民事訴訟法が施行されたのは1998年であるが、その後次のような改正がなされている。

2003年に民事訴訟法はいくつかの事項に関して改正された。同年、民事訴訟法と密接な関係がある人事訴訟手続や仲裁手続に関して、新しい法律が成立し公布された。すなわち人事訴訟法（平成15年法律第109号）、仲裁法（平成15年法律第138号）である。そして2004年にも民事訴訟法の一部が改正された。

その後も他の法律の改正により、それに対応して民事訴訟法の条文の改正が行われていることにも注意する必要がある。例えば、郵便事業の民営化に伴い、送達に関する規定が改正された（平成17年法律第102号）。すなわち民訴法99条2項、104条3項2号等の改正である。なお104条3項2号は、7年後に「郵政民営化法」の改正により改正された（平成24年法律

第30号)。「犯罪被害者等の権利利益の保護を図るための刑事訴訟法等の一部を改正する法律」(平成19年法律第95号)により、証人尋問に関する規定が改正された。すなわち民訴法203条の2、203条の3の追加、204条の改正である。

2011年には次のような法律が成立し公布された。「民事訴訟法及び民事保全法の一部を改正する法律」(平成23年法律第36号)、「非訟事件手続法」(平成23年法律第51号)、「家事事件手続法」(平成23年法律第53号)。

2011年の民事訴訟法の改正の内容は、国際的な民事事件に対応するために国際裁判管轄の規定を新設したことである。すなわち、日本の裁判所が国際的な民事事件を担当できるか否かについては、従来は法律に規定がないために、裁判所が事件ごとに対応していた。そのため国際裁判管轄について立法化が望まれていた。改正法はこれに応じて具体的に詳細な規定を新設したので(民訴法3条の2～3条の12)、国際裁判管轄の問題は、今後はこの規定によって処理されることになる。なお、1996年(平成8年)に成立した現在の民事訴訟法においてこの問題は検討はされたが、立法化は見送られたという事情がある。

ところで関連した問題として、外国を被告とした訴えについて、日本の裁判所が民事裁判をすることができるかという問題がある。これについては、「外国等に対する我が国の民事裁判権に関する法律」(平成21年法律第24号)が規定している(「対外国民事裁判権法」という略称が使用される場合もある)。

そこで参考書を利用する場合は、これらの改正を織り込んでいるものを利用すべきである。参考書が改正法を参照して書かれているか否かを見分けるには、本の冒頭のはしがきを読んだり、本の最後の奥付の出版年を見て判断することになる。

もっとも理論的な問題や法律の改正に影響されない問題であれば、上記の法の改正に影響を受けることはない。したがって、2003年7月以前に出版された本の価値がなくなったとか、利用できないということではない。レポートの課題は理論的な問題であり、上記改正に直接影響は受けないので、改正を織り込んでいない参考書でも十分に利用できる。なお2004年の民事訴訟法の改正の概要は、坂原正夫「民事訴訟手続のオンライン化について」(三色旗691号15頁以下〔2005年10月1日発行〕)において述べられている。

I 一般的な体系書

以下に代表的な体系書を挙げる(編著者名の五十音順)。

伊藤眞『民事訴訟法〔第4版補訂版〕』有斐閣、2014年

上田徹一郎『民事訴訟法〔第7版〕』法学書院、2011年

梅本吉彦『民事訴訟法 4版』信山社、2009年

川嶋四郎『民事訴訟法』日本評論社、2013年

河野正憲『民事訴訟法』有斐閣、2009年

小島武司『民事訴訟法』有斐閣、2013年

新堂幸司『新民事訴訟法〔第5版〕』弘文堂、2011年

高橋宏志『重点講義 民事訴訟法 上〔第2版補訂版〕』有斐閣、2013年

高橋宏志『重点講義 民事訴訟法 下〔第2版補訂版〕』有斐閣、2014年
中野貞一郎ほか編『新民事訴訟法講義〔第2版補訂2版〕』有斐閣、2008年
松本博之＝上野泰男『民事訴訟法〔第7版〕』弘文堂、2012年
三木浩一＝笠井正俊＝垣内秀介＝菱田雄郷『民事訴訟法』有斐閣、2013年

II 判例や事例を知るための参考書

高橋宏志ほか編『民事訴訟法判例百選〔第4版〕』（別冊ジュリスト201号）有斐閣、2010年

III 論点を整理するための参考書

伊藤眞ほか編『民事訴訟法の争点』（ジュリスト増刊、新・法律学の争点シリーズ4）有斐閣、2009年

IV 辞典

林屋礼二ほか編『民事訴訟法辞典』信山社、2000年

V 注釈書

体系書や教科書というものは理論的な体系に基づいて書かれるものであるが、注釈書は条文の条数の順に、それぞれの条文の内容を説明しているものである。詳細なものから簡単なものまでであるが、いずれにしても利用に際しては、先ず注釈書の当該条文が現行法の条文と同じか否かをチェックする必要がある。法の改正に関係がない条文であれば、最新のものでなくても利用できる。最新の注釈書としては、次のようなものがある（編著者名の五十音順）。

秋山幹男ほか著『コンメンタール民事訴訟法 I〔第2版追補版〕・II〔第2版〕・III・IV・V・VI』日本評論社

Iは1条～60条で、2014年

IIは61条～132条で、2006年

IIIは133条～178条で、2008年

IVは179条～242条で、2010年

Vは243条～280条で、2012年

VIは281条～337条で、2014年

笠井正俊ほか編『新・コンメンタール民事訴訟法 第2版』日本評論社、2013年

兼子一原著、松浦馨ほか6名著『条解民事訴訟法 第2版』弘文堂、2011年

小室直人ほか編『基本法コンメンタール・新民事訴訟法〔第3版追補版〕1～3』日本評論社

1は1条～132条の10で、別冊法学セミナー 212号（2012年）

2は133条～280条で、別冊法学セミナー 213号（2012年）

3は281条～405条で、別冊法学セミナー 214号（2012年）

三宅省三ほか編集代表『注解民事訴訟法 I・II』青林書院

Iは1条～60条で、2002年

Ⅱは61条～132条で、2000年

【レポート作成上の注意点】

理論は、具体的な問題に対して解決の指針を与えるものでなければならない。また具体的な問題に対する妥当な結論は、民訴法の理論と整合しなければならない。そこでこのようなことを考えてもらいたいと思い、事例問題をレポートの課題とした。

次に注意すべきことは、法律学においては、答えは一つではなく複数存在するという点である。そして重要なことは、それらのいずれかを選択するための思考過程である。すなわち、様々な観点から問題を検討して一つの解答を選択する決断こそが、法的思考能力を充実させるために重要である。したがって、このような検討と選択によってレポートが作成されなければならない。これが正にレポートにおいて問われるポイントである。

レポートの課題は、レポートを作成する際にこのような法的思考をすることを期待して、それができるように考慮して作られている。したがって、出題の意図を十分理解して、レポートを作成してほしい。すなわち、学説が対立しているのであれば、それぞれの説の長所・短所をよく検討してから、自らの見解をまとめることが重要である。

【成績評価方法】

科目試験による。

破産法

(市販書採用科目) (J 077-0591) [2単位]

【テキスト】

加藤哲夫『破産法〔第6版〕』弘文堂、2012年

※第5版(2009年)で学習を進めても構いません。

【講義要綱】

リーマンブラザースの破綻を端緒として日本経済は大打撃を受け、それからかなりの時間が経過した。しかし、その後の諸政策の実施にもかかわらず、未だそこから脱却し切れてはおらず、依然として企業倒産の件数は多い。そうした中、倒産法制の存在感は依然として大きいものがある。倒産法は、倒産した企業ないし個人を対象として、利害関係人の権利関係を適切に調整することによって、債務者の財産を適正かつ公平に清算したり、債務者の事業や経済生活の再生を目指すことを目的としている。

倒産という事態においては、債務者の乏しい財産をめぐって、利害関係人の権利・法律関係は鋭く対立する。よって、そこには民法や商法を中心とする実体法的な問題と、それを解決するための手続法的な問題とが複雑に絡まり合って存在しており、まさに問題のつぼみとなっている。

したがって、このような複雑な問題が絡まっている利害関係の調整を、当事者間の話し合

いのみによって解決することには限界があり、確固とした法制度が必要となる。それに資するのが倒産法（倒産処理法ともいう）といわれるものである。

ところで、わが国には、倒産法という名前のついた法律はなく、一般的には、破産法、民事再生法、会社更生法、会社法の第2編第9章第2節の特別清算規定を合わせて、倒産4法とよんでいる。しかし、これらの法律は、多かれ少なかれ破産法が基礎となっており、上記倒産法を理解するには、破産法の理解が不可欠である。本講座は、そのような意味において、破産法の基礎を十分に理解し、身につけてもらうことを目的とするものである。

【テキストの読み方】

テキストを読む場合、目次を大いに利用してもらいたい。すなわち、毎回テキストを読み始める前には、目次で、これから今自分はどの部分を読むのかということを常に確認すること。それによって、読む箇所の体系的な位置づけができるようになる。その場合、読んだ部分の要約をサブノートに書きながら読むと、より理解が深まると思う。また、破産法では、いろいろな聞き慣れない専門用語が出てくるが、おっくうがらずに、その都度、テキストや法律学辞典等でその意味を調べて、内容を確実に理解するようにすること。さらに、後述の『倒産判例百選〔第5版〕』（有斐閣）を利用して、判例とリンクさせながらテキストを読むと、その意味内容の理解がより深まるであろう。

また、テキストに出てくる条文は、おっくうがらずに、その都度、必ず六法全書で読んでおくこと。できれば、時間をみつけては、破産法の条文を1条から最後まで繰り返し読むようにしてほしい。そうすれば、破産法の体系が自然と頭に入ってくるであろう。

【履修上の注意】

破産手続は、実体法と手続法が複雑に絡まりながら進行していくものであり、破産法を理解するためには、そのための基礎知識が是非とも必要となる。よって、実体法としては、とくに民法財産法（民法総論、物権法、債権法）、および広い意味での商法（会社法、手形・小切手法、商法総則・商行為法）、さらには、手続法として、民事訴訟法の学習は必須である。また、もし可能であれば、民事執行法の学習もしておいてほしい。さらに、破産法には、民事再生法や会社更生法におけるのと類似した制度があるので、破産法を勉強するときには、常に、民事再生法や会社更生法の教科書等をひもとくように努力してほしい。

【関連科目・分野】

「民法」、「商法」、「民事訴訟法」、「民事執行法」、「民事再生法」、「会社更生法」等

【参考文献】

体系書（大部で詳細ではあるが、内容はかなり難しい教科書）として、もっとも定評があるのは、伊藤眞『破産法・民事再生法〔第3版〕』有斐閣、2014年である。比較的短く、読みやすい教科書としては、中島弘雅・佐藤鉄男『現代倒産手続法』有斐閣、2013年がある。また、入門書（倒産法とは大体どのようなものかを知るための教科書）としては、徳田和幸

『プレップ破産法〔第5版〕』弘文堂、2012年がある。

その他、他の法律分野と同様、倒産法も、判例を抜きにしては理論を語れないものであり、その際には、倒産法に関する重要な判例を集めて解説した、伊藤眞・松下淳一編『倒産判例百選〔第5版〕』有斐閣、2013年はぜひとも参照してもらいたい。さらに、破産法の条文を1条ずつ解説したものとして、山本克己・小久保孝雄・中井康之編『別冊法学セミナー新基本法コンメンタール破産法』日本評論社、2014年があるが、これは、学説・判例の状況も詳しく説明されており、レポート作成の際には、ぜひとも参照してもらいたい。

なお、初学者が読む場合、指定された教科書は若干難しいかも知れないので（ただし、破産法の学習をしたといえるためには、この教科書の内容はすべて理解する必要がある）、まず初めに、上の文献の内、徳田和幸『プレップ破産法〔第5版〕』等の入門書をまず読んで、倒産法とはどのようなものか、ということの頭に入れた上で教科書を読むと、より理解し易いであろう。

【レポート作成上の注意点】

破産法のレポート課題は事例問題であるから、その作成に当たっては、教科書等で学んだ破産法の理論を、具体的な事例にどのように当てはめて、問題を解決したかということが、レポートから明確に判るようなものをする必要があることを常に頭の中に入れておいてほしい。そのためには、具体的には、以下の順序で、レポート作成する必要がある。①レポートの課題が何を問うているかをしっかりと理解すること。②レポートを書く前に、テキスト等を熟読して、その内容を理解すること。①と②は同時にする必要がある。すなわち、テキストをよく読まなければ、出題の意図が分からないし、出題の意図が分かったら、それに対してどのような議論がなされているかということ、テキスト等で確認、理解する必要があるからである。③出題された問題については、理論上、このように考えられるという、基準となる考え方を提示すること。これはテキスト等を読めば書いてある。④出題された具体的な事例において、③で提示した理論がどのように当てはめられ、どのような結論を導くべきかを明らかにすること。⑤立論に当たっては、必ず、その根拠となった判例・学説・条文等を引用すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・刑事訴訟法

(J 107-1501)〔4単位〕

【講義要綱】

刑事訴訟法では、捜査から判決までの一連の手続きの流れを学ぶとともに、事実認定の資料となる証拠法に関しても学びます。刑事訴訟法では、ある「犯罪」という出来事について、捜査、公訴、公判・証拠、裁判と様々な場面で論点が密接な関連をもっていますので、ある

局面だけで考えるのではなく、例えば、捜査段階での違法が認められる場合、公訴提起できるのか、公判ではどのような争点が生じるのか、証拠法では何が争点となるのか、結果的に有罪判決を言い渡せるのか、を検討する必要があります。

なお、テキストの目次を参照して、どのような論点があるのかをつかんでください。

【テキストの読み方】

テキストでは多くの判例をとりあげています。刑事訴訟法の理論が実際に判例でどのようにあてはめられているのかを学んでください。なお、テキストを読むときには必ず該当条文を参照してください。

【履修上の注意】

刑事訴訟法を履修するにあたって、「法学」の基礎知識と「刑法」についても勉強しておいて下さい。

【関連科目】

憲法・刑法

【参考文献】

安富潔『刑事訴訟法〔第2版〕』三省堂、2013年

亀井源太郎『ロースクール演習刑事訴訟法〔第2版〕』法学書院、2014年

井上正仁ほか編『刑事訴訟法判例百選〔第9版〕』有斐閣、2011年

【レポート作成上の注意点】

1. 法学では、正確な概念の理解が不可欠です。しっかりテキストを読んでからレポートを書いて下さい。
2. 課題では何が論点なのかよく考えて下さい。
3. きちんと条文を参照しながら文章を作成して下さい。なお、法律改正に留意して最新の『六法』を用意して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

国際私法

(市販書採用科目) (J 097-1191) [2単位]

【テキスト】

櫻田嘉章『国際私法〔第6版〕』有斐閣(有斐閣Sシリーズ)、2012年
第5版(2006年)を用いて学習しても構いません。

【講義要綱】

国際私法とは、渉外的な私法関係(外国的な要素を何らかの形で含んでいる民商法に関連

する事実関係)に、適用すべき法を指定する規則のことです。

例えば、「婚姻の身分的な効力」、「不法行為債権の成立」、「物権変動」など予め典型的に分類された法律関係(単位法律関係)ごとに、もっとも密接に関連する事項(連結点)を定めておき、この事項が存在する国の法が指定されます。

具体的には、A国航空会社の飛行機が、B国内で墜落し乗客が死亡した場合には、「不法行為の成立」が単位法律関係とされますが、この連結点は「結果発生地」と定められていますから、B国の民法が指定されることとなります。このB国の民法を、準拠法(準拠実質法)といいます。

学習は、予め分類されている単位法律関係ごとに、その連結点と準拠法を確認してゆくという作業によって行います。加えて、その分類の妥当性、連結点の設定の仕方の妥当性(制定法の正当性)をも、検討する必要があります。

【テキストの読み方】

財産関係については、参考文献も参照すること。

【履修上の注意】

国際私法は、民法、商法、民事訴訟法の基礎知識があることが前提とされています。不安のある方は、少なくとも「民法総論」の教科書を復習しておく必要があると思います。

【関連科目】

民法、商法、民事訴訟法など

【参考文献】

澤木敬郎・道垣内正人著『国際私法入門 [第7版]』有斐閣(有斐閣双書)2012年
横山潤著『国際私法』三省堂、2012年

【レポート作成上の注意点】

国際私法の基本的な法源である「法例」は、2006年12月31日をもって廃止され、翌2007年1月1日からは、名称が変更されて、「法の適用に関する通則法」として施行されました。財産関係を中心に大きな改正がなされたため、旧い教科書では、内容上対応できません。したがって、前掲の参考文献を必ず使用してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

労働法 (J)

(市販書採用科目) (J 092-1091) [2単位]

【テキスト】

神尾真知子・増田幸弘・内藤恵『フロンティア労働法 [第2版]』法律文化社、2014年

※テキストは、最新版の使用が望ましいが、初版（2010年）を用いて学習しても構いません。

【講義要綱】

労働法とは、賃金を得て生活する者（労働者）と使用者との関係を規律する様々な法律の総称です。大別すると、以下の4つの領域として理解されます。

①、雇用関係に入る際の求人と求職に関わる法制度と政策を学ぶ、労働市場法。その中心的なテーマは、求職・求人に関する行政的支援・職業能力開発・雇用安定等で、昨今問題とされることの多い労働者派遣などもこの中で学びます。②、労働契約締結からその終了に至るまでの法律問題を考察するのが、個別的労働関係法です。ここでは、労働者と使用者の二者間の契約に基づく様々な労働条件、およびその変更が中心的テーマとなります。③、労働者・使用者に加えて労働組合という第3の主体が加わり、憲法28条の労働基本権を三者の間で具体化する領域が、集団的労使関係法です。労働組合・団体交渉・労働協約・争議行為、等を議論します。④、最後に現代社会では、労使間の紛争をいかに処理するかも重要な課題です。このような労働紛争の解決にかかる様々な法制度にも目を配る必要があります。

テキストは、現代的視点も含め、以上の領域全てを学べるようになっています。

【テキストの読み方】

伝統的な労働法の論点は、上記の②と③の領域にあります。②は、民法の雇用契約を発展させた領域ですが、現在では労働契約法も施行され、労働法独自の体系が整ってきています。③の領域は、憲法第28条の趣旨を如何に具現化するかを重視しております。但し興味深い論点のいくつかは、個別法と集団法の2つの法理が交錯する部分に生じます。

また労働法学は、現実社会の紛争から切り離すことの出来ない領域です。労働法学の学習には、総合的かつ体系的な理論を学習することに加えて、具体的な裁判例を学ぶことが必須です。学習に際しては労働法判例百選なども利用し、当該テーマにかかる学説が、具体的にはどのような事案として生じているかを学んで下さい。

最後に労働法学は、研究者のスタンスが分かれやすい領域でもあります。1冊のテキストに偏ることなく、複数の参考書を読み、相互に比較検討することをお願いします。かつまた現代社会では雇用の流動化が進み、労働市場に目を配る必要もあります。

【履修上の注意】

法律学を学ぶ際には、まず一般法の知識を得た上で、特別法による修正法理を学ぶ方が効果的です。労働法を学習するには、まず憲法、民法総則、債権各論を学習した後に履修することをお願いします。労働法学は法解釈学であり、労働関係を対象としております。社会政策や労働経済学の隣接領域ですが、それらを主として学ぶわけではありません。あくまでも法律学の1科目です。

【関連科目・分野】

上述したように法律学としての労働法は、憲法、民法総則、債権各論を基礎としています。さらに社会保障法とは、相互補完的な関係にあります。他学部の科目としては、社会政策学や労働経済学とも関連します。

【参考文献】

注意：労働法は改正が頻繁に行われる領域です。参考文献は、常に最新版を使用して下さい。（下記には、当該シラバス原稿作成時における情報を入れておきます。）

まず最初にテキストを用いて、当該テーマの全体像をつかみます。次にテーマに関連する専門書、あるいは法律専門誌や大学紀要に掲載されている専門的論文、さらには裁判例の原本に当たって考察を深めて下さい。

- 1) 指定テキストの他に、入手し易い初学者向きの参考書として、
 - ・中窪・野田『労働法の世界』（第10版）有斐閣、2013年
 - ・安枝・西村『労働法』（第12版）有斐閣プリマ・シリーズ、2014年
- 2) 裁判例の概略を簡易に学ぶために
 - ・別冊ジュリスト・労働判例百選（第8版）有斐閣、2009年
 - ・菅野ほか『ケースブック労働法』（第8版）弘文堂、2014年
- 3) さらに専門的に学ぶ際の概説書
 - ・菅野和夫『労働法』（第10版）弘文堂、2012年

【レポート作成上の注意点】

レポートを作成する前に、まずテキストを通読して下さい。次にレポートの構成を考える際には、当該テーマに関する専門書・専門論文・判例等を収集し、読み比べ、論点を整理した上で取り組んで下さい。レポートの末尾に必ず参考文献一覧を明記すること。

時に、単なるテキストの要約を提出する学生がいます。これは評価できないのでご注意下さい。なお他の文献から直接引用する場合には、必ずその出典を明示して下さい。その際は、文献や判例の引用方法を確認すること。インターネットの情報を引用する場合には、作成者が明らかにされているもののみを補助的に用い、URLに加えて当該HPの作成者とそのHPの名称を明示して下さい。（2010年刊行のテキスト初版で学習することは構いません。但しその場合は、最近の法改正について自習して下さい。）

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

白石忠志『独禁法講義〔第7版〕』有斐閣、2014年

※テキストは、最新版の使用が望ましいが、第6版(2012年)、第5版(2010年)、第4版(2009年)、もしくは第3版(2005年)を用いて学習しても構いません。

【講義要綱】

本講義は、経済法の中核をなし、その基本的秩序を形成する「独占禁止法」の大系を学習することを目的としている。独占禁止法は競争法とも呼ばれ、国内経済のみならず国際経済をも基本的に秩序づけているいまやグローバルスタンダードといえる。また、現代の経済社会で活躍するビジネスマンにとって必要不可欠な法律である。わが国の独占禁止法は、敗戦後の昭和22年(1947年)に制定され、現在にいたるまで60年余が経過した。この間に、わが国の経済社会は大きく変化し、わが国経済を基本的に秩序付ける独占禁止法の内容、公正取引委員会の運用・解釈もそれに応じて変容してきたといえる。現在、独占禁止法の社会的役割、そしてその重要性は国民一般に広く理解・認識されてきているが、いまだ完全にわが国の経済社会に定着したとはいえない状況にある。わが国が経済大国に相応しい国になるためには独占禁止法をわが国の経済社会に定着させることが不可欠である。もちろん、慶應義塾に学ぶ学部学生諸君にとってはそれだけでは充分といえない。これらの法運用がいかなる理念ないし理論のもと実施されているのかを的確に理解したうえで、それぞれが、これらの問題を自らの問題として取り組み、直感ではなく冷静かつ合理的な判断ができることを本講義では最終的な目標とする。

【テキストの読み方】

テキストを読む際には、理論的な説明ばかりに気を取られずに、テキスト内で取上げられている事例も適宜参照してもらいたい。事例について詳しく知りたい場合は、舟田正之他編『経済法審決・判例百選』(別冊ジュリスト199号、2010年)を参照するのが便利である。また審決や判決それ自体に当たることも重要である。特に経済法の場合、様々な取引が問題となっており、ケースを読むとビジネスの裏側がよく分かるので、ケース分析は非常に楽しいものである。是非、審決や判決それ自体についても、図書館で読んでみて欲しい。

【履修上の注意】

履修に際し、他の特定の科目を事前に履修している必要はない。ただし、経済法では、現実の経済活動や取引関係について、幅広く分析することになるので、新聞報道などに関心を持ってもらいたい。

【関連科目・分野】

経済法・独占禁止法は、一面において、事業者の経済活動を市場メカニズムの機能を有効

に発揮させることによってコントロールするものであり、人・法人の経済活動に関わる基本的な法制度（民法、商法、会社法）との関わりを無視することはできない。他方、事業者の経済活動が市場を場として行われ、ここにおける競争が国民経済の発達という公共目的と結びついて理解されることは、政府・公権力の権力行使とこれに関わる法制度（憲法、行政法、刑法）に自ずと関心を向かわせる。

このように経済法はさまざまな法制度の応用であり、これらの理解は経済法それ自体の把握に役立ち、またその前提でもある。本講義以外に、労働関係法や金融関係法も近時重要な関連科目となってきている。

また、市場や経済の秩序ないしは制度を考察の対象とする本講義の関心と関連して、経済主体の決定や行動、更に望ましい社会的厚生の実現に関する学—経済学とりわけミクロ経済学（とその応用分野としての産業組織論や「法と経済学」）など—にも強い関心と問題意識を持って取り組んでもらいたい。

【参考文献】

白石忠志『独占禁止法 第2版』（有斐閣 2009）

根岸哲編『注釈独占禁止法』（有斐閣 2009）

【レポート作成上の注意点】

レポートの課題は、独占禁止法の内容を全体を通じて適切に理解できているか否かを端的に問う問題である。当然、受講者諸君が上に掲げた文献の該当部分だけを読み比べるだけでは当方が求める解答にはたどり着けないであろう。テキストや参考文献を丁寧に読み込んで、それらの考え方を整理・検討してもらいたい。独占禁止法の体系的な把握についてはさまざまな見解があり得るわけで、本レポートにおいても受講者諸君にこれらを凌駕する独自の見解を求めているわけではない。むしろ、ここで取上げられている議論を整理し、自分なりの主張を（これらの業績の上に主張するとしても）客観的な根拠と一貫した論理に基づいて論ずることができるかどうかにある。

【成績評価方法】

科目試験による。

英米法

(J 039-7902、J 7932) [2単位]

【講義要綱】

この科目の学習目的は、大陸法とは対極にある法体系としての英米法、即ち、コモンロー体系について理解することにある。

何故、大陸法系の法制度を持つ日本の法律を学ぶものが英米法を学ぶか。それは法の本質、法と民主主義、正義のあり方、裁判所の役割等につき、より深く正しく理解し、我が国の法

及びそれを取りまく制度につき、批判的に理解するためである。

それゆえ、この科目においてはコモンローの特徴である判例法主義、陪審制、また、連邦制及び、それを形成する基盤たるアメリカ合衆国憲法、マグナカルタ等が、歴史的にどのように出現し、現在、それがどのような制度として確立されているかを知り、理解すべく、学習研究を行わなければならない。

【履修上の注意】

「法学（憲法を含む）」、「刑法各論」、「憲法」、「債権総論」、「債権各論」、「民法総論」、「商法」、訴訟法1つ（「民事訴訟法」か「刑事訴訟法」か）、「国際私法」、以上の科目を履修済みであることが望ましい。

【参考文献】

『英米法判例百選』（ジュリスト）有斐閣

『アメリカ法判例百選』（ジュリスト）有斐閣

伊藤正己・木下毅『アメリカ法入門〔第3版〕』日本評論社、2000年

田中英夫『英米法概説〔再版〕』有斐閣

『英米法』（現代法学全集48）

その他。

【レポート作成上の注意点】

- ・テキストをしっかりと通読すること：異なる法体系について学ぶのだから、その法体系の特徴、性質をしっかりと理解してからレポートに取り組む必要がある。
- ・何が問われているかをよく考えること：論点は何かをしっかりと把握し、それに沿ったレポートの構成を考えて自分の言葉で議論をすすめる必要があります。参考書をつぎはぎにしたような表現はしないことが大切です。

【成績評価方法】

科目試験による。

政治学（J）

（J 022-7201、J 7251）〔6単位〕

法

【講義要綱】

以下を修得することを目標とする。

1. 政治過程に関する知識

私達の将来を決める政治的決定は、決定を決める決定（制度、ルール）、様々な状況などから生まれてくる。こうした決定に関わるすべてを政治過程と呼んでもよい。選挙などを通して私たちはこの決定に関わっている。

2. 政治におけるものの見方

民主主義とは何か？ どこまで平等を達成すべきなのか？ こうした問いに自然科学的意味での「正解」はない。知識を蓄積するだけでなく、それをどう見るかという様々な「ものの見方」について学ぶ必要がある。

3. 理論と現実

理論として合理的であっても、現実がそれに一致しない場合もある。理論から現実を曲げるのではなく、その相違が意味することを考える必要がある。

【テキストの読み方】

意味のわからない語をそのままにせず、辞書やインターネットで調べる習慣をつけられたい。

テキストに書いてあることをその通りに受容するだけが勉強ではない。時にはその意味を疑い、自分で調べ考える必要もある。

【履修上の注意】

すべての学問はそうであるがとりわけ政治学は、幅広い知識とそれを統合する現実的感覚が必要である。日本政治、国際政治はもちろんであるが、社会、歴史、経済、文化等にも目配りが必要である。その上で移り変わる現象だけでなく、不変なもの、普遍なものは何かを見抜く眼を養われたい。

【関連科目】

「憲法」、「法学」、「経済学」、「社会学」、「歴史学」、「心理学」

【参考文献】

堀江湛編『政治学・行政学の基礎知識 第3版』一藝社、2014年

【レポート作成上の注意点】

- ・論文・レポートの書き方には一定のルールがあり、それを踏まえた方が、よりよい文章となる。論としての構成の作り方など基本的事項をまず身に付けられたい。
- ・参考文献は一冊では十分ではないので必ず複数あたること。また事典、辞典の類も概念把握には役立つ。注意して使用すればホームページなども参考になる。
- ・テキストを丸写しすることは、必ずしもよいとは限らない。

【成績評価方法】

科目試験による。

政治哲学

(市販書採用科目) (J 093-1091) [2単位]

【テキスト】

デイヴィッド・ミラー『政治哲学〈一冊でわかるシリーズ〉』岩波書店、2005年

【講義要綱】

ロックやルソーと並ぶ「社会契約説」の代表的論者として知られているホブズであるが、彼は国家を聖書に登場する海の怪物リヴァイアサンになぞらえ、それは人間がみずからを模して作り上げた人工的構築物であるとする。そのことを論証するにあたり、彼はリヴァイアサンを構成する「部品」たる人間の特質から議論を始め、「万人の万人に対する戦争」状態である自然状態から、いかにして国家が導き出されるのか議論を進めている（第1部）。

第2部ではそのようにして構築された国家がどのようなものであるのか、国家の諸形態、主権や人権の問題が論じられている。

可能な限り、まず原著を読み、自分なりの理解を形成してほしい。ついで、「ホブズの近代性」という限定された視点から、どういうことを読み取ることができるか、解説書や研究書を参考にノートをつくり、それらを素材に自分なりの回答を用意するよう努めてほしい。

【テキストの読み方】

意味のよくわからない専門用語などはそのつど辞書や事典、ウェブなどで調べてください。分からないまま、勝手な理解で読み進めていては勉強になりません。またテキストに書いてあることをそのまま受け入れ、覚えようとするのではなく、おかしいと思うところは自分でさらに調べ、自分の頭で理解し、自分の言葉で表現する癖をつけてください。

【履修上の注意】

政治学、近代政治思想史、法学、法哲学の基礎知識が必要です。

【関連科目】

政治学、近代政治思想史、法学、法哲学、哲学

【レポート課題用参考文献】

ホブズ『リヴァイアサン』第1部、第2部、岩波文庫（第3部、第4部はこの問題に関しては必要ありません。）

福田歓一『近代の政治思想』、岩波新書、1970年

【参考文献】

福田歓一『ホブズにおける近代政治理論の形成』、岩波書店、1998年（福田歓一著作集第1巻）

福田歓一『近代政治原理成立史序説』、岩波書店、1998年（福田歓一著作集第2巻）

田中浩『ホブズ研究序説—近代国家論の生誕〔改訂増補版〕』、御茶の水書房、1994年

レオ・シュトラウス『ホブズの政治学』、みすず書房、1990年

【レポート作成上の注意点】

1. 参考文献の丸写しやWeb検索したページのカット＆ペーストは不正行為とみなします。不十分でも自分なりの考察を行うこと。
2. 参考文献から引用するときは、必ず注をつけて、著者、著作、引用頁を明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

日本政治史 I —古代— (J 034-7702、J 7740)〔2単位〕**【講義要綱】**

東アジア情勢の変化に注目しつつ、古代日本の政治発展について考察する。

【参考文献】

笠原英彦『新・皇室論』芦書房、2013年
井上光貞ほか編『政治史1』山川出版社、1976年
田中史生『倭国と渡来人』吉川弘文館、2005年

【成績評価方法】

科目試験による。

日本政治史 II —中世— (J 042-8502、J 8571)〔2単位〕**【講義要綱】**

中世日本の権力構造を多角的に考察する。

【参考文献】

テキスト末尾の参考文献リストを参照のこと。これに加え、森茂暁『鎌倉時代の朝幕関係』思文閣出版、1991年、などが参考になる。

【成績評価方法】

科目試験による。

日本政治史 (J 024-7202、J 7254)〔2単位〕**【講義要綱】**

昭和初頭の日本の政治と外交を、二大政党による政権交代を視野に置きながら考察してみてください。

【テキストの読み方】

特定の時代だけでなく、時代を通観するテキストの読み方が必要です。

【参考文献】

井上寿一『政友会と民政党』中公新書、2012年
北岡伸一『日本政治史』有斐閣、2011年

【レポート作成上の注意点】

政治史上の事実をまとめるだけでは不可です。当該期の特徴をどのように浮き彫りにするかを考えて論じてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

ヨーロッパ政治史

(J 023-7201、J 7256)〔1単位〕

【講義要綱】

20世紀のヨーロッパ政治の歴史を、ヨーロッパ統合を中心として各国政治の発展と結びつけながら学習します。ヨーロッパ主要国の歴史と、ヨーロッパ統合の歴史、そして冷戦や国際環境の変化などを総合的に把握して下さい。

【参考文献】

遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』名古屋大学出版会、2008年。

【成績評価方法】

科目試験による。

アメリカ政治史

(市販書採用科目)(J 095-1091)〔4単位〕

【テキスト】

紀平英作編『新版世界各国史24 アメリカ史』山川出版社、1999年

【講義要綱】

アメリカ合衆国の政治史の概説。植民地時代から現代までをバランスよく学ぶ。アメリカ政治の特徴についての歴史的なアプローチであるといつてよいであろう。いわゆる文学部西洋史学科の歴史科目よりは政治学的あるいは理論的な分析視角が入っているものの、基本的に歴史であることには変わりがない。

本科目においては、アメリカの国内政治の展開だけでなく、外交政策の展開も重視されている。日本にとってもっとも重要な国であるアメリカ合衆国の内政および外交について、とくに歴史的背景を重視して学びたいものに薦めたい。

【テキストの読み方】

テキストだけでもかなり詳細に解説されているものの、併せて以下の本とともに読みすすめればより高度な理解が可能になるであろう。

大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝編『史料が語るアメリカ：1584-1988』（有斐閣）

歴史的に重要な資料を訳出した簡便な資料集。テキストと並行して読みすすめることを強く薦めたい。

有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎編『アメリカ史研究入門』（山川出版社）

基本的な歴史の流れをおさえた読者向けに、最新の研究動向を時期別・テーマ別に平易に紹介しており、文献調査の方法も示されている。テキストを読んだうえで是非読み進んでほしい。

久保文明編『アメリカの政治』（弘文堂）

アメリカ政治の初歩をわかりやすく解説。

有賀貞『アメリカ・ヒストリカルガイド』（改訂新版）（山川出版社）

政治を中心にアメリカ史をコンパクトに解説。

有賀貞・大下尚一・志邨晃佑・平野孝ほか『アメリカ史1・2』（山川出版社）

細かい事実を調査するのに便利。必要に応じて適宜参照されたい。

アメリカ学会訳編『原典アメリカ史1-9』（岩波書店）

歴史的展開の概説と資料の訳出およびその解説からなるきわめて有益な参考書。くわしく知りたいテーマについて学習する際に非常に便利である。

【研究課題】

以下に、自主学習の目安として、練習問題を記す。（基本的に解答は本文のなかに存在するか、少なくとも示唆されている。）

第1章 北米イギリス植民地の建設と発展

問題一 18世紀後半にイギリスから独立する13植民地は、どのような政治社会的特徴を持っていたのか、地域間の比較をしつつまとめてみよう。

問題二 13植民地は、イギリス帝国内部、さらにはヨーロッパやアフリカを含めた大西洋世界においてどのような政治経済的な位置づけに置かれていただろうか。時期の違いにも留意しながらまとめてみよう。

第2章 独立から建国の時代

問題一 独立に至り、さらにアメリカ合衆国成立へと帰着する経緯を、反対派の存在にも注目して、他の文献も参照してまとめてみよう。これらの経緯はどの程度「必然的」であったといえるのであろうか。

問題二 建国初期の政治的対立のあり方は、現代のそれとどのように異なると考えられるだろうか。政党政治に着目してまとめてみよう。

第3章 共和国の成長と民主制の登場

- 問題一 19世紀初頭のアメリカにおいて、南部や西部といった地域的まとまりはいかなる政治的意義をもつただろうか。具体的な争点の展開にも注目しつつ、まとめてみよう。
- 問題二 「ジャクソニアン・デモクラシー」はどの程度「革命的」であったか。変化と継続の両面に注意を払いながら、他の文献も参照して考えてみよう。

第4章 「明白な運命」と南北対立の激化

- 問題一 黒人奴隷制の存続の是非をめぐるのは、賛否両面から様々な議論が展開されたが、前章の記述も併せて整理してみよう。
- 問題二 領土の拡大に起因する出来事を中心に、奴隷制をめぐる南北対立の展開を整理してみよう。後の南北戦争は、歴史的必然だったのか、それとも別の解決がありえたのだろうか？

第5章 南北戦争と再建の時代

- 問題一 これまでのアメリカ史上最大の死者数を出した南北戦争は、その後のアメリカ史にどのような影響や記憶を残しているだろうか。他の文献にもあたってまとめてみよう。
- 問題二 戦後の再建はいかなる成果を生み、そこにはどのような限界があったのか、それぞれの原因を考えながらまとめてみよう。

第6章 爆発的工業化と激動の世紀末

- 問題一 南北戦争後の数十年を、戦前と20世紀の橋渡しをした時期と考えたと、この間に現代につながるいかなる変化が生じたと考えられるか、政治を中心にまとめてみよう。
- 問題二 アメリカの労働運動、社会主義運動、そして農民運動の特徴は何か。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題三 婦人参政権運動、禁酒運動、移民制限運動など、19世紀半ばから1920年代にかけて登場した運動について、その勢力伸長の理由と運動の成果、支持した人びと、指導者などの側面に分け、他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題四 人民党の運動と革新主義の運動を、担い手、目標とした政策、獲得した支持と成果、その遺産などの側面に分け、他の文献も参照しながら比較してみよう。

第7章 革新主義と世界大国アメリカ

- 問題一 革新主義運動はどのような形をとったのか、整理したうえで、それが後世にどのような影響を与えたのかまとめてみよう。
- 問題二 セオドア・ローズヴェルト、タフト、ウィルソンの革新主義との関わりを整理してみよう。
- 問題三 米西戦争を契機にアメリカの対外政策はどのように変化したといえるだろうか。また、それはどの程度、いかなる意味で「帝国主義的」だったといえるだろうか。まとめてみよう。

問題四 アメリカの第一次世界大戦との関わりは、どのようなものだったか、アメリカの国内社会への影響にも注意しながらまとめてみよう。この戦争は、その後のアメリカ史にとってどのような意味をもっただろうか。

第8章 繁栄と大恐慌

問題一 国際連盟加盟に反対した共和党の外交政策は1921年から1933年までどのように展開されたであろうか。それを孤立主義と断定することはどの程度妥当であろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題二 大恐慌に対するフーヴァー、フランクリン・ローズヴェルト両政権の対策を比較すると、そこにはいかなる共通点と違いがあるだろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題三 ニューディール政策は大きく二次に分けられ、その後行き詰まりへと変遷するが、それはアメリカの政治や国家機構のあり方をどのように変えたのだろうか。またそこにはいかなる限界があったといえるか、まとめてみよう。

問題四 アメリカの第二次世界大戦への参戦の過程と理由を、第一次世界大戦への参戦の過程と理由と比較しながら、他の文献も参照して検討してみよう。また、国内の政治状況、少数集団や戦争への批判者に対する対応ではどのような異同があったのであろうか。併せて調べてみよう。

問題五 「ニューディール連合」とは何か。その安定性の理由はどこに求められるか。それ以前の多数派連合とどのように違うか。また内部の対立要因ないし矛盾はどこにあったか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題六 1930年代の南部の政治は、いかなる点で他の地域の政治と異なっていたか。またそれはニューディールの展開や戦争政策の展開に対して何らかの影響を及ぼしていたのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題七 真珠湾攻撃にいたるまでの日米交渉では何が焦点であったか。戦争を避ける可能性はあったのだろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

第9章 第二次世界大戦から冷戦へ

問題一 第二次世界大戦中のアメリカとイギリス、そしてソ連は、それぞれ何を目的としていたのだろうか。またローズヴェルト大統領の外交にはどのような特徴があったであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題二 大戦中に策定されていたアメリカの戦後構想はどのような性格を持っていたのだろうか。またそれはどの程度実現し、いかなる限界を持っていたのだろうか。

問題三 大戦を通じて、アメリカの社会はどのような変化を経験したのだろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題四 ソ連に対するローズヴェルト、トルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、そしてジョンソン各政権の政策を比較検討し、ソ連との対立がどのように激化し、また緩和したかについて、他の文献も参照して調べてみよう。

- 問題五 ニューディール期に成立したアメリカの福祉国家はその後、トルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソンの各政権の下でどのように変化したであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題六 マッカーシズムはアメリカにおいて例外的現象であろうか、それともアメリカ本来の体質から直接的に発したものでであろうか。他の文献も参照して考えてみよう。

第10章 パクス・アメリカーナとその陰りの始まり

- 問題一 南北戦争後の再建から1964年の市民権法成立まで約一世紀かかっているが、なぜ黒人の地位向上はこれほどの時間を要したのか、他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題二 ジョン・F・ケネディは今日でもアメリカで国民的人気を誇るが、それはなぜか、他の文献も参照して調べてみよう。またケネディ政権の内政と外交はどう評価できるだろうか。
- 問題三 「偉大な社会」計画による改革とニューディール期の改革を、その担い手、課題、目標、政治的支持集団などの点から、他の文献も参照しながら比較検討しなさい。
- 問題四 アメリカがベトナム戦争に深入りしたのは特定の政権の責任であろうか。それともアメリカの外交政策が本来的にもっていた体質の故であろうか。他の文献も参照して、自分の考えをまとめてみよう。
- 問題五 対抗文化やフェミニズムに代表される、それまでの社会のあり方に対する異議申し立ては、中長期的にみていかなる政治的な影響をもったと考えられるだろうか。
- 問題六 ニクソン＝キッシンジャー外交はアメリカ外交史においてどのような特徴をもっているか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題七 20世紀を通じて、「帝王的大統領制」はいかにして生み出されたと考えられるだろうか。

第11章 ふたたび変貌するアメリカ

- 問題一 共和党はレーガンを当選させるにあたって、どのようなそれまでと違う新規の政策を用意したのであろうか。アメリカの保守主義はどのような過程を経て、いかなる理由で復活したのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題二 レーガン外交の特徴はどこにみられるであろうか。同じ共和党のニクソン＝キッシンジャー外交とどのように異なっていたのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題三 ニューディール連合はいかなる過程を経て、いかなる理由で解体したと考えられるであろうか。またこんにち、民主党と共和党はどのような集団から支持されているのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題四 クリントンは自らを「ニュー・デモクラット」（新しい民主党員）と定義しているが、彼はどのような点でそれまでの民主党政治家と異なり、どの部分で同じなのであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。
- 問題五 1994年中間選挙で勝利して翌年から成立した共和党多数議会は、それまで40年間の

議会と、内政、外交、あるいは大統領との関係などにおいて、どのように異なっていたであろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題六 民主党が1992年と1996年の大統領選挙で連続して勝利を収めた要因は何であろうか。また、中間選挙としては例外的に1998年に民主党が議席を増やした原因は何であろうか。他の文献も参照して調べてみよう。

問題七 冷戦の終結によって、アメリカの対外政策の課題はどのように変化したと考えられるだろうか。ブッシュ（父）、クリントン両政権の対応を比較しつつ考えてみよう。

【参考文献】

明石紀雄、飯野正子『エスニック・アメリカ：多文化社会における共生の模索』第3版（有斐閣、2011年）

東栄一郎（長谷川寿美他訳）『日系アメリカ移民二つの帝国のはざまで：忘れられた記憶、1868-1945』（明石書店、2014年）

加藤洋子『「人の移動」のアメリカ史：移動規制から読み解く国家基盤の形成と変容』（彩流社、2014年）

貴堂嘉之『アメリカ合衆国と中国人移民：歴史のなかの「移民国家」アメリカ』（名古屋大学出版会、2012年）

久保文明他編『マイノリティが変えるアメリカ政治：多民族社会の現状と将来』（NTT出版、2012年）

高佐智美『アメリカにおける市民権：歴史に揺らぐ「国籍」概念』（勁草書房、2003年）

イアン・ティレル（藤本茂夫他訳）『トランスナショナル・ネーション：アメリカ合衆国の歴史』（明石書店、2010年）

田中きく代『南北戦争期の政治文化と移民：エスニシティが語る政党再編成と救貧』（明石書店、2000年）

ジョン・ハイナム（斎藤真他訳）『自由の女神のもとへ：移民とエスニシティ』（平凡社、1994年）

古矢旬『アメリカニズム：「普遍国家」のナショナリズム』（東京大学出版会、2002年）

松本悠子『創られるアメリカ国民と「他者」：「アメリカ化」時代のシティズンシップ』（東京大学出版会、2007年）

村田勝幸『〈アメリカ人〉の境界とラティーノ・エスニシティ：「非合法移民問題」の社会文化史』（東京大学出版会、2007年）

【レポート作成上の注意点】

さまざまな参考文献を読み足した上で、必ず参照した文献について適切な形式で注をつけて作成すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

ロシアは中国のように日本と歴史的文化的関係が深いわけでも、またアメリカのように日本と経済的・政治的に結びついているわけでもないので、理解がなかなか難しい国です。社会主義体制という独自の政治経済体制を70年余り採用してきたことも、ロシアという国の理解を困難にしています。しかし、日本の隣国である以上、そこでどのようにして政治がなされているのか知っておく必要があります。特に、体制転換のような大規模な大きな変化が起こった後には、過去に得た認識がどこまで現在でもあてはまるのか、再吟味する必要があります。どこの地域でもそうですが、ロシアについても、深く理解するためには、歴史的展望をもち、他と比較してみる必要があります。こうした方法によって、好き嫌いを超えたロシア像を構築したいと思います。

【テキストの読み方】

まず全体を読み通して、ロシアについてイメージを描いてください。現状を理解するには、ソ連時代の政治はもちろん、その前の時代の政治について知識を持つことが必要です。次にもう一度、今度は日本の政治とはどこが違うのか考えながら読んでください。理解が深まるはずですよ。

【履修上の注意】

特にありませんが、地域研究の一部門ですから、「地域研究基礎」もしくは「政治学基礎」を予め学習しておくと、内容がよくわかると思います。関連する本や教科書を読んでください。

【関連科目・分野】

「歴史学」「政治学」「東洋史概説」「西洋史概説」「ロシア文学」

【参考文献】

歴史の概説書として、『ロシア史』1～3（山川出版社、1995～1997年）と土肥恒之『ロシア・ロマノフ王朝の大地』（講談社、2007年）。現代に関しては、新聞、インターネットなどを通して政治、経済に関する情報を収集し、得られたものを相互に比較しつつ、利用してください（新聞やインターネットによる情報は、しばしば異なる解釈が付されているので、複数の新聞や情報源を利用してください）。

【レポート作成上の注意点】

レポートはたんなる感想文ではないので、論点を整理して論じるよう心がけてください。予め論点を箇条書きにしておくなど、書くべきポイントをきちんと整理してから書いてください。これは努力すれば、誰でもかなり身につくものです。ワープロを利用するときは、変換ミスのないように注意してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

現代中国論

(市販書採用科目) (J 102-1391) [2単位]

【テキスト】

毛里和子『現代中国政治〔第3版〕—グローバル・パワーの肖像—』名古屋大学出版会、2012年

【講義要綱】

「台頭する中国」への関心が日本のみならず国際社会で高まっている。それは、一つには過去20年以上にわたって、中国が急速な経済成長を実現し、「世界の工場」、「世界の市場」として世界経済を牽引する力と認識されてきたからである。いま一つには、その経済力を背景に国際政治における発言力が高まり、「大国」として認知されてきたからである。しかし、「台頭」だけが中国の真の姿ではない。一方において中国は多くの深刻な問題に直面しており、「台頭」とは異なる側面にも留意しなければならない。

こうした多面性を持つ中国の現状を理解する上で不可欠であるのが、歴史的背景への理解である。すなわち、現在、中国が直面する問題を理解するためには、その歴史的背景に踏み込む必要がある。そうすることによって、中国の政治・外交の今後の展望を知る手がかりを得られるはずである。以上の問題意識に基づき、本講義では、「歴史的連続性」の視点を踏まえて、中国の政治・外交の問題を扱う。本講義の中心は1949年以降の中華人民共和国期であるが、無論、それ以前の中華民国期への理解も必要とされる。こうして、現代中国に生じたさまざまな事象の中から、中国の政治・外交の全体像を理解する上で有意義な個別のテーマを選び、学習を進めてゆく。

中国は日本と地理的にも文化的にも近接した存在であるがゆえに、理解が比較的容易であると思われがちである。しかし、いったん学習を始めるとその奥深さと複雑さに困惑するに違いないが、それこそが中国研究の醍醐味と言えよう。

【テキストの読み方】

本レポート課題に取り組むためには、当然のことながら、近年の中国政治に関する理解だけでは不十分である。

現在、中国において生起している様々な事象の背景を理解するためには、少なくとも、中華人民共和国建国以降の中国政治全体に関する理解が必要である。そのために課題提出者は、まず中華人民共和国の政治を通史的に理解しなければならない。差し当たり、テキストとともに下記の参考文献を読むことをおすすめする。それぞれの著者が、様々な視点から中華人民共和国の歴史を整理していることが理解できるはずである。これらを比較し、批判的に検

証しながら、自分自身の力で中華人民共和国史を整理し直す作業を踏まえて、本レポート課題に取り組んで欲しい。

【履修上の注意】

平素より、中国の動向に関心を持ち、中国に関する報道や情報に注意を傾け、一定の基礎的な理解があることが望ましい。

【参考文献】

- 西村成雄・小此木政夫『現代東アジアの政治と社会』放送大学教育振興会、2010年
国分良成編著『現代東アジア—朝鮮半島・中国・台湾・モンゴル—』慶應義塾大学出版会、2009年
西村成雄・国分良成『党と国家—政治体制の軌跡—』岩波書店、2009年
山田辰雄『中国近代政治史』放送大学教育振興会、2007年
国分良成編『中国の統治能力』慶應義塾大学出版会、2006年
家近亮子ほか編『5分野から読み解く現代中国』晃洋書房、2005年
国分良成編『中国政治と東アジア』慶應義塾大学出版会、2004年
天児慧『中国の歴史11 巨龍の胎動』講談社、2004年
天児慧『中華人民共和国史』岩波新書、1999年
小島朋之『中国現代史』中公新書、1999年

【レポート作成上の注意点】

レポート課題に関しては、上記の参考文献以外にも、膨大な書籍と論文がある。課題提出者は、それらをできるだけ系統的かつ批判的に読みこなすことが要求される。なお、言うまでもないが、課題に関する書籍や論文を単純に丸写ししたり、或いは部分的に切り取ったりしたものを要約しただけでは、合格点には達しない。課題提出者自身が本課題に真摯に取り組み、従来の説を批判的に検証した上で、たとえ未熟ではあっても、自らの言葉で記述することが要求される点に留意されたい。

【成績評価方法】

科目試験による。

日本外交史 I

(J 025-7301、J 7359) [4単位]

【講義要綱】

日本の開国以降第二次世界大戦終結までの（いわゆる戦前の）日本外交に関して、日本の指導者がみた主観的世界像および自国像と欧米およびアジアの国際政治の現実の間の関係・相互作用に留意して、理解を深めたい。

【参考文献】

入江昭『日本の外交—明治維新から現代まで』中公新書、1966年

【レポート作成上の注意点】

レポート課題に対するいわゆる「正解」は存在しない。また、単なる事実関係の羅列に終わらないように留意したい。分析視角（事実関係に一定の意義付けを与える一貫した視点）に一定のセンスや論理性があり、全体の考察に分析的なまとまりがあることが重要である。

【成績評価方法】

科目試験による。

日本外交史Ⅱ

(J 048-9301、 J 9360)〔2単位〕

【講義要綱】

第二次世界大戦終結以降（いわゆる戦後）20世紀終わりまでの日本外交について、戦後憲法と日米安全保障関係を基盤とするいわゆる「吉田路線」と、世界およびアジアの国際政治との相互関連に留意して理解したい。

【参考文献】

国分良成他『日中関係史』有斐閣、2013年

【レポート作成上の注意点】

レポート課題に対するいわゆる「正解」は存在しない。また、単なる事実関係の羅列に終わらないように留意したい。分析視角（事実関係に一定の意義付けを与える一貫した視点）に一定のセンスや論理性があり、全体の考察に分析的なまとまりがあることが重要である。

【成績評価方法】

科目試験による。

西洋外交史

(J 033-7702)〔4単位〕

【講義要綱】

第一次世界大戦から現在に至るまでの西洋外交史を対象にしています。外交の変容を中心として、大きな歴史の流れを理解していただきたいと思います。

【参考文献】

細谷雄一『外交—多文明時代の対話と交渉』有斐閣、2007年

【レポート作成上の注意点】

- (1) 参考文献を読んで下さい。
- (2) 著者の文章と自分の文章を区別して、論文形式で執筆して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

政治思想史Ⅲ

(J 036-7702)〔2単位〕

【講義要綱】

本講義の主たる目的は、テキストの序でも示されているように、〈啓蒙的理性〉と〈ロマン主義的理性〉という2つのパラダイムの対立・融合のプロセスの検討を通じてモダニティならびに現代政治の思想的課題を明らかにすることである。

【テキストの読み方】

各々の政治思想に内在するロジックを的確に理解したうえで、さらにそのロジックが歴史的にどのように作用してきたかを意識しつつ読んでください。

【履修上の注意】

「ヨーロッパ中世政治思想」をあわせて履修されることをお勧めします。

【関連科目】

「ヨーロッパ中世政治思想」、「政治哲学」、「西洋哲学史Ⅱ—近世・現代—」

【参考文献】

奈良和重『イデオロギー批判のプロフィール——批判的合理主義からポストモダニズムまで』慶應義塾大学法学研究会、1994年

カッシーラー著、中野好之訳『啓蒙主義の哲学（上）（下）』ちくま学芸文庫、2003年

バーリン著、小川晃一ほか訳『自由論』みすず書房、2000年

蔭山宏『崩壊の経験——現代ドイツ政治思想講義』慶應義塾大学出版会、2013年

【レポート作成上の注意点】

このレポート課題の問題だけに固執せず、テキスト全体を読んでから、問題に即して適切に答えてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

ヨーロッパの政治思想が中世と呼ばれる時期（テキストではそれを9世紀から15世紀までの約700年間に設定しています）において遂げた展開を講義します。その際、「普遍」と「特殊」との関係ならびにその変遷過程が重要なテーマとなります。

【テキストの読み方】

古典古代の哲学や宗教（キリスト教）といった多様な要因が、ヨーロッパ人の政治理解に大きな影響を与えていく、その消息に関心を払ってください。またテキスト執筆者にはメタレベルでの問題意識があります。それは、近代以降の日本人にとってヨーロッパ文化が第二の自我になっているということ、したがって日本人にとってヨーロッパ文化がもっている意義の把握は今日においても極めて重要だ、ということです。これらの点を意識しつつ、テキストを読まれることを強く願います。

【履修上の注意】

「政治思想史Ⅲ」をあわせて履修されることをお勧めします。

【関連科目】

「政治思想史Ⅲ」、「西洋哲学史Ⅰ—古代・中世—」、「歴史（西洋史）」

【参考文献】

- 鷲見誠一『ヨーロッパ文化の原型』南窓社、1996年
パコー著、坂口昂吉・鷲見誠一訳『テオクラシー』創文社、1985年
ティアニー著、鷲見誠一訳『立憲思想』慶應義塾大学出版会、1986年
モラル著、柴田平三郎訳『中世の政治思想』平凡社ライブラリー、2002年
佐々木毅著『宗教と権力の政治』講談社学術文庫、2012年
将基面貴巳著『ヨーロッパ政治思想の誕生』名古屋大学出版会、2013年
田上雅徳著『入門講義 キリスト教と政治』慶應義塾大学出版会、2015年

【レポート作成上の注意点】

どの科目のレポートもそうなのでしょうが、論理的な流れのはっきりしたレポートを作成してください。当該科目のように歴史的な科目のレポートでは、往々にして「〇〇年に××ということが起こった。次いで△△年には□□という事件が生じた」といった事実の羅列を記しただけのものが見受けられます。これは年表ではあってもレポートではありません。〇〇年の××を受けて△△年に□□が起こったとして、そこに一体いかなる因果関係が認められるのか。その点を意識した記述を心がけてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

この科目の主たる目的は、「コミュニケーション」概念を軸としつつ多様な学問領域の成果を用いて思考することの面白さを理解してもらうところにある。もともと「コミュニケーション」論は学際的な学問領域であり、政治学、社会学、心理学、社会心理学などの隣接分野との関わりが深いため学習範囲が広い。テキストや参考書だけでなく、関連する社会科学の文献をなるべく多く読むことが望まれる。

【テキストの読み方】

テキストの内容で分からない箇所がある場合は、テキストの文章が参照している参考文献にまでさかのぼって、自分の理解を深めることが望ましい。

【履修上の注意】

事前に履修すべき科目や、あらかじめ学んでおくべき知識は特にない。しかし、学習にあたってはテキストだけでなく他の複数の文献を読んで幅広く勉強することが必要である。参考文献で悩む場合、テキストの中で数多くの文献が紹介されているので、これらの文献を実際に自分の眼で読んでみるのが最も参考になる。

【関連科目】

「政治学」、「社会学」、「社会心理学」

【参考文献】

大石裕『メディアの中の政治』勁草書房、2014年

大石裕編『戦後日本のメディアと市民意識』ミネルヴァ書房、2012年

大石裕編『ジャーナリズムと権力』世界思想社、2006年

大石裕『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房、2005年

大石裕『政治コミュニケーション』勁草書房、1998年

【レポート作成上の注意点】

レポートのタイトルを自分で考え、冒頭に明記すること。

レポート作成を行う際に参照した文献、論文、資料などを明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

藤田弘夫・吉原直樹編『都市社会学』有斐閣、1999年

【講義要綱】

本科目は都市の多様な側面を社会的に理解することを目的とする。テキストに即して、次の順序で議論していく。

序 章 都市社会学の方法と対象

第Ⅰ部 都市の活動と世界

第Ⅱ部 住民活動とコミュニティの形成

第Ⅲ部 生活世界と都市文化の変容

第Ⅳ部 都市の計画と管理

終 章 都市社会学の新しい課題

名著解題

【テキストの読み方】

テキストについては、全部の章を正確に熟読してください。マテリアルやコラム、名著解題まで試験の範囲に入ります。

【履修上の注意】

持ち込み不可ですので、内容について自分でまとめてください。単にキーワードの暗記だけでなく、内容を論じる問題になります。

【参考文献】

各章の終わりに掲載されている文献を参考にしてください。他に次のようなテキストも参考になります。

- ・町村敬志・西澤晃彦『都市の社会学』有斐閣、2000年
- ・園部雅久・和田清美編著『都市社会学入門』文化書房博文社、2004年
- ・吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』有斐閣、2013年
- ・松本康編『都市社会学・入門』有斐閣、2014年

【レポート作成上の注意点】

以下の5つの条件がそろわなければ合格となりませんので、注意してください。

1. テキスト以外に5点以上の参考文献を用いること。
2. 字数は3600字以上4000字以内（注を字数に含む。参考文献リストは字数に含めない）。
3. 論述は社会的視点からなされること。
4. 注をつけること。
5. 参考文献リストを作成すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

現代社会は、産業化と切り離せない。産業社会学は、産業化された現代社会の社会的・人間的側面を明らかにしようというものである。現代人は、企業・官庁・非営利組織など、ほぼ例外なく何らかの組織に帰属して生活している。本科目で考えるべきことは、産業化にともなう諸課題であり、産業革命と市民革命の関係、大量生産方式と大衆社会の到来、組織とコミュニティの問題、組織と個人の目的、その効率性と人間性、組織による人間疎外とその克服、あるいはリーダーシップやプロフェッショナルリズム、余暇と労働の問題など、そのテーマは幅広く、しかも身近である。みずからの仕事と生活をふりかえり、現代を考えるという意味で、生涯学習に最適な課題を含んでいる。本科目の学習を通じて、現代社会について一歩踏み込んで考えてほしい。

【テキストの読み方】

テキストは、書かれている数字や時代背景に古いものがあるが、時代を超えた「古くて新しい問題」を提起している。含蓄ある表現が随所にみられ、示唆に富むものでもある。テキスト全体の底流に流れている大きな主張を読み取ってほしい。

【履修上の注意】

産業化はわれわれのまわりに深く浸透している。産業化が社会や個人におよぼした影響を他人ごとのように批判するのではなく、自分のこととして考えてほしい。他人の文章を借りるのではなく、自分の考えをしっかりと主張することが、履修上の条件である。

【関連科目】

特に指定しないが、経済学、経営学、社会学、心理学などに広がるテーマに関心をもっておいてほしい。

【参考文献】

- テラー『科学的管理法』ダイヤモンド社、2009年
- フロム『自由からの逃走』創元社、1984年
- ホワイト『組織のなかの人間』創元社、1984年
- バーナード『経営者の役割』有斐閣、1979年
- マグレガー『企業の人間的側面』産能大学出版部、1990年
- ハーズバーグ『仕事と人間』東洋経済新報社、1983年
- 井原久光『テキスト経営学（第3版）』ミネルヴァ書房、2008年
- 井原久光『社会人のための社会学入門』産能大学出版部、2012年など

【レポート作成上の注意点】

レポート課題はテキスト全体を通じて理解したことをたずねている。テキストの一部にあ

る記述に頼るのではなく、全体を通じて学んだことをふまえて論じてほしい。また、今回のテーマは、産業社会に生きる私たちすべてに共通する課題といえる。社会批判や評論家的なレポートではなく、自分の問題として考えてほしい。レポートの分量については4,000字という制限にこだわっているわけではない。簡潔を旨としてほしいが、同時に、しっかりとした内容のものにしてほしい。

【成績評価方法】

科目試験による。

経済原論 (J)

(J 019-6808) [4単位]

【講義要綱】

ミクロ経済学およびマクロ経済学からなる経済学の基礎理論を学習する科目である。

マクロ経済学が国民総生産・失業率・物価水準といった経済全体の集計量を考察するのに対し、ミクロ経済学は個々の経済主体の経済活動を分析対象とするという差異はあるが、ミクロ・マクロ経済理論は現実経済に対する一貫したものの見方を提供している。この科目は他の多くの経済学の分野に応用されるような、経済学の基礎理論を学ぶことを目的とする。

【テキストの読み方】

図や式の意味をよく理解するようにして下さい。

【履修上の注意】

ある程度の数学的知識と論理的思考力を前提とします。

【参考文献】

塩澤修平『経済学・入門（第3版）』有斐閣、2013年

塩澤修平『基礎コース・経済学（第2版）』新世社、2011年

【レポート作成上の注意点】

記述のうえで、それが仮定あるいは前提であるのか、論理的展開であるのか、論理的帰結であるのか、といった区別を明確にして下さい。

注意

この科目は、前半・後半に分かれていて、それぞれにレポートを提出しなければならない。前半は第1章から第14章まで、後半は第15章から終りまでとする。レポートはそれぞれ4,000字以内とする。

科目試験の受験については『塾生ガイド』（または『教職課程履修案内』）を参照のこと。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

この講義の目標は、財政の理論、制度、歴史、政策を理解し、現代日本における財政問題について考えることができるようにすることである。その際、財政理論は欠かせないが、財政現象は法制度に立脚しているため制度論ぬきに語ることはできず、また、歴史的研究を軽視して財政学は成立しえない。そのため、理論のみならず制度、歴史、政策までを含めて学んでほしい。本講義は、日本における予算、政府支出、租税、公債などを対象とするが、それぞれの領域で近年関心が高まっている現実的な問題についても関心をもって学んでほしい。

【参考文献】

- 片桐正俊編著『財政学—転換期の日本財政（第2版）』東洋経済、2007年
金澤史男編『財政学』有斐閣、2005年
佐藤進・関口浩『財政学入門（改訂版）』同文館、1999年
神野直彦『財政学（改訂版）』有斐閣など、2007年

【レポート作成上の注意点】

政府の財政活動が経済や社会全体にどのような影響を与えるかを考えるうえで、基礎的用語や理論についての知識が不可欠であると同時に、現実の経済問題や社会問題について強い関心を持っていること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【講義要綱】

- 第1章 資金循環と資金の過不足
1-1 経済と金融の関係—資金循環勘定
1-2 政府の資金不足の調整
1-3 企業の資金過不足の調整 (I-S バランス)
第2章 企業の資金調達と投資
2-1 日本企業の資金調達と投資
2-2 利子率と投資の関係
2-3 トービンの q と企業の投資
第3章 金融商品のリスク制御と価格計算

- 3-1 日本の家計のポートフォリオ
- 3-2 債券市場・株式市場
- 3-3 新しい金融商品とオプションの価格計算
- 第4章 金融機関の仲介機能と証券市場
 - 4-1 日本の金融機関の構成
 - 4-2 銀行・協同組織金融機関、貸金業
 - 4-3 証券会社と証券市場
 - 4-4 生命保険会社・損害保険会社
 - 4-5 機関投資家
- 第5章 金融行政と金融政策
 - 5-1 金融システムの安定と BIS 規制
 - 5-2 証券化とオフバランスシート
 - 5-3 金融政策と短期金融市場の金利調節
 - 5-4 インフレ・ターゲティングとテイラー・ルール
- 第6章 財政と財政投融资
 - 6-1 国債の発行増と金融機関の保有増
 - 6-2 財政投融资制度と財政投融资改革
 - 6-3 郵便貯金
- 第7章 貿易・資本移動と外国為替
 - 7-1 国際収支
 - 7-2 外国為替決定理論
 - 7-3 国際資本移動と国際金融のトリレンマ
 - 7-4 ユーロの危機
- 第8章 金融のミクロ理論
 - 8-1 家計の金融行動
 - 8-2 企業の金融行動
 - 8-3 銀行の金融行動
- 第9章 金融のマクロ理論
 - 9-1 IS-LM モデル
 - 9-2 所得と利子率の決定
 - 9-3 物価の決定—総需要—総供給モデル
 - 9-4 合理的期待形成と金融政策
 - 9-5 IS=LM=BP モデル (オープン・マクロモデル)

【成績評価方法】

科目試験による。

経済政策学 (J)

(J 087-0801)〔2単位〕

【講義要綱】

市場機構は万能ではないため、政府が直接・間接に市場に介入し、市場の失敗の是正をはかっています。

経済政策学は、このような政府の活動の現状を明らかにすると同時に、望ましいあり方を提示することを目的とする学問です。

本講義では、まず、必要な基本概念と経済理論を身につけ、その上で、直面する今日の政策課題を見極め、解決の方向を探ります。

【履修上の注意】

マクロ経済学およびミクロ経済学に関する知識をもっていることが望ましい。

【参考文献】

福田慎一・照山博司『マクロ経済学・入門』有斐閣 2011年（第4版）

岩田規久男・飯田泰之『ゼミナール経済政策入門』日本経済新聞社 2006年

【レポート作成上の注意点】

教科書を熟読するのみならず、巻末の参考文献や新聞・雑誌の経済記事・論文を読み、進んだ知識を積極的に取り入れるよう努力して下さい。

【成績評価方法】

科目試験による。

社会政策 (J)

(市販書採用科目) (J 098-1191)〔2単位〕

【テキスト】

駒村康平『福祉の総合政策〔新訂5版〕』創成社、2011年4月

【講義要綱】

本講義の目的は、急速な少子高齢化の中、社会政策の中で比重を増した社会保障制度の理解と社会経済システムとの整合について検討し、望ましい政策を自ら考えられるようにすることを目的としている。具体的政策としては、社会保障制度の中心領域である年金、医療、福祉以外に、関連領域である人口、家族、財政、労働等についてもカバーしている。

1. 成熟化社会、少子・高齢化社会における社会保障
2. 社会保障制度の機能と歴史
3. 社会保険（年金・医療・介護・雇用・労災保険）
4. 児童・高齢者・障害者のための福祉政策
5. 生活保護

6. 雇用政策（最低賃金制度）

7. 制度改革の方向性

【テキストの読み方】

まず第1～3章で、現行の社会保障制度を取り巻く変化を理解したうえで、第4章で社会保障制度の機能、第5章で社会保障の歴史を学んでください。第7章以降は各論ですので、各々関心をもった制度について掘り下げて、学んでください。第19章は、社会保障制度の枠組みの中で、どのように効率性を高め、限られた資源でより充実した社会保障を提供できるか、理論的背景とともに学び、社会保障の将来のあるべき姿について考えてください。

【履修上の注意】

経済学的な考え方を中心とした解説となっていますので、経済学の基本的な知識があった方が理解しやすいでしょう。また下記関連科目を併せて履修すれば、一層理解が深まるでしょう。

【関連科目】

「財政論」「人口論」「産業社会学」「労働法」

【参考文献】

城戸喜子・駒村康平編（2005）『社会保障の新たな制度設計』慶應義塾大学出版会。

厚生労働省『労働経済白書』、『厚生労働白書』各年版

厚生労働省サイト（<http://www.mhlw.go.jp/>）

【レポート作成上の注意点】

執筆する前にまず『塾生ガイド』（『教職課程履修案内』）の「レポート作成上の注意」をお読みください。課題1・2共に、引用・参考箇所（指定テキストを引用・参照する場合も含む）はレポート本文中に「 」等の記号を用い、またどこからの引用・参照なのか著者姓（出版年）該当のページ数まで明示したうえで、対応する参考文献リストをレポートの末尾に掲載してください。また節ごとに小見出しを付け、内容的な区切りを明示してください。こうしたレポート作成のガイドラインに沿っていない場合、添削不能として内容にかかわりなく再提出となります。

また課題2については、政策に関するレポートですので、何らかの政策提言を行ってください。その際には、その政策提言の論拠を最新データに基づき明確に示してください。データはテキスト掲載以外のデータも併せて使用してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・経営学 (J)

(市販書採用科目) (J 105-1391) [3単位]

【テキスト】

岡本大輔・古川靖洋・佐藤和・馬場杉夫『深化する日本の経営』千倉書房、2012年

【講義要綱】

経営学は、企業経営、企業組織、経営者行動など、組織と経営現象に関する幅広いテーマを対象とした学際的な学問です。本科目では、その中でも、コア領域である、経営管理論、経営戦略論の分野を主な対象としています。これらを通じて、企業はどのように戦略的な意思決定を行うのか、組織運営の原理・原則は何か、成功する企業と失敗する企業の違いを説明することはできるのか、について学んでいただき、社会・経済の中で不可欠な存在である企業と組織に関する理解を深め、新しい視点から物事を観察し、解釈できる目を養っていただければと思います。

【参考文献】

浅羽茂・牛島辰男『経営戦略をつかむ』有斐閣、2010年

浅羽茂・須藤美和『企業戦略を考える：いかにロジックを組み立て、成長するか』日本経済新聞出版社、2007年

【レポート作成上の注意点】

設問の意図を正確に理解し、レポートの構成を考えてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

会計学 (J)

(J 088-0901) [3単位]

【講義要綱】

会計学、主として財務会計論の基礎を学習する。科目試験の出題範囲はテキストの内容に限るが、レポートの作成についてはより広範な学習にもとづくことを期待する。

【参考文献】

友岡賛『会計の時代だ』ちくま新書、2006年

友岡賛『会計学はこう考える』ちくま新書、2009年

友岡賛『会計学原理』税務経理協会、2012年

友岡賛(訳)『歴史に学ぶ会計の「なぜ？」』税務経理協会、2015年

【レポート作成上の注意点】

できる限り、自分の言葉、をもって述べ、また、参考文献は明記すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

学問分野別
P9

分野別

総合教育科目
P51

総合

文学部
P89

文

経済学部
P167

経

法学部
P205

法

教職
P269

教職

科目別履修要領

〔教職課程専門教育科目〕

- ・履修要領には、絶版となった参考書も記載してあります。これは、「その参考書が学習上有益である。」と担当者が判断したものです。可能な範囲で図書館などで捜して学習することをお勧めします。
- ・この科目別履修要領の講義要綱には、科目名の「新」・「改訂」が省略されている箇所があります。

【テキスト】

沼野・松本・田中・白石・米山『教育の原理〔第4版〕』学文社、2010年

【講義要綱】

『教育の原理』〔第4版〕の内容構成は、第1章「教育とは何か」、第2章「文化と教育のかかわり」、第3章「学校式教育と人間教育」、第4章「何を教えるか」、第5章「いかに教えるか」、第6章「職業としての教師」となっている。第4版と第3版では、学習指導要領の改訂があったために第4章が、教育職員免許法の改正があったために第6章が大きく変わっている。しかし、テキストに通底する教育原理に変化があるわけではない。教職課程の科目であるから、実際に自分が教師となることができるかどうかを自分に問いつつ、テキストの教育原理と向き合うことが重要である。

【テキストの読み方】

テキストは複数の執筆者が書いている。執筆者によって、微妙に教育原理の理解に違いがある可能性がある。テキストを理解するとともに、批判的に検討することも必要である。

【履修上の注意】

「現代教師論」や「教育学」を履修していることが望ましいが、必須ではない。

【関連科目】

「現代教師論」、「教育学」

【参考文献】

『解説 教育六法』三省堂、2015年

村井実『日本教育の根本的変革』川島書房、2013年

日本教育法学会編『教育法の現代的争点』法律文化社、2014年

【レポート作成上の注意点】

しっかりとテキストを読み、テキストを踏まえて、課題が何を要求しているかをよく理解した上で、レポートを作成すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

遠藤由美『青年の心理』サイエンス社、2000年

【講義要綱】

青年期におけるさまざまな身体的・心理的・社会的変化について理解すると同時に、そうした青年期の成長に関わる教師として、どのような関わり方が求められるかについて考える機会にしてほしいと思います。その際、いろいろな文献に当たると同時に、現代社会で展開されている社会問題・教育問題にも関心を広げてほしいと思います。

【履修上の注意】

とくにありませんが、自らの青年時代、さらには現代社会における青年たちの生き様についても、日頃から関心を持つことを求めます。

【参考文献】

加藤隆勝・高木秀明『青年心理学概論』誠信書房、1997年

落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一『青年の心理学 改訂版』有斐閣、2002年

落合良行・楠見孝『自己への問い直し—青年期』金子書房、1995年

伊藤美奈子『思春期の心さがしと学びの現場』北樹出版、2000年

伊藤美奈子編『思春期・青年期臨床心理学』朝倉書店、2006年

【レポート作成上の注意点】

テキストをはじめ、文献等を参考にしながら、青年期の本質に迫ると同時に、その青年たちに関わる立場に身を置いて考えることを求めます。

またその際、自分の考えと、引用した文献等とを区別し、後者については引用文献として明記するようにしてください。

【成績評価方法】

科目試験による。

【テキスト】

田中耕治編『よくわかる教育課程』ミネルヴァ書房、2009年

【講義要綱】

カリキュラムの意義とその編成について総合的・多角的に研究し、カリキュラムを自主編成する力量を養うことを目的とする。特に、「総合的な学習の時間」に象徴されるような広

領域な学習領域を組織し評価する力量を養うことは、カリキュラム全体を組織・編成する力量養成に通じるものである。また、カリキュラム論といえば、自らの教育経験や子育て経験などを通じてある一定の「考え」をすでに（時には堅固に）有している受講生も多いと思われるが、本科目を通じてそれらを相対化し客観的に評価しうるようになることもそのねらいの一つである。

なおテキストには下表の通り修正を要する箇所があるので留意すること。

該当箇所	誤	正
199頁 22行目	1998年版学習指導要領は 2001（平成13）年に実施 されますが	1998年版学習指導要領は 2002（平成14）年に実施 されますが

【参考文献】

田中耕治・井ノ口淳三編著『学力を育てる教育学』八千代出版、2008年

【成績評価方法】

科目試験による。

国語科教育法

（P 006-7901、P 9408）〔3単位〕

【講義要綱】

国語の教師となるにあたって、どのような知識が必要かということだけでなく、教師になってからどのような姿勢を保ち続けられるかということ意識したい。さらに、知識・理解だけでなく、生身の人間同士による対話から学びが作られていくことを忘れてはならない。

テキストのみではなく、広く現代の生徒像をイメージしてもらいたいため、参考文献を以下に示した。

【テキストの読み方】

物語の読み取りだけが国語の力ではない、評論や古典、さらには表現など幅広く生徒に力をつけさせるよう指導をしていくことを念頭におきたい。テキストを出発点として、さらに幅広く教材や研究書に向かうこと。

【履修上の注意】

一つの教材に対して正しい一つの授業があるとは思えない。そこにはまず生徒の人数規模や性格、そして学校の特色、教師の性質など、様々な要素を含んだうえで一つの授業を教室で実践している。教材研究の深さはもちろん大前提として必要だが、授業のスタイルはその時その時に最適なもの常を常に考えてほしい。したがって、世の中に存在する先行研究、実践例、指導案などを丸写しに行動する姿勢では良き教師たりえない。本講義の試験やレポートにおいても同様である。

【参考文献】

堀裕嗣『一斉授業10の原理・100の原則』学事出版、2012年

堀裕嗣『教室ファシリテーション10のアイテム・100のステップ』学事出版、2012年

本谷宇一『子どもが「発問」する学びの教室』一光社、2011年

【レポート作成上の注意点】

履修上の注意でも述べた通り、先行研究を鵜呑みにするのではなく、教材を確実に自分のものとした上で成果をまとめてほしい。

【成績評価方法】

科目試験による。

社会科・地理歴史科教育法 (市販書採用科目) (P 021-9992) [3単位]

【テキスト】

小池俊夫・古屋野素材『新しい社会科』を創る(修正版)』学芸図書、2000年

白井嘉一・柴田義松編著『[新版]社会・地歴・公民科教育法』学文社、2009年

【講義要綱】

現行教育制度がスタートした昭和22年から、小学校、中学校、高等学校における教科目として社会科が学ばれるようになった。この教科はその後、平成元年の学習指導要領改定から高等学校では地理歴史科と公民科へ移行したことにより、中等教育の教員免許取得においては、中学校教諭においては「社会」、高等学校においては「地理歴史」と「公民」の三免許体制となった(国語や数学その他は二免許)。そのことはとりもなおさずこの教科の特殊性であり、社会科の成立やその後の変化、こういった教育が行われようとしたのかを理解する必要がある。

この理解の上に立って、では中高生に社会認識を深めさせていく教育とはいかなるものが考えられるのか。そのひとつが「地理歴史」を通じて、地理的な空間認識を学ぶことと歴史的な時間(歴史)認識を学ぶことであり、こうしたことは事実にして具体化させたものでしか教育的効果は期待できないのではないだろうか。社会科・地理歴史科教育法を学ぶにあたって自らどのような教育が行えるか模索してもらいたい。

【参考文献】

日本社会科教育学会編『社会科教育事典(新版)』ぎょうせい、2012年

全国社会科教育学会編『社会科教育実践ハンドブック』明治図書、2011年

以上2点は書店で手に入るもの。以下2点は絶版のもの。

勝田守一『戦後教育と社会科』(勝田守一著作集1)国土社

上田薫『問題解決学習の本質』(社会科教育著作集1)明治図書

テキストとしてあげたもの以外に上記の文献が参考となる。図書館などで閲覧してもらいたい。

また、教育実習などで実際に授業を行う際や教員採用試験の勉強のために『中学校学習指導要領解説—社会—』『高等学校学習指導要領解説—地理歴史編—』を購入し、現在の社会科及び地理歴史科の教科の目的や目標、指導上の留意点なども理解を深めてほしい。

【レポート作成上の注意点】

1について：社会科が成立したのは、日本の歴史上一大転換点となった、第二次世界大戦を挟んだ戦前と戦後の価値観の変化に根差したものといえよう。このことを踏まえて、民主教育とはどういったものか、それは戦前とどのような違いがあるのかを明確にして説明すること。また、社会科成立期（いわゆる初期社会科）の特徴は、どういったものか、授業でどのような内容をとりあげたのかなどを調べ、それと今日社会科の内容の相違を明らかにし、当時の社会科の理念について明確になる様論述すること。

参考文献に挙げたもの以外にも、いろいろあるので図書検索してほしい。また、インターネットから検索することも可能であるが、必ず出典を明記し、引用部分は括弧に入れるなり、2段落ちの記述にするなりして、明らかにすること。

2について：学習指導案の作成については、明確な基準といったものはなく、皆さんが教育実習に参加される学校や教育委員会ごとに作成の様式が異なっていると言えるでしょう。ここでは、テキスト本の中にある事例の中から最も授業を表現しやすいものを選んで作成してもらいたい。たとえば、テキストの167ページから170ページを参考とすれば、課題の構成でいう①は（4単元名、5単元目標）、②は（7本時の内容と教材解釈、留意点）、③は（9授業展開）、④は（8準備する資料教材、参考文献・資料）となる。学習指導案は、実際に授業に臨まなくともどういった授業であったか復元することが可能となるものであり、なによりも生徒の学習する内容を明確にし授業前に構想したものと授業後の反省を可能とするものである。そうしたことから、作成においては、十分な説明を加えた文章にしてほしい。

【成績評価方法】

科目試験による。

社会科・公民科教育法 （市販書採用科目）（P 023-9992）〔3単位〕

【テキスト】

小池俊夫・古屋野素材『新しい社会科』を創る（修正版）学芸図書、2000年
白井嘉一・柴田義松編著『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』学文社、2009年

【講義要綱】

講義目的・研究テーマ

直接的には、高等学校公民科〔現代社会・政治経済・倫理〕一種免許にかかわる科目だが、中学校社会科とも関連づけながら、中等教育全体における社会認識学習の在り方について幅広い考察をめざす。特に、近い将来、選挙権を通しての国政への参加、消費者として経済主体となる者として、公民の授業を通して様々な社会問題への関心を深め、積極的に社会に参加し、果たすべき役割を考える機会となることを期待する。

【参考文献】

指定したテキストの他に、どの会社のものでよいので、高校教科書の「現代社会」か「政治経済」と「倫理」が手元で参照できる状態であることが望ましい。2015年度より全学年新教育課程となるので、可能な限り最新のものが望ましい。

教科書の購入は、居住地域によって、難易の違いはあるかもしれないが、各地の「教科書取次店」で入手できる。各教科書の価格は書店で確認されたい（参考までに東京地区では、千代田区神田駿河台の三省堂本店が便利である）。

また今回の課題に関しては、地域の図書館等を利用し、それぞれのテーマに関係する各省庁から出ている白書類（『外交白書』『防衛白書』『環境白書』等）や、全国紙の縮刷版、新聞社系の年鑑（『朝日年鑑』『毎日年鑑』等）、さらには時事用語事典類（『現代用語の基礎知識』『イミダス』『知恵蔵』等）を参照することも重要である。また教科ごとの資料集や用語集なども参考になるが、その場合出来る限り新しい資料の活用に努めること。

また公民科としての学習領域とその内容を把握するために『高等学校学習指導要領解説—公民編一』（文部科学省）を手元に用意しておくことが望ましい。

【レポート作成上の注意点】

1 について：800字～1200字は、写真などを除くと、高校の標準的教科書の見開き2～3ページ程度のボリュームである。従って、出来る限り要点を絞って書くことに努めること。高校教科書の執筆者になったつもりで記述してもよい。

※(8)・(9) について

いずれのテーマとも、社会問題として多様なアプローチができると思われる。科学(医療技術など)の進歩、法的な問題として、さらには価値観や人生観などといった倫理的な側面など多角的な視点から課題に取り組むことが望ましい。また現行の公民諸科目の教科書の記述が、充分に対応し得ているのかどうか、という点にも注意を払って取り組んでもらいたい。

2 について：必ずしも指導案の形式をとる必要はないが、第三者からみて、授業の流れとその様子がわかるような構成となるように工夫すること。また授業の基本は、教師側からの問題提起とそれに対する生徒の応答である。つねに生徒が積極的に授業に参加するような工夫に心がけてほしい。また全体の授業時間（基本50分間）の配分も念頭に構成すること。

なお、インターネットで検索した資料を利用しても差し支えないが、その場合は必ず参

照したホームページの URL と、それにアクセスした日付を明記することが望ましい。また複数のホームページを比較検討した上で、もっとも適切と思われる内容を取捨選択する（その選択の過程もレポートに記述してほしい）という姿勢を重視する。

【成績評価方法】

科目試験による。

社会科・地理歴史科教育法特論Ⅱ	(市販書採用科目) (P 022-9992) [2 単位]
------------------------	-------------------------------

社会科・公民科教育法特論Ⅱ	(市販書採用科目) (P 024-9992) [2 単位]
----------------------	-------------------------------

【テキスト】

小池俊夫・古屋野素材『新しい社会科』を創る（修正版）』学芸図書、2000年
白井嘉一・柴田義松編著『〔新版〕社会・地歴・公民科教育法』学文社、2009年

【講義要綱】

講義目的・研究テーマ

本講義は、直接的には、中学校社会科一種免許を取得するための必修科目の一つであるが、ここでは、第一に、授業を展開するために必要とされる具体的な授業方法や手段を学ぶとともに、第二に、社会科という科目の特性を考えつつ、その適切な「評価」という視点からの教材研究を試みてもらいたい。

中学校社会科の学習は、生徒一人一人が各授業あるいは一連の授業を通じて、時間的（歴史）と空間的（地理）という広がりの中で営まれてきた（いる）多様な社会現象を、自分自身の在り方と日常の営みに密接に関わるものとしてリアリティをもって受けとめ、関心をもってそれらの社会現象にかかわっていこうとする姿勢を育むことをめざすものである。従って授業の研究とは、どのような授業ならばそうした目的の到達が可能であるか、それを追求し続けることに他ならない。そのために、授業で取り扱おうとする題材・事例の選択・吟味、またその提示方法の工夫など、つまり教材研究や授業計画が重要なことはいまでもないが、同様に重要なのは、授業の展開方法であり、とりわけ社会科は多様な授業形態が考えられる教科である。

そこで、いわゆる授業形態も、講義形式以外にも、ディスカッション・ディベート・グループ作業と発表などさまざま考えられる。さらには情報機器や視聴覚教材の活用など、その展開は多岐にわたる。どの学習単元（テーマ）にはどのような形態の授業形態（講義形式以外）がもっとも適切か。ここではその視点から、より具体的な授業展開を考察してもらいたい。

さらには、学校教育における教科の学習成果は、最終的には、いわゆる「評定」によって示される。しかし「評定」は、その学習の「評価」の過程で集められたデータなどの集計である。従って、授業においても、どこに評価のポイントをおいて構成するかが重要となり、

また評価方法なども事前に考慮せずには適切な授業の展開はありえない。その点を踏まえての授業形態（展開）についてまとめてもらいたい。

【参考文献】

指定したテキストの他に、どの会社のものでよいが、中学校社会科の「地理」・「歴史」・「公民」の三分野の教科書を手元にあることが必要。教科書の購入は、居住地域によって、難易の違いはあるかもしれないが、各地の「教科書取次店」で入手できる。各教科書の価格は書店で確認のこと。（参考までに東京地区では、千代田区神田駿河台の三省堂本店が便利である）。

また社会科の学習領域とその内容を把握するために『中学校学習指導要領解説—社会編—』（文部科学省）を手元に用意しておくことも必須。

【レポート作成上の注意点】

本講義では、「地理歴史科特論Ⅱ」の履修者は、中学校の教科書の「地理的分野」並びに「歴史的分野」から、また「公民科特論Ⅱ」の履修者は同じく中学校の教科書の「公民的分野」から、それぞれ学習単元を自由に一つ選び、その学習内容について、以下の「レポート作成上の注意点」を念頭に、課題レポートを作成、提出することとする。

1)・2) について

「社会科・公民科教育法特論Ⅱ」で履修する場合（公民的分野）

人間の営みはどの時代においても、さまざまな意味での各人の対立であり、その調整の連続である。それは目に見える経済的利益などの物質的なものから、倫理・宗教・思想など精神性に至るまでの対立であり、それを克服しようとする歩みである。そこで、「対立と調整」をキーワードとして、公民的分野における学習単元（テーマ）を一つ取り上げ、その単元の学習目標を念頭にレポート作成に取り組んでももらいたい。

「社会科・地理歴史科教育法特論Ⅱ」で履修する場合

（地理的分野）

私たちの生活は、それぞれの地域の自然環境や風土などの地理的条件のもとに営まれている。そうした条件のもとで人々はこれまでどのような生活をしてきたか。取りあげる地域は、自分の生活圏から世界の人々の生活のどの部分でもよい。その地域の産業などにも言及してもらいたい。

（歴史的分野）

古代から近現代に至るまで、どの時代においても日本の歴史は外国とのさまざまレベルでの関わりと交流、そしてその影響を受けながらの歩みである。どの時代、あるいは具体的な出来事を選ぶにしても、視点を日本において論じてもらいたい。

3) について（「公民科」・「地理・歴史科」共通）

学習内容並びに授業形態（展開）に応じて評価のポイントやその基準等も多様にあるはずである。客観的であることを大前提に、独自のものも考えてもらいたい。併せて、社会科

の学習にとって本来評価とはいかなる意味をもっているのかについても言及してもらいたい。

【注意】

インターネットで検索した資料を利用しても差し支えないが、その場合は必ず参照したホームページの URL と、それにアクセスした日付を明記することが望ましい。また複数のホームページを比較検討した上で、もっとも適切と思われる内容を取捨選択する（その選択の過程もレポートに記述してほしい）という姿勢を重視する。

【成績評価方法】

科目試験による。

英語科教育法

(市販書採用科目) (P 033-0991) [3単位]

【テキスト】

高梨庸雄・高橋正夫『新・英語教育学概論〔改訂版〕』金星堂、2011年

【講義要綱】

英語科の教員として必要となる英語教育学の理論と実践について教科書および参考書を通して学ぶ。特に、日本の学校英語教育における目的論、カリキュラム論、教材論、学習者論、教授法、評価方法、4スキル・文法等の指導実践に関する各論を研究する。また、教育実習に備え、教案（英語版）の作成方法も学習して欲しい。

【テキストの読み方】

常に実践を意識しながら、しっかりと読んで「基本」を学んでほしい。なお、講義要綱に記載の分野（目的論・カリキュラム論・教材論・学習者論・教授法・評価・指導実践各論）については、複数の参考書を使い、その理解を深めてほしい。

【履修上の注意】

履修上の条件は特に無いが、教職に関する科目（特に教育心理学・教育方法論・学校カリキュラム論等に関連する科目）や、教科に関する科目（特に英語学・言語学・英米文学・比較文学などに関連する科目）等と同時ないしはその履修後にとりかかるとを勧める。

【関連科目】

上記（「履修上の注意」）参照

【参考文献】

文部科学省『小学校学習指導要領』

文部科学省『中学校学習指導要領』

文部科学省『高等学校学習指導要領』

文部科学省『中学校学習指導要領解説—外国語編—』

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』

(なお、これらの学習指導要領については、最新のものを入手するか文部科学省のホームページから最新のものをダウンロードすることもできる)

浅羽亮一他著『わかりやすい英語教育法〔改訂版〕小中高での実践的指導』三修社、2013年

石田雅近他編『英語教師の成長：求められる専門性』大修館書店、2011年

JACET 教育問題研究会編『新しい時代の英語科教育の基礎と実践』三修社、2012年

JACET SLA 研究会編著『第二言語習得と英語科教育法』開拓社、2013年

木村松雄編『新版英語科教育法：小中高の連携—EGP から ESP へ』学文社、2011年

三浦省五・深沢清治編『新しい学びを拓く英語科：授業の理論と実際』ミネルヴァ書房、2009年

望月昭彦編『改訂版新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店、2010年

村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店、2006年

村野井仁『統合的英語科教育法』成美堂、2012年

高橋一幸『成長する英語教師』大修館書店、2011年

土屋澄男編著『新編英語科教育法入門』研究社、2011年

(以上の参考書については、改訂されている場合は、新学習指導要領に基づくものを利用すること。)

【レポート作成上の注意点】

課題1は英語で書くこと。教育実習生の英語力の低下が現場では問題となっているので、英語の辞書や英語そのものに関する参考書を使い、英語の教員としてふさわしい完璧な英語で作成して欲しい。また、教案は人に見てもらいたいことが多いので、第三者がみても分かりやすいフォーマットで作成すること。

【成績評価方法】

科目試験による。

道徳教育論

(P 025-7001)〔2単位〕

【講義要綱】

この科目は、道徳教育の本質的な課題を理解し、自ら考察するために設置されています。テキストはそれを補助するためのツールであり、テキストの内容を暗記するのではなく、テキストから考え方を学んでください。その考え方を使って自らの考察を展開できるようになるのが最終目的です。

【テキストの読み方】

まず、テキストの論理を虚心に追ってください。その際、テキストの細部にこだわりながら、常に道德教育の本質的な課題が何であるか、を意識しつづけてください。つぎに、テキストの論理から見えてくる考え方を修得し、「わかった」という自覚が生まれるまで、繰り返しテキストを読んでください。

【履修上の注意】

できるだけ多くの関連文献を読んでください。テキストのみの読了では、テキストの内容を十分に理解することができません。

【関連科目】

教育基礎論 特別活動論 生活指導論 教育臨床論

【参考文献】

岡部美香・他『道德教育を考える』法律文化社、2012年
柳沼良太『「生きる力」を育む道德教育』慶應義塾大学出版会、2012年
林忠幸・他『道德教育の新しい展開』東信堂、2009年

【レポート作成上の注意点】

『塾生ガイド』または『教職課程履修案内』の「レポート作成上の注意」をよく守ってください。

【成績評価方法】

科目試験による。

特別活動論

(市販書採用科目) (P 031-0492) [2単位]

【テキスト】

高旗正人・倉田侃司編著『新しい特別活動指導論 [第2版]』ミネルヴァ書房、2011年

【講義要綱】

受講生自身が学校で経験してきた「特別活動」を省察するとともに、教科学習などの教育課程上の他領域との理論上・実践上の関連性を考察することが求められる。そのためにも豊かな実践事例をテキストのみならず教育雑誌などで触れることが望まれる。理論や実践事例を通じて、特別活動が学校における子どもの「生活」においてどのような機能を果たしうるのか、それは子どもの発達や成長にとってどのような意義をもつものとなるものなのか、そしてそれらをふまえてこの教育課程上の領域名に冠された「特別」のもつ意味についても受講生が各自の見解をもつことが目指される。

【履修上の注意】

中高の学校階梯にこだわらず、初等教育領域にも関心をひろげるとともに、新学習指導要領への改訂の動向にも敏感になってテキストと向き合ってください。

【成績評価方法】

科目試験による。

教育方法論

(市販書採用科目)* (P 036-1191) [2単位]

【テキスト】

メディア教育開発センター『教師の力量アップをめざして ICT 編』(DVD 教材) 放送大学教育振興会、2005年

※「教育方法論」は上記 DVD 教材(市販)と、配本テキストが指定教材となります。

【講義要綱】

学ぶとはどういう営みか、教師の役割とは何か、授業とは何か、カリキュラムはどのように編成されるのか、評価とは何かなど、様々な観点から教育の方法について学んでいくことを通して、教育に関する認識を深めていって欲しいと思います。特に、単に観念的に教育を語るのではなく、具体的な教育実践のあり方を常に念頭に置きながら学習を進めていって下さい。

【テキストの読み方】

重要語句に着目しそれらを理解しつつ、より大きなテーマに関する認識を持つことができるように読解をすすめて下さい。

【履修上の注意】

教材はテキストと DVD です。両者を十分に活用してください。DVD 教材(教師の力量アップをめざして ICT 編)についてはすべて視聴すること。

【参考文献】

佐藤学『教育方法学』岩波書店、1996年

岩波講座・現代の教育 8『情報とメディア』岩波書店、1998年(絶版)

赤堀侃司編『高度情報社会の中の学校』ぎょうせい、1997年

水越敏行監修、菅井勝雄編『「メディア」による新しい学習』明治図書出版、1995年

市川伸一『コンピュータを教育に活かす―「触れ、慣れ、親しむ」を越えて』勁草書房、1994年(絶版)

佐伯胖『新・コンピュータと教育』岩波新書、1997年(絶版)

【参考 website】

教育情報ナショナルセンター

<http://www.nicer.go.jp/>

日本教育工学振興会

<http://www.japet.or.jp/>

【レポート作成上の注意点】

ICT を活用した具体的な実践例（〇〇学校の〇〇教諭による〇年生〇〇科の〇〇という単元の授業というレベル、なるべく最近の事例が望ましい）を必ず文献等で調べ、それを題材にして下さい。

引用文献は単にまとめて最後に記すだけではなく、必ずレポートの記述内容と対応させ、読者にその記述内容がどの引用文献によるものなのかがはっきりとわかるように論述してください。

【成績評価方法】

科目試験による。

改訂・生活指導論

（市販書採用科目）（P 037-1192）〔2 単位〕

【テキスト】

折出健二編著『生活指導〔改訂版〕（教師教育テキストシリーズ13）』学文社、2014年

【講義要綱】

個々の生徒の「問題行動」の背後には、しばしば、深刻で多様な矛盾を含む社会の現実がある。この事実は、今日、いかなる具体的様相を呈しているか。また、それらの諸矛盾の克服が課題として提起されるように生徒たちの学習を共同化しようとするとき、教師たちはどのような手だてを講じるべきか。こうした問題に答えを出すべく、生活指導、進路指導、教育相談の理論と方法を学びながら、子どもたちのあいだに関わり合いとしての集団が組織されることの重要性について、理解を深めよう。（2015年度からテキストが改訂され、その内容に若干の変更がありましたが、講義の趣旨は何も変わりません。以前から生活指導論を履修している方も、継続して学習できます。）

【テキストの読み方】

テキストを断片的に理解しただけでは、満足なレポートを書くことができない。1つの章の内容を十分に理解するためには、それが他の章の内容とどう関わっているかということろまで、しっかり考えるようにするのがよい。テキストは実践編を含めて全編をきちんと読み通すこと。また参考文献によってテキストの内容に関する理解を補うこと。

【参考文献】

岩川直樹・伊田広行編著『未来への学力と日本の教育8——貧困と学力』明石書店、2007年

【レポート作成上の注意点】

『塾生ガイド』を読んで所定の字数制限を踏まえるように。講義要綱は、レポートを書き上げたときにも、読み返してみるとよい。

【成績評価方法】

科目試験による。

新・教育臨床論

(市販書採用科目) (P 038-1591) [2単位]

【テキスト】

伊藤直樹編著『教育臨床論—教師をめざす人のために—』批評社、2009年

【講義要綱】

第一に、教師に必要とされる教育臨床的な視点について理解すること。その上で、学校現場で起こっているさまざまな〈問題提起現象〉について考えてほしいと思います。また、スクールカウンセラーをはじめとする専門機関との具体的な連携方法について学んでいただくことも目標の1つです。

【履修上の注意】

テキストを鵜呑みにするのではなく、日々変化している学校現場や子どもたちの現状にも関心を広げていただきたい。

【関連科目・分野】

「青年心理学」、「教育心理学」、「生徒指導論」、「学校カウンセリング」

【参考文献】

伊藤美奈子『スクールカウンセラーの仕事』岩波アクティブ新書、2002年

伊藤美奈子編『思春期・青年期臨床心理学』朝倉書店、2006年

【レポート作成上の注意点】

テキスト、参考文献のほか、関連文献について広く目を通したうえで自分なりの考え方や言葉を大事に論じて頂きたい。教師として学校現場に立った自分を想定し、その目を通して考えて頂きたい。

【成績評価方法】

科目試験による。